



# 2016シラバス 多摩大学 経営情報学部

## 現代の志塾

多摩大学は「今を生きる時代についての認識を深め、課題解決能力を高める」ため、教育理念を「現代の志塾」と定め、教育・研究・社会貢献の全分野の共通理念としています。「現代の志塾」とは「アジアユーラシアダイナミズム」の「現代」、社会の不条理の解決のために自らの職業や仕事を通じて貢献をする「志」、人間的な触れ合いによる少人数制ゼミを中心とした「手作り教育」の「塾」を意味しています。実社会の問題解決の最前線に立つ「志」人材の育成に尽力するため、個性と特色にあふれた「ゼミカの多摩大」を形成しています。

# 学年暦

	月	火	水	木	金	土	日
4月					1	2	3
					新入生オリエンテーション① 在学生オリエンテーション①		
	4	5	6	7	8	9	10
	新入生オリエンテーション② 在学生オリエンテーション②	入学式	① 履修登録開始	①	①	①	
	11	12	13	14	15	16	17
	①	①	②	②	②	②	
	18	19	20	21	22	23	24
	②	② 履修登録終了	③履修登録 確認期間開始	③	③	③	
	25	26	27	28	29	30	
③	③履修登録 確認期間終了	④	④	④ (昭和の日)	④		

	月	火	水	木	金	土	日
5月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	講義なし	憲法記念日	みどりの日	こどもの日	講義なし	講義なし	
	9	10	11	12	13	14	15
	④履修登録 削除期間開始	④	⑤	⑤	⑤履修登録 削除期間終了	⑤	
	16	17	18	19	20	21	22
	⑤	⑤	⑥	⑥	⑥	⑥	
	23	24	25	26	27	28	29
⑥	⑥	⑦	⑦	⑦	⑦		

	月	火	水	木	金	土	日
6月	5月30日	5月31日	1	2	3	4	5
	⑦	⑦	⑧	⑧	⑧	⑧	
	6	7	8	9	10	11	12
	⑧	⑧	⑨	⑨	⑨	⑨	
	13	14	15	16	17	18	19
	⑨	⑨	⑩	⑩	⑩	⑩	
	20	21	22	23	24	25	26
	⑩	⑩	⑪	⑪	⑪	⑪	
	27	28	29	30			
⑪	⑪	⑫	⑫				

【補講日】補講が必要な場合は、①～⑫の土曜日に実施することとする。

【見方】※○の中に数字が記入されている日が授業日です。  
 (例) 7月1日は授業があり、金曜日の授業の12回目です。

	月	火	水	木	金	土	日
7月					1	2	3
					⑫	⑫	
	4	5	6	7	8	9	10
	⑫	⑫	⑬	⑬	⑬	⑬	
	11	12	13	14	15	16	17
	⑬	⑬	⑭	⑭	⑭	⑭	
	18	19	20	21	22	23	24
	⑭ (海の日)	⑭	⑮	⑮	⑮	⑮	
	25	26	27	28	29	30	31
	⑮	定期試験日 (1)	定期試験日 (2)	定期試験日 (3)			

	月	火	水	木	金	土	日
8月	1	2	3	4	5	6	7
	集中講義	集中講義	集中講義	集中講義	集中講義		
	8	9	10	11	12	13	14
	追試験日	追試験予備日		山の日			
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

	月	火	水	木	金	土	日
9月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
						秋卒業のつどい	
	19	20	21	22	23	24	25
	敬老の日			①履修登録開始 (秋分の日)	①	①	
	26	27	28	29	30		
①	①	①	②	②			

	月	火	水	木	金	土	日
10月						1	2
						②	
	3	4	5	6	7	8	9
	②	②	②履修登録終了	③履修登録 確認期間開始	③	③	
	10	11	12	13	14	15	16
	③ (体育の日)	③	③履修登録 確認期間終了	④	④	④	
	17	18	19	20	21	22	23
	④	④	④	⑤ (開学記念日 <sup>※1</sup> )	⑤	⑤	
	24	25	26	27	28	29	30
⑤	⑤	⑤	⑥	⑥	⑥		

※1開学記念日： 本学の母体の学校法人田村学園は、昭和12年10月20日に田村國雄が設立した目黒商業女学校が起源となった。

	月	火	水	木	金	土	日
11月	10月31日	1	2	3	4	5	6
	⑥履修登録 削除期間開始	⑥	⑥	文化の日	⑦履修登録 削除期間終了	⑦	
	7	8	9	10	11	12	13
	⑦	⑦	⑦	⑦	多摩祭事前準備	多摩祭	多摩祭
	14	15	16	17	18	19	20
	多摩祭後片づけ	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	
	21	22	23	24	25	26	27
	⑧	⑨	⑨ (勤労感謝の日)	⑨	⑨	⑨	
	28	29	30				
⑨	⑩	⑩					

	月	火	水	木	金	土	日
12月				1	2	3	4
				⑩	⑩	⑩	
	5	6	7	8	9	10	11
	⑩	⑪	⑪	⑪	⑪	⑪アクティブ・ ラーニング発表祭	
	12	13	14	15	16	17	18
	⑪	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	
	19	20	21	22	23	24	25
	⑫	⑬	⑬	⑬	⑬ (天皇誕生日)	⑬	
	26	27	28	29	30	31	

	月	火	水	木	金	土	日
1月							1
							元旦
	2	3	4	5	6	7	8
	振替休日				⑭	⑭	
	9	10	11	12	13	14	15
	成人の日	⑭	⑭	⑭	センター試験 事前準備	センター試験	センター試験
	16	17	18	19	20	21	22
	⑬ (メモリアルデー*2)	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	
	23	24	25	26	27	28	29
⑭	月曜日授業⑮	定期試験日 (1)	定期試験日 (2)	定期試験日 (3)			

※ 2メモリアルデー： 創立者、田村國雄の命日。

	月	火	水	木	金	土	日
2月	1月30日	1月31日	1	2	3	4	5
			追試験日	追試験予備日			
	6	7	8	9	10	11	12
						建国記念の日	
	13	14	15	16	17	18	19
	集中講義	集中講義	集中講義	集中講義	集中講義		
	20	21	22	23	24	25	26
	集中講義	集中講義	集中講義	集中講義	集中講義		
	27	28					

	月	火	水	木	金	土	日
3月			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	卒業のつどい (春分の日)						
	27	28	29	30	31		



1. 基本理念	1
2. カリキュラムポリシー	2
3. ディプロマポリシー	2
4. 学生生活	3
5. 授業	4
6. 履修登録・確認	5
7. 学期末試験	9
8. 成績	13
9. 学科選択	16
10. 進級・卒業要件	17
11. 教職課程	23
12. オフィスアワー制度について	28
13. 授業評価アンケート(VOICE)について	29
14. 単位互換科目について	29
15. アセスメント	31
16. TOEIC 試験補助について	31
17. 多摩大学学則(抜粋)	32
18. 多摩大学学生懲戒規程	40
19. 多摩大学履修規程(抜粋)	43
20. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)	45
21. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)	46
22. 多摩大学成績評価規程	47
23. 前提科目一覧	48
24. 授業科目一覧	51
25. シラバス	57

# 1. 基本理念

多摩大学の設立母体である学校法人田村学園建学の精神である「質実清楚・明朗進取・感謝奉仕」を礎とした本学の基本理念は「国際性・学際性・実索性」の三つのキーワードで表現されます。

## <国際性>

日本は歴史上初めて国全体が本格的なグローバル化の波に洗われている。国内のみならず、国際社会で活躍できる人材、グローバル社会の一員として積極的な役割を果たす人材の育成が急務であるとの認識のもと、国際化のための教育カリキュラムの充実に取り組んでいる。

## <学際性>

行き過ぎた専門化の弊害を是正するため、学際的な研究・教育への取組を重視。経営学と情報技術の進展が密接不可分の関係にあることから生まれた学際的な領域である「経営情報学」を設立する。

## <実索性>

大学に対する「象牙の塔」批判を克服すべく、「社会に通用する大学」を標榜する。  
とくに、経営情報学という学問分野においては、実践的な最先端知識とアカデミックな研究の融合が不可欠であることから、教授陣については、アカデミックなキャリアを有する人材のみならず、実業界での最先端の実績を持つ人材を数多く集めてきた。

## 2. カリキュラムポリシー

本学の建学精神、教育理念に基づき、以下の2つの柱で構成されたカリキュラムによって、学生自身が各自の「志」を実現できる力を付け、人間的成長を促す教育を実現します。

### ○ゼミ中心教育カリキュラム

双方向型少人数教育をゼミナールの形で行い、産業社会や地域社会の中で直面する問題を採り上げ、それらを分析し解決策を提案・実施する活動を通じて、問題解決の実践力を養う実学教育プログラムを展開します。

### ○実践的知識獲得のための講義カリキュラム

問題の分析・解決策提案・実践に必要な考え方や知識を幅広く学ぶため、学際性、国際性を考慮した科目群を配置します。講義内容は、知識断片の記憶を排し、どのような手法や知識がどのような問題解決に役立つかを中心に教える実学教育プログラムを展開します。

## 3. ディプロマポリシー

本学部の教育課程においては、厳格な成績評価を行い、所定の単位を修め、「志」を実現できる力を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与します。

- ゼミ中心教育における科目の成績評価は、解決策の提案・実践の成果を公表することを前提とし、そこに至る過程で果たした学生の力を、教員が評価します。
- 実践的知識獲得のための講義では、適切な問題解決に必要な知識や技術的手法がどれだけ身についたかを評価します。
- カリキュラムの多面的履修を通して、豊かな人格形成の基本と基礎的な学力を養い、特定の専門領域にこだわらずに問題を探求する姿勢を身につけることを重視します。
- 双方向型の少人数教育をとおしてコミュニケーション力や論理的説得力が身についたかどうかを評価します。
- 4年間にわたる教育課程をバランスよく学ぶことにより、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与できる能力を身に付けさせます。
- 志を持って周囲に感動を与え、遂行できる能力を身に付けさせます。



## 4. 学生生活

### (1) 学生証

学生証は本学学生の身分を証明する重要なものです。請求のあったときにはいつでも提示できるよう、常に携帯してください。

《提示が必要なとき》

- ・通学定期を購入するとき(2013年度以前に入学した入学生は学生証と、さらに通学証明書が必要です)
- ・多摩大学所定の学期末試験を受けるとき
- ・各種証明書の発行を受けるとき
- ・学割証の発行を受けるとき
- ・その他、本学教職員から請求があったとき

《学生証に関する注意》

- ・他人に貸与又は譲渡してはいけません。
- ・紛失や盗難にあった場合は、直ちに学生課に届け出て、再発行(有料)の申請をするとともに、必ず最寄りの警察に届け出てください。(再発行の手続きは学生課にて行って下さい。)
- ・破損、汚損した場合や記載事項に変更のある場合は、学生課に届け出てください。
- ・再発行する場合は、必ず最寄り駅にて再発行する旨伝えてください。(2013年度以前入学学生のみ)
- ・卒業、退学等により学籍を離れるときは、直ちに学生課に返却してください。

### (2) 事務局窓口受付時間

平日 8:50~17:00

土曜日 8:50~12:30

(日曜日、祝祭日、その他大学所定の休日は休業)

### (3) T-NEXT(多摩大学学生ポータル)

T-NEXTは多摩大学の学生と教職員だけが閲覧できる学内システムです。ウェブシラバス、履修登録/確認、学科選択、掲示板、講義サポート(講義資料掲示等)といった大学での重要な申請や通知を行います。T-NEXTへのログインの方法や個人のパスワード等については、入学時の説明会にて説明を実施しています。不明な場合はメディア・サービス(ALC)に問い合わせてください。

### (4) 大学からの伝達・連絡事項の確認方法について

学生の皆さんに対する伝達・連絡等は、原則としてT-NEXTのみでお知らせします。掲示した事項については、周知されたものとして取扱います。大変重要な掲示をT-NEXTで行いま

すので**必ず毎日確認**してください。

## (5) 伝言・照会

電話による伝言依頼、住所、電話番号の照会等は受け付けておりません。

# 5. 授 業

## (1) セメスター制

1年を春学期と秋学期の2学期に分けて授業を行います。そして、本学では1学期毎に授業が完結するセメスター制を導入し、半期に集中して授業を行うことにより学習効果を高めています。

春学期 4月1日(金)から9月21日(水)まで

秋学期 9月22日(木)から翌年3月31日(金)まで

## (2) 単位制

科目の履修には単位制が採用されています。単位制とは、科目毎に一定の基準により単位数が決められ、その科目を履修し、試験等に合格して単位を修得する制度です。その修得した単位数が卒業の要件として定められた基準を満たした場合に、卒業が認められます。

## (3) 授業時間

授業時間は1時限90分で行います。

時 限	
1時限	9時00分 から 10時30分
2時限	10時40分 から 12時10分
昼休み	12時10分 から 13時00分
3時限	13時00分 から 14時30分
4時限	14時40分 から 16時10分
5時限	16時20分 から 17時50分
6時限	18時00分 から 19時30分

## (4) 休講

教員の都合による休講はありません。病気や学会出張等止むを得ない事情の場合は、補講・代講等の講義または課題等への振り替えを行います。

## (5) 補講

補講は休講等に対する措置として、平常授業を補うために行うものです。補講が行われる科目等についてはT-NEXTの掲示にて連絡します。

## (6) 欠席届の手続き

履修科目の単位認定には授業への出席が重視されます。科目によっては欠席が多いと単位の修得ができなくなります。止むを得ない理由で欠席をする(した)場合は、担当教員に欠席届(書式は自由)を提出して下さい。但し、欠席届を考慮するかしないかは、担当教員の判断に任されています。

# 6. 履修登録・確認

## (1) 授業

春学期と秋学期の2セメスター制で行います。学期ごと15回の授業を実施します。授業は学年暦に従って行われます。祝日に授業を行うこともあります。また、補講日は土曜日に設定されていますので、土曜日にも授業を行うことがあります。十分注意してください。

## (2) 履修登録とは

履修登録とは、授業を受けて単位を修得するために、毎学期の始めに、各自の履修計画に基づき、シラバス、カリキュラム表やその学期の時間割表等から履修科目を決定して、履修科目の登録をする手続きのことです。履修登録を怠ったり、登録漏れや間違いがあったりした場合は、たとえ授業に出席し試験を受けたとしても単位は修得できません。従って、この手続きは、最も重要な手続きであることを認識して下さい。

また履修系統図をホームページに記載しており、卒業までに身に付けることができる知識・能力が、どのように授業に対応しているのかを図に示してあります。履修科目を選択する際の参考にしてください。

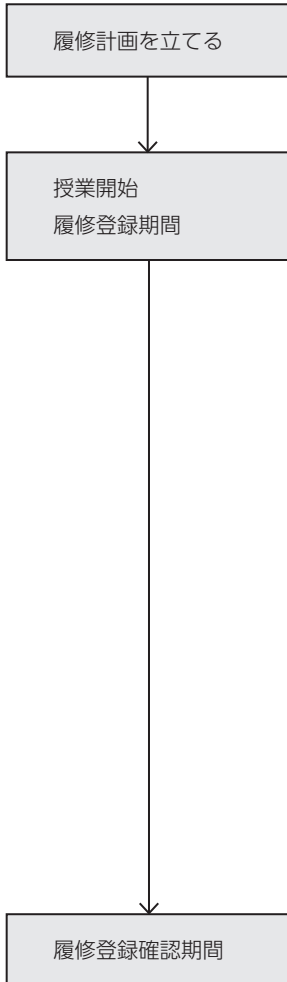
## (3) 登録・確認方法

T-NEXT上から科目を登録・確認する方法により行います。なお、システムの利用にあたっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。

## (4) 履修登録・確認上の注意

- ・履修登録及び確認は、配布パソコン、パソコン教室のパソコン及び自宅のパソコン等から行って下さい。
- ・履修登録・確認期間中(特に最終日)は学内のパソコン及び学内ネットワークの利用が混雑したり、パソコンの動作が遅くなったりすることが予想されます。登録にあたってはあらかじめ科目を決定した上で、十分に時間的な余裕を持って行って下さい。
- ・履修登録・確認に当たっての詳細な注意事項は別途指示します。

## (5)履修登録・確認の流れ



前学期の成績結果、時間割、シラバス、カリキュラム表等から、履修する科目を決定して下さい。

### 授業開始

春学期：4月6日（水）

秋学期：9月22日（木）

### 履修登録期間

春学期：4月6日（水）から4月19日（火）

秋学期：9月22日（木）から10月5日（水）

- ・クラス分けされている科目、選抜者のみが登録できる履修制限科目（(7)に記載）があるので注意して下さい。
- ・履修について卒業要件や進級要件で不明なことや確認したいことがある場合、提供されている資料を確認した後、教務課窓口まで相談に来て下さい。
- ・登録はT-NEXT上から行います。システム利用にあたっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。不明な場合は、メディア・サービス(ALC)で再発行手続きをして下さい。
- ・ネットワークの混雑を考え、登録は余裕を持って行って下さい。

### 履修登録確認期間

春学期：4月20日（水）から4月26日（火）

秋学期：10月6日（木）から10月12日（水）

### 履修登録削除期間

春学期：5月9日（月）から5月13日（金）

秋学期：10月31日（月）から11月4日（金）

**(6)履修登録に関するルールについて**

- ・履修登録確認期間中での科目追加、削除は、それぞれ8科目を上限とします。
- ・履修登録確認期間後の科目追加、削除は、それぞれ4科目を上限とします。ただし、履修登録確認期間最終日を含め、14日以内とします。その最終日が休業日の場合であっても手続き可能な日程は延長しません。
- ・履修登録期間後の科目追加、削除は当該学期中1度のみとします。
- ・履修登録確認期間中に、履修登録科目の追加や削除を希望する学生、または履修登録期間中に履修登録を行わなかった学生は、履修登録確認期間中に開催される「履修科目変更に関する説明会」に参加し、説明会の中で、指定の申請用紙にて変更及び登録申請を行うこととします。
- ・履修登録確認期間後に履修登録科目の追加や削除を希望する学生、または履修登録期間及び履修登録確認期間中の何れでも履修登録を行わなかった学生は、教務課にて所定の申請用紙にて変更及び登録申請を行うこととします。
- ・学生の履修登録変更に関しては、教授会への報告事項とします。

## ○履修登録確認期間から履修登録削除期間における追加、削除可能科目数

	履修登録確認期間中	履修登録確認期間後 14日以内	履修登録削除期間中
追加	8科目まで	4科目まで	不可
削除	8科目まで	4科目まで	上限なし

## (7)履修制限科目

### 1 講義の履修登録者数の制限について

受講者が教室に収まりきれない事態の発生を防止するため、受講希望者が多数になると見込まれる科目について、履修登録の制限を実施します。また、少人数制での教育環境が必要な科目についても履修登録の制限を実施します。履修を制限する科目については、T-NEXTにて掲示します。

履修制限の方法は、初回の講義に参加したものの中から、教室の規模に見合った受講者数等になるように選抜を行い、履修登録を認める履修許可者を決定します。

履修制限科目の履修登録は、履修許可者名簿に基づき教務課が行います。T-NEXTを使った履修登録は行えません。履修許可者において、履修を希望しない者は、履修登録確認期間以降に削除の申請をして下さい。また、履修許可がない者が履修登録していた場合には、その履修登録は抹消されます。

なお、履修制限を実施する科目に関しては、履修登録確認期間以降に認められている追加登録の対象とはしません。

### 2 履修許可者の選抜方法

履修許可の選抜は、各科目の初回の講義に出席した者の中から選抜します。初回の講義に出席しなかった者には履修許可は与えません。

ただし、初回講義の出席に関して正当な理由(病気や事故、交通機関の障害など)があって参加できなかった者で、履修登録期間中に担当教員にその旨を申し出、その理由が証明できる場合に限り、追加で履修許可の選抜を受けることができますこととします。

## 7. 学期末試験

### (1) 学期末試験の種類

#### ① 定期試験

各学期末の試験期間中に実施する試験であり、春学期末試験と秋学期末試験の年2回実施します。

#### ○ 試験期間

春学期末試験：7月27日(水)から7月29日(金)

秋学期末試験：1月25日(水)から1月27日(金)

#### ○ 試験時間

試験時間は1時限60分間です。

時 限	試験時間	遅刻限度時間	途中退席可能時間
1 限	9:20～10:20	9:40	10:00
2 限	10:50～11:50	11:10	11:30
昼休み	11:50～12:30		
3 限	12:30～13:30	12:50	13:10
4 限	14:00～15:00	14:20	14:40
5 限	15:30～16:30	15:50	16:10
6 限	17:00～18:00	17:20	17:40

※平常講義の時間割と時間帯・教室・曜日が異なりますので発表された時間割に注意して下さい。

※試験開始後、20分以上遅刻した場合、受験を認めません。

※試験開始から40分経過以降、途中退席を認めず。

◎受験には学生証を必要としますが、試験当日持参しなかった場合、教務課にて仮学生証の交付を行います。その際には、手数料として、100円を徴収します。

- ・仮学生証の有効期限は当該試験期間内に限ります。
- ・いったん納入された手数料は、如何なる理由があっても返金しません。

#### ② 授業内試験

◎各担当教員の判断により、講義時間中等に必要に応じて随時実施する試験をいいます。

◎仮学生証の発行は行いません。試験当日に学生証を持参しなかった場合には、各担当教員によって取扱いが異なります。

### ③定期試験の追試験

定期試験中に病気又は止むを得ない理由により、試験が受験できなかった者には、審査の上で追試験を許可することがあります。

#### ○手続き期間

事前届出を原則としますが、事後となった場合は、当該科目の試験当日を含む3日以内とします。なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日までとします。(期間の過ぎた申請は、一切受け付けません。)

#### ○手続きの際に必要な書類

1. 追試験受験願 (教務課に備付)
2. 理由を証明する添付書類  
病気・ケガ・・・・・・・・医師の診断書  
交通機関の遅延等・・遅延証明書等  
忌引・・・・・・・・・・会葬礼状等  
その他・・・・・・・・理由を詳細に記載した書類等

○追試験受験料 (1科目につき1,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。)

#### ○試験日

- 春学期試験の追試験・・・・8月上旬頃
- 秋学期試験の追試験・・・・2月上旬頃

### ④再試験

卒業年次の学生は、その年度の春学期または秋学期に履修登録して不合格になっている場合に限り、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験を受験できる可能性があります。再試験を実施する科目は制限がありますので十分注意してください。



## ○ 多摩大学経営情報学部再試験実施要領

この要領は、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験の実施に関する事項を定める。

- ① 再試験を実施する科目は、卒業年次に履修登録を実施している演習科目以外の必修科目、特別選択必修科目及び教養区分の語学とする。
- ② 再試験は次の要件をすべて満たした者に受験を許可する。
  - ・再試験対象の科目が不合格となり卒業に必要な単位が不足してしまった場合
  - ・再試験対象の科目において、指定された課題を提出、また定められた試験を受験している場合
  - ・不足単位が3科目以内の場合
  - ・再試験を受験し合格(単位修得)することにより不足単位が満たされ「卒業」が可能となる場合
  - ・授業科目担当者が再試験受験を許可した場合
- ③ 再試験を受験できる科目数は、不足単位の科目数とする。
- ④ 再試験の受験が許可された者は、指定の期間内(発表日を含め3日以内、なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日まで)に再試験料を納入し、受験手を完了しなければならない。
- ⑤ 再試験の合格評価は、履修規程第9条に定める合格最低評価をもって行う。

※詳細に関しては、別途T-NEXTの掲示等にて告知致します。

## (2) 試験実施上の注意事項

受験できる科目は、「履修登録」をして許可を受けた科目に限ります。受験に際して次のことに留意してください。

- 1 試験会場は講義が行われる講義室とは異なるので注意すること。
- 2 講義が行われる曜日・時限とは異なるので注意すること。
- 3 科目によっては講義室を2教室以上使用して試験を行うので、指示された講義室を間違えないように注意すること。
- 4 受験の際は、学生証を必ず持参し、試験中は机上の右上に置くこと。
- 5 学生証を持参しない場合は受験することはできない。但し仮学生証の交付を受けた場合は受験を認める。
- 6 答案には学部、学科、学籍番号、氏名を明瞭に記入すること。記入してない答案は無効となる。
- 7 受験中、机の上におくことのできる物品は、学生証のほかには次のとおり。

- (1) 筆記用具(ボールペン、万年筆、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム)
  - (2) 時計(ただし計算機、辞書機能付きは除く)
  - (3) 目薬・ティッシュペーパー
  - (4) 当該科目の持込許可条件で許可されたもの
- 8 試験会場には、携帯電話を持ち込まないこと。もし持参している場合は電源を必ず切りカバンの中にする。
  - 9 荷物は床もしくは隣のイスの上に置くこと(机の中には入れないこと)。本やノート等は必ずカバンの中にする。
  - 10 遅刻は試験開始後20分までであれば、認める。
  - 11 その他、監督者の指示に従うこと。
  - 12 試験時間中に不正行為をした者は、事実を確認の上多摩大学学則、多摩大学履修規程第8条及び多摩大学学生懲戒規程により処罰される。

### 不正行為とは

- ① 替え玉受験すること(依頼すること、引き受けること)。
- ② 答案を交換すること(双方)。
- ③ カンニングペーパー(器具)を使用すること。  
(机上・机の中・衣服の中にあつて例え使用していなくても不正行為とする)。
- ④ 机、その他(壁、床、手など)に記入し、これを利用しようとする。
- ⑤ 他人の答案を見て写すこと及び故意に他人に見せること。
- ⑥ 試験中に携帯で話すこと。試験時間中に電話が鳴動した場合、理由に関らず、不正行為とみなす。
- ⑦ 「解答はじめ」の指示の前に問題冊子を開き解答を始めること。
- ⑧ 「解答やめ。鉛筆を置いて下さい。」の指示に従わず、鉛筆を持ち解答を続けること。
- ⑨ その他上記①～⑧に類似する行為。
- ⑩ 監督者の指示に理由なく従わないこと。

## 8. 成績

### (1) 成績評価

成績評価は、学期末試験(定期試験・授業内試験)、レポート及び出席状況等を総合的に考慮して絶対評価で判定します。

	一般講義科目		演習科目	
	成績通知書	成績証明書	成績通知書	成績証明書
合格	A+	A+	P	P
	A	A		
	B	B		
	C	C		
不合格	F	表示しない	F	表示しない
認定※	N	N	N	N

※ 認定科目の単位認定、また編入学における単位認定等の場合のみ付与する。

認定科目	
単位互換科目	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
インターンシップⅠ・Ⅱ	スタディアブロードⅠ～Ⅷ
AP数学	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ

### (2) 成績発表

成績は、「成績通知書」を学生及び保証人宛に発送します。

春学期「成績通知書」発送予定・・・9月中旬頃

秋学期「成績通知書」発送予定・・・3月中旬頃

### (3) 成績評価に関する問合せ

当該学期の成績評価について確認をしたい場合は、次学期授業開始日より14日間以内の窓口受付時間に、教務課に申し出て下さい。

#### (4) 評定平均(GPA)

成績評価方法の一種として授業科目ごとの成績評価を5段階(A+またはP、A、B、C、F)で評価し、それぞれに対して4、3、2、1、0のグレードポイントを付与し、この単位当たり平均(GPA、グレード・ポイント・アベレージ)を出します。認定(N)はGPA計算に算入しません。

GPAは成績優秀者奨学金や、早期卒業、退学勧告、学科選択の学生選考、教職課程の履修許可など幅広く活用されます。

GAP除外科目	
単位互換科目	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
インターンシップⅠ・Ⅱ	スタディアプロードⅠ～Ⅷ
A P 数学	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目	

#### (5) 褒賞制度

本学では学業や社会活動において優れた業績を上げた学生を褒賞する制度を設けています。

褒賞名	褒賞内容
最優秀学生賞 (Best Academic Achievement Award)	大学在学中4年間を通じて総合的に最も優秀な成績を収めた卒業予定者5名及び本学学生として模範的行為のあった者若干名
成績優秀学生賞 (Academic Achievement Award of the semester)	成績優秀者奨学金受給学生に該当する者
優秀学生賞 (Academic Achievement Award)	各講義科目において顕著に優れた成績を収めた学生(各科目1名) 教育補助(SA)として著しい功績があった者 成績向上が顕著な者(GPAの向上等を基準) 学業に対する取組みが真摯で他の模範となる者
社会・研究活動賞 (Outstanding Achievement Award in Research and Social Activities)	コンテスト等において優秀な成果をおさめた者または団体 課外活動で全国大会に出場する等顕著な成績をおさめた者または団体 在籍期間を通じて学生会等の活動にて特に貢献のあった者 優れた研究成果又は論文を発表した者または団体
学長賞及び学部長賞 (President's Award, Dean's Award)	本学学生として模範的行為のあった者または団体

## (6)成績優秀者奨学金制度

学費減免を目的として各学期の評定平均(GPA)上位者20名に対して奨学金を付与します。

- ・区分1…各学期分の授業料
- ・区分2…5万円

### (1)評定平均算出方法

$$\frac{4.0 \times (\text{[A+]と[P]の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{[A]の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{[B]の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{[C]の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数 (F)の単位数を含む}}$$

### (2)選定

選定数の確認

- ・入試合格時に選定され奨学金を支給されている者(1年次生)及び、支給日当日に在籍していない者は対象外とする。
- ・区分1の奨学生候補者数の選定
  - ア、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修していて評定平均が3.2以上の者とする。
  - イ、複数名が対象となった場合は、評定平均最上位の者とする。
  - ウ、評定平均最上位の者が複数名の場合は、修得単位数同一者全員を区分1とし、奨学金は、区分1の定員(1名)を超える人数分については区分2の支給額を加え、均等に分配することとする。なお、均等に分配できない場合は、小数点を切り捨てる。
- ・区分2の奨学生候補者数は、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修している者とし、区分1と併せて各学期20名以内とする。

## (7)成績不振者

「各学期の修得単位数が4単位未満の学生」を成績不振者として定義しています。

成績不振者は教員と今後の就学に関して面談を実施する場合があります。

(例)

- ・1つの学期で3単位取得→成績不振者として面談実施の可能性あり
- ・1つの学期で4単位取得→成績不振者として面談は実施しない

## (8)退学勧告について

多摩大学成績評価規程により、在籍期間やGPA、修得単位数、修学の意思に応じて退学勧告を行っています。

## 9. 学科選択

### (1) 学科選択とは

経営情報学部において入学後の1年間は、学生は学科には所属せず経営情報学部の学生として広く経営情報の素養を身につけることが期待されます。学生の皆さんは、2年進級時に経営情報学科もしくは事業構想学科に所属する事になり、これを学科選択と言います。学科選択においては学生の志望が優先されますが、志望者数が定員を超えた場合は、GPAによる選抜が行われます。

### (2) 選抜方法

基本的に1年次の成績(1年間の※評定平均(GPA))をもとに選抜を行います。不本意な結果を招かないために、1年次に努力を払うようにして下さい。

※評定平均(GPA)算出方法

$$\frac{4.0 \times (\text{[A+]と[P]の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{[A]の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{[B]の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{[C]の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数 ( [F]の単位数を含む )}}$$

### (3) 申請手続きの流れ

#### 仮選択

プレゼミ I で詳細を連絡します。

#### 学科説明会

プレゼミ II で詳細を連絡します。

#### 申請期間

プレゼミ II で詳細を連絡します。

#### 所属学科発表

2017年3月にT-NEXTにて通知

# 10. 進級・卒業要件

## (1) 平成28(2016)年度入学生

### 1. 『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

### 2. 『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択 必修 <sup>※1</sup>	選択必修 <sup>※1</sup>	選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	74	124
	ビジネス			(語学) 4		
問題解決学	学科専門	4		16 <sup>※2</sup>		
	演習 <sup>※3</sup>	6		4		
合計		14	2	34	74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

### 3. 『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限除外科目

インターンシップ I・II  
StudyAbroad I～VIII  
A P 数学  
キャリア・デザイン II～IV  
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII  
教職に関する科目  
単位互換科目  
立志特講 I～III  
問題解決学特講 I～III

## (2)平成27(2015)年度入学生

### 1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

### 2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択 必修 <sup>*1</sup>	選択必修 <sup>*1</sup>		選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	(語学) 4	74	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 <sup>*2</sup>			
	演習 <sup>*3</sup>	6		4			
合計		14	2	34		74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

### 3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップ I・II
StudyAbroad I～VIII
A P 数学
キャリア・デザイン II～IV
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III



**(3)平成26(2014)年度入学生****1.『進級要件』**

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

**2.『卒業要件』**

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修 <sup>※1</sup>		選択科目	合計
基本科目	14	2	A区分	10	68	124
			B区分			
			C区分			
			E区分			
			D区分	4		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 <sup>※2</sup>	6			4		
合計	20	2		34	68	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

**3.『履修上限』**

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップ I・II
StudyAbroad I～VIII
A P 数学
キャリア・デザイン II～IV
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III

#### (4)平成25(2013)年度入学生

##### 1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

##### 2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修 <sup>*1</sup>		選択科目	合計
基本科目	14	2	A区分	10	68	124
			B区分			
			C区分			
			E区分			
			D区分	4 <sup>*2</sup>		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 <sup>*3</sup>	6			4		
合計	20	2		34	68	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

##### 3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
StudyAbroadⅠ～Ⅷ
A P 数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

**(5)平成24(2012)年度入学生****1.『進級要件』**

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

**2.『卒業要件』**

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修*1		選択科目	合計
基本科目	12	2	A区分	10	70	124
			B区分			
			C区分			
			D区分	4*2		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目*3	6			4		
合計	18	2		34	70	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

**3.『履修上限』**

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップ I・II
StudyAbroad I～VIII
A P 数学
キャリア・デザイン II～IV
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III

## (6)平成23(2011)年度入学生

### 1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

### 2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修		選択科目	合計	
基本科目	12	2	A区分	10	78 <sup>*2</sup>	124	
			B区分				
			C区分	4 <sup>*1</sup>			
			D区分				
基礎科目							
専門科目				16			
演習科目 <sup>*3</sup>	2						
合計	14	2		30	78	124	

※1 基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※2 ①「選択」区分の中に、ホームゼミⅠからⅥの12単位を含むものとします。この条件が満たされない場合、卒業要件履修単位数は134単位とします。

②卒業要件履修単位数134単位の場合は、社会人カセミナー・プロジェクトゼミ・インターゼミ・ホームゼミの8単位の単位修得を含めるものとします。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

※4 基本科目、専門科目、「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

### 3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
StudyAbroadⅠ～Ⅷ
AP数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

## 1 1. 教職課程

卒業時に教員の免許状を取得したい学生は、教職課程を履修して必要な単位を修得して下さい。

### (1) 多摩大学経営情報学部にて取得可能な免許状

学部	学科	種類	教科
経営情報学部	※1) 経営情報学科	高等学校教諭(一種)	情報・※2) 数学

※1) 事業構想学科を学科選択した学生は、多摩大学では高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することはできません。

※2) 高等学校教諭(一種)数学の教職免許は、明星大学通信教育部の科目等履修生として取得することができますが、多摩大学で高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することが必須条件になります。

### (2) 基礎資格及び最低修得単位数(教育職員免許法で定められている最低単位数)

免許状の種類	資格取得	基礎資格	大学において修得することを必要とする科目の最低単位数			
			教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目	教科に関する科目	教職に関する科目	教科又は教職に関する科目
高等学校教諭	一種免許状	学士の学位を有すること	8	20	23	16

### (3) 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目

免許法施行規則に定める科目及び単位数		左記に対応する開設授業科目		
科目	単位数	科目	必修	選択必修
日本国憲法	2	法学(憲法)	○	
体育	2	スポーツ I	○	
※1) 外国語コミュニケーション	2	English Expression II		○
		韓国語 II		○
		中国語 II		○
※2) 情報機器の操作	2	IT活用法 II	○	

※1) English Expression II、韓国語 II、中国語 II の3科目より1科目選択必修

※2) 2013年度入学生は、ビジネスコミュニケーション入門 I (読解力)

2014年度入学生から2015年度入学生は、ビジネスコミュニケーション入門 I

#### (4) 教職に関する科目

免許法施行規則に定める 科目区分	本学で開講している科目名			
	科目名	授業開始学期	単位数	必修
教職の意義等に関する科目	教職概論	1-秋	2	○
教育の基礎理論に関する科目	教育原理	2-春	2	○
	教育史	1-秋	2	○
	教育心理学	3-春	2	○
	教育制度論	2-春	2	○
教育課程及び指導法に関する 科目	情報科教育法Ⅰ	3-春	2	○
	情報科教育法Ⅱ	3-秋	2	○
	特別活動	2-秋	1	○
	教育課程総論	2-秋	1	○
	教育方法	2-秋	2	○
生徒指導、教育相談及び 進路指導等に関する科目	生徒指導	2-春	2	○
	教育相談	3-秋	2	○
教職実践演習	教職実践演習	4-秋	2	○
教育実習	教育実習	4-集中 (春学期集中)	3	○
合計	27			

※ 教職に関する科目は、卒業要件単位に含まれません

(5) 教科に関する科目

[◎印は必修科目、○印は選択必修科目]

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名										配当年次
	2012年度開講科目	単位	2013年度開講科目	単位	2014年度開講科目	単位	2015年度開講科目	単位	2016年度開講科目	単位	
情報社会及び情報倫理	◎情報社会学	2	◎情報通信と社会	2	◎情報通信と社会	2	◎情報通信と社会	2			
	◎情報概論	2	◎情報概論	2	◎情報概論	2	◎データフィクションⅠ	2			
	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報倫理	2	2-秋
コンピュータ及び情報処理(実習を含む)	◎ビジネス数学基礎	1	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	1-春
	◎ITリテラシー	1									
	◎情報サービスⅠ(ネットワークサービス)	2	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	3-春
	○プログラミング言語	2	○プログラミング言語Ⅰ	2	○プログラミング言語Ⅰ	2	○デザインワークショップⅠ	2	○Webプログラミング	2	3-春
			○プログラミング言語Ⅱ	2	○プログラミング言語Ⅱ	2	○デザインワークショップⅡ	2	○デザインワークショップⅡ	2	2-春
	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	1-秋
	◎コンピュータサイエンス	2	◎コンピュータサイエンス	2	◎コンピュータサイエンス	2	◎コンピュータサイエンス	2			
情報システム(実習を含む)	◎データベース	2	◎データベース	2	◎データベース	2	◎データフィクションⅡ	2	◎データフィクションⅡ	2	2-秋
	◎システムデザイン	2	◎システムデザイン	2	◎システムデザイン	2	◎システムデザイン	2			
	◎システム分析概論	2	◎システム分析概論	2	◎システム分析概論	2	◎システム分析概論	2	◎データフィクションⅠ	2	2-春
									◎ITデザインⅡ	2	3-秋
情報通信ネットワーク(実習を含む)	◎エビュタクトウク活用	2	◎エビュタクトウク活用	2	◎エビュタクトウク活用	2	◎エビュタクトウク活用	2	◎エビュタクトウク活用	2	3-春
	◎情報ネットワーク概論Ⅰ	2	◎情報ネットワーク概論Ⅰ	2	◎情報ネットワーク概論Ⅰ	2	◎クリエイティブデザインⅡ	2	◎クリエイティブデザインⅡ	2	2-秋
	◎情報ネットワーク概論Ⅱ	2	◎情報ネットワーク概論Ⅱ	2	◎情報ネットワーク概論Ⅱ	2	◎ITデザインⅠ	2	◎ITデザインⅠ	2	3-春
マルチメディア表現及び技術(実習を含む)	◎マルチメディア実践	2	◎マルチメディア実践	2	◎マルチメディア実践	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	2-春
	◎Webデザイン	2	◎WebデザインⅠ	2	◎WebデザインⅠ	2	◎WebデザインⅠ	2	◎WebデザインⅠ	2	2-春
			◎WebデザインⅡ	2	◎WebデザインⅡ	2	◎WebデザインⅡ	2	◎WebデザインⅡ	2	2-秋
	◎経営科学Ⅰ	2	◎経営科学Ⅰ	2	◎経営科学Ⅰ	2	◎問題解決メソッドⅠ	2			
情報と職業	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	2-春
	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	3-春

※上記のうち必修科目を22単位履修し、選択必修科目を12単位以上履修して下さい。

(6) 教職課程における科目新旧対照表

科目名	2012年度開講科目	2013年度開講科目	2014年度開講科目	2015年度開講科目	2016年度開講科目	備考
					IT活用法Ⅱ	新規2016年度入学生用
					経営とセキュリティ	新規
					Webプログラミング(隔年開講)	新規隔年開講
					データフィクションⅡ(区分:情報システム実習を含む)	新規
					ITデザインⅡ	新規
					情報倫理	新規
					情報セキュリティ	廃止
					韓国語Ⅱ	→ 韓国語Ⅱ -
					中国語Ⅱ	→ 中国語Ⅱ -
情報サービスⅡ(シミュレーション)	→ 廃止		→ 廃止	→ 廃止		
		ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ(読解力)	→ ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	→ ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	→ ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	2015年度以前入学生用
情報社会学	→ 廃止		→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	-
		情報通信と社会	→ 情報通信と社会	→ 情報通信と社会	→ 廃止	廃止
情報概論	→ 情報概論		→ 情報概論	→ データフィクションⅠ(区分:情報社会及び情報倫理)	→ 廃止	廃止
ビジネス数学基礎ITリテラシー	→ 廃止		→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	-
		ビジネス数学基礎	→ ビジネス数学基礎	→ ビジネス数学基礎	→ ビジネス数学基礎	-
情報サービスⅠ(ネットワークサービス)	→ 廃止		→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	-
		Webサービス開発	→ Webサービス開発	→ Webサービス開発	→ Webサービス開発(隔年開講)	隔年開講
プログラミング言語	→ アダブティブ言語Ⅰ	→ アダブティブ言語Ⅰ	→ アダブティブ言語Ⅰ	→ デザインワークショップⅠ	→ デザインワークショップⅠ	-
		アダブティブ言語Ⅱ	→ アダブティブ言語Ⅱ	→ デザインワークショップⅡ	→ 廃止	廃止
コンピュータサイエンス	→ コンピュータサイエンス		→ コンピュータサイエンス	→ コンピュータサイエンス	→ 廃止	廃止
情報探索法	→ 情報探索法		→ 情報探索法	→ 情報探索法	→ 廃止	廃止
データベース	→ データベース		→ データベース	→ データフィクションⅡ	→ データフィクションⅡ	-
情報ネットワーク概論Ⅰ	→ 情報ネットワーク概論Ⅰ		→ 情報ネットワーク概論Ⅰ	→ クリエイティブデザインⅡ	→ クリエイティブデザインⅡ	-
情報ネットワーク概論Ⅱ	→ 情報ネットワーク概論Ⅱ		→ 情報ネットワーク概論Ⅱ	→ ITデザインⅠ	→ ITデザインⅠ	-
ビジネス実践	→ 経営科学Ⅰ実践		→ 経営科学Ⅰ実践	→ クリエイティブデザインⅠ	→ クリエイティブデザインⅠ	-
Webデザイン	→ WebデザインⅠ		→ WebデザインⅠ	→ WebデザインⅠ	→ WebデザインⅠ	-
		WebデザインⅡ	→ WebデザインⅡ	→ WebデザインⅡ	→ WebデザインⅡ	-
経営科学Ⅰ	→ 経営科学Ⅰ		→ 経営科学Ⅰ	→ 問題解決メソッドⅠ	→ 廃止	廃止
経営科学Ⅱ	→ 経営科学Ⅱ		→ 経営科学Ⅱ	→ 問題解決メソッドⅢ	→ 廃止	廃止

## (7) 教職課程の履修について

①教職課程の履修要件は2年次以上で、原則として教員採用試験の受験を希望していること。

②教職課程の履修が認められる者

・1年次終了時

2年次に進級する際に、原則として、1年次中に修得した単位が40単位以上で、かつその成績の評定平均が2.1以上に達した者。

評定平均の算出方法

$$\frac{4.0 \times (\text{[A+]と[P]の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{[A]の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{[B]の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{[C]の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数 ( [F] の単位数を含む )}}$$

・2年次終了時

・80単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。

・3年次終了時

・110単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。

・原則として、教職に関する科目の必修科目（教育実習と教職実践演習を除く）をすべて修得していること。

・原則として、必修科目30単位全と、選択必修科目の内12単位以上修得していること。

③「教育実習3単位」のうち1単位は「事前・事後指導」とし、これに出席しなければ教育実習の単位は認定されない。

## (8) 教育実習について

①教育実習の目的

教育実習は、学校教育の実状や教員の実務を理解し、これまで大学で身につけた知識や理論を背景に、実習校において、教育職員として必要な現場の知識や技術、態度等を身につけるための実地修練の場です。

②教育実習の実施時期

教育実習の実施時期は4年次の6月を原則とするが、実習校の都合により、他の時期に行うこともあります。

③教育実習の説明会

4年次の教育実習履修有資格者を対象に、4月に教育実習説明会を実施し、教育実習申込書、教育実習日誌等を配布します。

④教育実習手数料

教育実習手数料は、教育実習申込みの際に納入してください。

→ 教育実習手数料 20,000円



⑤実習校との事前打ち合わせ会

教育実習開始前に、教育実習についての打ち合わせが実習校で行われます。実習に際しての指示を受けたり、実習生の準備状況の報告を行ったりするもので、実習同様に大切な行事ですから必ず出席してください。日時は実習校から直接本人に連絡があります。

**(9) 教員免許状の申請について**

大学から東京都教育庁へ一括申請を行います。

教員免許状申請料は、教員免許状申請の際に納入ください。

→ 教員免許状申請料 3,700円

## 12. オフィスアワー制度について

### 【オフィスアワーとは】

多摩大学経営情報学部では、オフィスアワーを実施しています。オフィスアワーとは、本学の経営情報学部の学生が受講する授業科目に関し、担当の教員に直接質問等をし、教員が返答するために行う面談の時間のことです。1週間の中に必ず90分以上設定し、公表した上で、学生からの相談を受けられるように待機しています。予約は不要です。

※担当授業科目には、ホームゼミを含みます。

※上記「学生」とは、経営情報学部生に加え、経営情報学部の科目を受講している科目等履修生と聴講生を含みます。

※非常勤教員については、随時電子メールで質問を受け付けています。詳細は別途配布する資料で確認して下さい。

### 【基本原則】

- ・面談内容は授業内容に関することとします。
- ・面談場所は3階教育サポート室奥のラウンジを使用します。
- ・オフィスアワー情報(曜日、時間)については、教育サポート室とホームページで公表します。URL : <http://www.tama.ac.jp/student/smis/011.html>
- ・一人の面談時間単位は、15分です。

### 【予約希望の場合】

面談は、予約なしでも可ですが、事前に予約することもできます。希望する学生は、3階教育サポート室カウンターにて、面談予約希望の旨を申し出て下さい。また申し込む場合は、申込用紙を受け取り、必要事項を記入して提出して下さい。

※予約申込時間：月曜日～金曜日午前9:30～午後4:30

※直接教員と約束をした場合でも、該当する時間に予約があった場合には予約した学生を優先します。

※曜日や時間、面談場所が変更になる場合があります。

※予約可能な時間は15分間を限度とします。

予約した場合には、面談当日指定された場所に遅れない様に直接行ってください。もしも予約時間定刻に予約した学生がいない場合、他の学生が優先されます。

## 1 3. 授業評価アンケート(VOICE)について

全ての講義科目について、学生による授業評価アンケート(VOICE)を実施しています。よりよい講義の実施のために、学生から真面目で率直な意見を聞くマークシートによる無記名式アンケートです。詳細は掲示にてお知らせしますので、積極的に回答して下さい。

なお、過去の授業評価アンケート(VOICE)結果については、3階図書館にて公開しています。履修する授業を選択する際に参考にして下さい。

## 1 4. 単位互換科目について

### ● 申請資格

多摩大学経営情報学部在学する学生

### ● 履修期間・履修単位制限

1. ネットワーク多摩単位互換制度によって開講されている他大学の科目(産学連携科目を含む)を履修することが出来ます。開講科目の詳細については、T-NEXTにて確認して下さい。
2. 単位互換制度により他大学の科目を履修し、単位を修得できるのは在学中30単位までとし、各学期の履修単位数上限に含まれます。また、修得した単位は「単位互換科目」の単位として卒業要件に含まれます。

### ● 履修申請

1. 履修登録は当該科目受講の翌学期に行い、単位認定されます。つまり、他大学の春学期開講科目を受講した場合、多摩大学で秋学期に履修登録し、秋学期の成績となります。
2. 履修申請は、春学期は3月29日(火)～4月22日(金)、秋学期は8月下旬～9月上旬(決定次第T-NEXTで発表します)までに「履修申請書」を顔写真添付のうえ教務課に提出して下さい。申請期間内であっても、開設大学の受付期間が終了している場合には受付が出来ません。原則として、受付期間外の受付は出来ませんので、申請は余裕を持って行って下さい。
3. 「履修申請書」を提出し、開設大学より許可を受けた科目は成績等に関わらず必ず履修することとします。
4. 履修許可者の発表はT-NEXTにて行います。

### ● 履修上の注意

1. 履修科目は、ネットワーク多摩単位互換制度により開講されている、単位互換科目及び産学連携事業科目のうち、半期完結の科目に限ります。
2. 在籍年次よりも上級年次に配当されている科目を履修することは出来ません。
3. 履修に当たっては移動時間を考慮し、他大学科目を履修する前後の時間に配置された多摩大学科目または他大学科目を履修することは出来ません。ただし、昼休みを挟む場合はこ

の限りではありません。

## ● 授業

1. 休講・補講等の授業及び試験日程等に関する通知は、開設大学が通常所属大学の学生に対する通知方法により行われますので、各自の責任において確認してください。
2. 出席状況によっては、学期の途中であっても開設大学から履修の許可を取り消されたり、試験の受験資格が取り消されることがあります。
3. 学年暦の差異により、多摩大学と開設大学での授業・補講(代講)の日時が重複した場合、どちらの授業に出席するかは自身で判断してください。

## ● 試験

1. 開設大学の試験と多摩大学の試験の日時が重複した場合は、その事実が判明したら直ちに本学の教務課に相談してください。相談が無い場合、対応措置を講じることができません。
2. 病気等により開設大学の試験を欠席したときは、追試験の受験を認められることがあります。その場合の手続き等は開設大学の定めに従います。
3. 開設大学における授業及び試験の詳細については、開設大学が配布する資料などで確認してください。

## ● 成績

1. 成績評価は開設大学の基準及び表示方法により行い、多摩大学の基準及び表示方法に置き換えて認定します。
2. 成績の質問は、開設大学の定めるところによるものとします。

## ● 特別聴講学生証

1. 特別聴講学生証は、開設大学において交付されます。
2. 有効期限は開設大学が必要と定める期間とします。また、有効期限内であってもこれを必要としなくなったとき、または有効期限が満了したときは特別聴講学生証を多摩大学教務課まで返却してください。

## ● その他

1. ネットワーク多摩単位互換制度を利用して履修する授業科目の聴講料は免除されます。ただし、教材費や実習費が必要な授業科目については、実費を徴収されることがあります。
2. 開設大学における図書館等の施設・設備の利用範囲、自転車・バイクの利用、開設大学で特に注意する事項などについては、開設大学が配布する資料等で確認してください。
3. 開設大学において急病になった、または事故にあった場合など、急を要する治療が必要な場合は、開設大学の診療施設を利用することが出来ます。また、直ちに救急措置を講じる必要がある場合、本学の判断により保険情報を含めた個人情報を開設大学の診療施設に提供することがあります。

なお、通学及び授業中に事故にあった場合、「学生教育研究災害傷害保険」の適用を受けることが出来る場合がありますので本学の学生課に問い合わせてください。

大学名	初回授業開始日		大学提供科目 / 産学連携科目
	前期	後期	
明星大学	4月14日(木) 3限	——	現役記者が教える英字新聞のツボ
中央大学	——	9月上旬 (木5限)※	現代社会と新聞

※決定次第T-NEXTで発表します。

## 15. アセスメント

アセスメントとは、専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を育成するためのプログラムです。1年生と3年生の春学期のオリエンテーションでアセスメントテストを実施します。外部の一般化された試験を用いて社会で求められる一般的な能力等を測定し、自身の現状を客観的に把握することが出来ます。1年生と3年生の両方で受験することで、カリキュラムによる学修成果を、大学の成績とは異なる視点で確認できます。試験での気づきを通して、大学での学びをより主体的なものにする原動力としてください。

## 16. TOEIC 試験補助について

大学から補助を受けて、無料で学内TOEICを受けることができます。就職や留学に行く際の目安、また自分の英語の実力がどの程度伸びたかを見るよいチャンスです。積極的に活用して、自身の成長の指標にしてください。申し込みの詳細については随時更新しますので、教育サポート室で最新情報を確認してください。

# 17. 多摩大学 学則(抜粋)

## 第1章 総則

(目的)

第1条 多摩大学(以下「本学」という。)は、永年に及び産業教育における経験を基盤とし、国際化・情報化時代に即応して、学生に高度な外国語能力と世界に通用する教養・最新の経営知識及び的確な情報処理能力を修得せしめ、国際的ビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与する指導的人材を育成することを目的とする。

(自己点検及び評価)

第2条 本学は、その教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。

2 自己点検及び評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(個人情報保護)

第3条 本学は、教育・研究活動等の適正かつ円滑な運営を図り、個人情報の有用性に配慮するため、個人の権利及び利益を保護する。

2 個人情報保護について必要な事項は、別に規程で定める。

(ハラスメントの防止)

第4条 本学は、ハラスメントの防止及びハラスメントに起因する問題が生じた場合に、適切な対応を行うための措置を講じ、学生、教育職員及び事務職員等の快適な環境を作り、教育、研究及び就業の機会と権利を保障する。

2 ハラスメントの防止について必要な事項は、別に規程で定める。

## 第3章 修業年限、在学年限、学年、学期及び休業日

(修業年限)

第10条 本学の修業年限は、4年とする。ただし、第38条の規定により卒業を認められた者については、この限りでない。

(在学年限)

第11条 学生は、8年を超えて在学することができない。

2 編入学、転入学及び再入学の許可を得た者の在学年限は、第20条第2項に定める。

(学年)

第12条 学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。ただし、秋学期入学生については、10月1日に始まり、翌年9月30日に終る。

(学期)

第13条 学年を次の2学期に分ける。

(1)春学期 4月1日から 9月30日まで

(2) 秋学期 10月1日から翌年3月31日まで

(休業日)

第14条 授業を行わない日(以下「休業日」という。)は、次のとおりとする。ただし、学長が必要と認めるときは、休業日を変更又は臨時に休業日を定めることができる。

(1) 日曜日

(2) 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日

(3) 本学の開学記念日 10月20日

(4) メモリアルデー 1月16日

(5) 夏季休業 8月10日から9月20日まで

(6) 冬季休業 12月25日から 翌年1月5日まで

(7) 春季休業 翌年2月10日から3月31日まで

2 休業日の変更又は臨時の休業日については、その都度公示する。

## 第4章 学籍

(入学の時期)

第15条 入学の時期は、学年の始めとする。ただし、再入学及び転入学については、学期の始めとすることができる。

(入学資格)

第16条 本学に入学することができる者は、次の各号の一に該当する者とする。

(1) 高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者

(2) 通常の課程による12年の学校教育を修了した者又は通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者

(3) 外国において、学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で、文部科学大臣の指定した者

(4) 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者

(5) 専修学校の高等課程(修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。)で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者

(6) 文部科学大臣の指定した者

(7) 高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者(旧規程による大学入学資格検定に合格した者を含む。)

(8) 学校教育法第90条第2項の規定により大学に入学した者であって、本学において、大学における教育を受けるにふさわしい学力があると認めた者

(9) 本学において、個別の入学資格審査により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、18歳に達した者

(入学の出願)

第17条 本学に入学を志願する者は、入学願書に所定の入学検定料及び別に定める書類を添えて願い出なければならない。

(入学者の選考)

第18条 前条の入学志願者に対しては、試験を行いその成績等により選考する。

(入学手続き及び入学許可)

第19条 入学者の選考に合格した者は、所定の期日までに入学誓約書その他所定の書類を提出し、第42条に規定する、所定の学費を納付しなければならない。

2 学長は、正当な事由なくして期日までに前項の手続きを完了しない者の合格を取消することができる。

3 学長は、第1項の入学手続きを完了した者に入学式において入学を許可し、学生証を交付する。

(編入学、転入学及び再入学)

第20条 次の各号の一に該当し、本学に入学を志願する者は、次のとおりとする。

(1) 大学を卒業した者又は退学した者

(2) 短期大学又は高等専門学校を卒業した者

(3) 専修学校専門課程を卒業した者

(4) 他の大学に在学中の者で、現に在学する大学の学長による転学の承認を得た者

また、学長は次の各号の一において、入学を許可することができる

(1) 編入学については、編入学定員内において、選考の上、入学を許可することができる。

(2) 転入学及び再入学については、定員に欠員のある場合に限り、選考の上、相当年次に入学を許可することができる。

2 前項の規定により入学を許可された者の既に履修した授業科目及び単位数の取扱い並びに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

3 前3条の各規定は、第1項の入学に準用する。

(休学)

第21条 疾病その他特別の事由により修学することができない者は、1学期又は1年間(2学期)を区分として、様式第1に規定する休学願を提出し学長の許可を得て休学することができる。

2 学長は、疾病その他特別の事由により修学することが適当でないと認めるときに、教授会の議を経て、休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第22条 休学期間は、1年以内とする。ただし、特別の事由があるときは、1年を限度として休学期間の延長を認めることができる。

2 休学期間は、通算して4年を超えることができない。

3 休学期間は、第10条の修業年限及び第11条の在学年限に算入することができない。



(復学)

第23条 休学期間中にその事由が消滅したときは、様式第2に規定する復学願を提出し学長の許可を得て復学することができる。

(転学)

第24条 他の大学又は短期大学に入学又は転入学を志願しようとする者は、様式第3に規定する転学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(転学部)

第25条 転学部を願い出る者は、選考し各教授会の議を経て、学長がこれを許可する。

2 転学部について必要な事項は、別に規程で定める。

(留学)

第26条 外国の大学又は短期大学で修学することを志願する者は、様式第4に規定する留学願を提出し学長の許可を得なければならない。

2 第36条の規定は、前項の留学の場合に準用する。

3 第1項の許可を得て留学した期間は、第11条に定める在学年限に含めることができる。

(願い出による退学)

第27条 病気その他の事由により退学しようとする者は、様式第5に規定する退学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(除籍)

第28条 次の各号の一に該当する者は、教授会の議を経て、学長が除籍する。

(1) 第11条に定める在学年限を超えた者

(2) 第22条第2項に定める休学期間を超えてなお修学できない者

(3) 長期間にわたり行方不明の者

(4) 学費の納付を怠り、催促してもなお納付しない者

## 第5章 教育課程及び履修方法等

(授業科目)

第29条 授業科目は、基礎教育科目及び専門教育科目とする。

2 授業科目の種類及び単位数等は、別表第1及び第5のとおりとする。

(単位の計算方法)

第30条 各授業科目の単位は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の基準により計算する。

(1) 講義及び演習については、15時間の授業をもって1単位とする。

(2) 実験、実習及び実技については、30時間の授業をもって1単位とする。

2 各授業科目の授業は、15週にわたる期間を単位として行う。ただし、学長が本学で教育上特別の必要があると認められるときは、教授会の議を経て、これらの期間より短い特定の期間において授業を行うことができる。

#### (履修方法)

第31条 学生は、所属する学部及び学科の所定の授業科目を履修しなければならない。

2 学生は、当該年度又は当該学期に履修する授業科目を選択し、指定期間内に所定の方法により履修科目を届出なければならない。

3 履修について必要な事項は、別に規程で定める。

#### (単位修得等の認定)

第32条 単位修得の認定その他授業科目履修の認定は、試験その他の審査により行う。

2 試験及び審査の方法について必要な事項は、別に規程で定める。

#### (第1年次に入学した者の既修得単位の認定)

第33条 本学の第1年次に入学した者が大学又は短期大学を卒業又は中途退学している場合、本学で教育上有益と認めるときは、教授会の議を経て、学長が既に修得した単位から、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目について、合計30単位を超えない範囲において、本学で修得したものとして認定することができる。

#### (成績の評価)

第34条 授業科目の成績は、一般講義科目は、A+、A、B、C、Fの5段階、ゼミナール科目はP、Fの2段階の評語をもって表示する。

2 表示した成績は、Fを不合格としその他を合格とする。

3 第33条、第35条及び第36条により認定された授業科目の成績は、認定(N)の評語をもって表示する。

4 成績評価について必要な事項は、別に規程で定める。

#### (他学部科目の履修)

第35条 学生は、他の学部開設されている授業科目のうち定められた科目を、24単位を超えない範囲において履修することができる。ただし、履修を希望する者は、あらかじめ学部長の許可を得なければならない。

2 前項の履修により修得した単位は、卒業に必要な修得単位数に算入することができる。

#### (他の大学の授業科目の履修)

第36条 学生は、他の大学、短期大学又は外国の大学との協議に基づき、授業科目を履修又は外国の大学に留学することができる。

2 前項の規定により履修した授業科目について修得した単位は、教授会の議を経て、学長が60単位を限度として認定することができる。

3 本学を休学时に他の大学、短期大学又は外国の大学で修得した単位の認定については、別表第2に掲げる単位認定料を徴収する。

#### (教育職員免許状取得のための課程)

第37条 本学に教育職員免許状取得のための課程を置く。

2 本学において資格の取得できる教育職員免許状の種類及び免許教科は、別表第3のとおりとする。

3 教育職員免許状を得ようとする者は、別表第4に定める「教科に関する基礎及び専門科

目]及び別表第5に定める「教職に関する科目」を履修しなければならない。

4 別表第5に定める「教職に関する科目」は、卒業に必要な単位数に算入することができない。

## 第6章 卒業及び学位

(卒業)

第38条 本学に4年以上在学し、別表第1に定める所定の単位数以上を修得した者は、教授会の議を経て、学長が卒業を認める。

2 当該学部の学生として3年以上在学した者が、別表第1に定める所定の単位数以上を優秀な成績で修得したと認めるとき、前項の規定にかかわらず教授会の議を経て、学長が早期卒業として認めることができる。

3 早期卒業について必要な事項は、別に規程で定める。

(学位)

第39条 学長は、卒業を認めた者に次の学位を授与し、「卒業証書・学位記」を交付する。

(1) 経営情報学部 学士(経営学)

(2) グローバルスタディーズ学部 学士(グローバルスタディーズ学)

## 第7章 賞罰

(表彰)

第40条 人物及び学業の優秀な者又は本学の学生として表彰に値する功績があった場合は、教授会の議を経て、学長が表彰する。

(懲戒)

第41条 本学則若しくは本学で定める諸規則に違反した者又はその他学生としての本分に反する行為があった場合は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

2 前項の懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。

3 懲戒について必要な事項は、別に規程で定める。ただし、定めた規程は、本学則と同様の取扱で公開する。

## 第8章 学費

(学費の種類及び額)

第42条 学生は、学年毎に授業料その他所定の学費を納付しなければならない。

2 学費の種類及びその額は、別表第2のとおりとする。

(学費の納付)

第43条 授業料は、年額の二分の一ずつを次の2学期に分けて納付しなければならない。

(1) 春学期(4月から 9月まで)：納期 4月中

(2) 秋学期(10月から翌年3月まで)：納期 10月中

2 施設費(維持費)及び図書教材費は、学年始めの月に一括して納付しなければならない。

(復学等の場合の学費)

第44条 春学期又は秋学期の中途において復学又は入学した者は、復学又は入学した月から当該期末までの授業料並びに当学年度分の施設費(維持費)及び図書教材費が未納の場合は、これ等を含め一括して復学又は入学した月に納付しなければならない。

(退学等の場合の学費)

第45条 春学期又は秋学期の中途で退学又は除籍された者の当該学期分の学費は、徴収する。  
2 停学期間中の学費は、徴収する。

(休学の場合の学費)

第46条 休学を許可された者又は命ぜられた者は、休学期間が1学期以上にわたる場合においてその学期分の授業料を免除する。ただし、休学在籍料として別表第2に定める額を納付しなければならない。

(研究生等の学費)

第47条 研究生、聴講生及び特別聴講学生の入学検定料、入学金及び授業料等の学費については、別に定める。

(既納の学費)

第48条 既納の入学検定料、入学金及び授業料等の学費は、返還しない。ただし、入学式までに入学を辞退した場合には、既納した入学手続納付金のうち、入学金を除く金額を返還する。

## 第9章 奨学

(奨学)

第49条 能力があるにもかかわらず経済的理由によって就学が困難な者及び特に学力が優れている者に対して、奨学の方法を講ずることができる。  
2 奨学の方法は、奨学金の給付又は貸与とする。  
3 奨学について必要な事項は、別に規程で定める。

## 第10章 研究生、特別聴講学生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生

(研究生)

第50条 本学の特定の専門事項について、研究することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が研究生として入学を許可することができる。  
2 研究生について必要な事項は、別に規程で定める。

(特別聴講学生)

第51条 他の大学又は外国の大学の学生で、協議に基づき本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、学長が特別聴講学生として入学を許可することができる。  
2 特別聴講学生について必要な事項は、別に規程で定める。

(科目等履修生)

第52条 本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が科目等履修生として入学を許可することができる。

2 科目等履修生について必要な事項は、別に規程で定める。

(聴講生)

第53条 本学の特定の授業科目を聴講することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が聴講生として入学を許可することができる。

2 聴講生について必要な事項は、別に規程で定める。

(外国人留学生)

第54条 外国人であって、外国において通常の過程による12年の学校教育課程を修了した者又はこれと同等以上の資格ある者が、本学に入学を志願するときは、日本政府、日本政府の承認した外国政府若しくは日本駐在の外国公館の発行した身分証明書又はこれに準ずる証明書のある者に限り、選考し学長が入学を許可することができる。

2 外国人留学生について必要な事項は、別に規程で定める。

## 第11章 公開講座

(公開講座)

第55条 地域社会の発展に寄与し、社会人の教養を高め、文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる。

2 公開講座について必要な事項は、別に規程で定める。

## 第12章 寄付講座

(寄付講座)

第56条 学外の機関等から授業科目の運営に必要な経費の寄付を受け、本学の教育研究に資するため、本学に寄付講座を開設することができる。

2 寄付講座について必要な事項は、別に規程で定める。

## 18. 多摩大学学生懲戒規程

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第41条の規定に基づき学生の懲戒について必要な事項を定めることを目的とする。

(懲戒の定義)

第2条 懲戒対象者は、学則に規定する学部学生、研究生、特別聴講生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生(以下「学生」という。)とする。

- 2 懲戒は、本学で学生の本分を全うさせるために、学校教育法及び学校教育法施行規則に基づき行う。
- 3 懲戒は、総合的に検討し教育的見地に基づき行う。
- 4 懲戒により学生に科す不利益は、懲戒目的を達成するため必要最小限とする。

(懲戒の種類)

第3条 学則第41条第2項で規定した懲戒の種類は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学は、学生としての身分を奪う事。

(2)停学は、無期又は有期としその期間の登校を禁止する事。

ア 停学の期間は、在学年限に含め修業年限に含めない。

イ 停学の期間が1カ月以下でかつ特別の事情がある場合は、学生委員会で審議し第7条に規定する学長の決定において修業年限に含めることができる。

ウ 有期停学は6ヶ月以下とする。

(3)訓告は、口頭及び文書により厳重な注意を行い、期限を定めて反省文の提出をさせる事。

(懲戒の基準)

第4条 前条に定める懲戒の基準は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

イ 学内又は学外において重大な非違行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

オ その他退学を受けた者の行為を教唆若しくは幫助した場合

(2)停学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合

イ 学内又は学外において悪質な非違行為を行った場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、悪質な不正行為を行った場合

オ その他懲戒処分をしても改善の見込みがない場合

## (3)訓告

- ア 学内又は学外において非違行為を行った場合
- イ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合
- ウ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合

## (審議)

第5条 学部長は、学生が懲戒の対象となりうる事項があったと認められるとき、学生委員会に調査を命ずる。

2 学生委員会は、事実関係の調査及び懲戒の種類の審議を行い、結果を教授会へ報告する。

## (調査)

第6条 学生委員会は、当該学生及び関係者等から資料の提出を求め、事情及び意見を聴くことができる。

2 学生委員会は、当該学生に弁明の機会を与える。

3 当該学生は、弁明の場において必要な証拠を提出し証人の喚問を求めることができる。また、当該学生は、補佐人を指名し補佐を受けることができる。

4 当該学生が、弁明の場を正当な理由なく欠席したとき、弁明の権利を放棄したものとする。

5 学生委員会は、懲戒処分決定前に謹慎を命ずることができる。ただし、謹慎の期間は、3ヶ月以内とする。

6 謹慎は、当該学生の行為が第4条で定める懲戒基準に該当するとき行うことができる。

7 謹慎期間は、停学期間に通算することができる。

8 謹慎期間中は、本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、参加ができる。

9 謹慎期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

## (懲戒の決定及び解除)

第7条 懲戒は、教授会の議を経て、学長が行う。

2 懲戒は、様式第1に定める懲戒通知書に理由も添えて当該学生に通知する。ただし、有期停学の場合は、停学解除日も通知する。

3 無期停学の解除行う場合は、教授会の議を経て、学長が行う。学長は、決定により停学解除を当該学生に文書で通知する。

## (再審査)

第8条 懲戒を受けた学生は、事実誤認、新事実の発見又はその他正当な理由があるとき、それらを示す資料を添えて文書にし、学長に再審査の申請を行うことができる。

2 再審査の申請は、懲戒通知書の決定日から1ヶ月以内とする。

3 学長は、再審査を行うかどうか判断し教授会の議を経て決定する。

4 学長は、再審査の必要があると決定したとき、学部長に再審査を命じる。

5 学長は、再審査の必要がないと決定したとき、当該学生に文書で通知する。

6 再審査の申請を行い学長が教授会の議を経て、懲戒の決定又は解除行うまでは、すでに決

定された懲戒内容の変更はできない。

7 再審査の調査は、第6条の規定を準用する。

(停学期間中の措置)

第9条 停学期間中は、当該学生が本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験、及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、この限りではない。

2 停学期間中は、当該学生に対して定期的な面談及び指導を行う。

3 停学期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(事務)

第10条 学生課は、学生の懲戒についての庶務を担当する。

(規程の公開)

第11条 本規程は、学生の不利益等につながる重要な規程であることから、本学のホームページ、学生ハンドブック等に学則と同様の取扱で公開する。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、教授会の議を経て、学長が行う。

附則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

様式第1



## 19. 多摩大学履修規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第31条、第32条及び第34条の規定に基づき、授業科目(以下「科目」という。)の履修、試験及び成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(科目の履修)

第2条 学生は、学則第31条第2項の履修科目届により、履修しようとする科目を登録しなければならない。

2 登録した科目の変更又は追加は認めない。

3 学科・年次・クラスが指定された科目については、その指定に従い履修するものとする。ただし、科目担当者が特に認めた場合はこの限りでない。

4 同一科目を同一年度に重複して履修することはできない。ただし、教育課程表及び授業時間割表において指示する特定の科目についてはこの限りでない。

5 すでに単位を修得した科目を履修することはできない。

6 履修に関するその他の事項については、教育課程表、講義要綱及び時間割表に定める方法によるものとする。

(定期試験)

第3条 定期試験は、学期末に行う。

2 定期試験を受験することができる者は、履修科目届けを提出したものに限る。

3 受験できる科目は、登録した科目とする。

4 授業料その他の納付金の未納者は、受験することができない。

(追試験)

第4条 追試験は、定期試験を実施した科目(レポートにより実施した科目を除く。)を、病気その他やむを得ない理由により受験できなかった者に対し、本学が指定する日にこれを行うことができる。

2 追試験を希望する者は、医師の診断書等理由を証明するに足る書類を添え、原則として当該科目の試験日を含む3日以内(ただし、日曜日、祝日は除く。)にその申請をし、教務委員会の許可を得なければならない。

3 追試験を許可された者は、所定の期日までに追試験料を納付しなければならない。

(再試験)

第5条 卒業年次の学生及び進級年次の学生が、履修登録した科目のうち不合格になった科目に対し、再試験を実施することがある。

2 再試験についての必要な事項は、別に定める。

3 再試験を許可された者は、所定の期日までに再試験料を納付しなければならない。

---

(試験の実施)

第6条 第3条、第4条及び第5条の試験に関する事項は別に定める。

(臨時試験)

第7条 臨時試験は、各科目担当者が随時これを行うことがある。

(不正行為)

第8条 第3条及び第4条並び第5条に定める試験において、不正行為を行なった者は多摩大学学生懲戒規程に基づき処分する。

2 受験中に答案を持ち出した者については、その受験科目を不合格とする。

(成績照会)

第10条 前条に定める成績評価について疑問がある場合は、成績の照会を申出ることができる。

2 成績照会は、次学期授業開始後2週間以内に事務局担当窓口に出なければならぬ。

## 20. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)

(対象学生)

第2条 早期卒業の対象学生は、学則第38条第2項に規定する者とする。ただし、再入学、編入学及び転入学した学生又は教職課程科目の履修者は、対象とならない。

(早期卒業要件)

第5条 早期卒業の要件は、3年又は3年半在学して所定の科目を履修し、多摩大学履修規程に規定する卒業要件単位数以上を修得しなければならない。ただし、休学した期間は在学期間に含まれない。

2 早期卒業要件について必要な事項は、別に細則で定める。

(申請の取下げ)

第6条 早期卒業希望者は、卒業の1ヶ月前までに早期卒業申請を取下げることができる。

(卒業の時期)

第7条 早期卒業の時期は、春季入学生にあつては3年次の3月以降、秋季入学生にあつては3年次の9月以降とする。

## 21. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)

(認定要件)

第2条 早期卒業の認定要件は、早期卒業規程第3条第1項に定めるもののほか、2年次終了時において、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)以下の単位を修得していること。

卒業に必要な必修・特別選択必修科目の単位の全てと卒業に必要な合計単位数の75%以上。(小数点以下の端数は切り上げとする)

(2)GPAが3.2以上であること。

(3)ホームゼミナールに所属し、担当教員の推薦を得ていること。ホームゼミナールに所属しない場合は専任教員2名の推薦状を得ていること。

(4)早期卒業の意志及び理由が明確であること。

(学習指導体制)

第3条 学習指導体制として、ホームゼミナール担当教員、教務委員長及びホームゼミナール担当教員が指名した教員1名(合計3名)又はホームゼミナール未所属の場合は教務委員長及び学生を推薦した専任教員2名(計3名)を配置する。

(早期卒業要件)

第4条 早期卒業の要件は、早期卒業規程第5条第1項に定めるもののほか、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)GPAが3.2以上であること。

(2)本学大学院の入学許可を得ていること。

(GPA)

第5条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + P \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数 (FJの単位数を含む)}$$

## 22. 多摩大学成績評価規程

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則第34条に基づき、成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(GPA)

第2条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + P \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数} ([F] \text{の単位数を含む})$$

(卒業)

第3条 卒業判定にGPAを使用する場合、多摩大学早期卒業規程による。

(面談の実施)

第4条 成績不振者の基準は、各学期の修得単位数が4単位未満の者とし、成績不振者に対する履修指導面談、就学的意思確認面談は、各年度に1回以上行い、3月31日までに実施する。

(退学勧告)

第5条 5年を越えて在籍し、GPAが1.0以下、かつ修得単位数が60単位未満の学生については、就学的意思確認面談を実施し、必要に応じて退学勧告を行うものとする。

(規程の改廃)

第6条 この規程の改廃は、教授会の議を経て、学長が行う。

附 則

この規程は、平成26年7月1日から施行する。

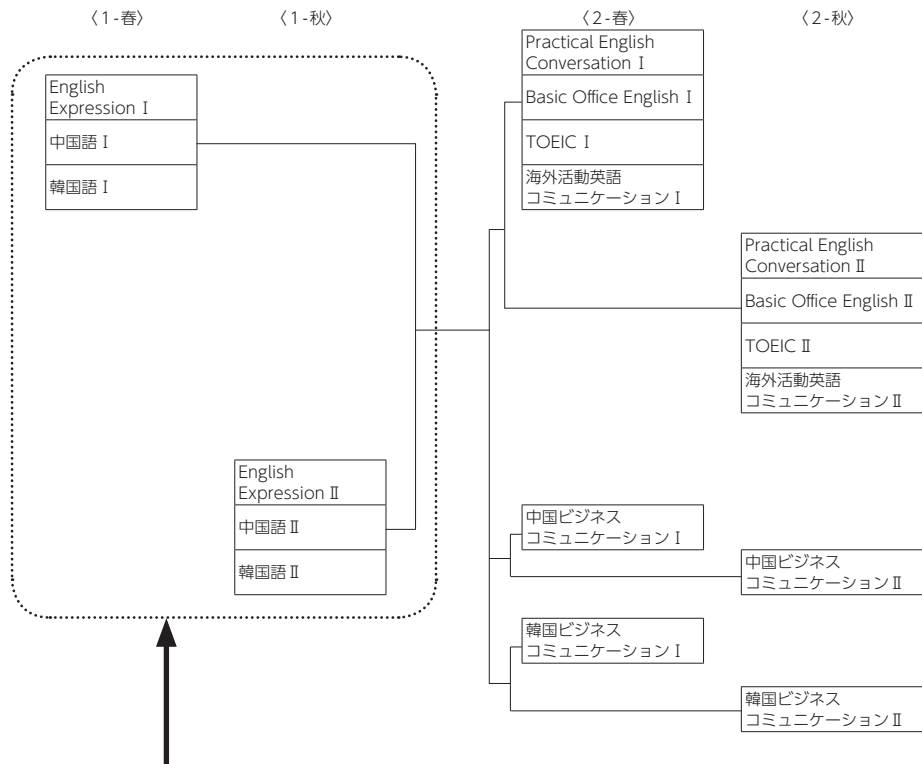
この規定は、平成27年4月1日から施行する。

## 23. 前提科目一覧

◆◇2014年度以降入学生用◆◇

### 2016年度 前提科目一覧

【語学系】<2014年度以降入学生適用>



※2011年度入学生～2013年度入学生は**同一言語にて**4単位修得してください。  
2014～2016年度入学生は、同一言語にこだわらず、4単位修得してください。

※既に2013年度までに上記の2年次以降に配当されている科目を履修した学生の皆さん

2014年度より上記ルールに則り履修登録が必要となるものであり2013年度までに履修された科目が取り消されることはありません。

(例：中国語 I を履修していない学生が2013年度に中国ビジネスコミュニケーション I の単位を取得した場合、2014年度以降もその単位が取り消されることはない。)

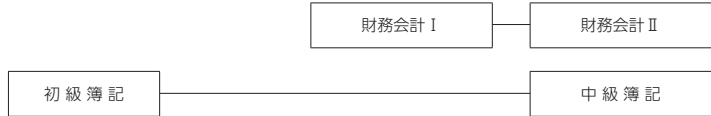
**【会計・財務系】**

〈1-春〉

〈1-秋〉

〈2-春〉

〈2-秋〉



**【情報系・その他】**

〈1-春〉

〈1-秋〉

〈2-春〉

〈2-秋〉



※上記科目以外に関しては、前提科目として特に定めておりませんが、単位修得を前提として講義を進めていく場合があります。シラバスをよく参照してください。







## 24. 授業科目一覽

---



3 年			4 年			区 分	科目群
春学期	単位	秋学期	単位	春学期	単位		
							教 養
		立志特講Ⅰ(冬期集中)	2				
		立志特講Ⅱ(冬期集中)	2				
		立志特講Ⅲ(冬期集中)	2				
							選 択 必 修 (語学)
							ビ ジ ネ ス
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
							選 択
							必 修
							選 択 必 修
					</		









## 25. シラバス

---

## 【2016年度シラバス 目次】

《一般科目》	コンピュータネットワーク活用.....	64
IT活用法I.....	財務会計I.....	65
IT活用法II.....	財務会計II.....	66
ITコミュニケーション入門.....	財務管理.....	67
ITデザインI.....	産業社会特講(食に関連する商品等からのアプローチ).....	68
ITデザインII.....	産業社会特講(【入門】 ビジョンマネジメント論).....	69
ITマネジメントI.....	産業社会特講(激変するグローバル社会と私たち).....	70
ITマネジメントII.....	産業社会特講(情報化社会とメディア編集).....	71
アジア経済論I.....	事業デザイン論I.....	72
アジア経済論II.....	事業デザイン論II.....	73
アメリカ経済論.....	事業構想論I.....	74
English ExpressionI・II.....	事業構想論II.....	75
Webサービス開発.....	自然科学概論II.....	76
WebデザインI.....	実践の事業経営特講.....	77
WebデザインII.....	社会心理.....	78
NPO・NGO論.....	社会調査士実習I・II.....	79
エネルギー・環境論I.....	消費心理.....	81
エネルギー・環境論II.....	情報探索法.....	82
海外活動英語コミュニケーションI・II.....	情報と職業.....	83
韓国経済論.....	情報法.....	84
韓国語I・II.....	情報倫理.....	85
韓国ビジネスコミュニケーションI・II.....	初級簿記.....	86
管理会計入門.....	女性のためのキャリアデザイン.....	87
キャリア・デザインI.....	数字力で語る.....	88
キャリア・デザイン入門.....	スポーツI・II.....	89
クリエイティブデザインI.....	スポーツと健康.....	91
クリエイティブデザインII-A.....	多国籍企業I.....	92
クリエイティブデザインII-B.....	多国籍企業II.....	93
グローバルエコノミーI.....	多摩学I.....	94
グローバルエコノミーII.....	多摩学II.....	96
グローバルエコノミーIII.....	地域観光論.....	97
グローバルエコノミーIV.....	地域産業論I.....	98
グローバルビジネス入門.....	地域産業論II.....	99
グローバルヒストリーI.....	地域政策プランニング.....	101
グローバルヒストリーII.....	地域ビジネス入門.....	102
グローバルヒストリーIII.....	地域ビジネスプランニング.....	103
グローバルヒストリーIV.....	中国経済論.....	104
グローバルマーケティングI.....	中国語I・II.....	106
グローバルマーケティングII.....	中国ビジネスコミュニケーションI・II.....	107
経営学概論I.....	データサイエンスI.....	108
経営学概論II.....	データサイエンスII.....	110
経営基礎I.....	データサイエンスIII.....	112
経営情報論I.....	データサイエンスIV-A.....	113
経営情報論II.....	データサイエンスIV-B.....	115
経営組織I.....	データフィクションI.....	117
経営組織II.....	データフィクションII.....	118
経営とセキュリティ.....	デザインワークショップI-A.....	120
原価分析.....	デザインワークショップI-B.....	121
現代メディア論I.....	デザインワークショップII.....	122
現代メディア論II.....	TOEIC I・II.....	123
国際経営入門I.....	特別講座I・II.....	124
国際経営入門II.....	日本経営史I.....	125
国際公共政策.....	日本経営史II.....	126
コンピュータ概論.....	日本経済史I.....	127





《教職に関する科目》

教育課程総論.....	245
教育史.....	246
教育実習.....	247
教育心理学.....	248
教育制度論.....	249
教育相談.....	250
教育方法.....	251
教職概論 2015年度入学生以前用.....	252
教職概論 2016年度入学生用.....	253
教職実践演習.....	254
情報科教育法I・II.....	255
生徒指導.....	257
特別活動.....	258

**科目名** IT活用法I(Utilizing method of IT I)**サブタイトル** ゲームと商品開発を通してデータに触れる**担当教員** 出原 至道、佐藤 洋行、島田 由美子**■講義目的**

本講義の目的は、ゲームや商品開発の実験を通して、実社会で活躍するために必要な情報の捉え方、考え方を身につけることにある。

**■講義分類**

ビジネスICT  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
社会人力育成

**■到達目標**

チームでさまざまな意見を出し合う中で、主体的に意思決定に関与できる。表面的に観察される現象に対して、戦略的な行動をとることができる。データに基づいた議論ができ、そのために表計算ソフトウェアを活用できる。自分の意見を分かりやすく伝えることができる。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各回に示す内容について、チームごとに90分の議論を行い、記録する。（一部個人課題）

**■評価方法**

欠席理由を問わず3分の2以上の出席を前提として、平常点40点、レポート（3回）各20点で評価する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 数値評価で90点以上  
評価A (89~80点) : 数値評価で80点以上90点未満  
評価B (79~70点) : 数値評価で70点以上80点未満  
評価C (69~60点) : 数値評価で60点以上70点未満  
評価F (59点以下) : 数値評価で60点未満

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

IT活用法IIは履修制限科目であり、A,DクラスとB,Cクラスで内容が異なる。また、初回講義で全体解説及び選抜を行うため、履修希望者は必ず初回講義に出席すること。

コンピュータを持参すること。

**科目名** IT活用法Ⅱ(Utilizing method of IT Ⅱ)**サブタイトル** リポジトリ管理システムを利用した協業**担当教員** 出原 至道、彩藤 ひろみ**■講義目的**

近年、情報技術スキルの証明には、公開リポジトリサービス上での活動が求められるようになってきた。本講義では、リポジトリ管理システムを利用したクラウド上でのチーム協業の演習を基盤として、情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになることを目的とする。

本講義の到達点である、マーケティング視点に基づくものづくりの発想法と、リポジトリへの蓄積、および、チーム協業は、社会において大きな競争力になる。

**■講義分類**

ビジネスICT  
ビジネス創造  
社会人力育成

**■到達目標**

新しい情報サービスについて、そこで使用されている情報技術が理解できる。また、新しい情報技術を用いて、新たなサービスが提案できる。その過程で、戦略的な発想方法を身につける。

**■授業形態**

講義  
演習  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各回に示す内容について、チームごとに90分の議論を行い、記録する。（一部個人課題）

**■評価方法**

欠席理由を問わず3分の2以上の出席を前提として、平常点60点、個人レポート40点で評価する。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：数値評価で90点以上  
評価A（89～80点）：数値評価で80点以上90点未満  
評価B（79～70点）：数値評価で70点以上80点未満  
評価C（69～60点）：数値評価で60点以上70点未満  
評価F（59点以下）：数値評価で60点未満

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

第1回目の講義で全体のオリエンテーションを行うので必ず出席すること。特段の事情がある場合を除き、第1回講義に欠席した場合、受講を認めない。

第1回目からノートPC（タブレットを含む）と電源をもってくること。

**科目名** ITコミュニケーション入門(Introduction to IT Communication)**サブタイトル****担当教員** 志賀 敏宏**■講義目的**

経営情報学部において、必須かつ基礎的なスキルである「マイクロソフトオフィス-特にワード（ワープロ）」の使い方を修得する。

本学が重視するアクティブ・ラーニングにおけるプレゼンテーション力に直結するスキルの向上を目指す。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

MOS（マイクロソフトオフィススペシャリスト）資格のWordのスペシャリストレベル（一般レベル）の合格。特に意欲ある者は、Wordのエキスパートレベル（上級レベル）の合格を目指して欲しい。

また、これらのスキルを足がかりに、自らパワーポイントやエクセルの資格合格を目指すことも可能である。

**■授業形態**

講義

演習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教科書の問題集を見ながらWordを操作すること。

予習復習の時間は30分程度。

**■評価方法**

出席50%、期末等に授業で行う模擬試験の結果50%

出席は全回出席で50点、出席回数に比例とする。

模擬試験は、過去のMOS試験に準拠した試験で、点数は以下の通り。

合格相当：30点～50点。合格圏内：20点～29点。合格圏外：0点～19点。

授業中の受講態度により出席点に加減点あり。他人に迷惑をかける行為による減点、積極的参加による加点等。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：下記、配分により90点以上

評価A（89～80点）：下記、配分により80点以上89点以下

評価B（79～70点）：下記、配分により70点以上79点以下

評価C（69～60点）：下記、配分により60点以上69点以下

評価F（59点以下）：下記、配分により59点以下

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本科目は、2016年度入学専用の科目である。

また、履修制限科目であるので履修希望者は必ず初回講義に参加すること。

クラス指定を実施するので、掲示によるクラス分け表を確認すること。

**科目名** ITデザインI(IT design I)**サブタイトル** 社会と情報の科学 (インターネット分野)**担当教員** 高橋 佑輔**■講義目的**

コンピュータネットワーク (インターネット) の基礎理論を基に、社会で活用できる力を修得する

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

IT (情報技術) 革命から数十年、現在は IT 無しに社会は動かない。他方、IT の不適切な利用による問題も発生している。将来、皆さんは IT を利用した業務をおこなうこととなるが、同時にそのリスクも負うこととなる。

本授業では IT とりわけ コンピュータネットワーク (インターネット) に着目した授業を行う。インターネットの基礎理論を基に、新しい技術であっても自ら適切に活用できる力を身につける。

**■授業形態**

講義

コンピュータによる演習

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

インターネットは様々な技術が相互に接続され運用される。すなわち、第1講の内容を基に第2講が進められる。授業内の簡単な課題によりそれぞれの講の定着を行うが、復習が必要である。毎回の授業内容を簡単に (1分程度で) 説明できるようにしておく。

**■評価方法**

第13講の課題 30%

それ以外の課題  $5\% \times 14 = 70\%$ 

第13講を休む (休んだ) 場合は、なるべく早く教員へメールを送ること。個別のキーワードを与える。それ以外の課題を15回以上提出した者は、点数の高い課題から順に評価する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : インターネットの基礎理論を基に、社会で活用できる力を修得しており、これに関する自らの考えを十分に示すことができる

評価A (89~80点) : インターネットの基礎理論を基に、社会で活用できる力を修得している

評価B (79~70点) : インターネットの基礎理論と、インターネットの適切な利用方法が分かる

評価C (69~60点) : インターネットの基礎理論が、インターネットの適切な利用方法が分かる

評価F (59点以下) : インターネットをよく理解していない

**■履修していることが望ましい科目**

- ・ Word, Excel, PowerPoint の基本的な使用方法を解説した科目
- ・ 情報に関する科目 (技術、数理的に解説される科目)

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

ノートパソコンと筆記用具、学生証を持参のこと。課題は出席者のみ評価する。

遅刻、中抜け、私語、内職は認めない。席は前から座ること。前の席が空いているのに後ろに座っている場合は、評価の対象とならない場合がある。出席は評価に加味しないが、得点調整を行う際は出席率を参考に調整を行う場合がある。3回以上の欠席は得点調整を行わない。正当な欠席理由がある場合は書類などを添えて (名前と学籍番号を記入) 申し出ること。

**科目名** ITデザインII(IT design II)**サブタイトル****担当教員** 増田 浩通**■講義目的**

ICTを基盤とした高度情報社会における実情やさまざまな問題を、社会との関係に重点をおいた視点で学ぶ。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

高度情報化社会における問題と社会のかかわりについて、常識として知っておくべき事項を体系的に理解することを目標とする。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ビジネスICTに関連する事項

**■評価方法**

中間レポート 30%、講義内課題 30%、講義外で実施する期末テスト 40%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : テストとレポートの合計で判断する。

評価A (89~80点) : テストとレポートの合計で判断する。

評価B (79~70点) : テストとレポートの合計で判断する。

評価C (69~60点) : テストとレポートの合計で判断する。

評価F (59点以下) : テストとレポートの合計で判断する。

中間レポートの提出がない、講義内課題が提出されていない、もしくは期末テストを受けないと評価はFになる。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ITマネジメントI(IT Management I)**サブタイトル** ビジネスにおいて知っておくべきIT基礎知識**担当教員** 佐藤 洋行**■講義目的**

今やすべてのビジネスで必須となっているITについて、ビジネスパーソンが知っておくべき基礎知識を学ぶ。そのために、ITが実際のビジネスの現場でどのように活用されているのかを、販売促進／顧客管理／物流／製造など、バリューチェーン／マーケティングにおける活動単位で解説する。それを通じて、ビジネスに共通して必要なIT知識を体系的に理解してもらう。

身近で実践的な事例を交えた講義とするので、社会人基礎力を養うために是非受講していただきたい。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネスマネジメント  
 ビジネスICT

**■到達目標**

ビジネスで必要とされるIT知識の基礎を身につける。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回講義資料および講義記録ノートによる復習

**■評価方法**

出席60%、期末試験40%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : ビジネスとITとの関わりについて、バリューチェーン／マーケティングにおける活動単位と関連付けて概説することができる。  
 また、ビジネスを取り巻くIT環境と、それが求める組織／企業関係の変化についてトレンドを理解し、個人情報について、ビジネス上注意すべき点を把握している。
- 評価A (89～80点) : ビジネスとITとの関わりについて、いくつかのビジネス活動における活用例を挙げることができる。  
 また、ビジネスを取り巻くIT環境と、それが求める組織／企業関係の変化についてトレンドを理解し、個人情報について、ビジネス上注意すべき点を把握している。
- 評価B (79～70点) : ビジネスとITとの関わりについて、いくつかのビジネス活動における活用例を挙げることができる。  
 また、ビジネスを取り巻くIT環境と、それが求める組織／企業関係の変化、および個人情報の取扱でビジネス上注意すべき点について、いくつかの論点を挙げることができる。
- 評価C (69～60点) : ビジネスとITとの関わりについて、いくつかのビジネス活動における活用例を挙げることができる。  
 また、ビジネスを取り巻くIT環境、それが求める組織／企業関係の変化、あるいは個人情報取扱でビジネス上注意すべき点のいずれかについて、論点を挙げることができる。
- 評価F (59点以下) : ビジネスとITとの関わりについて、語るべきところが無い。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

必ずPCを持参すること。



**科目名** ITマネジメントII(IT Management II)**サブタイトル** IT戦略とデジタルマーケティング**担当教員** 佐藤 洋行**■講義目的**

今やすべてのビジネスで必須となっているITについて、各企業がどのような戦略を持っているのかを学ぶとともに、IT戦略のトレンドを知る。また、IT活用の中でも、ビジネスの発展に最も重要なものの一つとなっているデジタルマーケティングについて、最前線事例を学ぶとともに、実際に体験することにより、実践的知識を獲得してもらう。

身近で実践的な事例を交えた講義とするので、社会人基礎力を養うために是非受講していただきたい。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネスマネジメント  
 ビジネスICT

**■到達目標**

ビジネスにおけるIT戦略の潮流について理解する。  
 デジタルマーケティングについて実践的知識を獲得する。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回講義資料および講義記録ノートによる復習

**■評価方法**

出席60%、期末試験40%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : IT戦略とその潮流について、幾つかの例示をしながら概説することができる。  
 デジタルマーケティングについて、広告/CRMそれぞれの観点から、核となる技術とともにその利用のされ方を論じることができる。
- 評価A (89~80点) : IT戦略とその潮流について、幾つかのトレンドワードを列挙し、説明することができる。  
 デジタルマーケティングについて、広告/CRMそれぞれの観点から、実際の利用のされ方を論じることができる。
- 評価B (79~70点) : IT戦略とその潮流について、幾つかのトレンドワードを列挙し、説明することができる。  
 デジタルマーケティングについて、広告/CRMいずれかの観点から、実際の利用のされ方を論じることができる。
- 評価C (69~60点) : IT戦略とその潮流について、幾つかのトレンドワードを列挙できる。  
 デジタルマーケティングについて、広告/CRMそれぞれの観点から、キーワードを列挙できる。
- 評価F (59点以下) : IT戦略やデジタルマーケティングについて、語るべきところが無い

**■履修していることが望ましい科目**

ITマネジメント I

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

必ずPCを持参すること。

## 科目名 ▶▶▶ アジア経済論Ⅰ(Asia EconomyⅠ)

サブタイトル ▶▶▶ アジアビジネスと企業戦略、そして起業家精神

担当教員 ▶▶▶ 金 美德

## ■講義目的

今や日本企業は、アジア市場に進出するか、アジアのヒト・モノ・カネ・情報を取り込まずにして、生き残れない。換言すれば「ビジネス=アジア」、「人生=アジア」の時代と言っても過言でない。

したがって本授業では、アジア経済の体系的な知識・理論やアジアの企業・産業・市場・情勢に関する情報の収集・分析方法を学ぶ。また、「アジア」をキーワードにして、日本企業の戦略・営業・経営企画・ビジネスモデルや日本経済の課題を考える。さらに、アジア経済論で学んだことを「いかに就活や起業に活かせるか」シミュレーションする。

本授業のキーワードは、アジアビジネス、グローバルビジネス、アジア・ユーラシアダイナミズム、アジア企業、アジア戦略、アジア情報、アジア市場、アジア消費者、アジアマーケティング、中小・ベンチャー企業のアジアへの販路拡大、外国人観光客(インバウンド)の日本誘致策と新たなサービス、新興国ビジネスモデル、アジアの知恵と日本の知恵の融合、地政学的知と地政学的戦略、アジアマインド、アジアセンス。

## ■講義分類

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

グローバルビジネス

地域ビジネス

## ■到達目標

- ①アジアの政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎的な知識・理論を習得する。
- ②アジア発のビジネス情報の収集力・分析力・発信力を身に付ける。
- ③アジアの潮流・論理・視点に基づく経営戦略力、ビジネスモデル構築力、起業力を身に付ける。

## ■授業形態

講義

プレゼンテーション

双方向

## ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

- ①アジア情勢やアジアビジネスに関するニュースやネット情報を調べること。  
授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう。
- ②就活を希望している、もしくは関心のある企業や業界のアジア戦略の情報を調べること。授業開始時に2～3名の学生に報告してもらう。

## ■評価方法

評価は、出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の割合で行う。

- ①出席と毎回提出する講義メモを重視（35%+35% = 70%）する。
- ②講義メモは、最低限の記述内容が記載されていない場合は、減点する。また、採点后、講義の最終段階で返却する。
- ③最終レポート（30%）は、A4用紙3枚以上とする。尚、図表の活用や枚数が増える場合は、高く評価する。15回の講義終了後、指定された提出期限までに提出すること。
- ④質問や意見は、講義への積極的な参加・貢献として加点する。発言者は、講義終了後に発言者リストに学籍番号と氏名を記入すること。

## ■評価基準

- 評価A+（90点以上）：出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の合算点が、90%以上であること。  
また、最終レポートに高い問題意識、鋭い視点、独創性のある主張などが反映されていること。
- 評価A（89～80点）：出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の合算点が、89～80%であること。
- 評価B（79～70点）：出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の合算点が、79～70%であること。
- 評価C（69～60点）：出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の合算点が、69～60%であること。
- 評価F（59点以下）：出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

## ■履修していることが望ましい科目

語学系、経営学系、経済学系、グローバルビジネス系科目を積極的に履修すること。

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

- ①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。
- ②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。
- ③遅刻および途中退室は、厳禁とする。途中退室は、必ず入退室を記録（日付・時間・学籍番号・氏名）すること。また、大幅な減点を行う。虚偽記録をした場合は、不合格扱いとする。
- ④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。
- ⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。友人への提出依頼や欠席したにも関わらず講義終了時に提出するなどの行為。
- ⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。友人のレポートのコピーや他科目のレポートを提出する行為。

**科目名** アジア経済論Ⅱ(Asia EconomyⅡ)**サブタイトル** アジアで活躍できる人材を目指そう**担当教員** バートル**■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。

本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、大中華圏（中国・台湾・香港・シンガポール）や中国の辺境経済圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を「読む」力の養成を目指す。

具体的には最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて習得した知識を自分の将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

- ①中国・大中華圏・中国辺境経済圏のビジネスに関する基礎的な知識の習得。
- ②中国・大中華圏・中国辺境経済圏の特徴と関連企業の経営戦略を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案、企業間の協力の可能性について考える。
- ③講義で習得した知見を就職活動に利活用できるようにする。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日頃から中国や日中関係および大中華圏と中国辺境地域に関する時事問題を始め、自分自身が関心をもつ特定の分野や業界ないし産業および企業に関する情報を常に収集、分析、調査する習慣をつけ、その過程の中で、自分自身や社会にとって将来役立つであろう問題の発見・解決力・コミュニケーション能力を身につける努力を惜しまない。

**■評価方法**

出席(30点)、毎回提出の講義メモ(30点)、最終レポート(30点)、講義内の質問・意見(10点)により行う。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上)	: 絶対評価 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が90点以上。
評価A (89~80点)	: 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が89点~80点の間。
評価B (79~70点)	: 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が79点~70点の間。
評価C (69~60点)	: 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が69点~60点の間。
評価F (59点以下)	: 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が59点以下。

**■履修していることが望ましい科目**

『アジア経済論Ⅰ』  
 『中国経済論』  
 『韓国経済論』  
 『特別講座』など、グローバルビジネス関連科目

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

### ■留意点

- ①講義中のルール順守の徹底。
- ②推薦された書籍や情報等は必ずチェックすること。
- ③レポート等の提出期限を必ず順守すること。
- ④成績評価について

出席と毎回提出する講義メモを重視(30点+30点=60点)する。最終レポート(30点)は、A4用紙3枚以内。講義内の質問・意見(10点)は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて1点~10点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、最後に返却する。

- ⑤その他

外部講師を招いての講演会実施ならびに履修者に有益な外部セミナー等は随時紹介する。

**科目名** アメリカ経済論 (America Economy)**サブタイトル** オバマ政権の経済政策および政策意図を把握する**担当教員** 千原 則和**■講義目的**

本講義の目的は、大統領が毎年議会に提出する『Economic Report of the President (ERP : 大統領経済報告)』を通じて、オバマ政権の経済政策とその意図を把握することにある。

『ERP』は、政権の経済情勢および経済政策に関する判断を示す報告書で、アメリカ経済の現状およびオバマ政権の経済政策を把握するには最適な資料である。本講義では、この『ERP』の翻訳書（『米国経済白書2015』）を使って、アメリカ経済の現状およびオバマ政権の経済政策を明らかにする。『米国経済白書2015』に記載されている豊富な図表および統計データをできる限り多く活用し、アメリカ経済のみならず世界経済の潮流に触れる機会を提供する。

必要に応じて、報道・解説番組（NHK「キャッチ！世界の視点」[国際報道2016]「時論公論」[視点・論点]、テレビ東京「WBS」）およびドキュメンタリー番組（NHK「BS世界のドキュメンタリー」[BS1 スペシャル]「NHKスペシャル」）を使って、最新のアメリカ経済の状況を説明する。

\* 『ERP』の2016年版は2月頃に公表されるが、本講義では学習者の利便性を考慮して、2015年版の『ERP』の翻訳書を使用することとする（2016年版の翻訳書は7月刊行予定）。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力養成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

1. オバマ政権の経済政策および政策意図を理解する
2. 『大統領経済報告』の内容を理解し、実践的知識獲得のための環境を整える
3. 『白書』を通じて、アメリカ経済に関連する最前線事例に触れ、課題発見のための素地を養う

**■授業形態**

講義  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容****【予習】**

・講義の前に、最低でも1回、『米国経済白書2015』の当該箇所を通読すること

**【復習】**

・講義終了後に、再度、『白書』の当該箇所を通読すること  
・講義の中で使用したデジタル資料は、講義終了後に、PDFファイルとして配布する。各自T-NEXTを通じてダウンロードし、復習に活用してもらいたい。

**■評価方法**

定期試験（60%）、授業内の課題の取り組み・出席など（40%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、90～100点  
評価A（89～80点）：評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、80～89点  
評価B（79～70点）：評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、70～79点  
評価C（69～60点）：評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、60～69点  
評価F（59点以下）：評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、59点以下

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業時に、出席確認を兼ねて、課題に取り組んでもらう。学習した内容を確認・整理するための小テストなどを実施する（小テストの点数は成績に反映しないので安心してほしい）。積極的な授業参加者には加点評価をする。

**科目名** English ExpressionI・II(English Expression I・II)

**サブタイトル** グローバルビジネス、地域ビジネスで志を実現するために必要な英語力養成

**担当教員** 中村 その子、石川 晴子、市川 やよい、ガイ ローズ、加藤 みゆき、下山 英子

**■講義目的**

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。

最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るところから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。また、単なる和文英訳的な会話をすることに終わらず、なんらかの調査や研究を行った自分の考えをまとめ、それを英語で学生同士話し合ったり、プレゼンテーションとして発表する場も設ける予定である。グループワーク・グループディスカッション・プレゼンテーションなどの活動を重視し、産業社会の最前線事例や問題解決シミュレーションなども積極的に取り入れる。大学の学びでは、学習したものを自分なりにまとめて、自分の将来に向けて活用できるようになることが必須である。

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。

- (1) 自分たちの意見、考え方、アイデアをしっかりとした形で伝え、提案できる = 発信
- (2) 相手からの発信を正確に理解し、状況に応じた的確な処理が行える = 受信
- (3) 自分が必要な情報(WE B/論文をはじめとする資料や文献など)を検索し、内容を読み取って利用できる = 情報理解
- (4) 社会の課題をビジネスの現場で解決していく力の一つとして英語でのコミュニケーション能力を身につける

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向  
発見学習  
問題解決学習  
経験・調査学習

学習者の能動的な学習への参加があり、学んだ情報を思い出しやすい、異なる文脈でもその情報を使いこなしやすい授業

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には授業中に行われるテストや課題の準備を十分にしておくこと。学期中の土曜日を1回か2回程度使用し、外部組織と連携したフィールドワーク、またそれに関連した授業を行う場合がある。

**■評価方法**

出席	20%	授業内小テスト	20%
宿題	20%	中間テストおよび期末テスト	40%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上)	出席	20%	授業内小テスト	20%
	宿題	20%	中間テストおよび期末テスト	40%
の配分で得点を付け、90点以上の場合				
評価A (89~80点)	出席	20%	授業内小テスト	20%

評価B (79~70点)	宿題	20%	中間テストおよび期末テスト	40%
	の配分で得点を付け、80点から89点の場合			
評価C (69~60点)	出席	20%	授業内小テスト	20%
	宿題	20%	中間テストおよび期末テスト	40%
	の配分で得点を付け、70点から79点の場合			
評価F (59点以下)	出席	20%	授業内小テスト	20%
	宿題	20%	中間テストおよび期末テスト	40%
	の配分で得点を付け、60点から69点の場合			
	出席	20%	授業内小テスト	20%
	宿題	20%	中間テストおよび期末テスト	40%
	の配分で得点を付け、59点以下の場合			

#### ■履修していることが望ましい科目

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施する

#### ■留意点

指定されたクラスに履修登録をして出席すること。

なお、Eラーニングオプション、およびTOEICオプションでEnglish Expression IまたはEnglish Expression IIの単位を取得しようとする学生に対しては、学期初めにT-NEXTで説明を掲示するのでそれをよく読んで指示にしたがうこと。

EラーニングオプションとTOEICオプションは原則として再履修の学生のみを対象とする。年度初めのオリエンテーションでプレースメントテストを行い、能力別クラス編成を行う。



**科目名** Webサービス開発(Web Service Building)**サブタイトル** JavaScript + Web API**担当教員** 出原 至道**■講義目的**

本講義は、隔年開講の「Webプログラミング」と並んで、開発系科目の最上位に位置づけられる。開発の分野を志す学生にとって、大きな武器となる科目である。

「Webプログラミング」がサーバサイドのアプリケーション開発を行うのに対し、本講義では、Web ページに埋め込まれる形で実行されるクライアントサイドアプリケーション開発を実践する。具体的には、ウェブ上で提供されている様々なデータを API (Application Programming Interface) を通してリアルタイムで自動的に収集し、それに基づいたサービスを利用者に提供するアプリケーションを開発する。

講義では、最先端の API を実装実験するため、実際に取り上げる API は変更される場合がある。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

- ・クライアントサイドアプリケーションが実装できるようになる。
- ・XML形式のデータ構造が理解できる。
- ・Web API の概念を理解し、自力で自由に使える。
- ・新しいWebサービス提案ができる。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義時間内でも演習を行うが、これだけでは、実装技術は身につかない。最低90分程度の復習を中心に、自分で実際に手を動かして技術の習得に務めること。

**■評価方法**

10回以上の出席、かつ、中間発表・最終発表を前提として、以下の配分で評価する。  
授業内レポート (30%)、作品 (20%)、試験 (50%)

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 数値評価で90点以上  
評価A (89~80点) : 数値評価で80点以上90点未満  
評価B (79~70点) : 数値評価で70点以上80点未満  
評価C (69~60点) : 数値評価で60点以上70点未満  
評価F (59点以下) : 数値評価で60未満

**■履修していることが望ましい科目**

WebデザインⅠまたはWebデザインⅡの履修を強く推奨する。  
IT活用法Ⅰ・Ⅱ、デザインワークショップⅠ・Ⅱなどの履修が望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

原則として、3年次からの履修を想定している。2年次生で履修希望する者は、レポート提出による理解度試験 (WebデザインⅠ・Ⅱ、Webプログラミング) に合格する必要があるため、あらかじめ相談すること。

**科目名** WebデザインI(Web Design I)**サブタイトル****担当教員** 齋藤 S.裕美**■講義目的**

Webデザインでは、HTMLおよびCSSを用いて中級レベルのWebサイトを自分の手でつくりあげることが最終目標とする。演習を通じて、Webページを記述するためのマークアップ言語のひとつであるHTMLとCSSの記述方法、それぞれの特徴と使い方を習得し、あわせてWebページのデザインに関する基礎的な知識およびWebサイトの管理運営に関して必要な知識を身につける。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

HTML5とCSSを用いたWebサイト構築技術の習得およびWebページのデザインに関する基礎的な知識の修得をめざす。

**■授業形態**

講義  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講を受講するにあたり、前講までの学習内容を理解しておくこと。  
ほぼ毎時課題を出すので、その課題作成を通じてHTMLとCSSの記述方法について必ず復習すること。

**■評価方法**

課題作品40%、期末試験45%、出席状況15%を基本とし、授業への参加態度などを加味して総合的に評価する。作品は、次の3点を中心に評価する。

- (1)技術の基本を理解しているか。
- (2)デザイン的に見所のある作品か(内容の深さ・表現の美しさ)。
- (3)著作権に配慮しているか。

また、期末試験は、次の2点を中心に評価する。

- (1)Webデザインに関わる基礎知識を正しく理解しているか。
- (2)HTML、CSSについて基本的な使い方を理解しているか。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分に理解し、評価方法に示した5つの観点を全て満たしたWebページを作成する知識と技能がある。

評価A (89～80点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した5つの観点のうちいずれか4つ以上を満たしたWebページを作成する知識と技能がある。

評価B (79～70点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した5つの観点のうちいずれか3つ以上を満たしたWebページを作成する知識と技能がある。

評価C (69～60点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した5つの観点のうちいずれか2つ以上を満たしたWebページを作成する知識と技能がある。

評価F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本科目は履修制限科目であり、第1講・第2講において実習を行うためのソフトウェアや各種設定についての説明を行うので、履修希望者は第1講・第2講に必ず出席すること（第1講・第2講以外では説明しない）。積み重ねが大切な授業であるから、途中で欠席しないこと。

**科目名** WebデザインII(Web Design II)**サブタイトル** javascriptを学んで、動的、インタラクティブなWebページをデザインする**担当教員** 良峯 徳和**■講義目的**

この授業は、HTMLやCSSの基本をマスターした学生を対象に、より高度な表現力、よりインタラクティブなコミュニケーションを可能とするWebページ制作技術の習得を目的とする。具体的には、HTML、CSSの基礎に加えて、javascript と呼ばれるクライアントサイドのWebプログラミングの技法をWebページに組み込むための基礎知識ならびに制作技術を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネス創造  
ビジネスICT

**■到達目標**

- ①プログラミングの基本となるアルゴリズム、構文ルールを理解・習得し、プログラムを構築する基礎能力を身に着ける。
- ②Webデザインに有効なさまざまなメソッドの使い方を理解・習得し、必要に応じて使いこなす技術力を身に着ける。
- ③Webのユーザビリティやアクセシビリティについての理解を深めるとともに、著作権への配慮やセキュリティの問題についても関心を持てるようにする。

**■授業形態**

講義  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業の開始時に毎回前回の授業の内容理解を確認するための小テストを行う。その準備として、1時間程度の復習を行ってこよう。

**■評価方法**

出席: 10%, 課題提出: 30%, 小テスト: 40%, 学期末課題: 20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を柔軟に応用、発展させることができる。また授業への取り組みがきわめて熱心で、積極的である。
- 評価A (89~80点) : 講義内容についてよく理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に応用、発展させることができる。また授業への取り組みが熱心で、積極的である。
- 評価B (79~70点) : 講義内容についてほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度応用することができる。また授業への取り組みもまじめである。
- 評価C (69~60点) : 講義内容について基本的な事柄を理解し、簡単なことであれば、目的に応じて学んだ内容を応用することができる。または、授業への取り組みがやや不足している。
- 評価F (59点以下) : 講義内容について基本的な知識も理解も有していない。または授業への取り組みが不真面目である。

**■履修していることが望ましい科目**

WebデザインI (Web Design I)

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、該当小テスト後の1週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、最初の授業で説明する。

**科目名** NPO・NGO論(NPO・NGO Theory)**サブタイトル** ソーシャル・イノベーションの組織論**担当教員** 松本 祐一**■講義目的**

社会的な問題の解決の主体であるNPOやNGO（以下、2つの概念を合わせて便宜上NPOと表記）が登場した歴史的背景、組織原理を学び、ソーシャル・イノベーションの事業開発について理解する。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
ビジネスICT  
地域ビジネス

**■到達目標**

NPO特有の組織原理を理解すること

**■授業形態**

講義  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

興味のあるNPOの事例の収集

**■評価方法**

授業中提出のワークシート40% 中間レポート20% 最終レポート40%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：すべて出席し、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることを網羅していて、独自性がある。NPOの組織原理を理解している。  
評価A（89～80点）：9割以上出席し、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることを網羅している。NPOの組織原理を理解している。  
評価B（79～70点）：8割以上出席し、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることを網羅している。NPOの組織原理を理解している。  
評価C（69～60点）：6割以上出席し、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることにある程度、答えられている。  
評価F（59点以下）：5割以下の出席率で、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることに答えられていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

10分以上の遅刻は欠席として扱う。

**科目名** エネルギー・環境論I(Energy and environmental engineering I)**サブタイトル** エネルギー世界潮流と日本の課題**担当教員** 十市 勉**■講義目的**

東日本大震災と福島第一原発事故を契機に、電力や石油など国民生活、経済活動に不可欠なエネルギー需要と供給のあり方が国民的な課題になっています。本講義では、石油や天然ガス、石炭の化石燃料、原子力発電や再生可能エネルギー、省エネルギーなどの基礎知識を学び、社会人基礎力と問題解決能力を身につけることを目的とします。

**■講義分類**

グローバルビジネス  
ビジネス環境理解  
社会人力育成

**■到達目標**

エネルギー問題の基礎知識を習得し、世界潮流の中で日本のエネルギー問題を理解できるようにする。

**■授業形態**

講義

プレゼンテーション (学生のプレゼンテーション2回、外部講師プレゼンテーション1回)

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回事前に、授業で使う説明資料をT-NEXTに掲載するので、予習と復習を行い、理解を深める

**■評価方法**

出席 (50%) + アンケート記入 (50%)、意見発表者に特別加点

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容が良く理解出来ており、かつ自ら更に学んでいる  
評価A (89~80点) : 講義内容が良く理解出来ている。  
評価B (79~70点) : 講義内容が理解出来ている。  
評価C (69~60点) : 講義内容が理解できているものの、不十分な部分もある  
評価F (59点以下) : 講義内容が理解できていない

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

遅刻や授業中の私語などは厳禁、違反者には場合によっては単位を付与しない。

**科目名** エネルギー・環境論Ⅱ(Energy and environmental engineering II)**サブタイトル** エネルギー世界潮流と日本の課題**担当教員** 十市 勉**■講義目的**

資源小国の日本は、世界のエネルギー情勢によって非常に大きな影響を受けます。本講義では、石油や天然ガスの化石燃料、原子力発電や再生可能エネルギー、省エネルギーなど最新の国際政治、経済、企業活動、技術の動向などについて、グローバルな視点と過去の歴史を踏まえて、世界および主要国の現状と課題を分析し、今後日本が取り組むべきエネルギー問題の解決策について考えていく。

**■講義分類**

グローバルビジネス  
ビジネス環境理解  
社会人力育成

**■到達目標**

エネルギー問題を巡る国内外の最新・最先端の動向を習得し、世界潮流の中で日本のエネルギー・温暖化政策・戦略のあり方、および企業の課題などを考えられるようにする。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション（学生のプレゼンテーション2回、外部講師プレゼンテーション1回）

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回事前に、授業で使う説明資料をT-NEXTに掲載するので、予習と復習を行い、理解を深める

**■評価方法**

出席（50%）＋アンケート記入（50%）、意見発表者に特別加点

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義内容が良く理解出来ており、かつ自ら更に学んでいる  
評価A（89～80点）：講義内容が良く理解出来ている  
評価B（79～70点）：講義内容が理解出来ている  
評価C（69～60点）：講義内容が理解出来ているが、不十分な部分もある  
評価F（59点以下）：講義内容が理解出来てない

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

遅刻や授業中の私語などは厳禁、違反者には場合によっては単位を付与しない。

**科目名** 海外活動英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ(English communicationⅠ・Ⅱ)**サブタイトル** 真の国際化とは自分の国を知ること Be a global business person!**担当教員** 中村 その子、渡辺 幸裕**■講義目的**

社会人としての基礎力をつけるため、国内外で活躍する各分野での最新事例を直接知ることは大変貴重である。この科目では企業や団体で活躍する現役ビジネスパーソンから直接“社会の現実”を聞き、日々の課題を解決している現場の雰囲気を感じ取り、問題解決手法、各分野に必要な英語表現を学習する。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

社会環境を知り、問題解決力とともに時代感覚を養い、将来のビジネスライフを想像し、準備学習する為の自分なりの入り口と道筋を見つける。

**■授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向  
 発見学習  
 問題解決学習  
 経験・調査学習  
 学習者の能動的な学習への参加があり、学んだ情報を思い出しやすい、異なる文脈でもその情報を使いこなしやすい授業

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義に招かれるゲスト、学外での研修、見学、フィールドワークの内容について事前に十分に調査研究をし、授業後は教員からの指示に従ってフォロー学習を行う。

**■評価方法**

出席50%、中間レポート20%、期末レポート30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 出席 (授業での積極性と真摯な態度を含む)、中間レポート (課題宿題を含む)、期末レポート (課題宿題を含む)、プレゼンテーションのクオリティを点数化し、それが90点以上の場合  
 評価A (89~80点) : 出席 (授業での積極性と真摯な態度を含む)、中間レポート (課題宿題を含む)、期末レポート (課題宿題を含む)、プレゼンテーションのクオリティを点数化し、それが89~80点の場合  
 評価B (79~70点) : 出席 (授業での積極性と真摯な態度を含む)、中間レポート (課題宿題を含む)、期末レポート (課題宿題を含む)、プレゼンテーションのクオリティを点数化し、それが79~70点の場合  
 評価C (69~60点) : 出席 (授業での積極性と真摯な態度を含む)、中間レポート (課題宿題を含む)、期末レポート (課題宿題を含む)、プレゼンテーションのクオリティを点数化し、それが69~60点の場合  
 評価F (59点以下) : 出席 (授業での積極性と真摯な態度を含む)、中間レポート (課題宿題を含む)、期末レポート (課題宿題を含む)、プレゼンテーションのクオリティを点数化し、それが59点以下の場合

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

企業のトップ、役員、マネージャーから現場担当まで広い階層で、外交官を含む各官庁の現役官僚など、メインの学習テーマ「真の国際化とは自分の国を知ること」に沿った講師をお呼びします。若者の好奇心と軽快なフットワークで、自分の将来を考えて、ビジネスマインド、センスをつける為に貴重な時間になります。受講学生の将来の為、日本の未来の為へと協力依頼をし、多忙な時間を割いて頂くばかりです。ので、話を聞かせて貰う場に最低の礼儀をわきまえない非常識な態度はその時点で失格となります。“志を持った多摩大学学生”としての態度で臨まれる事を希望します。父兄も参加出来る特別オープン企画も実施予定。

**科目名** 韓国経済論 (Korean Economy)

サブタイトル 日韓ビジネス

担当教員 金 美德

**■講義目的**

一つは、韓国企業について学ぶ。日本企業(中小・ベンチャー企業含む)が韓国進出するか否か、韓国企業をライバルにするかパートナーにするか、韓国人訪日観光客(インバウンド)や日本人訪韓観光客(アウトバウンド)の対策を考える。また、韓国企業と日本企業の経営スタイルやグローバル戦略を比較研究することにより、新たな経営戦略やビジネスモデルを考察する。さらに、韓国企業を通じて、アジア企業やアジアビジネスについても学ぶ。

もう一つは、朝鮮半島情勢を知る。朝鮮半島は、韓国と北朝鮮、南北に分断されており、緊迫かつ不安定な情勢である。そのため、日本の平和や企業のリスクマネジメントを考える上で、朝鮮半島の情勢分析は必要不可欠である。

本講義のキーワードは、日韓ビジネスと日韓企業連携、韓国企業とアジア企業、韓流マーケティングとアジアマーケティング、アジアビジネスと新興国ビジネス、激動する朝鮮半島とアジア・ユーラシアダイナミズムである。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

グローバルビジネス

地域ビジネス

**■到達目標**

- ①韓国と北朝鮮の政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎知識を習得する。
- ②韓国企業の経営スタイルやグローバル戦略などの特徴を分析し、日本企業の新たな経営戦略やビジネスモデルを立案する。または日韓ビジネスのアイデアを提案する。
- ③朝鮮半島問題に対する当事者意識の涵養を図り、社会人にとって大切な国際情勢や平和に対する敏感さを兼ね備えるようになる。

**■授業形態**

講義

プレゼンテーション

双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ①朝鮮半島情勢や日韓ビジネスに関するニュースやネット情報を調べること。  
授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう。
- ②就活を希望している、もしくは関心のある企業や業界の韓国ビジネス(生産・販売・調達)の状況を調べること。  
授業開始時に2～3名の学生に報告してもらう。

**■評価方法**

出席(35%)、毎回提出の講義メモ(35%)、最終レポート(30%)の割合で評価する。

- ①出席と毎回提出する講義メモを重視 (35%+35% =70%) する。
- ②講義メモは、最低限の記述内容が記載されていない場合は、減点する。また、採点后、講義の最終段階で返却する。
- ③最終レポート (30%) は、A4用紙3枚以上とする。尚、図表の活用や枚数が増える場合は、高く評価する。15回の講義終了後、指定された提出期限までに提出すること。
- ④質問や意見は、講義への積極的な参加・貢献として加点する。発言者は、講義終了後に発言者リストに学籍番号と氏名を記入すること。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の合算点が、90%以上であること。  
また、最終レポートに高い問題意識、鋭い視点、独創性がある主張などが反映されていること。

評価A (89～80点) : 出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の合算点が、89～80%であること。

評価B (79～70点) : 出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の合算点が、79～70%であること。

評価C (69～60点) : 出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の合算点が、69～60%であること。

評価F (59点以下) : 出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

**■履修していることが望ましい科目**

語学系、経営学系、経済学系、グローバルビジネス系科目を積極的に履修すること。



### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

- ①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。
- ②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。
- ③遅刻および途中退室は、厳禁とする。途中退室は、必ず入室を記録(日付・時間・学籍番号・氏名)すること。また、大幅な減点を行う。虚偽記録をした場合は、不合格扱いとする。
- ④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。
- ⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。友人への提出依頼や講義には出席していないのに終了時に提出するなどの行為。
- ⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。友人のレポートのコピーや他科目のレポートを提出する行為。

**科目名** 韓国語Ⅰ・Ⅱ(KoreanⅠ・Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 趙 佑鎮、朴 浩烈**■講義目的**

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲がある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
グローバルビジネス

**■到達目標**

- ・ハングル文字や発音を徹底してマスターした後に、基本的文法を理解する
- ・韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論を学ぶ際の土台づくり

**■授業形態**

講義  
双方向  
その他(韓国語と韓国を扱ったビデオ・視聴覚教育)

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること。

**■評価方法**

- ・授業での毎回の小テストの総計点(100%)＋授業態度(加算点＋α)
- ・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。よって、出席が一定未満だとF処理されることを警告する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : ・ハングル文字や発音を完全にマスターしており、基本的文法を高度に理解している  
・韓国語の基本ボキャブラリーが豊富である
- 評価A (89～80点) : ・ハングル文字や発音をかなりマスターしており、基本的文法を良く理解している  
・韓国語の基本ボキャブラリーをかなり習得している
- 評価B (79～70点) : ・ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している  
・いくつかの韓国語のボキャブラリーを読んで意味がわかる
- 評価C (69～60点) : ・ハングルを基本的にスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
- 評価F (59点以下) : ・ハングルをスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多かったため小テストを受ける機会が少ないことで総計点が不足した結果の不合格

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

- ・授業態度における私語、携帯電話(をいじること)、本授業とは無関係のパソコン使用、途中退室は絶対に不可であり、徹底的に厳しく注意する。これらの注意は学生の社会人としての常識涵養のための不可避なものであるが、このような注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。
- ・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFなる可能性を警告する。
- ・復習を重視すること
- ・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない

**科目名** 韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ(Korean Business CommunicationⅠ・Ⅱ)**サブタイトル** 韓国語中級**担当教員** 朴 浩烈**■講義目的**

教材と配布資料を使って読む、書く、話す、聞くのレベルにおいて韓国語中級をめざす。外国語マスターへの道は根気と不断の努力以外にはあり得ないので、適宜小テストを行い韓国語向上を目指す。受講生たちにはハングル能力検定試験(3級～5級)の受験を奨励する。そのための対策も講ずる。外国語レベルとコミュニケーションレベルは必ずしも比例するとは言い難い。したがって「ことばと文化」を通して韓国(朝鮮半島)を幅広く理解することによって、様々なビジネスシーンや国際交流などにおけるコミュニケーションを能動的に行う上での自信やヒントを得ようとするのも講義目的である。ことばと文化における日韓間の類似点や相違点を双方向的に捉えることは、お互いの心理的距離を縮める接近法ともなろう。「ことばと文化」を幅広く理解するための手段として関連する政治、社会、歴史、教育、芸能(韓流、Kポップ)、スポーツ、ナショナリズム、時事問題など最前線事例も適宜トピックとして扱いながら、個々人が疑問に思うことなども議題に取り上げ、ディスカッションも行う。楽しく白熱した議論になれば幸いである(自信がなくてもできるだけ韓国語を使ってみる)。一切タブーはない。その過程において集団(国家・民族・企業など)として、又は人間個々人として日韓間に存在する問題点を発見し、受講生なりの解決へのアプローチを見いだすことも目的とする。下に掲載した教材・参考文献以外にも韓国の新聞記事やコラムなどを利用し、それらを讀んだり書いたりしながら韓国語能力の向上を図るとともに思考力や想像力を高める。

**■講義分類**

社会人力育成  
ビジネス環境理解  
グローバルビジネス

**■到達目標**

1. 韓国語中級レベルの達成
2. ディスカッションを通しての自己主張とコミュニケーション能力の向上
3. 「韓流」と「日流」を通してのビジネス事情理解(最前線事例理解)
4. 異文化理解力の向上とグローバル化における他者認識の方法論習得
5. 総合的韓国(朝鮮半島)学に対する知の蓄積と問題意識の涵養
6. ハングル能力検定試験3～5級

**■授業形態**

講義  
双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

1. CDを聞きながら発音練習し、教科書が読めるようにすること、練習問題を解いて来ること。
2. ハングル検定試験対策資料を自習すること。
3. 学期末に提出するレポート作成のための指定図書を計画的に読む。

**■評価方法**

出席50%、講義参加態度50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 欠席が0～1回で講義参加態度が最優であること(講義参加態度にはレポート、小試験含む)  
 評価A (89～80点) : 欠席が1～2回で講義参加態度が優であること  
 評価B (79～70点) : 欠席が2～3回で講義参加態度が良であること  
 評価C (69～60点) : 欠席が3～4回で講義参加態度が良であること  
 評価F (59点以下) : 欠席が4回以上で講義参加態度が消極的な場合

**■履修していることが望ましい科目**

韓国語Ⅰ、韓国語Ⅱ

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 管理会計入門(Introduction to Management Accounting)**サブタイトル** 意思決定と業績管理に関する会計的手法を学ぶ。**担当教員** 金子 邦博**■講義目的**

本講義は、産業社会を支える企業などの組織体の経営・管理活動における問題発見や問題解決に役立つ情報を提供するためのシステムとしての管理会計について、最新の理論と手法を学習することで、企業の戦略的な経営に資することを目指して会計情報を活用していくことの意義を理解することを目的とする。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

企業で使われている意思決定への情報提供システムとしての管理会計における理論と手法についての基礎的な知識を習得すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義を受講するにあたっては、毎回の講義で学習したことを整理し、理解を深めておく必要があります。次の講義のなかで、前回講義の理解度を問う復習テストを行います。また、次回講義の内容を把握するため、テキストの該当部分を事前に一読しておくことも必要です。講義内容の復習と次回講義の準備には概ね1時間程度の取り組みが必要です。

**■評価方法**

期末試験の成績により評価する（100%）。なお、期末試験の成績が70点に満たない者は、期末試験の成績に復習テストの成績を加算して成績判定を行う。

ただし、講義に際して教員の指示に従わない等の受講態度に問題があった者に対しては、期末試験の成績が良好であっても単位は付与しない。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）	： 期末試験の得点が90点以上
評価A（89～80点）	： 期末試験の得点が80点以上90点未満
評価B（79～70点）	： 期末試験の得点が70点以上80点未満
評価C（69～60点）	： 期末試験と復習テストの合計得点が60点以上
評価F（59点以下）	： 期末試験と復習テストの合計得点が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

この講義の受講に際して、特定の科目の単位取得は条件とはしないが、「原価分析」が履修済みであることが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- (1) 講義資料は、TNEXTの「授業資料」に掲示するので各自ダウンロードすること。
- (2) 期末試験は、受講者の人数によっては定期試験期間中ではなく、第15講の時間内に授業内試験として実施する場合があります。その際は、その旨の掲示をTNEXTで行います。

**科目名** キャリア・デザインI(Career Design I)**サブタイトル** 社会人になる準備**担当教員** 浜田 正幸**■講義目的**

社会人と学生は根本的にちがうので、学生から社会人になるためには、シフトチェンジが必要である。そのために必要な知識・能力として、社会人基礎力や産業社会の理解などがある。本講をきっかけに、社会人になるためのシフトチェンジすることが目的である。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

- ① 自己分析ができていて、自己PRのスピーチができる
- ② 履歴書を適正に書くことができる
- ③ 社会人基礎力を理解し、日々の生活でその能力を獲得する努力ができる

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回小レポートを課す。

**■評価方法**

取組み姿勢 30%、達成意欲 30%、出席 20%、試験 20%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 社会人として認められるレベルに達している場合。  
 評価A (89~80点) : 出席、レポート、確認テストすべてに十分到達している場合。  
 評価B (79~70点) : 出席、レポート、確認テストの総合がある程度できているが、十分とはいえない場合。  
 評価C (69~60点) : 出席、レポート、確認テストとも十分ではないが、今後の努力を期待する場合。  
 評価F (59点以下) : 出席、レポート、確認テストすべてが未達の場合

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** キャリア・デザイン入門(Introduction to Career Design)**サブタイトル** 「自分の人生」を考える**担当教員** 浜田 正幸**■講義目的**

社会人になるイメージを形成するとともに、具体的な自立の方法、自分にとっての幸せな人生、それを実現するための大学生生活の計画を立案することが本講の目的である。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

- ① 自立イメージの確立
- ② 自分にとっての「幸せな人生」のイメージ化
- ③ 大学生生活の計画立案

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回の講義で小レポートを課す。

**■評価方法**

取組み姿勢 30%、達成意欲 30%、出席 20%、試験 20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : ラーニングゴールに十分到達している。  
評価A (89~80点) : ラーニングゴールにほぼ到達している場合。  
評価B (79~70点) : ラーニングゴールへの到達が十分とは言えない場合。  
評価C (69~60点) : ラーニングゴールに到達していないが、キャリアデザインに関する理解が少しはできている場合。  
評価F (59点以下) : ラーニングゴールにはるかに到達しておらず、キャリアデザインに関して理解できていない場合。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**



**科目名** クリエイティブデザインII-A (Creative Design II-A)**サブタイトル** コンピュータシミュレーションで、理想のカフェを設計しよう**担当教員** 出原 至道**■講義目的**

学生にとって、新しいアイデアを出し、協業によってそれを実現していく能力を鍛えることは、極めて重要である。

本講義は、コンピュータを用いた3Dアプリケーションのチーム開発の演習を通して、各種のアルゴリズムの実装とユーザ視点のものづくりを行うことを目的とする。

具体的には、Unity (<http://madewith.unity.com/>) を利用したアプリケーション開発を行う。Unity は、ゲーム開発に限らず、PC からスマートフォンまで、ひろくさまざまなプラットフォーム上で、物理・景観シミュレーションの能力を活かした実務アプリケーション開発でも実績が増えている。

この講義では、実務的なアプリケーション開発手法の初歩を学び、各学生のホームゼミにおける研究活動の基礎技術とすることを目標とする。

**■講義分類**

ビジネス ICT  
 社会人育成  
 ビジネスマネジメント  
 顧客理解

**■到達目標**

- ・スクラムによるアジャイル開発手法を実践する。
- ・github を利用した共同開発のプロセスを理解する。
- ・Unity を利用したアプリケーション開発の基礎を理解する。
- ・基礎的なアルゴリズムの実装が C# でできるようになる。
- ・コンピュータを利用したシミュレーションの基礎を理解し、実装できるようになる。

**■授業形態**

講義  
 演習  
 グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義後、各チームで独自に実装研究を90分程度行い、記録すること。

**■評価方法**

平常点 (github 上での寄与) 50%  
 最終プレゼンテーション 40%  
 最終プレゼンテーション相互評価 10%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 数値評価90点以上  
 評価A (89~80点) : 数値評価80点以上90点未満  
 評価B (79~70点) : 数値評価70点以上79点未満  
 評価C (69~60点) : 数値評価60点以上70点未満  
 評価F (59点以下) : 数値評価60点未満

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・全体の講義では、複雑なプログラミングは行わない。意欲のある学生は、自主的にプログラミング技術を探求すること。
- ・全体の講義では、モデリングはほとんど行わない。意欲のある学生は、自主的にモデリング技術を探求すること。
- ・毎回、コンピュータを持参すること。
- ・特段の事情がある場合を除き、第1回の講義に出席していないものの受講は認めない。



**科目名** クリエイティブデザインII-B(Creative Design II-B)**サブタイトル** クリエイティブデザインII B ～3DCG制作とその社会的浸透**担当教員** 彩藤 ひろみ**■講義目的**

3DCGを利用したCM,アニメ、映画、ポスターなどが増えてきた。立体をそのまま3Dプリンターで印刷することも簡単になってきた。3DCGを制作体験しながら、これからの社会のどのような方面に応用できるか考察し、具体的に提案できるようにする。情報伝達・発信のひとつの表現方法として、3DCGを身につける。個々人の技術習得も狙うが、問題発見、解決の糸口として、グループワーク、プレゼンテーションを実施する。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

3DCGソフトの種類を理解  
3DCGソフトの利用  
グループワーク、プレゼンテーションを通じてのプロジェクトの推進  
3DCGの社会的価値の考察と成果発信

**■授業形態**

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

オープンソースソフトウェア[<http://blender.org>]Blenderのインストール  
ワード、エクセル、パワーポイントの操作方法復習  
CG系のニュースをよく見て、集めておく

**■評価方法**

授業内でのミニ知識テストなどの平常点（20％）と作品課題（30％）、レポート（20％）、出席（30％）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：各課題での技術点と芸術点が特に優れているもの。  
3DCGとその社会的浸透具合の考察が特に優れているもの。  
評価A（89～80点）：各課題での技術点と芸術点が優れているもの。  
3DCGとその社会的浸透具合の考察が優れているもの。  
評価B（79～70点）：各課題での技術点か芸術点が優れているもの。  
3DCGとその社会的浸透具合の考察が優れているもの。  
評価C（69～60点）：基本をおさえた評価できるもの。  
評価F（59点以下）：基準に達しないもの。

**■履修していることが望ましい科目**

必須ではないが、WEBデザイン、クリエイティブデザインI

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

PCは最初から必要  
マウスを用意してほしい

**科目名** グローバルエコノミーI(Global Economy I)**サブタイトル** 国際経済(International Economics)**担当教員** 下井 直毅**■講義目的**

この講義では、最前線事例を紹介しつつ、国際経済をめぐる問題をとりあげる。国際経済は日本経済に大きな影響を及ぼしている。グローバル化という言葉をよく耳にするが、世界の経済状況がめまぐるしく変わる中で、その動きを理解することはとても大切である。日頃、目や耳にしている出来事や現象を通して、日本や世界を取り巻く産業社会における経済動向の仕組みやメカニズムについて学んでほしい。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
グローバルビジネス

**■到達目標**

世界経済の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業内資料の熟読

**■評価方法**

出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計100%で100点満点。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている  
評価A（89～80点）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている  
評価B（79～70点）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている  
評価C（69～60点）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている  
評価F（59点以下）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない

**■履修していることが望ましい科目**

ミクロ経済学、マクロ経済学

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

**科目名**

グローバルエコノミー II (Global Economy II)

**サブタイトル**

金融論 (Finance)

**担当教員**

下井 直毅

**■講義目的**

この講義では、金融の理論と仕組みの基礎知識について学ぶ。また、産業社会にとっても重要である金融の役割を理解する。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
グローバルビジネス  
地域ビジネス

**■到達目標**

日本の金融の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教科書の該当する範囲の熟読

**■評価方法**

出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計100%で100点満点。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている  
評価A（89～80点）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている  
評価B（79～70点）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている  
評価C（69～60点）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている  
評価F（59点以下）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

**科目名** グローバルエコノミーⅢ(Global Economy Ⅲ)**サブタイトル** (グローバル視点を踏まえた)日本経済論：プレゼンと討論による学び**担当教員** 椎木 哲太郎**■講義目的**

日本経済を分析対象とし、経済学的視点、歴史的視点、社会経済システム論的視点からアプローチする。さらに産業、貿易、労働、金融、財政、社会保障といった各分野毎の切り口からも接近を試みる。それによって、日本経済の現状と課題をトータルに把握したい。その上で、経済政策の果たした役割についても具体的事例に即して検討し、日本経済を取り巻く大きな環境変化に対応して、国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた経済政策のあり方を考える。グループワークによる調査・報告（プレゼンテーション）と討論（ディスカッション）を中心に、双方向のアクティブラーニング実践として進めていく予定である。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

経済学の理論を援用して日本経済の現状・因果連関を分析し、環境変化に伴って解決すべき課題を明らかにする中で、企業活動と市民生活に不可欠な日本経済に関するトータルな認識を深め、「問題解決」に通じる望ましい経済政策を構想することができる。日本経済の各分野に関して、データの分析をもとに、将来展望につながる説得的なプレゼンテーションを展開することができる。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向授業

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

1人最低20分の報告（プレゼンテーション）のために、シラバスを参考に報告テーマに該当する日本経済に関連した2冊以上の専門書を読み、入念な準備として4時間以上費やすこと。  
 コメンテーターは当該分野について、必ず2点の問題提起を用意していただくこと。  
 毎週（全員）の報告に対して、必ずコメント・質問を記入したペーパーを提出すること。

**■評価方法**

最終レポート（60%）、報告・討論【メモ】・出席（40%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：最終レポート、発表・討論ともに論旨明快でデータの分析が十分なされ、極めて優秀である  
 評価A（89～80点）：最終レポート、発表・討論ともに優秀である  
 評価B（79～70点）：最終レポート、発表・討論ともに良い  
 評価C（69～60点）：最終レポート、発表・討論ともに普通  
 評価F（59点以下）：最終レポート、発表・討論ともに不十分。データの分析がなされていない。

**■履修していることが望ましい科目**

マクロ経済学

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

報告（プレゼン）に際しては、何冊かの参考文献を読んで頂く。第1～第3回の講義で分担（各回の報告者とコメンテーター）を決定するので、（予め希望回を明確にして）必ず出席すること。この間の講義に出席しなかった（分担決定に参加しなかった）諸君には、履修を許可しない。

プレゼン、最終レポート作成にあたっては、MS Office、Excelを使いこなすことを目標とする。最終レポートには必ずExcelで作成したデータを挿入すること。

**科目名** グローバルエコノミーⅣ(Global Economy Ⅳ)**サブタイトル** 経済統計学(Economic Statistics)**担当教員** 下井 直毅**■講義目的**

産業社会を分析する上では多種多様な問題が提起される。経済成長の見通しはどうか、中高年層の雇用の予想はどうか、為替相場の動向はどうか予想されるのか、等々である。こうした問題について経済理論はもちろんだが、経済統計データもあわせてみる必要がある。この講義では、日本経済の現状および日本経済が抱える課題について学び、最前線事例を紹介しつつ、その際に必要なデータについての基礎知識を身につけることを目的としている。

**■講義分類**ビジネス環境理解  
グローバルビジネス**■到達目標**

日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識の修得をめざす。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教科書の該当する範囲の熟読

**■評価方法**

出席点あるいは授業の平常点(30%)、試験(70%)。合計100%で100点満点。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識をほぼすべて修得できている  
評価A (89~80点) : 日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識をかなり修得できている  
評価B (79~70点) : 日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識を十分に修得できている  
評価C (69~60点) : 日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識をある程度修得できている  
評価F (59点以下) : 日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識を修得できていない

**■履修していることが望ましい科目**

グローバルエコノミーⅠ(国際経済)、グローバルエコノミーⅡ(金融論)、グローバルエコノミーⅢ(日本経済論)

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

**科目名** グローバルビジネス入門(Introduction to Global Business)**サブタイトル** 世界と日本を知る**担当教員** 金 美德、飯田 健雄、石川 晴子、椎木 哲太郎、趙 佑鎮、中村 その子、バートル**■講義目的**

担当教員7名が、「世界から見た日本」と「日本から見た世界」という視点から、日本と世界、政治と経済、企業とビジネス、文化とマーケティングなどをテーマに最前線事例を踏まえて解説する。また、日本や世界を高度産業社会に再構築するための問題点と解決策を考察する。

主な目的は、事業構想学科への誘導である。また、グローバルビジネス系科目や特別講座ⅠⅡ(寺島学長監修リレー講座)の基礎学習や社会科学の基本的な考え方を学ぶこと。さらに、自らの立ち位置や、将来進むべき方向性を思索することである。

主なキーワードは、世界潮流、時代認識、アジア・ユーラシアダイナミズム、日中韓、国際経済、国際経営、国際協力、日本企業のグローバル戦略、グローバルマーケティング、若者の文化と留学である。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

グローバルビジネス

ビジネスICT

地域ビジネス

**■到達目標**

①グローバルビジネス系統科目の特性を理解するとともに、他分野の系統科目との関連性を把握する。

②2年時の特別必修科目である「特別講座ⅠとⅡ(共通テーマ「世界潮流と日本の進路」)」の基礎知識を習得する。

**■授業形態**

講義

双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

2講義終了毎にレポートを提出すること。合計7レポート提出することとなる。

**■評価方法**

出席率(60%)と合計7つのレポート(40%)に基づいて評価する。

担当教員7名が、2講義ずつオムニバス形式で合計14講義を行い、それぞれレポート(A4用紙1枚以上)の提出を求める(合計7レポート:A4用紙7枚以上)。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、90%以上であること。

評価A (89~80点) : 出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、89~80%以上であること。

評価B (79~70点) : 出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、79~70%以上であること。

評価C (69~60点) : 出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、69~60%以上であること。

評価F (59点以下) : 出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、59%以下であること。

**■履修していることが望ましい科目**

語学系、経営・経済系、グローバルビジネス系科目を積極的に履修すること。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

①第1回目のガイダンスに必ず出席すること。

理由は、7名の担当教員によるオムニバス形式の講義が、第2回目より開始されるため受講要領をよく承知して置く必要がある。

②パソコン・携帯電話・音楽イヤホンは、使用を禁止する。

③私語・帽子着用・飲食は、禁止する。

④遅刻および途中退室は、厳禁とする。

⑤レポートは、1教員の講義(2回連続講義)が終了し、1週間後の金曜日16時30分までに教育サポート室に提出すること。

**科目名** グローバルヒストリーI(Global History I)**サブタイトル** 日本社会の歴史的・文化的特質を考える**担当教員** 大森 映子**■講義目的**

歴史を学ぶことは、過去の事実を明らかにするだけでなく、現代社会を客観化することでもある。ここでは、過去の日本社会の特質を歴史的に振り返りながら、現代社会がかかえている矛盾点を明らかにし、問題解決の方法を探る糸口を考える。今年度扱う問題は、次の2点である。第一は、先端技術に支えられた文化の復元である。これまで漠然と「思い込み」で理解されてきた日本文化の実像を明らかにし、文化的特質を再検討する。また第二には、世界遺産の問題を取り上げる。世界遺産は、観光資源として位置づけられがちであるが、その本来の意味はどこにあるのか。世界遺産を通して、過去の日本社会が「自然」に対してどのように向き合ってきたのかを明らかにする。

**■講義分類**

社会人力育成  
地域ビジネス  
グローバルビジネス  
基礎教養

**■到達目標**

- (1)過去の事実に向き合うことの重要性を理解する。
- (2)歴史認識は、現代社会の矛盾点を浮き彫りにするものであることを理解する。
- (3)歴史を踏まえて、自分なりの意見をもてるようにする。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回の授業前に、取り上げる時代についてあらかじめ学んでおく。また、復習を重視し、授業内で示されたキーワードについて理解を深めておく。

**■評価方法**

平常点60%（授業内で求める簡単なレポートを重視する）、中間レポート（プレゼンテーション）20%、最終レポート20%を原則とする。ただし受講者数によっては、レポートを授業内試験とする場合がある。

**■評価基準**

- 評価A+（90点以上）：授業の趣旨と内容を十分に理解し、自分の意見を持てるようになった。  
 評価A（89～80点）：授業の趣旨と内容を、基本的に理解し、自分の意見を持てるようになった。  
 評価B（79～70点）：授業の趣旨と内容を、一応理解できた。  
 評価C（69～60点）：不十分なところはあるが、授業の趣旨は一応理解できた。  
 評価F（59点以下）：授業の趣旨、内容ともに理解できていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

履修希望者多数の場合は人数制限を行うため、初回は必ず出席すること。なお、受講者数によって、一部内容の入れ替えをする場合があるので、注意すること。

**科目名** グローバルヒストリーⅡ(Global HistoryⅡ)**サブタイトル** グローバル近現代史：世界と日本**担当教員** 椎木 哲太郎**■講義目的**

本講座は、史学科的な歴史研究ではなく、若い諸君が確固たる歴史（時代）認識を持ち、これからの人生にどう向き合いかを考えるための一つの契機となることをめざしている。そして、現代の世界が直面する諸課題とその歴史的背景を知り、複雑な相互連関の中にある国際関係や経済問題を考察するための共通認識を深め、未来への選択につなげていけるような歴史的教訓を得ることをねらいとしている。歴史を動かすものは何かと問いかけよう。さらに、日本の近現代についても、世界史の流れの中で再検討したい。幕末・明治維新以後の日本は、西洋近代の大きな歴史的潮流に抗えず飲み込まれたが、その一方で、渦中に消すことのできない楔を打ち込み、近代世界史の一頁を飾る主体へと変身した。

グローバル化の中を生き抜くためには、他者を知らねばならない。世界の各地域、欧米や中国、アジア、ロシアやイスラーム世界について理解を深めるには、地政学的視点とともに、その歴史に遡って考究することが不可欠であろう。アジア・太平洋地域の協力関係のあり方をめぐっては議論が分かれているが、仮に「東アジア共同体」といった枠組みを志向するのであれば、EUへの道のりがどのような茨に満ちたものであったかを追跡しておく必要があるのではないだろうか。少子・高齢社会、「持続可能な社会」への取り組みは、北欧諸国等の「実験」からも示唆を得ることができよう。

半期15回という限られた時間の中で、歴史を扱う際の時代的制約（現代の価値基準で評価することの危険性、等）を十分意識しつつ、こうした現代的問題意識に沿って、通史よりもテーマ中心の大胆なアプローチを試みたい。前半で歴史を動かす諸要因について検討し、後半では欧州、米国、ロシア、アジア・アフリカ、イスラーム世界、そして日本の近現代史について概観する。20世紀的原理とはいかなるものであったのだろうか。21世紀において、それはどのように展開、変容を遂げていくのであろうか。配布資料の事前の読解（予習）を前提に、ディスカッションを交えた密度の濃い講座、「アクティブ・ラーニング」の場となるよう心がけたい。また諸君にも、自らが歴史を創る主体に他ならないことを銘記して臨んで頂くことを期待する。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人育成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

世界と日本の相互作用、光と影に満ちた近現代史を学ぶことを通じて、現代社会の直面する諸課題の解決につながる豊富な示唆を獲得し、学問としての社会研究の基盤と、グローバル社会に生き、グローバルビジネスを円滑に進めるために有効な視座（歴史観）を構築することができる。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向授業

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

第2回講義以降、毎回翌週分の講義資料（8ページ）を配布する。これを1時間以上かけて講義までに必ず読了した上で受講すること。全く読んでこなかった者の参加は認めない。各回の分担担当者を予め決めておき、担当者は必ず当該資料に関連した問題提起、ないしは詳細研究の結果を報告することを義務づける。

**■評価方法**

期末試験（70%）、レポート・小テスト・出席（30%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：試験の成績、質疑の内容、ともに顕著に優れており、講義を通じて現代社会の諸課題の歴史的解明、社会研究の基盤の構築、歴史観の醸成につながる認識の獲得という高次の水準に到達できている  
 評価A（89～80点）：試験の成績、質疑の内容、ともに優れている  
 評価B（79～70点）：試験の成績、質疑の内容、ともに良い  
 評価C（69～60点）：試験の成績、質疑の内容、ともに普通  
 評価F（59点以下）：試験の成績、質疑の内容、ともに不十分

**■履修していることが望ましい科目**

グローバルヒストリーⅠ  
マクロ経済学



■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者、読んでこなかった者は、原則として当日の受講を認めない。また、第2回までに重要不可欠な点を説明するとともに、連続性を重視した積み上げ型の講義であるため、第2回の講義までに全く出席しなかった者、さらに途中で欠席3回を超えた者は、本講座の履修を認めない。

講義中の私語、帽子着用、飲食は禁止する。PC、スマートフォン、音楽イヤホンの使用も禁止する。板書の撮影は認めない。遅刻及び途中退室は厳禁とする。

**科目名** グローバルヒストリーⅢ(Global History Ⅲ)**サブタイトル** 上海・内山書店をめぐる日中交流史**担当教員** 中澤 弥**■講義目的**

20世紀の前半、1910年代から1945年までの日中交流史を、上海という都市をフィールドとしてたどっていく。その際に呼び出されるのは、内山完造という一人の日本人であり、彼が開いた内山書店である。当初、副業として開店した内山書店は、店を拡大していくと共に、日中の文化人が集うサロンへと変貌していく。また内山完造は、作家の魯迅を一時かくまうなど、中国の歴史の流れにも関わりを持っていく。そうした歴史に学ぶことで、中国、あるいはアジアの各国との交流に関する課題を発見、解決していく力を身に付けてもらいたい。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

大正から昭和前半における日本と中国との関係について歴史的視座を獲得し、主に文化的な交流において何が必要なのか、思考力と判断力を身につける。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

中国、特に上海の歴史を事前に学習しておく。魯迅の小説、芥川龍之介・谷崎潤一郎の上海紀行文、横光利一の小説「上海」などを事前に読んでおく。

**■評価方法**

評価は3分の2以上の出席を必須とし、各回の講義内容に基づく小レポートや小テスト50%、OFFICE(Word)を使用した課題レポート50パーセントにより行う。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 日中交流史における内山完造と内山書店が果たした役割を理解し、文化交流における課題を自ら発見・解釈した上で、文章によって論理的に説明できる。

評価A (89~80点) : 日中交流史における内山完造と内山書店が果たした役割を理解し、文化交流における課題を自ら発見し、文章によって説明できる。

評価B (79~70点) : 日中交流史における内山完造と内山書店が果たした役割を理解し、文化交流における課題を文章によって説明することができる。

評価C (69~60点) : 日中交流史における内山完造と内山書店が果たした役割を理解し、文章によって示すことができる。

評価F (59点以下) : 日中交流史における内山完造と内山書店が果たした役割を正しく理解できていない。出席不良で、小テストなどの得点が低い。課題未提出。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** グローバルヒストリーⅣ(Global History Ⅳ)**サブタイトル** 日本政治史 一前近代の国際関係一**担当教員** 大森 映子**■講義目的**

対外政策を軸としながら、前近代における日本の政治史を概観する。古代から近代までを視野に入れて授業を進めるが、主に江戸時代の対外関係を扱う。前近代の国際関係を考える時、中国や朝鮮半島をはじめ、アジア諸地域との密接な結びつきを無視することはできない。この点は現代社会にも通じるところであり、アジアの中の日本という立場からの歴史認識は、政治的・経済的・国際的な諸問題を解決に導く糸口となるものであろう。このような側面を意識しながら、前近代における日本の対外政策および海外認識について検討する。

**■講義分類**

問題解決  
問題解決のための方法  
グローバルビジネス  
社会人基礎力

**■到達目標**

- (1)日本の前近代における国際関係、対外認識について理解する。
- (2)前近代、および明治期における外交政策が、現代日本に及ぼした影響について考える。
- (3)現代社会を考える上で、歴史的認識が大切であることを認識する。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回の授業前に、取り上げる時代についてあらかじめ学んでおく。また、復習を重視し、授業内で示されたキーワードについて理解を深めておく。

**■評価方法**

平常点60%（授業内で求める簡単なレポートを重視する）、中間のまとめ20%、最終レポート20%を原則とする。ただし受講者数によっては、中間のまとめをレポートに振り返る場合がある。

**■評価基準**

- 評価A+（90点以上）：授業の趣旨と内容を十分に理解し、自分の意見を持てるようになった。  
 評価A（89～80点）：授業の趣旨と内容を基本的に理解し、自分の意見を持てるようになった。  
 評価B（79～70点）：授業の趣旨と内容を、一応理解できた。  
 評価C（69～60点）：不十分なところがあるが、一応授業内容を理解できた。  
 評価F（59点以下）：授業の趣旨を理解できていない。

**■履修していることが望ましい科目**

グローバルヒストリーⅠを履修していることが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

初回は、授業の方向性を確認する重要な場であるので、必ず出席すること。

## 科目名 ▶▶▶ グローバルマーケティングI(Global Marketing I)

サブタイトル ▶▶▶

担当教員 ▶▶▶ 細川 淳

### ■講義目的

グローバルマーケティングは、自分と関係のないどこかの会社の人びとがやっている事ではない。グローバルイズムはいつの間にか私たちの生活を取り囲んでしまっており、マーケティング概念や戦略はそのまま私たちの人生のポジショニング・戦略に結びつく考え方を提供してくれる。本講義ではグローバルマーケティングの基本理論の体系的習得を目指す。同時に同概念の習得を通じて、各自の志を意識・設定した上で生活、キャリア、人生の設計に肝要なグローバル指向、戦略指向を身につけてもらうべく、「企業」と「個人」を往来した授業を展開する。

### ■講義分類

顧客理解  
ビジネス創造  
グローバルビジネス  
ビジネス環境理解  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

### ■到達目標

- ①グローバルマーケティングの基本理論を体系的に理解する。
- ②その概念習得を通じて、各自の志を意識・設定し、将来の生活・キャリアの設計・選択・戦略を構築する実践的知識・能力を涵養する。

### ■授業形態

講義  
双方向

### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

国際的なビジネスやブランドに関する書籍、雑誌のうち、学生自身の興味を喚起するものを読み込み、また日常生活で触れるグローバル・ブランドや商品が展開される店舗やURLを観察する事により、各自の国際ビジネスへの興味を喚起、グローバルマーケティングというものについての各自のイメージ、疑問、仮説を整理、考察しておく。

### ■評価方法

期末試験 80%  
授業参画 20% (コメント・ペーパー (随時実施) の提出、発言、質問、問いかけへの応答、各1回につき5点。)

### ■評価基準

- 評価A+ (90点以上) : グローバルマーケティングの各概念やキーワードをほぼ完全に理解し、使いこなせる。授業参画回数が多い。授業参画の点数は参画回数1回5点の加点方式。最大20点 (ただし参画の内容、授業態度により、減点もあり得る。)
- 評価A (89~80点) : グローバルマーケティングの各概念やキーワードを充分理解している。授業参画回数が比較的多い。
- 評価B (79~70点) : グローバルマーケティングの各概念やキーワードを平均以上に理解している。授業参画回数がやや多い。
- 評価C (69~60点) : グローバルマーケティングの各概念やキーワードある程度理解しているが欠落している部分も多い。授業参画回数がやや少ない。
- 評価F (59点以下) : グローバルマーケティングの各概念やキーワードの理解度が必要レベルに達していない。授業参画回数が少ないかない。

### ■履修していることが望ましい科目

マーケティング関連の授業を履修していることが望ましいが、必須ではない。

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

**科目名** グローバルマーケティングII(Global Marketing II)**サブタイトル****担当教員** 小祝 啓士夫**■講義目的**

グローバルビジネスにおいて存在感を増すアジア市場。このマーケットの特長は人口ボリュームの多い若者たちが消費やトレンドを牽引し、今後もさらに伸びゆく新興市場であること。その中でも注目されるASEAN各国の若者たちを理解し、現地の最新トレンドに触れることで、ASEAN市場をマーケティングしていくための基本事項や最新事例を各国別、テーマ別（食、ファッション、暮らし、健康、美容、メディア、結婚や恋愛、日本との関係など）に講義します。各国独自のライフスタイル、国民性、宗教、コミュニティなどの相違点がマーケティングの現場でどう活用されていくのかを学んでいきましょう。また、講義内のグループワークでコミュニケーション力、問題解決のための方法、マーケティング調査設計などビジネス現場の実践的な知識も高めていきましょう。70ヶ国の海外ネットワークを持つマーケティング会社の経営者として、多数の海外案件に携わってきた私の現場経験をできるだけ皆さんに共有させていただきます。また、講義では内容に合わせて、現地事情に詳しい有識者、進出企業の担当者、現地在住者なども交えていく予定です。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 グローバルビジネス  
 地域ビジネス

**■到達目標**

グローバルマーケティングの基礎スキルを身につけるための、  
 ○各国最新事情の把握と理解  
 ○各国生活者のリアルな実像を把握と理解  
 ○各種調査や取材など実践的手法の理解

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各国の基礎情報の収集や課題作業など

**■評価方法**

出席=50%  
 課題レポート、グループワーク評価=50%  
 を基準として、100点満点で得点化し、絶対評価により評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 講義で扱うテーマ (ASEANにおけるマーケティング) について正しい理解がある。  
 講義で得た情報や理解をベースに応用力があり、自分なりの意見やアイデアを持っている。  
 グループワークやディスカッションにリーダーシップを発揮し、積極的に参加している。  
 出席率および課題レポートの評価がとてよい。
- 評価A (89~80点) : 講義で扱うテーマ (ASEANにおけるマーケティング) について正しい理解がある。  
 講義で得た情報や理解をベースに応用力があり、積極的に学ぶ姿勢がある。  
 グループワークやディスカッションに積極的に参加している。  
 出席率および課題レポートの評価がよい。
- 評価B (79~70点) : 講義で扱うテーマ (ASEANにおけるマーケティング) について平均以上の理解がある。  
 グループワークやディスカッションに積極的に参加している。  
 出席率および課題レポートの評価が平均以上である。
- 評価C (69~60点) : 講義で扱うテーマ (ASEANにおけるマーケティング) について理解がある。  
 グループワークやディスカッションに積極的に参加している。  
 出席率および課題レポートの評価が合格得点に達した。
- 評価F (59点以下) : 講義で扱うテーマ (ASEANにおけるマーケティング) について理解がない。  
 グループワークやディスカッションに消極的である。  
 出席率および課題レポートの評価が合格得点に達していない。

**■履修していることが望ましい科目**

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

**科目名** 経営学概論I(Introduction to Management I)**サブタイトル****担当教員** 常見 耕平**■講義目的**

経営学の理論について理解する。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

経営学の理論について理解すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

経済社会の現実にはろく目を向けること。

**■評価方法**

最終試験結果のみで評価する(100%)

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を90%以上理解していること  
評価A (89~80点) : 講義内容を80~89%理解していること  
評価B (79~70点) : 講義内容を70~79%理解していること  
評価C (69~60点) : 講義内容を60~69%理解していること  
評価F (59点以下) : 講義内容の理解が60%に満たないこと

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

経営学理論のうち、古典的(あるいは伝統的)管理論と呼ばれるものを学ぶ。  
授業は文章を読み、内容を理解することを中心においてすすめる。したがって出席し、教師の話を聞いているだけというものではない。講義時間のほとんどを課題文の読解に費やすことになる。  
なお、ここに記載しているのは、あくまで計画である。したがって、本シラバスの記載内容にかかわらず、講義開始後、受講生の理解や興味・関心、教員の興味・関心に応じて、講義内容を大幅に変更する可能性がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。変更がある場合は講義時間中に指示する。掲示等を行わない。  
なお、本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** 経営学概論Ⅱ(Introduction to Management II)**サブタイトル****担当教員** 常見 耕平**■講義目的**

経営学理論を理解する。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

経営学理論を理解すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

現実社会の動向に広く目を向けること。

**■評価方法**

最終試験結果のみで評価する（100%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義内容を90%以上理解していること

評価A（89～80点）：講義内容を80～89%理解していること

評価B（79～70点）：講義内容を70～79%理解していること

評価C（69～60点）：講義内容を60～69%理解していること

評価F（59点以下）：講義内容の理解が60%に満たないこと

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業は文章を読み、内容を理解することを中心においてすすめる。したがって出席し、教師の話を聞いているだけというものではない。講義時間のほとんどを課題文の読解に費やすことになる。

なお、ここに記載しているのは、あくまで計画である。したがって、本シラバスの記載内容にかかわらず、講義開始後、受講生の理解や興味・関心、教員の興味・関心に応じて、講義内容を大幅に変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。変更がある場合は講義時間中に指示する。掲示等は行わない。



**科目名** 経営基礎II(Basic Management II)**サブタイトル** 経営シミュレーションゲームを通じたアクティブラーニング経営体験プログラム**担当教員** 出原 至道、常見 耕平**■講義目的**

多摩大学の学生が将来進んでいくであろう、方向を考えると、二つの教育的課題が想定される。第一は産業社会における企業活動の全体像を、いかにして(それも出来るだけ早い段階で)理解してもらうか、ということであり、第二は、「主体的に問題解決に取り組み、成功させる能力」をいかにして修得してもらうか、という点である。

本講義は、この二つの課題を解決するために、開設されている。

具体的には、受講学生は、(1)講義を受講し、(2)「多摩大式経済経営シミュレーター」ゲームへ参加する。この2点が、本講義の概要である。

ゲームでは、一定のルールにのっとり、ゲーム上に作られた仮想の市場において、参加者すべてが、企業経営者と消費者の役を果たす。複数業種の中から選んだある業種に属する会社を設立、経営し、経営理念に従った経営を展開し、利益の確保を目指す。まさに、これらの行為すべてが、問題発見と問題解決の実践である。

講義では、当初の述べたような目的を達成するのに必要な、具体的もしくは抽象的な情報を学生諸君に伝えんとする。そしてこれを踏まえ、ゲームの中での企業経営を、自らがたてた経営目標に合致するように進める。

受講学生の理解度に応じて、講義内容・進度を調整する。

**■講義分類**

ビジネスICT  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成

**■到達目標**

- ① 企業経営の全般について理解し、表現できるようになること。
- ② 自分が経営にかかわった企業や、他の企業の経営の概要を把握、分析することができるようになること。
- ③ 受講後、自分の専攻分野がより明確に絞り込むことができ、さらに、その専攻分野が全体の中でどのような位置にあるのかについて理解できるようになること。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ・講義外の時間で、シミュレータは継続的に動作する。常に市場動向に気を配り、対応することが求められる。
- ・講義パートの内容については、次回講義でテストを行う。復習をしっかり行うこと。

**■評価方法**

- (1)ゲームへの参加の度合い(出席を含む) 30%
- (2)レポート 40%
- (3)試験(ゲームのオペレーションおよび、ゲームを通じて得た企業経営に関する知識の理解がなされているかどうかを判定する) 30%
- を総合して評価を行う。このほかに、シミュレーションゲームの結果を成績に加算する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : (1)ゲームへの参加の度合い(出席を含む)(2)レポート(3)試験において、一定の基準を上回ることを条件に、数値評価で90点以上
- 評価A (89~80点) : (1)ゲームへの参加の度合い(出席を含む)(2)レポート(3)試験において、一定の基準を上回ることを条件に、数値評価で80点以上90点未満
- 評価B (79~70点) : (1)ゲームへの参加の度合い(出席を含む)(2)レポート(3)試験において、一定の基準を上回ることを条件に、数値評価で70点以上80点未満
- 評価C (69~60点) : (1)ゲームへの参加の度合い(出席を含む)(2)レポート(3)試験において、一定の基準を上回ることを条件に、数値評価で60点以上70点未満
- 評価F (59点以下) : (1)ゲームへの参加の度合い(出席を含む)(2)レポート(3)試験において、一定の基準を上回ることを条件に、数値評価で60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

すべての授業に出席・参加することが単位取得の基本条件であることを銘記されたい。  
また、言うまでもなく、ネットワーク上のゲームにアクセスすることで、経営シミュレーションを行うのであるから、PCと、電源ケーブルは必須である。必ず持参して参加されたい。

**科目名** 経営情報論Ⅰ(Management Information Systems Ⅰ)**サブタイトル** 経営情報の基本を具体的に学ぶ**担当教員** 志賀 敏宏、大森 拓哉、佐藤 洋行**■講義目的**

経営情報学部、特に経営情報学科の共通リテラシー（読み書き・ソロバン力）の内容として、企業・社会が何を目的として情報システムを活用するのか、どんな情報システムを活用しているのかを具体的な事例を通じて理解する。

なお、上記理解の前提として、企業・社会の活動の概要の理解も進める。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネスマネジメント

ビジネスICT

**■到達目標**

- ①企業や社会が、何を目的として情報システムを利用しているのかを、具体的に理解する。
- ②企業や社会が目的達成のために利用している情報システムのポイント・核心を知る。

**■授業形態**

講義（外部講師含む）

双方向

適宜グループディスカッションやグループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業での受講の効果を高めるため、キーワードを辞書、書籍、ネットで予習しておくことを必須とする。

また、期末レポートの質を高めるため、受講時のノートに基づいて、授業の流れの確認、書籍等の利用による疑問点の解消などの復習を行うものとする。

**■評価方法**

出席50点。期末レポート50点。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：下記評価方法、配分の通り

評価A（89～80点）：下記評価方法、配分の通り

評価B（79～70点）：下記評価方法、配分の通り

評価C（69～60点）：下記評価方法、配分の通り

評価F（59点以下）：下記評価方法、配分の通り

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

外部講師の都合等により、テーマ（内容）、順番を変更することがある。

## 科目名

## 経営情報論Ⅱ(Management Information Systems Ⅱ)

## サブタイトル

## 担当教員

出原 至道、増田 浩通

## ■講義目的

企業活動を効果的に行うには顧客嗜好や社会動向をタイムリーかつ的確につかむ必要がある。ウェブの発達により安価に多量のデータを「ビッグデータ」として収集することが可能になった。これらの技術の利用法とその実例を紹介する。  
ウェブ2.0の登場によりウェブ上には一部の専門家や企業ばかりでなく一般多数の人々の意見・心情が公開できる場になった。そうした意見・心情の中から人々の考え方、流行に対する受け入れ方を分析し、企業活動に活かす方法について学ぶ。

## ■講義分類

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネスマネジメント  
グローバルビジネス  
ビジネスICT

## ■到達目標

- (1) 「ビッグデータ」時代での最新技術の動向を理解する。
- (2) どのような企業がそれをどのように活用しているかを理解する。
- (3) ユーザとして利用することで社会全体がどのような変化を起こしつつあるかを理解する。
- (4) 「ビッグデータ」時代での企業と顧客の関係について理解する。

## ■授業形態

講義

## ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

この科目は、企業におけるWebベースビジネスをテーマとする。したがって、各自に特定の企業活動について、各回の講義内容に関してもまとめることが求められる。

## ■評価方法

講義中の理解度確認テストおよびレポート課題(50%)、期末試験／レポート(50%)により行う。

## ■評価基準

- 評価A+ (90点以上) : (1) 「ビッグデータ」時代での最新技術の動向を理解して利活用を提案できる。  
(2) どのような企業がそれをどのように活用しているかを理解して利活用を提案できる。  
(3) ユーザとして利用することで社会全体がどのような変化を起こりつつあるか説明できる。  
(4) 「ビッグデータ」時代での企業と顧客の関係について理解して利活用を提案できる。
- 評価A (89~80点) : (1) 「ビッグデータ」時代での最新技術の動向を理解して利活用を提案できる。  
(2) どのような企業がそれをどのように活用しているかを理解して利活用を提案できる。  
(3) 「ビッグデータ」時代での企業と顧客の関係について理解して利活用を提案できる。
- 評価B (79~70点) : 以下の4つのうち2つについて実施できる。  
(1) 「ビッグデータ」時代での最新技術の動向を理解して利活用を提案できる。  
(2) どのような企業がそれをどのように活用しているかを理解して利活用を提案できる。  
(3) ユーザとして利用することで社会全体がどのような変化を起こりつつあるか説明できる。  
(4) 「ビッグデータ」時代での企業と顧客の関係について理解して利活用を提案できる。
- 評価C (69~60点) : 以下の4つのうち1つについて実施できる。  
(1) 「ビッグデータ」時代での最新技術の動向を理解して利活用を提案できる。  
(2) どのような企業がそれをどのように活用しているかを理解して利活用を提案できる。  
(3) ユーザとして利用することで社会全体がどのような変化を起こりつつあるか説明できる。  
(4) 「ビッグデータ」時代での企業と顧客の関係について理解して利活用を提案できる。
- 評価F (59点以下) : 上記の内容について、理解不十分か、実施を提案できない

## ■履修していることが望ましい科目

経営情報論Ⅰ

## ■卒業年次生対象再試験の実施

実施する

## ■留意点

先端事例を紹介するため、各回の講義内容は、適宜変更する場合がある。

**科目名** 経営組織Ⅰ(Management Organization Ⅰ)**サブタイトル** 組織の実践的理解**担当教員** 小林 英夫**■講義目的**

企業は最も重要な経営資源である人(々)を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。  
経営組織Ⅰでは、この問題に関する基礎的項目について最前線事例を踏まえて学び、実践的知識を獲得する。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
グローバルビジネス  
地域ビジネス

**■到達目標**

- ・組織とは何であり企業組織はどのように運営されているのかを理解し説明できる。
- ・組織の主要構成要素である人的資源が組織の中でどのように活かされているのかを理解し説明できる。
- ・自らが組織を通じてキャリアを築き産業社会へ貢献することのイメージを描くことができる。

**■授業形態**

講義  
双方向  
クラスディスカッション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には、事前学習しておくべき用語やポイントを自分なりに調べその意味を考えてくるとともに、T-NEXTにアップされる授業資料に事前に目を通し、疑問点を明確にしておくこと。  
授業後には、授業資料に再度目を通して疑問点が解消されたかを確認し、解消されていない場合は次回の授業までに教員に質問するなどにより解消すること。

**■評価方法**

授業貢献点(59点)、期末試験(41点)  
毎回の授業においてコメントシートまたはミニレポートの提出を求め、その内容をA(授業を聴き良い気づきがあった)、B(授業を聴いていた)、C(授業を聴いていたとは思わない)の3段階評価し、授業貢献点とする。Aは加点対象(6点)、Bが標準(4点)、Cは減点(-4点)、欠席は0点とする。従って、授業に出席していても、受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大59点とする。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が90点以上  
授業貢献点は単なる出席点ではなく、授業を聴き、更に自ら考えることができているかを評価する。また、授業を改善していくための建設的提言も授業への貢献として評価する。期末試験では、経営組織に関する知識の習得度とともに、組織を通じたキャリア形成イメージが描けるようになっているかを評価する。

評価A (89~80点) : 授業貢献点と期末試験の合計が80点以上90点未満  
評価B (79~70点) : 授業貢献点と期末試験の合計が70点以上80点未満  
評価C (69~60点) : 授業貢献点と期末試験の合計が60点以上70点未満  
評価F (59点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** 経営組織Ⅱ(Management Organization II)**サブタイトル** 組織の理論的理解**担当教員** 小林 英夫**■講義目的**

企業は最も重要な経営資源である人（々）を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。

経営組織Ⅱでは、この問題に対してこれまでの学術的成果を踏まえ理論的側面からの検討を行うとともに、理論を実務に適用する際の考慮点を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- ・1900年代より現在に至る経営組織理論の進展を体系的に説明することができる。
- ・経営組織の理論と実際の組織運営における課題を結び付けて考え、理論を用いて実務的な問題解決方法を考えることができる。
- ・自らが組織を通じてキャリアを築き産業社会へ貢献することのイメージを描くことができる。

**■授業形態**

講義  
 双方向  
 クラスディスカッション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には、事前学習しておくべき用語やポイントを自分なりに調べその意味を考えてくるとともに、T-NEXTにアップされる授業資料に事前に目を通し、疑問点を明確にしておくこと。

授業後には、授業資料に再度目を通して疑問点が解消されたかを確認し、解消されていない場合は次回の授業までに教員に質問するなどにより解消すること。

**■評価方法**

授業貢献点（59点）、期末試験（41点）  
 毎回の授業においてコメントシートまたはミニレポートの提出を求め、その内容をA（授業を聴き良い気づきがあった）、B（授業を聴いていた）、C（授業を聴いていたとは思われない）の3段階評価し、授業貢献点とする。Aは加点対象（6点）、Bが標準（4点）、Cは減点（-4点）、欠席は0点とする。従って、授業に出席していても、受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大59点とする。

**■評価基準**

- 評価A+（90点以上）：授業貢献点と期末試験の合計が90点以上  
 授業貢献点は単なる出席点ではなく、授業を聴き、更に自ら考えることができているかを評価する。また、授業を改善していくための建設的提言も授業への貢献として評価する。期末試験では、経営組織に関する理論の理解度とともに、組織を通じたキャリア形成イメージが描けるようになっているかを評価する。
- 評価A（89～80点）：授業貢献点と期末試験の合計が80点以上90点未満  
 評価B（79～70点）：授業貢献点と期末試験の合計が70点以上80点未満  
 評価C（69～60点）：授業貢献点と期末試験の合計が60点以上70点未満  
 評価F（59点以下）：授業貢献点と期末試験の合計が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

経営組織Ⅰを履修していることが望ましいが、必須ではない

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 経営とセキュリティ(Management and Security)**サブタイトル** 情報化社会における企業の立場から必要となる情報セキュリティ**担当教員** 諸橋 正幸**■講義目的**

インターネット技術の急速な発展に伴い、企業や組織においてもインターネットを前提とした情報収集・利用やそれに基づくサービス提供が当たり前となっている。また、サービスを受ける側の情報リテラシーも十分な態勢にあることを前提とした情報化社会への変化が急速に進みつつある。

そうした変化に対応するために必要な考え方やそれに対応する技術として、情報セキュリティが注目され、情報セキュリティ技術者の重要性が高まっている。

本講義では、情報化社会の現在と今後の方向性を理解した上で、情報セキュリティ技術の重要性を認識し、それに対応できる情報セキュリティプロフェッショナルとしての知識を習得する。これにより、情報セキュリティに関連する問題を解決する能力を身に付けることを目標とする。

**■講義分類**

ビジネスICT  
社会人力育成

**■到達目標**

- (1) 情報化社会の現在と未来を理解している
- (2) 情報セキュリティの重要性を説明できる
- (3) 情報セキュリティへの脅威を認識し、対策をとることができる

関連する資格：

情報セキュリティスペシャリスト  
情報セキュリティ管理士

**■授業形態**

講義  
グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

配布レジュメ、指定図書、事前に伝える参考URLなどで十分な予習・復習をしておく。また、授業内で伝える確認項目について復習し、自分なりのやり方でまとめておく。

**■評価方法**

試験60% 平常点40%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 企業や組織が活動する上で情報通信技術を如何に活用しているかを理解し、そこで必要とされる情報セキュリティの基礎的な知識と技術が十分に身についている。
- 評価A (89~80点) : 企業や組織が活動する上で情報通信技術を如何に活用しているかを理解し、そこで必要とされる情報セキュリティの基礎的な知識と技術が身についている。
- 評価B (79~70点) : 企業や組織が活動する上で情報通信技術を如何に活用しているかを理解し、そこで必要とされる情報セキュリティの基礎的な知識と技術がそこそこに身についている。
- 評価C (69~60点) : 企業や組織が活動する上で情報通信技術を如何に活用しているかを理解し、そこで必要とされる情報セキュリティの基礎的な知識と技術がある程度身についている。
- 評価F (59点以下) : 十分な知識がない。出席していない。試験を受けていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

就活等の理由により出席できなかった学生については申請があれば、その回の配布資料に基づいた質疑を行い、講義内容が確実に理解できていると認めるときは、出席扱いをする（病欠等についても同様）

**科目名** 原価分析(Management Accounting)**サブタイトル** 原価の計算方法と分析方法を学ぶ**担当教員** 渡辺 智信**■講義目的**

本講義では、製造業者が損益計算書や貸借対照表といった財務諸表を作成する上で必要となる原価計算（製品原価計算）の基本的な手続を理解すること、および標準原価計算、CVP分析といった管理会計の基本的な計算手法を理解することが目的である。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
社会人育成

**■到達目標**

製品原価計算と管理会計のための計算手法について、基本的な計算ができるようになることが目標である。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

1時間程度の復習（計算練習）

**■評価方法**

講義中に行う課題65%（出席点37.5%を含む）  
授業内中間・期末テスト35%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：製品原価計算、管理会計のための計算手法を網羅的にマスターしている。  
評価A（89～80点）：製品原価計算、管理会計のための計算手法を、概ね網羅的にマスターしている。  
評価B（79～70点）：製品原価計算、管理会計のための計算手法の半分超をマスターしている。  
評価C（69～60点）：製品原価計算、管理会計のための計算手法の半分程度をマスターしている。  
評価F（59点以下）：製品原価計算、管理会計のための計算手法をわずかしかマスターしていない。

**■履修していることが望ましい科目**

初級簿記

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

毎時間の講義の理解度を確保するための小テストを実施する（小テストと合わせて出席をとる）。



**科目名** 現代メディア論I(Contemporary Media Studies I)**サブタイトル** メディアを読む、世界を読む**担当教員** 木村 知義**■講義目的**

感じる空間、考える教室へ！ 世界と時代に向き合う知のシャワーを！  
いま、メディアは劇的な変化の時代を迎えている。

ICT(情報・コミュニケーション技術)のめざましい進化によって、ネットメディアからもたらされる情報が生活のすみずみまでいきわたるようになった。ニュースをはじめ多様な情報を得るツールとして、スマホ端末が生活の一部となり、とりわけ若者世代ではそれが顕著である。従来の活字メディアにおいてもデジタル技術を活用して映像・音声と複合したメディアとしてネットでの展開が著しい。さらに、映像コンテンツのネット配信サービスの広がりによって、従来のテレビ放送の視聴習慣を大きく変える可能性も指摘されはじめた。一方、既存のマスメディアへの信頼が揺らぎ、そのあり方が根底的に問われる状況に直面している。

こうした歴史的ともいうべきメディア環境の「変容」は、単に情報の「送り手」の問題にとどまらない。

「受け手」としての我々のメディアとの向き合い方＝メディアリテラシー(メディアを的確かつ批判的に読み解き、活用していく力)もまた、鋭く試される時代を迎えているというべきである。何が情報で、その背後にある「構造」は何かを見抜き、的確かつ鋭く読み解くことがますます重要になっている。

さらに、これまで情報の受け手としての存在でしかなかった私たちが、SNSをはじめ、メディアを活用して情報の発信者として生きるフィールドも大きく広がっている。

こうした問題意識に立って、メディアの現在と未来を見通して、情報感度と情報の解読能力を高め、問題発見能力、論理的思考力、問題解決能力にいたる、現代社会を生きるうえで必要となる人間としての基礎力の涵養にチャレンジする。

教室では、長年にわたってテレビ・ラジオの放送の現場で教養、文化および報道分野の仕事を重ね、ラジオの朝の「報道番組」のアンカーを務めた経験を生かして、具体事例をおとしてそれぞれが考え、意見発表と議論を重ねながら学びを深め、同時に、コミュニケーション能力を鍛えることで、大学から社会に巣立つ際に不可欠な、新たななりべラリアルーツというべき創造性豊かな知性の獲得をめざす。

**■講義分類**

社会人力育成  
ビジネスICT  
ビジネス環境理解  
グローバルビジネス

**■到達目標**

1. 現在のメディア状況について知見を広げ、メディアと社会に対して深い問題意識を持つことができる。
2. 日々、世界と日本で起きる出来事、ニュースについて、自分の頭で考え、分析し、自分の言葉で語ることができる。
3. 情報を読み解く力、問題発見能力を鍛え、問題解決のための実践的知識を獲得して、社会生活の中で活用できる。
4. 現代社会を生きる上で不可欠なコミュニケーション能力を鍛え、実生活で実践、活用できる。
5. 生きた実践的教養、知性を獲得し、独自の発想と言葉をもって語ることができる。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回教室で次週学ぶための課題を提示し、報道記事やメディア関連資料を配布するので、それらを読み込み、必要なことは調べて、自分の意見を持って授業に臨むこと。配布資料の読了と、課題について図書館などで文献に当り関連事項を調べることが授業の前提となる。

**■評価方法**

学期末の課題レポート：40パーセント、教室での発言、発表などの積極性と毎回の授業終了時のレポート：40パーセント、特別講義についてのミニレポート：20パーセント

なお、学期末のレポート、特別講義にかかわるレポートはMicrosoft OfficeのWordにて作成のこと。また、レポートの評価にあたっては、講義内容をふまえてそれぞれが考えをどう深め、何にどう触発されて自己の思考を発展させたのかを重視し、なによりも自分で考え、自分のことばで語る、各自のオリジナリティを最も重視して評価、採点する。引用を逸脱するWebなどからのコピー・アンド・ペーストによるレポート作成は評価の対象外として不合格とする。またWebや文献からの引用にあたっては必ず典拠を明示すること。

**■評価基準**

評価A+(90点以上)：講義を通して得たメディアにかかわる知見をもとに、現在のメディア状況について考えを深め、発展させて、自分の

ことばで説得力のある論を展開できるところに到達している。同時に、日常の教室でも、メディアのあり方にかかわる問題、課題の解決にむけて独自の視点、考えを積極的に発言、提示することができる。学んだことを、現代のメディア状況に対する、オリジナリティーに富む独自の視点からの問題提起に深化、発展させているかどうか、社会性と説得力のある「論」（の萌芽）に到達しているかどうか、日常の教室での積極性も含め、重視して判断する。

- 評価A (89～80点) : 講義で得た知見をもとに、メディアによって伝えられるニュースや「できごと」に対して、自分の頭で考え、分析し、自分の言葉で語ることができる。またそれをもとに、現在のメディアのあり方に対して自分なりの切り口、発想で考えようと努力していることが伝わってくる。レポートや教室での意見発表で、問題意識の深まりが顕著で、傾聴すべき問題提起が含まれている。
- 評価B (79～70点) : 講義を真摯に聴講し、メディアにかかわる諸問題についての知見の獲得に努力したことがうかがえ、それらをもとに、一定程度の知見の深化、発展への努力が認められる。同時に、メディアのあり方について自分の意見、見識を持って向き合おうと努力している（ことが伝わってくる）水準に到達している。
- 評価C (69～60点) : 講義から最低限の知見の獲得の努力のあとがうかがえるが、そこにとどまっただけで、さらに知見を広げたり、自分の考えを深める努力ではまだ不十分な点が残る。また、学んだことがらを理解し、自分のことばに咀嚼して語るところまで到達できていない。
- 評価F (59点以下) : 講義による知見の獲得への真摯さと、それをもとにした自分の考えを深めることに努力のあとがうかがえない。いうまでもないことだが、Webからのコピー・アンド・ペーストをはじめ、他人の論文や言説の剽窃、切張りによるレポート作成は論外。

### ■履修していることが望ましい科目

日頃から、政治、経済にとどまらず歴史、芸術、文化、さらには自然科学に及び、広く多様な領域に関心を持ち、問題意識を深め、総合的な「全体知」の獲得に努力すること。

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

前週に提示される課題、資料について、各自読み込み、必要な事項については調べ、考えを整理して毎回の授業に臨むことが必要となる。主体的、能動的に事前学習したことを授業でさらに深め、それをふまえて、意見発表、議論を重ね、それらを総合して最後に「まとめ」という、「3部構成」で授業を進める。

また、毎回の授業終了時に、その日学んだことについて短いレポートを提出する。

したがって、事前学習が不可欠となることを十分理解、認識しておくこと。

なお、日々世界と日本で起きるできごとやニュースを具体事例として活用しビビッドな学びの場とするため、全体としては講義計画の内容を網羅、包括することを前提にするが、臨機応変に講義内容を組み変えていくこともありうることをあらかじめ承知、理解しておくこと。

教室では意見発表や討論を組み込んで進めていくので、積極的に発言することを心がけること。

最終課題のレポート、特別講義の「感想レポート」はMicrosoft OfficeのWordで作成のこと。

なお、本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** 現代メディア論II(Contemporary Media Studies II)**サブタイトル** メディアを読む、世界を読む**担当教員** 木村 知義**■講義目的**

春学期の「現代メディア論」をふまえて、さらに問題意識を深めていく。

春学期は、メディア環境の激変ともいえる時代を迎え、いまメディアがどんな問題、課題に直面しているのかを入口にして、情報の「受け手」としての我々に求められる力とはどのようなものかを具体事例にもとづいて考えた。こうした「メディアの現在地」に対する認識を深めるのと同時に、メディアの世界に起きている新たな動き、トレンド、特にデータジャーナリズムの動向と可能性に注目して知見と問題意識を深めた。また、新聞をはじめとする従来からのメディアを通して、情報をどう読み解き、時代や世界についての認識をどう深めるのかを考えた。

それはとりもなおさず、情報の受け手としての我々に必要とされるメディアリテラシーを鍛える営みであった。その核心は「メディアが形作る『現実』を批判的に読み取る力」であり、「建設的な批判力」の獲得、練磨であった。

こうした営為に通底する問題意識は、日々洪水のように押し寄せる情報の波に翻弄されてはならない! ということである。あるいはメディアは「饒舌」なまでに語るが、伝えられるべきことは語られていないのではないかという問題意識でもある。ことばを変えると、「メディアの危機」が語られる現在のメディア状況の前に、世界で、日本で、いま一体何が起きているのか、時代はどこに向かうのかなどをメディアを通して的確に読み解き、認識できる力をどのようにして獲得し、鍛えるのかということでもある。

秋学期は、特に、「客観報道」「調査報道」「メディアの新潮流」といったテーマを重要な柱に据えて、メディアの報道記事や国内、海外のテレビ・ドキュメンタリー番組なども活用しながら、いまメディアに問われるものは何かについて考えたとともに、そこで我々情報の「受け手」に求められる力とはどのようなものかについて、さらに深めていく。

同時に、春学期にも掲げたように、大学という場から社会に巣立つ際に不可欠な情報への感度を高め、情報の解析能力、さらにはそれらにもとづいたコミュニケーション能力を鍛え、現代社会を生きるための新たなリベラルアーツというべき創造的な学びの場をめざす。

合言葉は春学期同様、感じる空間、考える教室! そして、世界と時代に向き合う知のシャワーを! である。

**■講義分類**

社会人力育成  
ビジネスICT  
ビジネス環境理解  
グローバルビジネス

**■到達目標**

1. 現在のメディア状況について知見を広げ、メディアと社会に対して深い問題意識を持つことができる。
2. 日々、世界と日本で起きる出来事、ニュースについて、自分の頭で考え、分析し、自分の言葉で語ることができる。
3. 情報を読み解く力、問題発見能力を鍛え、問題解決のための実践的知識を獲得して、社会生活の中で活用できる。
4. 現代社会を生きる上で不可欠なコミュニケーション能力を鍛え、実生活で実践、活用できる。
5. 生きた実践的教養、知性を獲得し、独自の発想と言葉をもって語ることができる。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

春学期同様、毎回教室で配布する報道記事やメディア関連資料を読み込み、それに対する自分の意見を持って授業に臨むことを義務づける。したがって、資料の読了が授業の前提となる。加えて、毎回、次週に備えての事前学習課題を設定し、随時指名して教室で発表を求める。

**■評価方法**

学期末の課題レポート: 40パーセント、教室での発言、発表などの積極性と毎回の授業終了時のレポート: 40パーセント、特別講義についてのミニレポート: 20パーセント

なお、学期末のレポート、特別講義にかかわるレポートはMicrosoft Officeのwordで作成のこと。

また、レポートの評価にあたっては、講義内容をふまえてそれぞれが考えをどう深め、何にどう触発されて自己の思考を発展させたのかを重視し、なによりも自分で考え、自分のことばで語る、各自のオリジナリティを最も重視して評価、採点する。引用を逸脱するWebなどからのコピー・アンド・ペーストによるレポート作成は評価の対象外として不合格とする。またWebや文献からの引用にあたっては必ず典拠を明示すること。

### ■評価基準

- 評価A+ (90点以上) : 講義を通して得たメディアにかかわる知見をもとに、現在のメディア状況について考えを深め、発展させて、自分のことばで説得力のある論を展開できるところに到達している。特に、「客観報道」がはらむ問題点と「調査報道」の可能性について、授業での学びをもとに問題意識を深め、自分なりの意見を持って語ることができる。同時に、日常の教室でも、メディアのあり方にかかわる問題、課題の解決にむけて独自の視点、考えを積極的に発言、提示することができる。学んだことを、現代のメディア状況に対する、オリジナリティーに富む独自の視点からの問題提起に深化、発展させているかどうか、社会性と説得力のある「論」(の萌芽)に到達しているかどうか、日常の教室での積極性も含め、重視して判断する。
- 評価A (89~80点) : 講義で得た知見をもとに、メディアによって伝えられるニュースや「できごと」に対して、自分の頭で考え、分析し、自分の言葉で語ることができる。またそれをもとに、現在のメディアのあり方に対して自分なりの切り口、発想で考えようと努力していることが伝わってくる。さらに「客観報道」がはらむ問題点と「調査報道」の可能性について、授業での学びをもとに問題意識を深め、自分なりの意見を持って語ることができる。また、レポートや教室での意見発表で、問題意識の深まりが顕著で、傾聴すべき問題提起が含まれている。
- 評価B (79~70点) : 講義を真摯に聴講し、メディアにかかわる諸問題についての知見の獲得に努力したことがうかがえ、それらをもとに、一定程度の知見の深化、発展への努力が認められる。同時に、「客観報道」にかかわる問題点、課題についても理解できていて、「調査報道」の可能性についても一定の理解に達している。総合的に、メディアのあり方について自分の意見、見識を持って向き合おうと努力している(ことが伝わってくる)水準に到達している。
- 評価C (69~60点) : 講義から、最低限の知見の獲得の努力のあととはうかがえるが、そこにとどまっていて、さらに知見を広げたり、自分の考えを深めたりすることが十分とはいえない。特に「客観報道」から「調査報道」へという論理展開について、認識や問題意識の深まりに課題を残している。総じて、学びに対する一定程度の努力のあととはうかがえるが、学んだこととがらを咀嚼して、自らの考えに深めて語るところに到達できていない。
- 評価F (59点以下) : 講義による知見の獲得への真摯さと、それをもとにした自分の考えを深めることに努力のあとがうかがえない。いうまでもないことだが、Webからのコピー・アンド・ペーストをはじめ、他人の論文や言説の剽窃、切張りによるレポート作成は論外。

### ■履修していることが望ましい科目

春学期同様、日頃から、政治、経済にとどまらず歴史、芸術、文化、さらには自然科学に及び、広く多様な領域に関心を持ち、問題意識を深め、総合的な「全体知」の獲得に努力すること。

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない。ただし、就職などの事情については別途本人と話し合って重ねての課題設定などを考慮する場合もある。

### ■留意点

「現代メディア論」に続く秋学期も、概説的なメディア論をめざすものではなく、メディアによって日々伝えられるニュースや放送番組を適宜取り上げ、情報の読み解き方を学び、それを通して時代や世界を見る目を鍛え、同時に現代のメディアのあり方を考えることをめざしていく。

前週に提示される課題、資料について、各自読み込み、必要な事項については調べ、考えを整理して毎回の授業に臨むことが必要となる。

主体的、能動的に事前学習したことを授業でさらに深め、それをふまえて、意見発表、議論を重ね、それらを総合して最後に「まとめ」という、「3部構成」で授業を進める。

また、毎回の授業終了時に、その日学んだことについて短いレポートを提出する。

したがって、事前学習が不可欠となることを十分理解、認識しておくこと。

なお、日々世界と日本で起きているできごとやニュースを具体事例として活用しビビッドな学びの場とするため、全体としては講義計画の内容を網羅、包括することを前提にするが、臨機応変に講義内容を組み変えていくこともありうることをあらかじめ承知、理解しておくこと。

教室では意見発表や討論を組み込んで進めていくので、積極的に発言することを心がけること。

最終課題のレポート、特別講義の「感想レポート」はMicrosoft Officeのwordで作成のこと。

**科目名** 国際経営入門I(Introduction to International Management I)**サブタイトル****担当教員** 飯田 健雄**■講義目的**

国際経営は世界政治・経済に利益を求めてダイナミックに動くトランスナショナルな超国家的組織体です。この組織を外部・内部から探究していきましょう。

**■講義分類**

グローバルビジネス

**■到達目標**

国際経営の基礎を包括的に学んでいく。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

NHKの経済ニュースを見よう。また、日本経済新聞を毎日、読む習慣をつけよう。隔週ごとの項目に関して、指定教科書を事前に読み、講義後、板書された項目を理解していこう。

**■評価方法**

試験（70%）出席（30%） 試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：出席は15回中、ほとんど講義にでている学生。試験は5問中、すべてに解答し、90点以上を取得すること。  
評価A（89～80点）：出席は、15回中、ほとんど講義に出ていた学生。試験は5問中、すべてに解答し、80点以上を取得すること。  
評価B（79～70点）：出席は、15回中、10回以上講義に出ていた学生。試験は5問中、4問すべてに解答し、70点以上を取得すること。  
評価C（69～60点）：出席は15回中、7回以上講義に出ていた学生。試験は5問中、3問すべてに解答し、50点以上を取得すること。  
評価F（59点以下）：出席が15回中、5回以下、および、試験は5問中、3問以下で50点以下の水準にあること。

**■履修していることが望ましい科目**

多国籍企業論IおよびII

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** 国際経営入門Ⅱ(Introduction to International Management II)**サブタイトル****担当教員** 飯田 健雄**■講義目的**

国際経営の基礎を包括的に学んでいく。国際経営とは国内で履行される経営の海外適用・応用という考えをもってもよい。しかし、その海外事業展開には国内競争では想像もできなかった複雑性・困難な問題が待ち受けている。その理由を解き明かしていくのがこの講義の最大の目的である。学生は、経営の基礎をきちんと学んでから履修することを希望する。

**■講義分類**

グローバルビジネス

**■到達目標**

国際経営の各領域や業務部門を理解していく。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前期に学習した教科書の1章から7章までをよく読んでおく。

**■評価方法**

試験（70％）出席（30％） 試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：出席は15回中、ほとんど講義にでている学生。試験は5問中、すべてに解答し、90点以上を取得すること。  
評価A（89～80点）：出席は、15回中、ほとんど講義に出ている学生。試験は5問中、すべてに解答し、80点以上を取得すること。  
評価B（79～70点）：出席は、15回中、10回以上講義に出ている学生。試験は5問中、4問すべてに解答し、70点以上を取得すること。  
評価C（69～60点）：出席は15回中、7回以上講義に出ている学生。試験は5問中、3問すべてに解答し、50点以上を取得すること。  
評価F（59点以下）：出席が15回中、5回以下、および、試験は5問中、3問以下で50点以下の水準にあること。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** 国際公共政策 (International public policy)**サブタイトル** 地球規模の諸課題と、新しいグローバルな公共政策**担当教員** 椎木 哲太郎**■講義目的**

「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）というのは少し極端としても、我々の生活が地球社会全体の在りようと密接に関連していることは、紛れもない事実である。このことは、最近の事例で言えば、エボラ出血熱の深刻化や（シリア）難民問題の例で明らかであろう。国際医療協力によって、伝染病を現地で封じ込め、終焉させない限り、すべての地球市民は生命の危機に晒されることとなる。武力紛争を終結させ、平和構築に取り組みない限り、難民問題の根本的解決にはつながらない。

国際公共政策とは、平和、安全保障、開発、人権、基本的自由といった国際的共通価値、「国際公益」を実現するための政策の総称[高阪章編（2008）『国際公共政策学入門』大阪大学出版会p.1]である。グローバル環境政策、グローバル開発政策のようにグローバルな目標設定を必要とする公共政策を「グローバル公共政策」、単に国家間の共通の目標設定によって成立する公共政策を「国際公共政策」として区別する見方もあるが[庄司真理子・宮脇昇編（2011）『新グローバル公共政策』晃洋書房pp.12-13]、本講座では主として前者に重点を置いて「国際公共政策」の名称の下に一括して把握、考究する。

人々の生命が守られ、生活の質が向上していくためには、国連をはじめとした国際機関、国家やNGOによる国際協力に基づく現制度の活用のみならず、新たな制度の創出も必要となる。そうした取り組みを地球レベルで進めていくためには、グローバルに行動する各主体や政策形成過程の研究にアプローチしなければならず、法学・政治学・経済学の活用が欠かせない。本講座は昨年度まで経済学・経済政策論の知見をベースとした「社会経済政策」として展開されてきた。その成果を引き継ぎながら、さらに法学・政治学・国際関係論等の先端研究、2004年度まで開講されていた「市民活動論」の蓄積も援用して、グローバルな視点からの「総合政策論」の発展を企図している。

「ポスト産業社会」を生きる市民の生活の質を高めていくためにも、成熟した、途上国と共生できる真の意味で「持続可能な社会」を実現するための体系的な社会経済政策が不可欠である。経済社会を完全に制御できるような万能性を持ち合わせている訳ではないが、政策選択を誤った場合には災厄が待ち受けていることは歴史が教えてくれる。これからの企業活動においても、自国のみならず各国政府の時代を先取りした政策展開を予想することが重要となってくるし、途上国市民の生活を犠牲にする企業行動は最早許されない。また、市民生活に直結する労働政策や教育政策は言うに及ばず、社会保障政策や環境政策、さらには文化政策までもが経済と産業のあり方を規定するのが現代である。そうした重層的認識に立ち、広い視野から社会問題解決の学としての活用方法を習得したい。

日本よりも先に「産業化以後」の課題に直面することとなった欧米諸国の社会経済政策から学ぶべき点が多い。制度改革等の社会的イノベーションについて、豊富な知見を提供してくれる。また、日本に続いて高齢化や少子化の進むアジア諸国の取り組みに対しても、現状分析を踏まえた積極的提言が必要となろう。そして何よりも、世界政府が存在しない中で、国際機関、政府、NGO、市民組織等が協力し合って新たな枠組み、制度、国際公共政策を創出し問題解決に取り組んでいることを、自らの問題として、当事者意識を持って臨んで頂きたい。専門能力を伴った人的貢献こそが、地球社会に必要とされているのである。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

先進国、途上国双方を視野に入れた幅広い国際公共政策、社会経済政策を学ぶことによって、成熟した「持続可能な社会」を実現するための総合的な視座を身に付け、高い志を持って地球市民、主権者たる日本国民として連帯し、（国際機関やNGOで仕事をすることも含めて）積極的にグローバルな行動・貢献ができるようになる。企業で働く際にも、国際ルールを遵守し、よき企業市民としてグローバルに活動、社会的貢献を行うことが容易となる。

**■授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 双方向授業

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

初回講義時に配布する講義計画に従って、毎週1時間を目標に必ず予習してくること

**■評価方法**

期末試験の結果（70%）、小テスト・レポート・出席（30%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：幅広い国際公共政策に関する理解を示す試験の成績、通常の取り組みとともに顕著に優れている

- 評価A (89～80点) : 試験の成績、通常の取り組みともに優れている  
評価B (79～70点) : 試験の成績、通常の取り組みともに良い  
評価C (69～60点) : 試験の成績、通常の取り組みともに普通  
評価F (59点以下) : 試験の成績、通常の取り組みともに不十分

### ■履修していることが望ましい科目

マクロ経済学

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

本講座は連続性を重視した積み重ね型の講義であり、最初に重要な点を概説する。これらの理解なくしてその後の学習は困難である。また、長期的に取り組んで頂くための課題を提示する可能性がある。したがって、第3回目までに全く出席しなかった者は原則として履修を許可しない。

「授業の概要」の進行順序は、履修者の状況によっては変更される場合がある。

2008年度以降、2011年度以前の入学生は、「産業社会論入門（経済学入門）」、「経済学基礎」の単位取得者に限り履修することができる。



**科目名** コンピュータ概論(Introduction to Computers)**サブタイトル** コンピュータの仕組みを理解して有効に利用する**担当教員** 中村 有一**■講義目的**

この講義では「コンピュータはどういう機械か」ということを学ぶ。受講者はコンピュータに関する知識を持たないという前提で講義する。講義の狙いは、コンピュータに親しみを持ってもらうこと。コンピュータに関する広告や新聞記事に、怖れず目を通せるようになることを願っている。

講義内容は、コンピュータとは何か、コンピュータの歴史、コンピュータの構成要素などである。最新の話題より基礎的な知識に重点を置く。この知識がないとコンピュータを使えないということではないが、コンピュータを勉強する上で必須となる知識が中心となる。文系・理系とわけると理系っぽい講義の一つであるが、文系の人にも知っておいてほしい内容がほとんどである。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

コンピュータに関する基礎的な用語が理解できていること。コンピュータの仕組みが大まかに把握できていること。2進数などの演算の仕方が理解できていること。

**■授業形態**講義  
演習**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

用語の意味を理解し、ミニテストなどの結果を振り返る。

**■評価方法**

学期末試験70% レポートなど平常点30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : ほぼ完ぺきな理解度と評価

評価A (89~80点) : 上位の評価

評価B (79~70点) : 中位の評価

評価C (69~60点) : 下位の評価

評価F (59点以下) : 不十分な理解度と評価

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

復習してわからない点などがあれば、できるだけ授業中に質問して解決すること。その他、授業と並行して、入門書レベルの本を数冊読むことを勧める。

**科目名** コンピュータネットワーク活用(Utilization of Computer Network)**サブタイトル** インターネットの仕組みを理解し活用する**担当教員** 中村 有一**■講義目的**

ネットワーク技術は、いま世の中でもっとも必要とされる技術の1つである。単に概念を理解するだけでなく、具体的にネットワークにコンピュータを接続し、システムとして機能するようにしなければならない。さらに安定してネットワークを利用するには、セキュリティや信頼性の面にも配慮しておく必要がある。これらのことを、1つ1つ意味を理解しながらできるようにしていくのがこの講義の目的である。  
受講にあたっては、基本的な用語とその概念を理解し、実習を通して、具体的なネットワーク構築に必要な知識を習得する。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

現在主流として使われているネットワーク技術TCP/IPの基礎的な仕組みを理解し、実際にネットワークを利用したり、トラブルに対処したりできるように、知識とスキルを身につける。

**■授業形態**講義  
演習**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

用語の意味を理解し、ミニテストなどの結果を振り返る。

**■評価方法**

学期末試験70% レポートなど平常点30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : ほぼ完ぺきな理解度と評価  
評価A (89~80点) : 上位の評価  
評価B (79~70点) : 中位の評価  
評価C (69~60点) : 下位の評価  
評価F (59点以下) : 不十分な理解度と評価

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

コンピュータを使った演習については、自分で必ず実際に動かしてみること。単に本を読むだけでは得られない知識が得られるはずである。

**科目名** 財務会計I(Principle of Accounting I)**サブタイトル** 財務諸表の基礎理論を学ぶ**担当教員** 清松 敏雄**■講義目的**

本講義は、「ビジネス入門Ⅱ」の講義内容（会計部分）に関する理解を深化させることが目的である。具体的には、財務諸表のうち、損益計算書と貸借対照表（特に資産）に焦点を当て、会計処理の背後にある理論をマスターすることが目的である。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

損益計算書および貸借対照表（特に資産）に関する論点を理解することが目標である。

**■授業形態**

講義が中心（部分的にグループディスカッションを行う）

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ほぼすべての授業後には課題を提出すること。

**■評価方法**

授業内中間テスト 50%  
授業内期末テスト 50%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：損益計算書、貸借対照表（特に資産）に関する基本的な論点を網羅的にマスターしている。  
 評価A（89～80点）：損益計算書、貸借対照表（特に資産）に関する基本的な論点について、概ね網羅的にマスターしている。  
 評価B（79～70点）：損益計算書、貸借対照表（特に資産）に関する入門者レベルの知識を有した上で、基本的な論点について、半数超をマスターしている。  
 評価C（69～60点）：損益計算書、貸借対照表（特に資産）に関する入門者レベルの知識を有した上で、基本的な論点について、半数程度をマスターしている。  
 評価F（59点以下）：損益計算書、貸借対照表（特に資産）に関する入門者レベルの知識を有していない、あるいは、入門者レベルの知識は有しているものの、基本的な論点についてわずかしかがマスターできていない。

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス入門Ⅱ

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義は、秋学期に行われる「財務会計Ⅱ」の事前履修科目である。

**科目名** 財務会計Ⅱ(Principle of Accounting II)**サブタイトル** 財務諸表の基礎理論を学ぶ**担当教員** 清松 敏雄**■講義目的**

本講義は、財務会計Ⅰの内容に関する理解を深化させることが目的である。具体的には、財務諸表のうち、貸借対照表（特に負債・純資産）の会計処理の背後にある理論をマスターすることが目的である。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

貸借対照表（特に負債・純資産）に関する論点を理解することが目標である。

**■授業形態**

講義が中心（部分的にグループディスカッションを行う）

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ほぼすべての授業後には課題を提出すること。

**■評価方法**

授業内中間テスト 50%  
授業内期末テスト 50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 貸借対照表（特に負債・純資産）に関する基本的な論点を網羅的にマスターしている。  
評価A (89~80点) : 貸借対照表（特に負債・純資産）に関する基本的な論点について、概ね網羅的にマスターしている。  
評価B (79~70点) : 貸借対照表（特に負債・純資産）に関する入門者レベルの知識を有した上で、基本的な論点について、半数超をマスターしている。  
評価C (69~60点) : 貸借対照表（特に負債・純資産）に関する入門者レベルの知識を有した上で、基本的な論点について、半数程度をマスターしている。  
評価F (59点以下) : 貸借対照表（特に負債・純資産）に関する入門者レベルの知識を有していない、あるいは、入門者レベルの知識は有しているものの、基本的な論点についてわずかしかがマスターできていない。

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス入門Ⅱ  
初級簿記

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義の履修のためには、「財務会計Ⅰ」の単位を修得済みでなければならない。

**科目名** 財務管理(Financial Management)**サブタイトル** 財務諸表分析と企業価値評価**担当教員** 清松 敏雄**■講義目的**

企業経営に関する情報は多方面から発せられている。これらの情報を収集・分析して企業の実態を明らかにしようとするのが経営分析である。情報のなかでも企業が作成する財務諸表を対象とする分析を財務諸表分析という。本講義では、財務諸表から得られる財務データを中心に、経営分析のために会計情報を適切に読み取るための知識・技法を習得することを目的としている。

また、授業の後半では、会計情報をもとにした企業価値評価について解説する。企業価値評価は複雑な内容ではあるが、その基礎知識を習得することが目的である。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

①財務諸表分析に関する基礎知識を習得すること、②企業価値評価について、3つのアプローチの特徴や計算方法などの基礎知識を習得することが目標である。

**■授業形態**

講義が中心（部分的にグループディスカッションを行う）

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ほぼすべての授業後には課題を提出すること

**■評価方法**

授業内中間テスト 50%

授業内期末テスト 50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 到達目標に示した①・②の内容について、基本的な論点を網羅的にマスターしている。

評価A (89～80点) : 到達目標に示した①・②の内容について、基本的な論点を概ね網羅的にマスターしている。

評価B (79～70点) : 到達目標に示した①・②の内容について、入門者レベルの知識を有した上で、基本的な論点を半数超マスターしている。

評価C (69～60点) : 到達目標に示した①・②の内容について、入門者レベルの知識を有した上で、基本的な論点を半数程度をマスターしている。

評価F (59点以下) : 到達目標に示した①・②の内容について、入門者レベルの知識を有していない、あるいは、入門者レベルの知識は有しているものの、基本的な論点についてわずかしかマスターできていない。

**■履修していることが望ましい科目**

財務会計Ⅰ  
財務会計Ⅱ  
初級簿記

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 産業社会特講(食に関連する商品等からのアプローチ)(Special Lecture on Industry Society)**サブタイトル** 食に関連する商品・サービス・産業からのアプローチ**担当教員** 大風 薫**■講義目的**

コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどの各種流通チャネルで売られている食品は、一体どのように作られているのでしょうか。食品メーカーをはじめとする食関連企業では、マーケッターと呼ばれる人たちが、日々、消費者のニーズを探索し、消費者の心をつかめるような製品を開発するべく努力しています。そして、開発した製品を市場にデビューさせ、持続的な売上や利益を獲得できるようなマーケティング活動をしています。本講では、さまざまな食品および食関連企業の事例を研究し、今後の、日本人の生活や家族形態の変化を見据えた場合に、どのような製品やサービスが求められるかについて、出席者のグループディスカッションを交えて考えていきます。食べ物、メーカー、新製品開発、マーケティングに興味・関心のある学生の参加を期待します。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント

**■到達目標**

- 1.食品メーカーをはじめとする食関連企業が置かれているビジネス環境を理解する
- 2.食品メーカーをはじめとする食関連企業において、どのような新製品開発やマーケティングが行われているのかを理解する
- 3.出席メンバーに対して、自分の意見を述べ、意見交換ができるようになる

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- 1.指定された企業のHPや関連書籍などを読んでくこと
- 2.食品の流通チャネルを観察しておくこと
- 3.新聞、関連雑誌、書籍などを読み、食関連企業が置かれている経営環境についての情報収集をしておくこと

**■評価方法**

出席50%、課題・グループディスカッションへの取り組み40%、最終プレゼンテーション10%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 欠席なし、指定された課題やグループワークについて、講師の指示に基づいて積極的に取り組み、最終プレゼンテーションを実施すること
- 評価A (89~80点) : 13回以上の出席、指定された課題やグループワークについて、講師の指示に基づいて積極的に取り組み、最終プレゼンテーションを実施すること
- 評価B (79~70点) : 12回以上の出席、指定された課題やグループワークについて、講師の指示に基づいて積極的に取り組み、最終プレゼンテーションを実施すること
- 評価C (69~60点) : 12回以上の出席、指定された課題やグループワークについて、講師の指示に基づいた取り組みを行う、最終プレゼンテーションを実施すること
- 評価F (59点以下) : 出席回数が12回未満、指定された課題やプレゼンテーションに取組みない、最終プレゼンテーションに参加しない

**■履修していることが望ましい科目**

マーケティング・リサーチ 等のマーケティング科目

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

特段の理由がない限り、欠席は認めない。  
15分以上の遅刻は欠席とみなす。  
単に出席だけして、課題に取り組みなかつたり、グループディスカッションに参加しなかつたりする場合は、欠席とみなす。

**科目名** 産業社会特講(入門)ビジョンマネジメント論(Special Lecture on Industry Society Introduction to Vision Management)

**サブタイトル** - 職業の歩み方をつくる 12の成長技法 -

**担当教員** 荻阪 哲雄

#### ■講義目的

多摩大生のひとり一人が、プロフェッショナルを目指す【職業の歩み方】をつくるために人間成長へ導く力、【ビジョン・マネジメント 12の成長技法】を、学ぶことが講義の目的である。本講義は、20年間、1万人以上の企業リーダーを支援してきた組織変革コンサルタントが実践のコンサルティング・フィールドで発見した「12の成長技法」の「ツボ」と「コツ」を、初公開する。講義を受講する学生諸氏には、自分の将来へ【職業のビジョン】を、自分自身で考え抜く授業になる。

#### ■講義分類

社会人力育成  
ビジネス創造

#### ■到達目標

- ①講義を傾聴して、自分で考え、人と語り合い、本を読み、刺激を受け、自分を「見つめる力」を磨く
- ②本講義で感じた「学び」を、「自分の言葉」にすることができる
- ③自分の「発見」したことを、進んで「対話」しながら、「現実の行動」へ活かすことができる

#### ■授業形態

講義  
個人ワーク  
ペア討議  
グループディスカッション  
発表  
個人プレゼンテーション

#### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

毎回、火曜日講義終了後から日曜日朝8時までの間に「所感レポート」を指定の指示方法にて提出。

#### ■評価方法

出席、毎回の所感レポート、討議内容、最終提出物を総合的に100%で評価。

1. 講義の出席回数、聴講態度、討議の参画度合い。
2. 毎回、火曜日の講義終了後、次の日曜日、朝8時までに「所感レポート」の提出。
3. 【結束力の強化書】【リーダーの言葉が届かない10の理由】  
どちらかの書籍を読み、「学びの所感」の提出。（Word、A4の1枚、400字以上）
4. 期末、【自分の職業ビジョン】の提出。（Word、PowerPointのどちらかで創る）

#### ■評価基準

評価A+ (90点以上) : 全回出席、討議内容、所感レポート、最終提出物のすべてが、十分に到達目標へ達し優れている。  
 評価A (89~80点) : 全回出席、討議内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達している場合。  
 評価B (79~70点) : 全回出席、討議内容、所感レポート、最終提出物のいずれかが、到達目標へもう一歩の場合。  
 評価C (69~60点) : 全回出席、討議内容、所感レポート、最終提出物が深く考えられていない。今後に期待する場合。  
 評価F (59点以下) : 低い出席率で、所感レポートが出せず、最終アウトプットを提出できない。

#### ■履修していることが望ましい科目

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

#### ■留意点

**科目名** 産業社会特講(激変するグローバル社会と私たち)(Special Lecture on Industry Society Global Society Change Suddenly and us)

**サブタイトル** 激変するグローバル社会と私たち

**担当教員** 荻野 博司

### ■講義目的

異彩な候補が人気を集め、先行きの見通せない米大統領選挙。難民問題に揺れる欧州連合（EU）。めざましい台頭から一転して足元が危うくなった中国。北朝鮮との緊張が高まる韓国。そして、「イスラム国（IS）」によるテロの恐怖。世界の各地で秩序や常識を覆す事態が進んでいる。それは、日本の企業社会にも深刻な影響を及ぼしている。

こうした激動の根底にあるもの、これからの方向について、新聞やウェブなどのメディアも活用しながら探っていく。必要に応じて、履修生の発表をもとに授業を進めることも考えている。それにより情報を主体的に取り込む姿勢を習得することを目指す。とくに米大統領選挙の最終盤での授業であり、選挙戦と併走しながら授業を進めたい。

企業訪問の直前になって新聞を読みだす「にわか勉強」では得られない内容の濃いものとし、それぞれの問題解決力を高める。グローバル化に伴って日本政府や企業が解決を迫られる問題を想定し、どのように取り組んだらいいのかを考える授業となる。また、小論文の書き方も指導したい。

### ■講義分類

### ■到達目標

大きく変わるグローバル社会の現状を理解し、そうしたなかでの自らの判断能力を高める。将来の就職も視野に入れて、幅広い情報を取り込み、分析することに取り組むとともに、その成果を説得力を持って発表する力も涵養する。

具体的には以下のような内容となる。

1. 欧米やアジアの変容について、歴史的な視点で考える。
2. メディアの情報を鵜呑みにするのではなく、その背景も考えて批判的に吸収するメディアリテラシーを得る。
3. 自らの体験を世界の変化と連動させてとらえ直し、産業社会の将来像を考える。
4. 最終的には、自らの考えを積極的に伝える姿勢を確立し、企業社会での活動に役立てる。
5. 自らの視点を盛り込んだ小論文を書く能力を得る。

### ■授業形態

講義に加えて、履修生によるプレゼンテーションの機会を設ける。できるだけ双方向型の講義を心がける。

### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

授業日の新聞をじっくり読み込み、最新の内外の動きを理解してから講義に臨むことが望ましい。

### ■評価方法

授業に取り組む姿勢を評価する。とくに、それぞれに割り振られた報告については、その内容を重視する。

絶対評価として以下のような観点から判定する。

1. 現在起こっている問題の概要を理解しているのか。
2. 国際的な問題を自らの視点から論じられるか。
3. 説得力のある説明ができるか

配分は以下とする。

授業姿勢：50%  
小テスト・レポート：10%  
期末試験：40%

### ■評価基準

評価A+（90点以上）：授業に積極的に関与し、試験においてもトップクラスの成績を上げた者。

評価A（89～80点）：上記に順ずる成績を収めた者。

評価B（79～70点）：授業における関与は物足りないものの、平均レベルの成績を収めた者。

評価C（69～60点）：最低限の知識は得たと認められる者。

評価F（59点以下）：授業への関与度、試験の成績などから判断し、履修したとは認められない者。

### ■履修していることが望ましい科目

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点



**科目名** 産業社会特講(情報化社会とメディア編集)(Special Lecture on Industry Society Information Society and Media Editing)

**サブタイトル** 情報化社会とメディア編集

**担当教員** 橘川 幸夫

**■講義目的**

インターネットが普及し、本格的な情報化社会が到来しました。この社会においては、情報を単に右から左に流したり、コピー&ペーストするだけでは通用しません。自分なりの視座を持ち、自分の想いや志を加えて、情報を他者に渡す必要があります。本講座では、情報化社会の本質的な変化と最前線事例を紹介し、一人一人が情報化社会に主体的に参加するための編集・プロデュースの実践的知識獲得を目指します。

**■講義分類**

ビジネス創造  
社会人力育成

**■到達目標**

自分なりの視座、視点を獲得すること。

**■授業形態**

講義  
ワークショップ

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

事前に情報収集する場合と授業後にレポート提出を求められることがあります。

**■評価方法**

出席 50%、課題 20%、試験 30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 期末試験と課題の得点が90点以上  
評価A (89~80点) : 期末試験と課題の得点が80点以上90点未満  
評価B (79~70点) : 期末試験と課題の得点が70点以上80点未満  
評価C (69~60点) : 期末試験と課題の得点が60点以上70点未満  
評価F (59点以下) : 期末試験と課題の得点が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

特にありません

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

新しい社会のあり方やメディアの構造に関心のある人の受講を期待します。

**科目名** 事業デザイン論I(Business design theory I)**サブタイトル** 事業開発(business creation)の方法論**担当教員** 松本 祐一**■講義目的**

企業、行政、NPO等、様々な組織が行う営みを、「事業」という同じ枠組みでとらえ、その歴史や特徴を理解し、自分で事業をデザインするための方法論を学ぶ。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
ビジネスICT  
地域ビジネス

**■到達目標**

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること

**■授業形態**

講義  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ビジネスプランを立案するための情報収集等

**■評価方法**

授業中提出のワークシート40%、中間レポート20%、最終レポート40%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : すべての授業に出席し、自分でビジネスプランを組み立てることができる。また、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることを網羅していて、独自性がある。
- 評価A (89~80点) : 9割以上出席し、自分でビジネスプランを組み立てることができる。また、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることを網羅している。
- 評価B (79~70点) : 8割以上出席し、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることを網羅している。ビジネスプランももれなく作成できる。
- 評価C (69~60点) : 6割以上出席し、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることにある程度答えられている。
- 評価F (59点以下) : 5割以上の出席率で、それぞれの授業でのアウトプットが要求されていることに答えられていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

10分以上の遅刻は欠席となります。

**科目名** 事業デザイン論II(Business design theory II)**サブタイトル****担当教員** 手塚 貞治**■講義目的**

ビジネスモデルを考えるフレームワークを解説したうえで、ビジネスモデルの各種パターンを事例とともに解説する。最後は、演習に準じた形で実際にグループワークを通じて自分たちのビジネスモデル案を構築してもらう。

**■講義分類**

ビジネス創造/ビジネスマネジメント

**■到達目標**

自分で事業アイデアを考え、それをビジネスモデルキャンバス等のフォーマットを活用してレポートにとりまとめられるようになる。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
その他(レポート作成)

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には前回講義の内容を復習しておくこと。特に取り上げた事例についてはネット等で確認しておくことが望ましい。

**■評価方法**

授業点(毎回のレポート評価)80% + 演習点(グループワーク取り組み・発表)20%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 授業内容を十分理解し、秀逸な独自のビジネスモデル案を考えることができる。  
 評価A (89~80点) : 授業内容を十分理解し、A+までは到達していないものの、自分なりのビジネスモデル案を考えることができる。  
 評価B (79~70点) : 自分なりのビジネスモデル案を作成することまでは難しいものの、授業内容は理解している。  
 評価C (69~60点) : 一部不十分な点もあるものの、授業内容を理解している。  
 評価F (59点以下) : 授業内容を理解できていない。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・授業中の私語や携帯、飲食等他人に迷惑をかける行為は厳禁。即刻退出してもらう。
- ・テストは実施せず、授業内のレポート・演習のみで評価を行うため、2/3以上の出席が必要である。
- ・後半では演習も予定しているため、定員50名で想定している。大幅に定員を上回る場合は、小テストによる選抜も検討する。また参加人数や参加者の理解度に応じて、演習の進め方は変更の可能性もある。
- ・演習にてビジネスモデル案を検討するなど、相当の負荷がかかるため、起業家志望者やビジネスに強い関心のある者を歓迎する。

**科目名** 事業構想論Ⅰ(Business concept theory Ⅰ)**サブタイトル** 創造型問題解決の事例紹介**担当教員** 中庭 光彦、杉田 文章、松本 祐一、小林 英夫、バートル**■講義目的**

多摩大経営情報学部事業構想学科でいう「事業構想」とは、これまでの方法を問い直して新たなしくみをつくり、それを事業として実現する「創造的問題解決」を意味します。

事業構想というと、大企業の成功物語をイメージするかもしれませんが、そんなことはありません。中小企業が新たな目的にチャレンジする例もありますし、ある日個人が起業することもあるでしょう。あるいは、社員が日常の仕事に新しい工夫を持ち込む、さらには人生の分岐点で自分の新たな生き方を発見し実践する—これらすべてが事業構想と呼べるものです。

事業構想と一口に言っても、そこには実に多様な仕事と生き方の物語があり、志ある主人公が存在するので

す。そこで、本授業では、事業構想学科の専任教員がこのような主人公と本学OBをゲストとして招き、その現場の活動の姿を紹介します。

学生のみなさんは、この科目を入りに、事業構想の多様なイメージを描いてください。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

グローバルビジネス

地域ビジネス

**■到達目標**

毎回異なるゲストの話を聞き、事業構想にとって重要なポイントを自分なりに考えることができるようになる。

**■授業形態**

講義

双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前회에話された内容を整理してくる。

**■評価方法**

毎回ミニレポートを提出してもらおう。ミニレポートを4段階評価し、出席点もとる。

最終レポートも提出してもらおう。但し最終レポートを出さないと、ミニレポート、出席が一定レベルに達していても単位取得はできない。

出席 40%

ミニレポート 30%

最終レポート 30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 事業構想について特筆すべき説明をすることができる。

評価A (89~80点) : 事業構想についてよく説明することができる。

評価B (79~70点) : 事業構想について一定の説明をすることができる。

評価C (69~60点) : 事業構想について拙い断片的な説明はできる。

評価F (59点以下) : 事業構想についてほとんど説明することができない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 事業構想論II(Business concept theory II)**サブタイトル** 創造型問題解決の事例紹介**担当教員** 中庭 光彦、杉田 文章、松本 祐一、小林 英夫、バートル**■講義目的**

多摩大経営情報学部事業構想学科でいう「事業構想」とは、これまでの方法を問い直して新たなしくみをつくり、それを事業として実現する「創造的問題解決」を意味します。

事業構想というと、大企業の成功物語をイメージするかもしれませんが、そんなことはありません。中小企業が新たな目的にチャレンジする例もありますし、ある日個人が起業することもあるでしょう。あるいは、社員が日常の仕事に新しい工夫を持ち込む、さらには人生の分岐点で自分の新たな生き方を発見し実践する—これらすべてが事業構想と呼べるものです。

事業構想と一口に言っても、そこには実に多様な仕事と生き方の物語があり、志ある主人公が存在するので

す。そこで、本授業では、事業構想学科の専任教員がこのような主人公と本学OBをゲストとして招き、その現場の活動の姿を紹介します。

学生のみなさんは、この科目を入りに、事業構想の多様なイメージを描いてください。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

グローバルビジネス

地域ビジネス

**■到達目標**

毎回異なるゲストの話聞き、事業構想にとって重要なポイントを自分なりに考えることができるようになる。

**■授業形態**

講義

双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回到話された内容を整理してくる。

**■評価方法**

毎回ミニレポートを提出してもらう。ミニレポートを4段階評価し、出席点もとる。

最終レポートも提出してもらう。但し最終レポートを出さないと、ミニレポート、出席が一定レベルに達していても単位取得はできない。

出席40%

ミニレポート30%

最終レポート30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 事業構想について特筆すべき説明をすることができる。

評価A (89~80点) : 事業構想についてよく説明することができる。

評価B (79~70点) : 事業構想について一定の説明をすることができる。

評価C (69~60点) : 事業構想について拙いが断片的な説明はできる。

評価F (59点以下) : 事業構想についてほとんど説明をすることができない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 自然科学概論II(Introduction to Natural Science II)**サブタイトル** 暮らしの中の生命科学**担当教員** 松山 伸一**■講義目的**

自然科学の一分野である生命科学の基礎を学び、日常生活や社会との密接な関わりを通して、「科学の眼」と「持続的な好奇心」を養う。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

日常生活の中で生命科学がいかに多くの事柄と結びついているのを知り、学んだ知識が机上にとどまることなく、実生活の中で生かせるようになる。また、世間にあふれる玉石混濁の情報の中から有益なものを選択できる基礎力を身につけ、恒常的に科学リテラシーの向上をはかることができる。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

高校「生物」の教科書や生物資料集を一読して講義に臨むこと。

**■評価方法**

出席（25%）+毎回の課題（25%）+授業内期末試験（50%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：目標を超えた到達度を示し、きわめて優れた成績

評価A（89～80点）：目標を十分に達成し、優れた成績

評価B（79～70点）：目標をおおむね達成し、十分と認められる成績

評価C（69～60点）：目標をかるうじて達成し、最低限度を満たした成績

評価F（59点以下）：目標を達成しておらず、合格と認められる最低限度を満たしていない成績

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

私語などの迷惑行為者は退室させる。

15分以上の遅刻者は原則入室させない。

**科目名** 実践的事業経営特講(Practical Business Management)**サブタイトル** 業界研究**担当教員** 村山 貞幸**■講義目的**

日本のさまざまなビジネス業界は、業界固有の課題と日々戦いながら、あらゆる問題解決に挑んでいる。講義では、各業界からゲストをお招きし、その生々しい状況をご説明いただく。リアルな最前線事例を聴くことを通じて、さまざまな業界を具体的に理解することを目的とする。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成

**■到達目標**

- (1) 業界の現状、将来性を理解する。
- (2) 自分のキャリアと結びつけて、業界を理解する。

**■授業形態**

講義  
パネルディスカッション  
質疑応答

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

解説された業界における特徴的企業を調査する。

**■評価方法**

出席 50% 試験 50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 業界を完全に理解し、自分のキャリアに適切に結び付けられている。  
 評価A (89~80点) : 業界を8割理解し、自分のキャリアに適切に結び付けられている。  
 評価B (79~70点) : 業界を7割理解し、自分のキャリアに適切に結び付けられている。  
 評価C (69~60点) : 業界を6割理解し、自分のキャリアに適切に結び付けられている。  
 評価F (59点以下) : 業界の理解が6割を下回っている。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- (1) 外部講師を意識した行動をとること。マナーに反する学生は退室させることがある。
- (2) 授業中の私語、携帯電話、飲食等授業を妨げる行為は禁止する。
- (3) 遅刻は認めない。
- (4) 講師のご都合により、日程、業界が変更されることがある。

**科目名** 社会心理(Social Psychology)**サブタイトル****担当教員** 良峯 徳和**■講義目的**

人間は「社会的動物である」と言われるように、私たちの意識や行動は、家族、学校、職場、地域、国など、さまざまな集団・社会を抜きにしては考えられない。この授業では、個人と社会の関わり合いについて実証的に研究する社会心理学の成果を、具体的な事例や有名な実験などを紹介しつつ、社会的な存在としての人間の行動や認知、他者と共に生活することの意味やその影響について、理解を深める。

**■講義分類**社会人力育成  
顧客理解**■到達目標**

- ①社会心理学の方法論や実証研究の成果について理解し、基本的な知識を身に付けること。
- ②自分の考え方や周りの人達の生き方や行動が、さまざまな社会的要因の影響を受けていることを理解できるようになる。
- ③この授業で学んだことを、よりよい自分の生き方、他者への理解、対人関係や集団、社会のなかでの活動のあり方に活かせるようにする。

**■授業形態**講義  
グループワーク**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業の開始時に毎回内容理解を確認する小テストを行う。その準備として、1時間程度の復習を行ってこること。

**■評価方法**

出席 20%, 小テストおよび期末試験 50%, レポート 30%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 社会心理学に関する理論をきわめてよく理解しており、具体的な状況でそれを応用することができる。また授業への取り組みがきわめて熱心で、積極的である。
- 評価A (89~80点) : 社会心理学に関する理論をよく理解しており、授業への取り組みが熱心で、積極的である。
- 評価B (79~70点) : 社会心理学に関する理論をおおまかに理解しており、授業への取り組みもまじめである。
- 評価C (69~60点) : 社会心理学に関する基本的な知識を有している。または授業への取り組みがやや不足している。
- 評価F (59点以下) : 社会心理学に関する基本的な知識も理解も有していない。または授業への取り組みが不真面目である。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、小テスト実施後の1週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、授業内で説明する。



**科目名** 社会調査士実習Ⅰ・Ⅱ(practical training for social ResearcherⅠ・Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 酒井 麻衣子**■講義目的**

社会調査を適切に用いるためには、問題の設定の仕方、調査設計、調査方法、分析方法、そして結果の解釈などの様々な専門知識を学習する必要がある。ただし、これらの知識を覚えたとしても、必ずしも効果的な調査が行えるとは限らない。これは、社会調査が現実の社会の問題を取り扱うものであり、基本を踏まえつつ柔軟に応用する力が必要となるためである。社会調査を学ぶ上で欠かすことのできない、実際にそれらの知識を関連させ、実際に調査しとめるといふ調査に関する総合力を身につけることを目的とする。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成  
 ビジネスICT

**■到達目標**

社会調査に関連する知識を総合的に活用し、実際に社会調査の一連の流れを実施できるようになる。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

社会調査の一連の流れの中で随時必要となる情報収集、調査テーマに関連する基礎的知識の修得等

**■評価方法**

実習での取り組み状況50%、グループによる論文および個人レポート50%  
 以下の項目について社会調査を実行する上で必要となるスキルが身についたかどうかの到達水準に基づいて評価する。

- (1)問題意識を調査可能な形に具体化し、適切な調査設計ができたか
- (2)調査設計に従い、適切な実査が行えたか
- (3)実査の結果を適切に分析し、解釈することができたか
- (4)グループでの取り組みに積極的に参加し、他のメンバーと適切な協力体制を築くことができたか

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 顕著にすぐれた水準に達している  
 評価A (89~80点) : 到達すべき水準を十分に超えている  
 評価B (79~70点) : 到達すべき水準に達している  
 評価C (69~60点) : 十分とは言えないが最低限の水準を満たしている  
 評価F (59点以下) : 本講義で到達すべき水準に達していない

**■履修していることが望ましい科目**

以下の「社会調査士」資格認定科目のうち、各分野について1科目以上を事前に履修していることを強く推奨する。

A分野：リサーチ入門  
 B分野：マーケティングリサーチ  
 C分野：マーケティング・データ分析Ⅰ、データサイエンスⅠ  
 D分野：データサイエンスⅡ、データサイエンスⅢ  
 E分野：マーケティング・データ分析Ⅱ、データサイエンスⅣ

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・本講義を履修する場合は、IおよびIIを両方履修すること(片方のみの履修はできない)
- ・社会調査士認定科目(G分野)に該当するため、資格を取得したい場合には、必ず履修すること。
- ・実習を効果的に行うため、他の社会調査士資格認定科目を修得し、ある程度の事前知識があることが望ましい。
- ・調査の実施にあたっては、講義時間外の活動が必要となる。

注1) 選抜試験について

本科目は、実習科目のため、履修上限人数を20名とする。そのため、履修に際しては、選抜試験を実施し、その成績によって受講者を選抜する。選抜方法などについては、随時発表するので、T-NEXT掲示板などを確認すること。

注2) 社会調査士については、一般社団法人 社会調査協会(<http://jasr.or.jp/>)を参照のこと。

**科目名** 消費心理(Consumer Psychology)**サブタイトル** 消費者理解とそれを仕掛ける企業側の心理学**担当教員** 浜田 正幸**■講義目的**

産業社会の最前線の事例から学ぶ。

- ① 消費者行動の理解の一助として心理学が有効であることを学ぶ
- ② 企業は消費者に対して、心理学を駆使して、購買をプロモートしていることを学ぶ
- ③ 心理学が、ビジネスの世界で多様に織り込まれていることを理解する

**■講義分類**

顧客理解

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

- ① 消費心理に関する一般的テーマや理論を把握する
- ② 消費心理を把握する方法を身につける
- ③ 消費心理や消費行動の分析方法を知る

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回レポートを課す

**■評価方法**

取組み姿勢 30%、達成意欲 30%、出席 20%、試験 20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : ラーニングゴールに十分に達していること  
 評価A (89~80点) : ラーニング・ゴールが概ね理解できている  
 評価B (79~70点) : ラーニング・ゴールにやや到達しているが、十分とはいえない。  
 評価C (69~60点) : ラーニング・ゴールに一部は到達しているが、その他は理解不足。  
 評価F (59点以下) : 消費心理を理解できていない。授業の内容を把握していない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 情報探索法 (Information Searching Methods)**サブタイトル** アウトプット重視の情報探索法**担当教員** 泉澤 恭子**■講義目的**

溢れる情報の中から、信頼性の高いビジネス情報を選び、加工してプレゼンテーションする技術を身につける。

**■講義分類**

ビジネスICT  
社会人力

**■到達目標**

1. 信頼性の高いビジネス情報源を知る。
2. インターネットおよびデータベースの検索技術を身につける。
3. 信頼性の高い情報を選びとるための実践的知識を身につける。
4. パワーポイント資料を作成する技術を身につける。
5. プレゼンテーション資料づくりに必要な情報倫理に関する実践的知識を身につける。
6. パワーポイントを用いたプレゼンテーションができるようになる。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション  
グループワーク  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ほとんどの講義において、授業中に検索等の実習を行い、検索結果等を提出してもらいます。これらの実習で探索した情報をもとにプレゼンテーション資料（パワーポイント資料）を作成した上で、期末試験で発表してもらいます。欠席したり授業時間内に課題提出できない場合には、宿題とします。

**■評価方法**

- ・ 出席および実習課題 50%、試験 40%、授業貢献等 10%
- ・ ただし、授業態度が著しく悪く、講義全体に悪影響を及ぼしていると講師が判断する場合には不合格とする。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 出席および実習課題提出内容が一定の条件を満たしており、かつ、試験結果が特に優良である。授業への貢献も加味して総合評価する。
- 評価A (89~80点) : 出席および実習課題提出内容が一定の条件を満たしており、かつ、試験結果が優良である。授業への貢献も加味して総合評価する。
- 評価B (79~70点) : 出席および実習課題提出内容が一定の条件を満たしており、かつ、試験結果が良い。授業への貢献も加味して総合評価する。
- 評価C (69~60点) : 出席および実習課題、試験結果、授業への貢献の総合評価が一定の条件を満たしている。
- 評価F (59点以下) : ・ 出席および実習課題、試験結果、授業貢献の総合評価が一定の条件を満たしていない。  
・ 授業への出席率や授業態度が著しく悪く、授業全体に悪影響を及ぼしていると講師が判断する場合。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

受講者の習得状況等に応じて講義の内容やスケジュールを適宜変更する。

**科目名** 情報と職業 (Information and Profession)

サブタイトル

担当教員 齋藤 S. 裕美

**■講義目的**

本講義は、情報と職業についての関わり、情報に関係する職業人(情報処理技術者、ネットワーク技術者など)の役割と責任について理解することを目的とする。

現代の社会において、IT(情報技術)は必要不可欠な存在である。情報技術の進展によって生まれた産業の特徴や情報システムが一般社会生活のなかでどのように使われているかなど、情報技術の現状を把握するとともに、私たちの生活や既存の産業が受けた情報化の影響などについても学習する。

また、情報システムを構築し運用する上で、情報処理技術者やネットワーク技術者が果たすべき役割や責任について理解し、情報技術の専門家に求められる勤労観や職業観を身につけることも目的のひとつである。

さらに本講義によって、将来、情報に関係する職業人を目指す高校生に対して、適切な教育指導が出来るようになることを目指す。

**■講義分類**

ビジネス環境理解

社会人力育成

**■到達目標**

情報技術が産業社会や人々の生活に対して及ぼした影響を理解し、情報技術の専門家に求められる倫理観や職業観を身につけることをめざす。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講を受講するにあたり、前講までの資料をよく読んでおくこと。

講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。

**■評価方法**

期末試験45%、学期中のレポートや課題40%、出席状況15%を基本とし、授業への参加態度などを加味して総合的に評価する。

レポートや期末試験は、次の4点を中心に評価する。

- (1)情報社会に至る産業社会の変遷を理解しているか。
- (2)情報社会における人々の勤労観や職業観を理解しているか。
- (3)情報産業の特徴や技術動向を理解しているか。
- (4)情報産業に関わる職業人としての役割や責任を理解し、必要な倫理観を身につけているか。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分理解し、評価方法に示した4つの観点について、その内容を関連づけ、自分の考察を含めてそれらの内容を的確に説明できる。

評価A (89~80点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した4つの観点について、その内容を個別に、自分の考察を含めてそれらの内容を説明できる。

評価B (79~70点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した4つの観点について、いずれか2つ以上の内容を説明できる。

評価C (69~60点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した4つの観点について、いずれか1つ以上の内容を説明できる。

評価F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

特になし。

**科目名** 情報法(Information Law)**サブタイトル** 知的財産法**担当教員** 石岡 克俊**■講義目的**

この講義では、「知的財産」に関わる法制度全般を説明していきます。一口に「知的財産」と言っても、しばしば耳にするわりに、それがどんなものであるか案外知られていません。ましてや、何故これらを保護しなければならないのか、また、これらの保護のためにどのような仕組みが用意されているのかに至っては、ほとんど初耳でしょう。この講義では、知的財産に関する法制度の理解を深めていくことを目的としています。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
グローバルビジネス  
ビジネスICT

**■到達目標**

この講義の到達目標としては、しばしば話題にのぼる知的財産の問題について自ら考えていくことができるようになることです。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

事前に配布する講義資料（原則A4サイズ1枚）に目を通しておき、ポイントや疑問点などを確認しておくこと（正味1時間程度）。

**■評価方法**

期末に実施する試験において評価を行う（100パーセント）。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：本講義で取り扱われた内容について、ほとんどすべて正確に理解している。  
評価A（89～80点）：本講義で取り扱われた内容について、概ね正確に理解している。  
評価B（79～70点）：本講義で取り扱われた内容について、ほとんど理解している。  
評価C（69～60点）：本講義で取り扱われた内容について、概ね理解している。  
評価F（59点以下）：本講義で取り扱われた内容について、あまり理解していない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 情報倫理(Information Ethics)**サブタイトル****担当教員** 齋藤 S.裕美**■講義目的**

本講義は、情報通信技術と人々の倫理観についての関わり、社会生活における情報の価値、情報通信技術の役割や影響力などを理解し、情報社会における望ましい態度やあり方、情報倫理の必要性を理解することを目的とする。

現代の社会において、情報通信技術は必要不可欠な存在である。情報通信技術の進展によって生じた諸問題について把握するとともに、それらを解決するひとつの緒として情報倫理という考え方やその必要性について考える。

また、情報関連の法律や規制等についても学習する。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成

**■到達目標**

情報通信技術が社会や人々の生活に対して及ぼした影響を理解し、情報社会における様々な問題について思考する力と倫理的態度を身につけることをめざす。

**■授業形態**

講義  
グループディカッション  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講を受講するにあたり、前講までの資料をよく読んでおくこと。  
講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。

**■評価方法**

期末試験50%、学期中のレポートや課題50%を基本とし、授業への参加態度などを加味して総合的に評価する。  
レポートや期末試験は、次の6点を中心に評価する。

- (1)個人情報やプライバシーに関する問題や法制度について理解しているか。
- (2)知的財産制度や著作権制度、それらに関する問題について理解しているか。
- (3)インターネットを活用したコミュニケーションのあり方とその問題点について理解しているか。
- (4)情報社会での企業システムとデータ活用の様相とその問題点について理解しているか。
- (5)情報社会でのセキュリティのあり方とセキュリティ技術について理解しているか。
- (6)情報社会での個人の責任を理解し、必要な倫理観を身につけているか。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分理解し、評価方法に示した (1) ~ (5) の観点について、その内容を関連づけ、自分の考察を含めてそれらの内容を的確に説明できる。また、(6) の観点について十分な資質を備えていることがわかる。

評価A (89~80点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した (1) ~ (5) の観点について、その内容を個別に、自分の考察を含めてそれらの内容を説明できる。また、(6) の観点について十分な資質を備えていることがわかる。

評価B (79~70点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した (1) ~ (5) の観点について、いずれか3つ以上について自分の考察を含めてその内容を説明できる。また、(6) の観点について十分な資質を備えていることがわかる。

評価C (69~60点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した (1) ~ (5) の観点について、いずれか2つ以上の内容を説明できる。また、(6) の観点について十分な資質を備えていることがわかる。

評価F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

著作権検定、個人情報保護法検定の内容に一部対応。

**科目名** 初級簿記(Introductory Level Bookkeeping)**サブタイトル** 簿記入門**担当教員** 金子 邦博**■講義目的**

本講義は、産業社会において企業が行うさまざまな取引を会計情報として記録するための技法である「簿記」の基本原理を習得し、日本商工会議所が主催する簿記検定試験の3級(日商簿記3級)に合格できる知識と能力を習得することを目的とする。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

企業の経済活動を会計情報として記録するための技法である「複式簿記」の仕組みについての基礎的な知識を習得すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義を受講するにあたっては、毎回の講義で学習した内容の理解度を確認するため、配付した宿題を解いておくことが必要です。次回の講義のなかで、前回講義の理解度を問うミニテストを行います。

また、次回講義の内容を把握するため、テキストの該当部分を事前に一読しておくことも必要です。講義内容の復習と次回講義の準備には概ね1時間程度の取り組みが必要です。

**■評価方法**

期末試験の成績により評価する(100%)。なお、期末試験の成績が80点に満たない者は、期末試験の成績にミニテストの成績を加算して成績判定を行う。

ただし、講義に際して教員の指示に従わない等の受講態度に問題があった者に対しては、成績が良好であっても単位は付与しない。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上)	: 期末試験の得点が90点以上
評価A (89~80点)	: 期末試験の得点が80点以上90点未満
評価B (79~70点)	: 期末試験のミニテストの合計得点が70点以上
評価C (69~60点)	: 期末試験とミニテストの合計得点が60点以上70点未満
評価F (59点以下)	: 期末試験とミニテストの合計得点が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

この講義の受講に際して、特定の科目の単位取得は条件とはしないが、講義の受講にあたっては、「ビジネス入門Ⅱ」の科目が履修済みであることが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

1.この科目の単位取得のためには、宿題及び講義内容の復習を通じて知識の定着を図り、問題演習の積み重ねにより会計処理能力の向上をさせるなどの自主的な学習が必要である。

2.講義の際には、教科書のほかに、必ず「電卓」を持参すること。

なお、「電卓」に関しては、初回講義のなかで、選び方などを説明するので、初回講義前に事前に用意しておく必要はない。

3.講義の理解度合いを各自で確認してもらうことを目的に、講義では毎回ミニテストを実施する。

4.講義の資料については、TNEXTの授業資料に掲示する。

5.本講義は、半期(15回の講義)で完結する講義を春学期と秋学期の年2回開講する。内容は全く同じなのでどの学期に受講しても構わないが、この科目の発展科目である「中級簿記」は秋学期にしか開講しないので、連続して受講を希望する場合、「初級簿記」は春学期に履修することが望ましい。

6.春学期には、この科目と連動する「簿記演習」が開講されます。日商簿記検定に合格するためには、数多くの問題演習が必要ですので、簿記検定の合格を目指す人は、この科目と合わせて受講してください。



**科目名** 女性のためのキャリアデザイン (Career Design for Women)**サブタイトル** 女性の幸せな生き方を考える**担当教員** 住吉 美紀**■講義目的**

今は女性も一生仕事を持ち、働く時代です。男女共に生涯就職も減り、転職は普通のこと、また定年後の充実した生き方も問われます。そんな中、早いうちからキャリアデザインについて主体的に考える手法を学び、癖をつけることは、社会人基礎力になるだけでなく、幸せを設計する上で一生涯に立ちます。この講義では、講師自らの経験とネットワークを利用した最前線事例に触れながら、実践的知識獲得を目指す。一人一人が社会に出て仕事をしてみたいというクリエイティブな気持ちを育て、さらに、今後人生に迷ったときに、人生を舵取りしていけるノウハウや考え方を身につけるものです。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

キャリアはそれぞれが自分でデザインしていくことの出来るものであることを理解する。自らのキャリアをデザインしていける視点、考え方の基礎を身につける。主体的な物の見方の修得。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 場合によってはゲストスピーカーを招いて話を聞く。

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回授業を復習する。課題に応じて自分と真剣に向き合うことが求められる。学んだことを日常の中で実践に移すこと。

**■評価方法**

出席30%、エッセイ・質問票などの課題や授業内外のミニレポート50%、インタビューとプレゼンテーション20%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 授業内容について十分理解し、それらに関連づけて、自分の考えをプラスし、的確に、さらに創造的に、その内容を表現し、伝えることが出来る。  
 評価A (89~80点) : A+までは到達しないが、個々のテーマに付いて十分理解し、的確に内容を伝えることが出来る。  
 評価B (79~70点) : 内容把握は的確だが、その内容を十分に伝えるまでは到達していない。  
 評価C (69~60点) : 学んだ内容について、十分には理解できていない。  
 評価F (59点以下) : 著しく理解が不十分である。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 数字力で語る(How Basic Mathematics apply to the World)**サブタイトル** グローバル時代に必須のリテラシー**担当教員** 深沢 真太郎**■講義目的**

英語と同じように、「数字」も世界共通の言語である。  
ゆえに、数字で語れないビジネスマンはこれからのグローバル社会で生きていくことはできません。  
この科目は、就職活動就に通るための数学的知識だけを学ぶのではなく、社会で生きていくために必要な数的思考とは何かを基礎から学びます。  
「数字に強い人」を育成するためのベース作りに位置づけることができる、極めて重要な教育テーマである。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

- (1) 四則演算の意味や操作術など根本から理解し、数字=ビジネスでの言語と捉える
- (2) 良いのか悪いのか、高いのか安いのか、数的根拠をもって評価できる
- (3) 数字やグラフを用いて、説得力ある説明ができる
- (4) 就職活動時に受験するであろう基礎能力検査の対策を兼ねる

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回講義の復習

**■評価方法**

期末試験 50%  
レポート 20%  
出席 30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 一般的なビジネスパーソンレベルにある認められる  
評価A (89~80点) : 数的思考ならびに数的表現力に優れると認められる  
評価B (79~70点) : 就職活動に影響が出ないレベルと認められる  
評価C (69~60点) : 及第点。ただし、今後の自己研鑽が不可欠  
評価F (59点以下) : 不十分。

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス数学基礎

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

私語や携帯電話などマナーに関しては厳しく指導をする。  
他の学生に配慮ができない言動をする者は退出させることもあるので注意すること。  
また、レポートや試験は講義中の講師の発言やアドバイスから出題されることが多い。  
毎回出席することが極めて重要である。  
本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** スポーツI・II(Sports I・II)**サブタイトル** ウォーキング、ボディワーク、シェイプアップフィットネス、フットサル、バドミントン、ゴルフ等**担当教員** 梅澤 佳子、大澤 拓也、杉田 文章、福角有敏**■講義目的**

スポーツは文化です。スポーツをたしなむこと、スポーツを知ることは、自分や社会を健康にし、また幸福にするのに有益なことです。スポーツが幸福につながるのだと仮定するならば、それは、人を幸せにするビジネスともつながることでしょう。そこで、多摩大学では、以下のような目的で、「スポーツ」を設置し、学生諸君の履修を促しています。

- (1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。
  - (2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力（「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります）を身につけること。
  - (3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。
  - (4) スポーツの価値についての知見を深めること
- 多摩大学は、ビジネスパーソンを育てる大学ですが、「スポーツ」も、よき社会人、よき市民として生きていくための最も基本的な要素を形成するものとして、位置づけられています。授業として、種目設定はもちろんありますが、その種目が上達すればよい、ということではありません。この授業プログラムを通じて、上の(1)～(4)のような目的が達成されることにこそ重要であることを理解してもらいたいと願っています。また、スポーツは、現代社会における、重要なビジネスコンテンツのひとつにもなっています。その意味でも、スポーツへの知見を深めておくことは有益であると考えます。

詳細は、学生諸君に与えられた本学IDアカウントからのログインにより閲覧できるGoogleSiteに掲載し、その閲覧方法についてT-NEXTによって通知するので、それに従ってください。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成

**■到達目標**

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが、講義としての目標であり、学生一人一人の状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となる。

**■授業形態**

講義  
 実技  
 グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

スポーツのプレイヤーとしてのスキル開発もさることながら、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解することが重要なので、スポーツに関する文献や、報道、その他の情報を十分に蒐集し、理解し、個人の資質向上に結び付ける学修内容を想起しておいてもらいたい。

**■評価方法**

以下による総合評価とする。※各担当教員毎に配分は異なるので指示をあおぐこと

- (1) 授業へのコミットの深度、参加態度
- (2) 講義目的である以下3点を修得したい度合いを評価する。
  - ① スキルの修得
  - ② 知識の修得
  - ③ 自分や他者に資する①②のマネジメント能力

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 技能の開発が十分行われたと同時に、その社会的意義や、有効性について深く理解し、将来自分のキャリア中やレジャーライフを通じてこれを十分生かすことができるまでになったと認められること。

評価A (89～80点) : 技能の開発が十分行われたと同時に、その社会的意義や、有効性について深く理解したと認められること。

評価B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われ、今後の取り組みによってこれが人生にわたって活かされる資質が形成されたと認められること。

評価C (69～60点) : 講義における種目やスポーツについての体験をし、一定の経験値とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。

評価F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

### ■履修していることが望ましい科目

特にない。

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

- ① 高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してもらいたい。
- ② 各講義において、指示が異なるので、これによく留意して受講してもらいたい。
- ③ 原則として、受講希望者は、学期の第1講の日時に、指定された教室に集合しなければならない。(T-NEXTにて指示する)

**科目名** スポーツと健康(Sports and Health)**サブタイトル****担当教員** 梅澤 佳子**■講義目的**

運動やスポーツを日常生活の中で習慣化し健康を維持・向上させていくことは、学生の皆さんが社会に貢献していくためにも、皆さん自身の人生を豊かに過ごすためにも重要なことです。

また、社会全体としても、あらゆる世代の人々が、心も身体も社会的にも健康で、それぞれの人生を十分に生きることが重要です。

講義では、第一に現代の健康課題とその対策について学ぶこと、第二に、安全に効果的に楽しく運動やスポーツを実施するために必要な基本的知識を学ぶこと、第三に社会的な視点からスポーツや健康についての幅広い知識を学ぶことを目的としています。

**■講義分類**

社会人基礎力育成

ビジネス創造

地域ビジネス

**■到達目標**

1. 現代社会における健康課題を理解し自ら対策に取り組める能力を身につける。
2. 運動、スポーツに関する課題を解決する能力を身につける。
3. 日常生活を健康で快適に過ごすための健康管理方法、運動、スポーツとの関わり方の理解。
4. 運動、スポーツ、レジャー、レクリエーションの享受能力を高める。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

事前事後の学習ポイントを参考に、指定図書で事前事後の学習を行って下さい。

**■評価方法**

出席状況(態度・取組状況を含む)が30%、2回実施する授業内テストが70%を基本としつつ、事前学習への取組状況などの積極性をプラスに評価します。

絶対評価方法にて評価します。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 授業内容について十分に理解し、自分の考えもまとめて表現できている。また自らの考えにオリジナリティが発揮されている。

評価A (89~80点) : 授業の内容について十分に理解し、自分の考えもまとめて表現できている。

評価B (79~70点) : 授業の内容について理解しているが、その内容の表現が不十分である。

評価C (69~60点) : 学んだ内容について理解していない。

評価F (59点以下) : 著しく理解が不十分である。

**■履修していることが望ましい科目**

特にありません。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

出席は、評価のための前提条件とします。講義終了時に提出する小レポートによる出席状況および小レポートの記載内容による取組状況の評価が含まれます。

**科目名** 多国籍企業I(Multinational Corporations I)**サブタイトル****担当教員** 飯田 健雄**■講義目的**

準備学習（予習・復習等）に必要な時間に準じる程度の具体的な学修内容

**■講義分類****■到達目標**

春学期は世界の代表的多国籍企業を学んでいく。特に、アメリカのICT企業に的を絞り、理解する。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

NHKをはじめとする民放各社の経済ニュースで日本企業や外国企業の動向を知ってこよう。日本経済新聞を読んで、世界の企業の動向を知ろう。

**■評価方法**

試験（70％）出席（30％） 試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：出席は15回中、ほとんど講義にでている学生。試験は5問中、すべてに解答し、90点以上を取得すること。  
評価A（89～80点）：出席は、15回中、ほとんど講義に出ていた学生。試験は5問中、すべてに解答し、80点以上を取得すること。  
評価B（79～70点）：出席は、15回中、10回以上講義に出ていた学生。試験は5問中、4問すべてに解答し、70点以上を取得すること。  
評価C（69～60点）：出席は15回中、7回以上講義に出ていた学生。試験は5問中、3問すべてに解答し、50点以上を取得すること。  
評価F（59点以下）：出席が15回中、5回以下、および、試験は5問中、3問以下で50点以下の水準にあること。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 多国籍企業Ⅱ(Multinational Corporations Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 飯田 健雄**■講義目的**

秋学期は多国籍企業の中でインフラ産業に特化している企業を学んでいきます。

**■講義分類****■到達目標**

21世紀の先進諸国は、B to CからB to Bの戦略展開を積極的に進めています。その事業形態の理解を深めましょう。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

NHKの経済ニュースを見よう。また、日本経済新聞を毎日、読む習慣をつけよう。隔週ごとの項目に関して、指定教科書を事前に読み、講義後、板書された項目を理解していこう。

**■評価方法**

試験（70%）出席（30%） 試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：出席は15回中、ほとんど講義にでている学生。試験は5問中、すべてに解答し、90点以上を取得すること。  
 評価A（89～80点）：出席は、15回中、ほとんど講義に出ている学生。試験は5問中、すべてに解答し、80点以上を取得すること。  
 評価B（79～70点）：出席は、15回中、10回以上講義に出ている学生。試験は5問中、4問すべてに解答し、70点以上を取得すること。  
 評価C（69～60点）：出席は15回中、7回以上講義に出ている学生。試験は5問中、3問すべてに解答し、50点以上を取得すること。  
 評価F（59点以下）：出席が15回中、5回以下、および、試験は5問中、3問以下で50点以下の水準にあること。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 多摩学I(Tama Study I)

サブタイトル ～多摩を学ぶ。多摩から学ぶ。～

担当教員 奥山 雅之

**■講義目的**

各地域には、各地域なりの「力」があります。その力の源泉は、地域にいる人々の共通の記憶を継続的に育んでいることです。多摩地域にあるこの大学で、私たちが一緒に学んで共通の体験から何かを得ようとしているのも、場所の「力」によるものと考えても良いのではないのでしょうか。

私たちの大学が立地している多摩地域にも、地域なりの「力」があります。その「力」と可能性について考えることが、この地域の活性化と発展につながります。

「多摩学」とは、多摩の来歴を探り、多摩の現代について考え、多摩という視点から未来を構想する学問です。多摩川と相模川に挟まれた地域を広義の「多摩」として、その地歴を探り、この地域の持つ意味と可能性を多角的・学際的に探求していきます。

本講義では、主に多摩地域を様々な産業の面からみていくことで、多摩地域が持つ「力」について考えていきます。講義では豊富な最新事例を交えながら、それぞれの産業について分けて説明しますが、それを束ねて、多摩の産業社会の全体像を描きながら、地域の課題を導き出すことをねらいとしています。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
社会人力育成  
地域ビジネス

**■到達目標**

本講義のゴール（目標）は、次の3つとします。

- (1) 自分なりの「多摩地域」の全体的なイメージを持ち、自分の言葉でその特徴と可能性を説明できること。
- (2) 他の地域と比べた特徴や優位点を自分なりに見つけ出すこと。
- (3) 多摩地域を自分なりに説明することにより、プレゼンテーション能力を高めること。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義にあたって多摩地域の地理について基礎的な知識を習得するための予習が必要である。講義内のレポートに加えて、課題レポートを複数回課することを予定しているので、レポートを作成して提出することが求められる。

**■評価方法**

出席（講義内レポート含む）40％、課題（レポート等）60％。  
ただし、講義に際して教員の指示に従わない等問題があった者は、減点あるいは単位を付与しないものとする。

**■評価基準**

- 評価A+（90点以上）：「多摩地域」の全体的なイメージを的確に捉え、地域を様々な視野から考察し、特徴を抽出することに関する高い能力を獲得した。  
多摩地域を的確に説明できる程度の講義内容の理解とプレゼンテーション能力を獲得した。
- 評価A（89～80点）：「多摩地域」の全体的なイメージを捉え、地域を様々な視野から考察し、特徴を抽出することができる。  
多摩地域を説明できる程度の講義内容の理解とプレゼンテーション能力を獲得した。
- 評価B（79～70点）：「多摩地域」の全体的なイメージはある程度は捉え、地域を考察して特徴をいくつかみつけることができる。  
多摩地域の概要は説明できる程度の講義内容の理解とプレゼンテーション能力を獲得した。
- 評価C（69～60点）：「多摩地域」の全体的なイメージを不十分ではあるが捉え、特徴をいくつかみつけることができる。  
不十分ではあるが、ある程度の講義内容の理解とプレゼンテーション能力を獲得した。
- 評価F（59点以下）：「多摩地域」の全体的なイメージの捕捉および地域の考察ができていない。  
講義の内容を理解していない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

【重要】受講希望者が200名を超える可能性がありますので、履修制限（200名）を設けます。履修するためには、必ず初回の講義に出席し、初回の講義内レポートを提出する必要があります。



受講希望者（初回受講者）が200名を超えた場合には、講義内レポートによって履修可能者（履修登録をすれば履修できる者）を決定します。

**【重要】** 双方向授業を実施するため、パソコンを毎回持参してください。

**科目名** 多摩学Ⅱ(Tama Study Ⅱ)**サブタイトル** 「多摩」地域の歴史の変遷と特性を知る**担当教員** 大森 映子**■講義目的**

地域の特性を把握するには、その歴史的な経緯を知ることが不可欠である。また、歴史を探ることは将来を見通すための鍵になりうるであろう。国際化が重視されている昨今であるが、自らのよりどころを明確にしなければ、国際的な対応はむしろ困難であり、問題発見やその解決のための手がかりを得ることはできない。ここでは、まず地域を学ぶことの意味を明らかにした上で、多摩地域の歴史を辿り、地域に根ざした特性を明らかにし、地域ビジネスの可能性を考えてみたい。

**■講義分類**

地域ビジネス  
グローバルビジネス  
社会人力育成

**■到達目標**

- (1) 多摩地域に対する理解を深め、地域的特性と密着した産業社会の実情を探る。
- (2) 現代を考える上で、歴史的考察が重要であることを認識する。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回の授業前に、取り上げる時代についてあらかじめ学んでおく。また、復習を重視し、授業内で示されたキーワードについて理解を深めておく。

**■評価方法**

平常点60%(授業内で求める簡単なレポートを重視する)、見学記録10%、中間試験10%、最終レポート20%を原則とする。ただし受講者数によっては、最終レポートは授業内試験とする場合がある。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 授業の趣旨と内容を十分に理解し、自分の意見を持てるようになった。  
評価A (89~80点) : 授業の趣旨と内容を、基本的に理解し、自分の意見を持てるようになった。  
評価B (79~70点) : 授業の趣旨と内容を、一応理解できた。  
評価C (69~60点) : 不十分なところはあるが、授業のポイントは一応理解できた。  
評価F (59点以下) : 授業の趣旨、内容ともに理解できていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

初回は授業の方針を確認する上で重要であるので、必ず出席すること。  
また、後半の講義の中で、学生によるプレゼンテーションを予定している。

**科目名** 地域観光論 (Regional tourism theory)**サブタイトル** 観光まちづくりの最前線事例と地域ビジネス**担当教員** 中庭 光彦**■講義目的**

日本の社会経済を支える有力な産業として「観光産業」が注目されています。温泉地、歴史ある都市、魅力ある景観、その土地ならではの名産品・・・様々な観光商品・観光サービスを企業や自治体が開発し、観光客、すなわち「移動する顧客」を相手にしたビジネスを伸ばしてきました。

昔は、大都市の旅行代理店と観光地の宿泊施設が協力して観光客を集めていました。今は、各観光地が魅力づくりを競った結果、海外からの観光客も増え、元気になる地域も出てきています。かつては、「観光業」と言えばどんな仕事か誰もが想像できましたが、今では様々な観光業が生まれ、「これも観光業なの？」という仕事も生まれています。例えば、ネット通販の楽天はホテル予約ポータルサイト運営者として巨大な観光業者となっています。一方観光地の魅力をつくる「着地マーケティング」の力不足が日本の弱点となっています。

そこで、本講義前半では、観光に関心のある主に2年生を対象に、観光産業の基本・現状を伝え、「移動する人間」が社会経済を変える影響力や地域観光政策の考え方について学びます。後半では観光まちづくりに焦点を絞り、観光地をつくるマーケティングや政策の戦略について学びます。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネスマネジメント  
 地域ビジネス

**■到達目標**

観光による地域ビジネスの考え方を理解し、基本用語を使って、現代の観光についてレポートを書けるようになる。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 プレゼンテーション

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回に配布した資料とノートを理解してくること。

**■評価方法**

レポート60%、出席40%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解し、新たな情報を加えて伝えることができる。  
 評価A (89~80点) : 講義内容を十分に理解して、伝えることができる。  
 評価B (79~70点) : おおよその内容は把握しているが、論理的に伝えるまで至っていない。  
 評価C (69~60点) : 内容をあまり理解できておらず、伝えることも十分ではない。  
 評価F (59点以下) : 著しく理解に欠けており、伝えることはできない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 地域産業論Ⅰ(Local industry Theory Ⅰ)**サブタイトル** 製造業、流通業、サービス業それぞれの違いを理解し、「もの」「サービス」「情報」を複合した「新ビジネス」を構想する。**担当教員** 奥山 雅之**■講義目的**

産業が取り扱う財には、「物財」「サービス財」「情報財」があるが、それぞれの財の提供する産業の相互の比較、各財の特性が生み出す産業問題など、サービス経済化が進む現代に起きている産業問題を取り扱います。

後半では、特に映画、ゲーム、音楽などコンテンツ産業、クリエイティブ産業に焦点を当て、その現状と課題についても検討していきます。

産業問題、とくにサービス産業、情報産業の諸課題を理解し、将来の就職先での確かな事業の構想、および市場戦略、競争戦略の立案などができる能力を身に付けることを目的としたプログラムです。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

地域ビジネス

**■到達目標**

産業や企業に関連した問題を発見、分析、解決することができる社会人となるための産業の捉え方やその分析方法を習得する。

**■授業形態**

講義

双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

テーマごとのレジュメを配布し、プレゼンテーションまたは板書によって講義を進める。事前準備学習・事後展開学習としてレポートを課す。

**■評価方法**

出席（講義内レポートを含む）40%、課題レポート20%、定期試験40%。ただし、講義に際して教員の指示に従わない等問題があった者は、減点あるいは単位を付与しないものとする。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：サービス、情報の概念について深く理解し、サービス産業、情報産業の課題について的確に把握し、新ビジネスを構想できる。

評価A（89～80点）：サービス、情報の概念について理解し、サービス産業、情報産業の課題について把握し、新ビジネスを構想できる。

評価B（79～70点）：サービス、情報の概念について理解し、サービス産業、情報産業の課題について把握している。

評価C（69～60点）：サービス、情報の概念について理解している。もしくは、サービス産業、情報産業の課題について把握している。

評価F（59点以下）：サービス、情報の概念について理解していない。かつ、サービス産業、情報産業の課題について理解していない。受講態度に問題がある。

**■履修していることが望ましい科目**

事業構想論

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 地域産業論II(Local industry Theory II)**サブタイトル** ～中小企業の役割、問題点、発展形態および経営～**担当教員** 奥山 雅之**■講義目的**

中小企業は、企業数の99%、就業者数の約70%を占め、地域経済を支えるとともに、「社会をこうしたい」という志を持った多くの中小企業（=志企業）が新しい製品やサービスを創るなど、「イノベーション」の担い手としても重要な役割を果たしています。

私たちは、よくテレビCMを実施しているような大企業の名前と事業内容はよく耳にしますが、中小企業がどのような企業活動を行っているか、知りうる手段が十分に整っているとはいえません。

しかし、地域の中をよく見ると、規模は小さいけれど独自の技術を持って特定の製品で大きな市場シェア（占有率）を持つものづくりの中小企業や、行列のできる小さな店などを見つけることができます。中小企業は、ひとつのイメージでは語りつくせない、極めて多様性のある存在なのです。

中小企業は、当然のことではありますが、大企業と比べて経営の基盤が弱い部分があり、また経営上の課題を抱える企業も多く存在します。こうした中小企業の問題性についてもしっかりと目を向けていくことも必要ですが、中小企業を決してネガティブのみには捉えずに、豊富な事例を交えながら、その強みや魅力、今後の発展にも迫り、社会に出ても役に立つ実践的知識獲得を目指します。

受講すれば、「中小企業」に対するイメージも一新されるはずですよ。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 地域ビジネス

**■到達目標**

本講義のゴール（目標）は、次の2つとします。

- (1) 生活と中小企業、地域と中小企業とのつながりについて、現実感を持ってイメージすること。
  - (2) 社会における中小企業の役割、問題点、発展形態および経営について、理論を理解したうえで各自が各自の意見と考え方を持つこと。
- ※自分なりの「中小企業観」を持つことが重要です。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義にあたって経営学について基礎的な知識を習得するための予習が必要である。講義内のレポートを複数回課すことを予定しているので、これらのレポートを作成して提出することが求められる。

**■評価方法**

出席（小レポートを含む）40%、定期試験（中間試験を行う場合はそれを含む）60%。  
 ただし、講義に際して教員の指示に従わない等問題があった者は、減点あるいは単位を付与しないものとする。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 生活と中小企業、地域と中小企業とのつながりについて、現実感を持って的確にイメージできている。社会における中小企業の役割、問題点、発展形態および経営について、理論の理解度が極めて高く、かつ、自分なりの明確な「中小企業観」を獲得できている。
- 評価A (89～80点) : 生活と中小企業、地域と中小企業とのつながりについて、現実感を持ってイメージできている。社会における中小企業の役割、問題点、発展形態および経営について、理論の理解度が高く、かつ、自分なりの明確な「中小企業観」を獲得できている。
- 評価B (79～70点) : 生活と中小企業、地域と中小企業とのつながりについて、ある程度現実感を持ってイメージできている。社会における中小企業の役割、問題点、発展形態および経営について、理論の理解度があり、かつ、自分なりの「中小企業観」を獲得できている。
- 評価C (69～60点) : 生活と中小企業、地域と中小企業とのつながりについて、少しはイメージできている。社会における中小企業の役割、問題点、発展形態および経営について、理論をある程度理解し、または、自分なりの「中小企業観」を獲得している。
- 評価F (59点以下) : 生活と中小企業、地域と中小企業とのつながりについて、十分にイメージできていない。社会における中小企業の役割、問題点、発展形態および経営について、理論を十分に理解していない、あるいは、自分なりの「中小企業観」を獲得できていない。

### ■履修していることが望ましい科目

事業構想論

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

・日頃から、新聞の産業、企業関連の記事（特に中小企業・ベンチャー企業関連の記事）について興味を持ってチェックしてください。

**科目名** 地域政策プランニング (Regional policy planning)**サブタイトル** 政策による問題解決企画の技法**担当教員** 中庭 光彦**■講義目的**

「産業社会の問題解決の最前線に立つ人材（志士）を育てる」のが多摩大学の使命であるが、地域における「問題解決手法」の基礎として、「地域政策プランニング」を開講する。

現代社会において問題解決とは、企業－行政－NPO等、更には個人とグループ、先輩といった「多元的な人々の連携」の下で進められる。問題特定－政策企画－政策実施－政策評価という一連の過程を、多元的な組織・個人で合意をしながら、円滑に問題解決を進めるための「術（art）の体系」。これが政策マネジメントである。

国が政策を立案し実行すればそれが全国に行き渡り問題が解決されたのが人口増加を前提とした成長経済の時代だった。しかし、これからは人口減少局面を前提にした政策を企画しなければならない。多様な問題が現場で起こり、地域ごとに異なる解決方法で社会を変える。この考え方と方法実例を教えるのが本講義の狙いである。

防災対策と人口減少対策を中心にトレーニングを行う。

**■講義分類**

地域ビジネス

**■到達目標**

因果関係図をつくり、それをもとに政策企画を行い、それを説明できるようにすること。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回に配布した資料とノートを理解してくること。

**■評価方法**

レポート60%、出席40%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義内容を十分に理解し、新たな情報を加えて伝えることができる。

評価A（89～80点）：講義内容を十分に理解して、伝えることができる。

評価B（79～70点）：おおよその内容は把握しているが、論理的に伝えるまで至っていない。

評価C（69～60点）：内容をあまり理解できておらず、伝えることも十分ではない。

評価F（59点以下）：著しく理解に欠けており、伝えることはできない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

グループディスカッションができるように、約100名を上限に履修制限を行います。第1回目は必ず出席してください。履修許可を得られない学生は履修登録できません。

**科目名** 地域ビジネス入門(Introduction to Region Business)**サブタイトル** ～地域活性化の手法を考える～**担当教員** 中澤 弥、中庭 光彦、梅澤 佳子、大森 映子、奥山 雅之、松本 祐一**■講義目的**

現代を生きる私たちには、「グローバル」へと視野を広げる一方、足元に市場が広がる「ローカル（地域）」にもしっかりと目を向けることが必要となっています。

ビジネス、あるいはNPOなどの非営利組織の活動においても、地域は競争環境であると同時に土地や人材等といった経営資源でもあります。顧客ニーズが多様化し、きめ細かな製品・サービスの生産、取引活動が要求されるようになり、こうしたニーズの変化への適応が急務となっています。つまり、ビジネスにおいても地域との関係は切っても切り離せない密接なものがあるのです。こうした中、近年、地域の資源を活用したり、地域の課題やニーズにきめ細かく対応したりする地域密着型のビジネス（「地域ビジネス」）が注目されています。

本講義は、このような地域とビジネスの関係や地域活性化手法を学ぶ入門科目であり、様々な地域活性化の手法を豊富な事例を交えながら学んでいきます。また、本講義を通じて、「地域社会」や「ビジネス」に対する多面的な見方を養います。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
地域ビジネス

**■到達目標**

- 1 自分の生活にとって地域とは何かということ、現実感を持ってイメージすること。
- 2 地域ビジネスに関する基礎知識、地域活性化の基本的手法を習得し、地域の課題解決に向けた構想力を身に付けること。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講義の内容をまとめ、地域ビジネスの問題解決のために何が必要か、系統的に理解すること。

**■評価方法**

出席20%、各講義に関するレポート60%、まとめのレポート20%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：各講義のテーマについて深く理解し、地域ビジネスに対する自分の考えを明確に示すことができる。  
評価A（89～80点）：各講義のテーマについて理解し、地域ビジネスに対する自分の考えを示すことができる。  
評価B（79～70点）：各講義のテーマについて理解し、地域ビジネスの可能性を考えることができる。  
評価C（69～60点）：各講義のテーマについて理解し、地域ビジネスの重要性をつかんでいる。  
評価F（59点以下）：各講義のテーマの理解が不十分であり、地域ビジネスの重要性をつかんでいない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**



**科目名** 地域ビジネスプランニング(Regional Business Planning)**サブタイトル** 地域問題解決のケース理解と企画**担当教員** 中庭 光彦**■講義目的**

ある通学の風景。みなさんは朝起きたらスーパーやコンビニで買った食材を冷蔵庫から取り出し、キッチンで料理し、きれいな部屋で食事し、水洗トイレで用を足し、メールチェックし、家を出ます。自転車を駅に駐車し、電車に乗り、バスを乗り継いで大学に到着。こうした暮らしができるのは、地域を利用するために先人が地域を整えてきたからです。これを開発と呼びます。

ところが、みなさんの両親が若い頃にはうまくいっていた都市と地域が、今どんどん変わってきています。子どもを生みたくなくなるような都市、まじめに農業をしても収益を得られない農地、大学を卒業しても働き口が無い地域、震災が起きると多数の死傷者が生まれる地域……。いま、日本では、人口減少に伴い、様々な地域の問題解決が必要になっています。そのためには、企業だけではなく自治体やNPO等がビジネスの手法で社会を変えることが重要です。

本講義では、地域について考えてみたいという2年生を対象に、地域の問題解決の実際のケースと、その裏にある論理を紹介します。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
ビジネスマネジメント  
地域ビジネス

**■到達目標**

地域問題に関するニュース記事を理解したレポートを書けるようになること。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回は配布した資料とノートを理解しておくこと。

**■評価方法**

レポート60%、出席40%。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 地域問題に関するニュースキーワードを十分に使いこなし、レポートも特筆すべきものである。  
評価A (89~80点) : 地域問題に関するニュースキーワードと使いこなし、レポートもしっかりと書けている。  
評価B (79~70点) : 地域問題に関するニュースキーワードはあまり使われていないが、レポートは書けている。  
評価C (69~60点) : 地域問題に関するニュースキーワードはほとんど使われていないが、何とかレポートは書けている。  
評価F (59点以下) : キーワードを使わず、レポートもほとんど書けていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 中国経済論 (Chinese Economy)**サブタイトル** 中国・大中華圏で活躍できる人財を目指す**担当教員** バートル**■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。

本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を立体的かつ複眼的な視点で理解を深めるための基本的な知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を正しく「読む」力の養成を目指す。

具体的には、中国や日中間のビジネスの最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて習得した知識や得た知見を自分の就職や将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

グローバルビジネス

地域ビジネス

**■到達目標**

- ①中国経済に関する基本的な知識を習得し知見を広げ、中国の実像を把握できるようにする。
- ②中国経済の現状と課題を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案のほか、日中間の協力の可能性について、履修者が独自の問題意識を持てるようにする。
- ③講義で習得した知見を就職活動に利活用できるようにする。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日頃から中国や日中間連の時事問題を始め、自分自身が関心をもつ特定分野や業界ないし産業および企業に関する情報を常に収集、分析、調査する習慣をつけ、その過程の中で、自分自身や社会にとって将来役立つであろう問題の発見・解決力・コミュニケーション能力を身につける努力を惜しまない。

**■評価方法**

出席(30点)、毎回提出の講義メモ(30点)、最終レポート(30点)、質問・意見(10点)により行う。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 絶対評価  
出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が90点以上。
- 評価A (89~80点) : 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が89点~80点の間。
- 評価B (79~70点) : 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が79~70点の間。
- 評価C (69~60点) : 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が69~60点の間。
- 評価F (59点以下) : 出席 (30点)、毎回提出する講義メモ (30点)、最終レポート (30点)、講義内の質問・意見(10点)の100点満点のうち、評価点が59点以下。

**■履修していることが望ましい科目**

『アジア経済論Ⅰ』

『韓国経済論』

『特別講座』など、グローバルビジネス関連科目

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ①講義中のルール順守の徹底。
- ②推薦された書籍や情報等は必ずチェックすること。
- ③レポート等の提出期限を必ず順守すること。

④成績評価について

出席と毎回提出する講義メモを重視(30点+30点=60点)する。最終レポート(30点)は、A4用紙3枚以内。講義内の質問・意見(10点)は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて1点~10点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、最後に返却する。

**科目名** 中国語Ⅰ・Ⅱ(ChineseⅠ・Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 安田 峰俊**■講義目的**

21世紀を迎えた現在、国際社会において中華圏の政治・経済・観光などの分野における重要性は高まり続けています。仮に将来、自分が日本国内のみで働くとしても、隣人・同僚・顧客などとして中華圏の人々と接する機会はずべてあることでしょう。本講義では現代中国社会に関する解説をはさみつつ、明日からすぐに使える、実用中国語の会話・読解・文法知識の習得を目指していきます（特に会話を重視します）。

中国ビジネスに興味がある人、中華料理や三国志が好きな人、高校時代まで英語が苦手だったけれど大学では外国語を習得してみたいと考えている人など、どんな動機の方でもOKです。一緒に学んでみましょう。

※履修は中国語を母語としない学生に限定しています。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
社会人育成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

中国語で自己紹介ができるようになること。  
現地に行ったときに、空港からホテルまで自分一人で移動できる程度の会話能力の育成を目指す。  
客観的指標としては、1年後に中国語検定4級程度の実力をつけることを目標とする。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教科書を4月中に必ず購入すること（翌月時点で未購入の場合は減点、最悪の場合は単位不認定もありえます）。  
講義前には当日学習予定範囲の教科書該当部分を熟読し、教科書付属のCDを聞いて耳を慣らすこと。

**■評価方法**

出席30%＋授業中小テスト10%＋期末テスト60%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：欠席数がおおむね3回以下、期末テストの点数が高く（発音・声量ともに十分で中国語の基礎的なコミュニケーションに問題がないと判断される）、高い意欲を認められる場合。

評価A（89～80点）：欠席日数がおおむね3分の1以下で、期末テストの点数がやや高く（中国語の基礎的なコミュニケーションがひとまらず可能と判断される）、意欲を認められる場合。

評価B（79～70点）：欠席日数がおおむね3分の1以下で、期末テストの点数が中程度（中国語の基礎的なコミュニケーションが最低限可能と判断される）の場合。

評価C（69～60点）：欠席日数がおおむね3分の1を超え、期末テストの結果も悪いが、若干の学習意欲が認められるなどの場合。

評価F（59点以下）：期末テストに不出席、出席日数が半数に満たない、授業態度が悪い、極度に意欲に欠けるなどの場合。また、小テスト時のカンニング行為も不合格相当とする。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

**科目名** 中国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ(Chinese Business CommunicationⅠ・Ⅱ)**サブタイトル** 中国・大中華圏で活躍できる人財を目指そう**担当教員** パートル**■講義目的**

この講義は、中国語の学習経験の有無を問わず、基本的に中国や大中華圏の文化について興味関心を持っている学生、または将来中国や大中華圏で活躍して見たい学生であれば、誰でも履修することが可能である。

講義内容は以下のように二部構成となっている。

①中国文化への理解を深めるためのミニ講座、テーマ別のチームワーク、留学生との交流会、文化体験を実施する。中国の食文化をはじめ、若者文化、政治経済や社会問題などをテーマとして取り上げ、教員によるミニ講座に加え、受講生全員参加型のプレゼンテーションやディスカッション、留学生との交流会、多摩祭の国際交流イベント等への参加を通じて、中国や大中華圏の文化について理解を深めるようにする。

②実践性を重視した中国語による会話力、自己表現力を高める自然体で楽しい語学レッスンを行う。自己紹介や短い会話文を使って、中国語の発音の練習と復習を行い、会話を自然な形で表現できるようにする。また、中国語検定試験の受験を目指す方に対しては、個別指導を行うほか、中国語圏への留学など支援体制も充実させる。本講義のポイントは「文化から言葉を学ぶ」「日常的に使える中国語力を身につける」ことである。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人育成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

①中国・大中華圏の文化について理解を深め、グローバルビジネス系の講義をはじめ就活に活かすことができるようにする。

②自然な形で中国語による自己紹介をはじめ会話力、表現力を身につけられるようにする。

受講生のレベルに合わせて中国語検定試験(HSK)1～3級以上の合格を目指す。

**■授業形態**

講義を中心としながら、学生主体のテーマ別のプレゼンテーションやディスカッションを行うなど「楽しい会話」の授業を目指す。

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

①中国・大中華圏の文化についての毎週の講義テーマに関連する事例を事前に調べて講義に臨むこと。

②中国・大中華圏に関する時事問題を始め、自分自身が関心をもつ特定分野に関する情報を常に収集、分析、調査する習慣をつけると共に、授業でのミニ講座やグループワークと関連づけて取り組むことを推奨する。

③中国語の表現力を向上させるために授業で配布するプリントやYoutubeなど動画サイトを利活用しながら事前の学習や復習(1日当たり30分～1時間)を行う。

**■評価方法**

評価は、出席状況(40%)、小テスト(30%)と期末レポート(30%)で評価する。

**■評価基準**

評価A+(90点以上) : 成績は、下記配分により絶対評価で行う。

評価点100点 (小テスト30点+期末試験40点+出席30点)のうち90点以上。

評価A(89～80点) : 評価点100点 (小テスト30点+期末試験40点+出席30点)のうち89・80点。

評価B(79～70点) : 評価点100点 (小テスト30点+期末試験40点+出席30点)のうち79・70点。

評価C(69～60点) : 評価点100点 (小テスト30点+期末試験40点+出席30点)のうち69・60点。

評価F(59点以下) : 評価点100点 (小テスト30点+期末試験40点+出席30点)のうち59点以下。

**■履修していることが望ましい科目**

中国語Ⅰと中国語Ⅱなど。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

①講義の予習・復習やグループワークに関する課題の事前準備をしっかりと行うこと。

②授業中にPCを使用するため、毎回持参すること。

**科目名** データサイエンスI(Data Science I)**サブタイトル** データ利活用の基礎的スキル**担当教員** 佐藤 洋行**■講義目的**

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化（IoT含む）により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の基礎力の習得を目指し、データ分析の入門を取り扱う。具体的には、データ分析プロセスについていくつかのフレームワークを学び、データの要約と可視化、データの比較と関係性の分析、因果関係の検証の実際的手法についての知識習得と実践を行ってもらう。このようなスキルは現在のビジネスでは会社のどの部署でも必要とされるものであるため、受講をお勧めする。

なお、講義では分析を実体験することで理解を深めることを重視するため、コンピュータソフトを用いてデータ分析をするスキルも演習により習得してもらう。適宜、グループワークによるレポート作成やプレゼンテーションも行ってもらおう。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 社会人力養成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT

**■到達目標**

- (1) データプレゼンテーションの枠組みに基づいたデータ利活用ができる
- (2) データ分析のフレームワークを理解し、実践できる
- (3) データを要約し、視覚化することができる
- (4) データの傾向とバラつきを測ることができる
- (5) データの比較を正しく行うことができる
- (6) データ分析の結果を他者に分かりやすく伝えられる

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回講義資料および講義記録ノートによる復習

**■評価方法**

出席30%、レポート70%  
 統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : データ分析プロセスのフレームワークに従って分析を実践し、結果を他者に分かりやすくプレゼンテーションできる。
1. データを理解した上で仮説構築を行い、その仮説を検証するための分析結果を導き出すことができる。
  2. 分析結果を、統計学の知識に基づいて表やグラフで表現できる。
  3. 分析結果から価値のある考察を導き出すことができる。
- 評価A (89~80点) : データ分析プロセスのフレームワークに従って分析を実践することができる。
1. データを理解した上で仮説構築を行える。
  2. データの特徴を、統計学の知識に基づいて表やグラフで表現できる。
  3. 作成した表やグラフから、データの特徴を読み取ることができる。
- 評価B (79~70点) : データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎を理解している。
1. データ分析を行う上で必要な工程を列挙することができる。
  2. データの特徴を把握する上で必要な、いくつかの統計学の知識を持っている。
  3. 表現された表やグラフから、データの特徴を読み取ることができる。
- 評価C (69~60点) : データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎をある程度身に付けている。
1. データ分析を行う上で重要な課題の設定と仮説の構築における注意点を知っている。
  2. 表現された表やグラフから、データの特徴を読み取る上で必要な要点を知っている。
  3. 相関関係と因果関係の違いを説明できる。
- 評価F (59点以下) : データ分析プロセスのフレームワークの要点について説明できない。統計学の重要性について理解していない。表やグラフを読み解くことが出来ない。

■履修していることが望ましい科目

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

必ずPCを持参すること。

本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ収集やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。

**科目名** データサイエンスII(Data Science II)

**サブタイトル**
**担当教員** 今泉 忠

**■講義目的**

高度情報化により、情報が数量として扱われるデータを扱う必要性はますます高まっている。本講義では、データに基づく課題解決や問題解決に必須の統計学に関して、その基礎概念の理論的な理解を深め、社会現象を確率モデル・統計モデルとして扱うために必要な統計的方法を利活用できることを目標としている。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- (1) 基礎的な確率分布について理解し、適用できる
- (2) 標本抽出について理解できる
- (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる
- (4) 検定問題が理解でき、適用できる

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

統計学に関する知識の理解だけでなく、実際の問題解決を求める。  
 そのために、講義内で出された課題を次回までの必ず理解しておくことが求められる。

**■評価方法**

講義中の小テスト(50%)、期末試験(50%)により行う。統計的な基本概念が理解できたかについて評価する。授業ごとに出題する課題を理解でき、適用できるかが評価のポイントとなる。統計的なものの考え方・データの処理の仕方ができているかどうかを評価する。  
 統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : (1) 基礎的な確率分布について理解し、適用できる  
 (2) 標本抽出について理解できる  
 (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる  
 (4) 検定問題が理解でき、適用できる  
 評価A (89~80点) : (1) 基礎的な確率分布について理解している  
 (2) 標本抽出について理解している  
 (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる  
 (4) 検定問題が理解でき、適用できる  
 評価B (79~70点) : (1) 基礎的な確率分布について理解している  
 (2) 標本抽出について理解している  
 (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる  
 評価C (69~60点) : (1) 基礎的な分布の性質を理解している  
 (2) 平均の推定問題が理解でき、適用できる  
 評価F (59点以下) : 上記のいずれも理解しておらず、適用もできない

**■履修していることが望ましい科目**

データサイエンス I

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出の



アクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。  
「データサイエンスIII」、「データサイエンスIV」、「問題解決メソッドI」、「問題解決メソッドII (2016年度は開講せず)」の履修には本講義を履修しておくことが望ましい。

**科目名** データサイエンスIII(Data Science III)**サブタイトル** 経営情報のための統計学/Applied Statistics for Management & Information Sciences**担当教員** 今泉 忠**■講義目的**

高度情報化社会となり、問題解決のためにはデータを収集して、それをもとに考えることが当然となった。データを閱してどのような目的のために収集して、活用するかが重要となってきている。この講義では経営情報におけるデータを活用するための基本力の習得を目指し、統計的データ分析を取り扱う。具体的には、データの要約と因果関係の検証のためのデータ分析を内容とする。このようなスキルは、共通のスキルであるので、受講しておくことをすすめる。なお、講義では実際に検討し、理解を深める事が重要であるので、コンピュータソフトを用いてデータ分析の基礎をも習得する。適宜、グループレポートなどを作成する。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人育成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- (1) 基礎的な離散分布と連続分布について理解し、統計的思考をもとに実際の場面で活用できる。
- (2) 平均の区間推定や仮説が行える。実際の問題解決問題を、統計的な枠組みで表現し分析できる。
- (3) 分散分析や重回帰モデルを適切に活用できる。因果関係について推測できる。
- (4) 意思決定に役立つ表現ができる。

**■授業形態**

講義  
 演習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

統計学Iでの学修内容を理解していること。  
 講義内に出される課題については次週の講義開始時に回収する。

**■評価方法**

課題提出 60% 期末試験 40%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 実際の問題を確率モデルで表現できる。  
 確率分布に理解して、実際に利活用できる。  
 実際の問題解決のためにデータプレゼンテーションを用いて提案できる。  
 目的に応じた統計モデルを選択して、実施、結果を評価できる。
- 評価A (89~80点) : 確率分布を理解して、実際に利活用できる。  
 実際の問題解決のためにデータプレゼンテーションを用いて提案できる。  
 目的に応じた統計モデルを選択して、実施、結果を評価できる。
- 評価B (79~70点) : 実際の問題解決のためにデータプレゼンテーションを用いて提案できる。  
 目的に応じた統計モデルを選択して、実施、結果を評価できる。
- 評価C (69~60点) : 実際の問題解決のためにデータプレゼンテーションを用いて提案できる。  
 統計モデルを適用できる。
- 評価F (59点以下) : 評価A+~Cまでのいずれもできない。

**■履修していることが望ましい科目**

「ビジネス数学I・II」、「データサイエンスI」、「データサイエンスII」、「データサイエンスIV」等の授業と深く関連している。  
 事前に「データサイエンスII」の履修を前提とする。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。  
 PCなどを利用するので、その準備をすること

**科目名** データサイエンスIV-A(Data Science IV-A)**サブタイトル****担当教員** 久保田 貴文**■講義目的**

さまざまな問題解決のために必要なデータ解析の基礎的な内容を習得し、さらに自ら問題を考えそれを解決できる能力を養います。講義のなかでは、実際のデータを用い、エクセルとRにより解析を行いレポートを作成します。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 ビジネスICT

**■到達目標**

データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に以下の4つの項目について習得していること。

1. エクセルでのピボットテーブル
2. エクセルを使ったデータ分析（集計・抽出・分類・並べ替え）
3. 回帰分析
4. 判別分析・クラスター分析

さらに、自ら問題を設定し、本講義で学んだ手法によってそれを解決できることがさらに望ましい。

**■授業形態**

講義  
 グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

基本的なコンピュータのリテラシー：ファイル・フォルダ（以降単にファイル）を開く、ファイルを選択、コピー、貼り付け、削除などが行える。  
 ウェブブラウザの操作：Google等を使った情報の検索、t-nextから必要なファイルのダウンロード  
 エクセル入門：基本的な操作、入力・修正・整形、グラフの挿入  
 Rのインストールの為に：ファイルの保存、ファイルの実行、フォルダの構造についての基礎的な知識（どこに保存されているか?等)

**■評価方法**

レポート4回（各25%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に以下の4つの項目について習得していること。

1. エクセルでのピボットテーブル
2. エクセルを使ったデータ分析（集計・抽出・分類・並べ替え）
3. 多変量解析（回帰分析）
4. 多変量解析（判別分析・クラスター分析）

さらに、自ら問題を設定し、本講義で学んだ手法によってそれを解決できる。

評価A（89～80点）：データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に以下の4つの項目について習得していること。

1. エクセルでのピボットテーブル
2. エクセルを使ったデータ分析（集計・抽出・分類・並べ替え）
3. 多変量解析（回帰分析）
4. 多変量解析（判別分析・クラスター分析）

評価B（79～70点）：データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に以下の3つの項目について習得していること（ただし4を含むこと）。

1. エクセルでのピボットテーブル
2. エクセルを使ったデータ分析（集計・抽出・分類・並べ替え）
3. 多変量解析（回帰分析）
4. 多変量解析（判別分析・クラスター分析）

評価C（69～60点）：データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に以下の2つの項目について習得していること（ただし4を含む）。

1. エクセルでのピボットテーブル
2. エクセルを使ったデータ分析（集計・抽出・分類・並べ替え）
3. 多変量解析（回帰分析）

4. 多変量解析 (判別分析・クラスター分析)  
評価F (59点以下) : データ解析の考え方および手法について十分に理解が出来ない。さらに様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来ない。

■履修していることが望ましい科目

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

**科目名** データサイエンスIV-B(Data Science IV-B)**サブタイトル** ビジネス分野でのデータ利活用**担当教員** 佐藤 洋行**■講義目的**

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化 (IoT含む) により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の技術的知識をある程度もっている前提で、実際にそれをビジネス分野で応用する上で必要な実学的知識を修得するとともに、最新のクラウドサービスを体験することにより、データ利活用の発想力を身につけることを目的とする。

具体的には、ビジネス分野でデータ利活用を行う上で必要なオープンソースソフトウェア利用、最新のクラウドサービス、オープンデータなどの技術的な知識を講義する。演習では、クラウドサービス (Microsoft Azureを想定) を利用したデータ分析を体験することで、新たなデータ利活用方法を発想する訓練を行う。その上で、企業に所属する現役のデータサイエンティストと交流し、データサイエンスのビジネス分野での応用について幅広い理解を可能とする。このような最前線事例に触れられる機会は貴重であると考えられるので、受講をお勧めする。

なお、講義ではグループワークによるレポート作成やプレゼンテーションを行ってもらう。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力養成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT

**■到達目標**

- (1) データ分析がビジネスでどのように応用されているか理解している
- (2) データ分析業務に不可欠なオープンソースソフトウェアを理解している
- (3) クラウドサービスを利用することができる
- (4) オープンデータの概要と利用にあたっての注意点を理解している
- (5) データ利活用の方法について、自分なりの考察を加える事ができる

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 プレゼンテーション

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回講義資料および講義記録ノートによる復習

**■評価方法**

出席30%、レポート70%  
 統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : データ利活用の方法について、自分なりの考察を加える事ができる。  
 1. ビジネス分野でのデータ利活用に必要な最低限の最新知識を持つ。  
 2. 上記知識に基づき、ビジネス分野でのデータ利活用について自分なりの意見を他者に表明できる。  
 3. データ利活用方法を複数発想することができる。
- 評価A (89~80点) : データ利活用に必要な分野の知識を広範囲に把握している。  
 1. ビジネス分野でのデータ利活用に必要な最低限の最新知識を持つ。  
 2. オープンソースソフトウェアやクラウドサービスの利用方法を理解している。  
 3. データ利活用のビジネス事例について、どのような仕組みでそれが実現されているのか、概要を説明できる。
- 評価B (79~70点) : データ利活用に必要な知識の分野にどのようなものがあるか理解している。  
 1. ビジネス分野でのデータ利活用において注意すべき点を理解している。  
 2. オープンソースソフトウェアやクラウドサービスの利用方法を理解している。  
 3. レコメンデーションやターゲティングといった、最も良く利用されるデータ利活用方法について概要を説明できる。
- 評価C (69~60点) : データ利活用に必要な知識をある程度理解している。  
 1. データ利活用に必要となる知識の幾つかを理解している。  
 2. オープンソースソフトウェアやクラウドサービスにどのようなものがあるかある程度理解している。  
 3. レコメンデーションやターゲティングといった、最もよく利用されるデータ利活用方法の事例を知っている。

評価F (59点以下) : データ利用に必要な知識を説明できない。オープンソースソフトウェアやクラウドサービスについて理解していない。身近なデータ利用事例を挙げることができない。

### ■履修していることが望ましい科目

ITマネジメントⅠ  
ITマネジメントⅡ  
データサイエンスⅠ  
データサイエンスⅡ  
データサイエンスⅢ

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

必ずPCを持参すること。

本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ収集やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。

**科目名** データフィケーションI(Datafication I)**サブタイトル** 情報概論**担当教員** 中村 有一**■講義目的**

20世紀後半からコンピュータや通信の技術が急速に発達し、情報技術が社会や産業に大きなインパクトを与えるようになってきた。さらに21世紀になって、それまで予測されていたことがほぼ現実のものとなり、本格的な情報社会が到来した。これに伴って、これまでの工業社会とは異なる考えかたやモラルが必要とされる時代となった。また個人の生活の中にもパソコンなどの情報機器が普及し、それらの原理や役割を正しく把握し、うまく利用することが求められるようになってきた。この講義の目的は、現代の情報社会で必要とされる知識やモラルを身につけ、情報産業などの分野で活躍できる基礎をつくることである。

また、本講義によって情報通信の分野に、より興味をもってもらい、将来のゼミ選択や就職にも参考になるようにしたい。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

情報技術の概略を理解すること。情報化にともなう社会変化、産業構造の変化など、大きな流れを把握した上で、さまざまな課題を自分の頭で考えられるような能力を身につける。また情報社会で生きていくうえで必要なモラルについても習得する。

**■授業形態**

講義

演習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

用語の意味を理解し、ミニテストなどの結果を振り返る。

**■評価方法**

学期末試験70% レポートなど平常点30%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : ほぼ完璧な理解度と評価

評価A (89~80点) : 上位の評価

評価B (79~70点) : 中位の評価

評価C (69~60点) : 下位の評価

評価F (59点以下) : 不十分な理解度と評価

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

スライドの資料は、概略を示したもののなので、これだけを読んでも理解できないだろう。復習するとき、内容を整理するために使う。授業中に適宜紹介する参考文献を読むことにより、授業内容をより深く理解できるようにすることが望ましい。

## 科目名 データフィケーションII(Datafication II)

### サブタイトル

担当教員 深沢 弘美

### ■講義目的

産業社会における問題解決において、データは重要な役割を果たす。そのため、コンピュータ上で正しくデータを管理するための技術を身につけることはあらゆる業種、分野において大変重要となる。そこで本講義ではコンピュータでの情報の蓄積・管理の実践的知識として、E-Rモデルを中心としたデータベースの基礎概念について学習する。リレーショナルデータベースの基礎概念をもとに「データベースを活用できる」ようになること、さらには「データベースを作成できる」ようになることが本講義の目標である。講義は演習と課題制作を含み、最終課題ではグループでデータベースを設計し、制作する。

### ■講義分類

ビジネス環境理解  
ビジネスマネジメント  
ビジネスICT

### ■到達目標

- ①データベースの活用：リレーショナルデータベースの基本概念を理解し、効率的なデータ管理ができるようになること。
- ②データベースの設計：正しいデータベースを設計できるようになること（ER図、正規化などの理解）。
- ③データベースの作成：E-Rモデルによるデータベースを構築することができるようになること（MicroSoftAccessによるデータベースの作成）。

### ■授業形態

講義  
グループワーク  
プレゼンテーション

### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

準備学習としては、「データベースとは何か」などインターネットなどを活用して学習しておくことが望ましい。授業は演習と並行して進めるので、ソフトウェアの操作とその理論の意味や必要性との対応を見直し、積極的に復習に取り組むことが必要である。

### ■評価方法

期末試験(40%)、授業内課題等平常点(60%)

### ■評価基準

- 評価A+ (90点以上) : ①データベースの活用：リレーショナルデータベースの基本概念を理解し、効率的なデータ管理ができる。  
②データベースの設計：正しいデータベースを設計できる（ER図、正規化などの理解）。  
③データベースの作成：リレーショナルモデルによるデータベースを構築することができる（MicroSoftAccessによるデータベースの作成）。  
上記①から③をマスターし、データベースの設計から開発まですべてを一から自分で行える。
- 評価A (89～80点) : ①データベースの活用：リレーショナルデータベースの基本概念を理解し、効率的なデータ管理ができる。  
②データベースの設計：正しいデータベースを設計できる（ER図、正規化などの理解）。  
③データベースの作成：リレーショナルモデルによるデータベースを構築することができる（MicroSoftAccessによるデータベースの作成）。  
上記①から③について大半を理解し、データベースの設計から開発まで、教師や仲間の助けをかりながら行える力をつけた。ER図や正規化などの理論的な理解に不十分な部分があった。
- 評価B (79～70点) : ①データベースの活用：リレーショナルデータベースの基本概念を理解し、効率的なデータ管理ができる。  
②データベースの設計：理論的な理解は十分ではないが、指示に従ってデータベースを設計することができる。  
③データベースの作成：理論的な理解は十分ではないが、指示に従ってデータベースを作成、修正することができる。
- 評価C (69～60点) : 基礎となる用語を理解し、教科書通り操作することはできたが、表面的な理解にとどまり手順を反復的に使っただけだった。
- 評価F (59点以下) : 基礎的な用語の理解が不十分で、教科書等に従って操作することもできなかった。

### ■履修していることが望ましい科目

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

初回授業にて調査を行い次回以降のクラス(1時間目か2時間目か)を決定するので、履修希望者は必ず出席すること



と。

授業は、演習形式で学習を積み上げていくので、欠席をしないこと。欠席した場合は、授業内容や課題を確認し各自学習を行うこと。

「Webプログラミング」では、本講義の知識、能力を必要とするため、履修を希望する場合は本科目を履修すること。

**科目名** デザインワークショップ I-A (Design Workshop I-A)**サブタイトル** Java 言語によるプログラミング入門**担当教員** 中村 有一**■講義目的**

本講義は、Java言語によるプログラミングの入門コースである。将来SEなどを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生には、この科目を受講することを強く勧める。Java言語は、最近広く普及しているプログラミング言語であり、この言語を一通り習得していると、さまざまな場面で役に立つ。また「情報処理技術者試験」などの資格試験を受ける場合にも有効である。

授業は、基礎的なプログラミングの構造の説明と、その演習の繰り返しで行っていく。単元ごとにレポートの提出を求めるため、各日、空き時間にはしっかりと復習をすることが必要である。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

Java言語を一通り使いこなせるようになることが最終目標である。

**■授業形態**講義  
演習**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

プログラムの意味を理解し、ミニテストなどの結果を振り返る。

**■評価方法**

学期末試験50% レポートなど平常点50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : ほぼ完璧な理解度と評価

評価A (89~80点) : 上位の評価

評価B (79~70点) : 中位の評価

評価C (69~60点) : 下位の評価

評価F (59点以下) : 不十分な理解度と評価

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。

授業には、毎回各自のノートPCを必ず持ってくること。

なお「デザインワークショップI」は同時限に開講されており、どちらかを選択する必要がある。「デザインワークショップI」はより初心者向けの授業であり、Java言語ではなくもっと簡単な視覚的言語を使用する予定である。「デザインワークショップII」は中級者向けのコースでPython言語を使用する予定である。「デザインワークショップI」A,Bと「デザインワークショップII」には直接的なつながりはないので、受ける順番などは自由に選択できる。

**科目名** デザインワークショップ I-B(Design Workshop I-B)**サブタイトル** Design Workshop IB - Programming for beginners**担当教員** 彩藤 ひろみ**■講義目的**

本講義は、いずれ何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムをコンピュータに実装可能になるまでの第一歩を学ぶ。問題解決するための解法を考えて、一つ一つ実行させることが重要である。すべての人がコーディングを理解することが必要だ、という考え方が、アメリカでは広がっている。そのための支援団体も多い。ここでは、コンピュータにどうやってこちらの考えを伝えるのか、そのアルゴリズムを学び、実践してみる。デザインワークショップ I は、AとBに分かれているが、将来ICTビジネスの方面で職を得たいと思うものは、なるべくAを、まったく初心者で、ひとまずコーディングのことを知っておきたいというものはBを選択するとよい。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

アルゴリズムの理解  
プログラミングの組み立て  
ステップ単位の実行とフィードバックの理解

**■授業形態**

ビジネスICT

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

Code.orgのチュートリアルを順番にやってみる。  
わからないところは飛ばして、後で問題解決する。

**■評価方法**

学期末試験50% レポートなど平常点50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : ほぼ完璧な理解度と評価  
評価A (89~80点) : 上位の評価  
評価B (79~70点) : 中位の評価  
評価C (69~60点) : 下位の評価  
評価F (59点以下) : 不十分な理解度と評価

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。

授業には、毎回各自のノートPCを必ず持ってくること。

**科目名** デザインワークショップ II (Design Workshop II)**サブタイトル****担当教員** 今泉 忠**■講義目的**

この講義ではプログラム言語【Python】について学ぶ。Pythonは、オブジェクト指向、命令型、手続き型、関数型などのスタイルでプログラムを書くことができる。開発効率が高く、フリーの優秀なフレームワークや開発環境が揃っている。何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムの実装が可能になりたいなどの将来SEなどを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生やには、この科目を受講することを強く勧める。

本講義の前半では順次処理、分岐処理、繰り返し処理について学び、Pythonのコーディングスキルを確かなものにする。後半では、データの作成や集計、並び替えのプログラミングを実践して、データを処理するアルゴリズムの基礎について理解を深める。

自分の頭で考えて、アイデアを表現する力を身につけてもらいたい。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

Pythonのプログラミングと、アルゴリズムの基礎を身につけることを目指す。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義の概要に記載した事前に学習しておくべき用語やポイントについて、講義資料を読んだり、インターネットで検索して意味を調べておく。

また、講義中に解決できなかったエラーや理解が追いつかなかった項目は、次の講義までに調査して、解決しておくこと。

**■評価方法**

日常課題50%、期末テスト50%。出席が80%を満たさない場合は減点する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 出席、課題、テストを総合して、90%以上の高得点を獲得している。

評価A (89~80点) : Pythonの応用的なプログラムを書くことができる。

評価B (79~70点) : Pythonの簡単なプログラムを書くことができる。

評価C (69~60点) : Pythonのプログラムを読んで理解することができる。

評価F (59点以下) : 出席数が足りない。あるいは、基本的なPythonの文法が理解できていない。

**■履修していることが望ましい科目**

IT活用法I

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・デザインワークショップ I の内容を理解していることを前提とする。
- ・講義と日常の課題を通して、JAVAを身につける努力をしたかを学期末試験で問う。出席や日常課題だけでは単位は取れない。

- ・一度身につければ、プログラミングの世界ではとても役に立つ内容である。頭が柔らかく、ガッツがあるうちに、頑張って身につけよう。

**科目名** TOEIC I・II(TOEIC I・I I)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**■講義目的**

English Expressionと並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEICの点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がればTOEICの点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。

この講義ではTOEICの得点を少なくとも現在の自分の点数から100点は上げることをめざし、リスニングリーディング両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEICの点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEICの勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげたい。

**■講義分類**

英語検定試験準備

自己表現・英語コミュニケーション

**■到達目標**

授業履修前のTOEIC得点より100点アップした実力をつける。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

TOEIC受験へ向けての準備

**■評価方法**

授業への出席および参加 20%、授業内活動（小テスト・課題・宿題含む）40%、定期試験 40%

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：評価方法により計算された総合点が90%以上の場合  
 評価A（89～80点）：評価方法により計算された総合点が80～89%以上の場合  
 評価B（79～70点）：評価方法により計算された総合点が70～79%の場合  
 評価C（69～60点）：評価方法により計算された総合点が60～69%の場合  
 評価F（59点以下）：評価方法により計算された総合点が59%以下の場合

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

## ●事前履修科目について

【2011～2013年度入学生適用】

同一言語にて4単位（English Expression IとII、中国語IとII、韓国語IとII、もしくはIT活用法IとII（旧：プログラミング言語入門IとII）の組み合わせ）を修得していること。

【2014年度以降入学生適用】

同一言語にこだわらずD区分4単位を修得していること。

## ●履修定員について

この科目は原則30人の人数制限がある。履修希望者が30人を上回った場合は、初回の授業に出席した学生を優先し、加えて初回の授業で選抜に関する説明や授業の進め方に関して重要な指示を出すので、初回の授業に必ず出席すること。上記理由で初回の授業に欠席した場合履修できないことがある。

**科目名** 特別講座Ⅰ・Ⅱ(Consideration revolution Ⅰ・Ⅱ)**サブタイトル** 寺島実郎学長監修リレー講座**担当教員** 寺島 実郎、久恒 啓一、金 美穂、奥山 雅之、バートル、中庭 光彦、志賀 敏宏、小林 英夫、増田 浩通、中澤 弥、栢原 伸也、良峯 徳和、佐藤 洋行**■講義目的**

寺島実郎学長が提唱してきた「世界潮流と日本の進路」を軸に、国際情勢、経済、国内行政、IT、歴史など各分野における精鋭の専門家を講師として招き、通年の体系的なプログラムを開催する。

現代世界は、単なる同時不況、経済危機を超え、本質的な意味での構造転換に直面している。「外は広く、内は深い」、このことを知るだけで人間の重心は下がる。鈴木大拙の言葉のごとく、より広い視野で世界を見渡し、より深く自らの立脚点を見つめる視座が求められている。

この連続講義では、我々が生きている時代を的確に把握し認識するために、世界から見た日本、また日本国内の諸問題について複数回にわたり多面的に取り上げることで、問題意識の提起と深化を目指す。時代に発信する識者の生の声を聞いて現代世界を生きるヒントを得てもらいたい。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
グローバルビジネス  
ビジネスICT  
地域ビジネス

**■到達目標**

自分自身が生きている時代を把握し認識するために、連続講座を通じて提起される数々の問題や課題について自分なりの解決策を考える。

**■授業形態**

講義  
専用ノート作成

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ①寺島実郎学長監修リレー講座パンフレットのテーマにしたがってキーワードを調べる。
- ②中間レポートや最終レポートの作成にあたり、「レポートの書き方」について解説する。

**■評価方法**

出席(40%)、講義専用ノート(30%)、中間および最終レポート(30%)の割合で評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 出席(40%)、講義メモ(30%)、中間および最終レポート(30%)の合算点が、90%以上であること。  
尚、最終レポートは、寺島学長が採点する。
- 評価A (89~80点) : 出席(40%)、講義メモ(30%)、中間および最終レポート(30%)の合算点が、89~80%であること。  
尚、最終レポートは、寺島学長が採点する。
- 評価B (79~70点) : 出席(40%)、講義メモ(30%)、中間および最終レポート(30%)の合算点が、79~70%であること。  
尚、最終レポートは、寺島学長が採点する。
- 評価C (69~60点) : 出席(40%)、講義メモ(30%)、中間および最終レポート(30%)の合算点が、69~60%であること。  
尚、最終レポートは、寺島学長が採点する。
- 評価F (59点以下) : 出席(40%)、講義メモ(30%)、中間および最終レポート(30%)の合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

**■履修していることが望ましい科目**

グローバルビジネス系、地域ビジネス系、ビジネスICT系のすべての科目に関連する。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

- ①第1回目のガイダンスに出席しない場合は、履修できない。尚、履修希望者が多い場合(座席数が限られている為)、履修者を選抜する。春学期に履修できなかった場合は、秋学期に履修すること。
- ②地域住民をはじめとする一般参加者350名(有料)と一緒に外部講師の講演を聴講するため、受講ルールを厳守すること。(携帯電話・パソコン使用や私語・帽子着用・飲食の禁止、遅刻および途中退室の厳禁など)
- ③001教室の座席は、事前に指定された席に着席すること。受講態度は、座席番号でチェックする。
- ④講義内容および講義内容に関する自分の意見は、特別講座専用ノートに整理して記入する。
- ⑤自分自身の生きている時代と社会を見つめ、自分はどのように生きるべきかを思索し、発見するための講義としたい。講義で学んだ内容は、就職活動や社会生活などで自信を持って話せるようにしてもらいたい。情熱を持って参加してほしい。

**科目名** 日本経営史I(Business History of Japan I)**サブタイトル****担当教員** 常見 耕平**■講義目的**

近代(明治から昭和前期)日本の企業経営の歴史を理解する。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

近代日本の企業経営の歴史を理解すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日本の近代史について、概括的な理解を持つこと。

**■評価方法**

最終試験結果のみで評価する(100%)

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を90%以上理解していること  
評価A (89~80点) : 講義内容を80~89%理解していること  
評価B (79~70点) : 講義内容を70~79%理解していること  
評価C (69~60点) : 講義内容を60~69%理解していること  
評価F (59点以下) : 講義内容の理解が60%に満たないこと

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

明治から昭和前期までの近代日本の企業経営について学ぶ。理解の必要上、江戸期の経営についてもふれる。授業は文章を読み、内容を理解することを中心においてすすめる。したがって出席し、教師の話を聞いているだけというものではない。講義時間のほとんどを課題文の読解に費やすことになる。

なお、ここに記載しているのは、あくまで計画である。したがって、本シラバスの記載内容にかかわらず、講義開始後、受講生の理解や興味・関心、教員の興味・関心に応じて、講義内容を大幅に変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。変更がある場合は講義中に指示する。掲示等は行わない。

**科目名** 日本経営史II(Business History of Japan II)**サブタイトル****担当教員** 常見 耕平**■講義目的**

現代日本の企業経営の歴史を理解する。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

現代日本の企業経営の歴史を理解すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日本の現代史について、概括的な理解を持つこと。

**■評価方法**

最終試験結果のみで評価する（100%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義内容を90%以上理解していること

評価A（89～80点）：講義内容を80～89%理解していること

評価B（79～70点）：講義内容を70～79%理解していること

評価C（69～60点）：講義内容を60～69%理解していること

評価F（59点以下）：講義内容の理解が60%に満たないこと

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業は文章を読み、内容を理解することを中心においてすすめる。したがって出席し、教師の話を聞いているだけというものではない。講義時間のほとんどを課題文の読解に費やすことになる。

なお、ここに記載しているのは、あくまで計画である。したがって、本シラバスの記載内容にかかわらず、講義開始後、受講生の理解や興味・関心、教員の興味・関心に応じて、講義内容を大幅に変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。変更がある場合は講義時間中に指示する。掲示等は行わない。



**科目名** 日本経済史I(Economic History of Japan I)**サブタイトル****担当教員** 常見 耕平**■講義目的**

近代(明治から昭和前期)日本経済の歴史を理解する。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

近代の日本経済史について理解すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日本の近代史について、概括的な理解を持つこと。

**■評価方法**

最終試験結果のみで評価する(100%)

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を90%以上理解していること  
評価A (89~80点) : 講義内容を80~89%理解していること  
評価B (79~70点) : 講義内容を70~79%理解していること  
評価C (69~60点) : 講義内容を60~69%理解していること  
評価F (59点以下) : 講義内容の理解が60%に満たないこと

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業は文章を読み、内容を理解することを中心においてすすめる。したがって出席し、教師の話を聞いているだけというものではない。講義時間のほとんどを課題文の読解に費やすことになる。

なお、ここに記載しているのは、あくまで計画である。したがって、本シラバスの記載内容にかかわらず、講義開始後、受講生の理解や興味・関心、教員の興味・関心に応じて、講義内容を大幅に変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。変更がある場合は講義時間中に指示する。掲示等は行わない。

**科目名** 日本経済史II(Economic History of Japan II)**サブタイトル****担当教員** 常見 耕平**■講義目的**

現代日本の経済の歴史を理解する。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

現代日本の経済の歴史を理解すること。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日本の現代史について、概括的な理解を持つこと。

**■評価方法**

最終試験結果のみで評価する（100%）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義内容を90%以上理解していること

評価A（89～80点）：講義内容を80～89%理解していること

評価B（79～70点）：講義内容を70～79%理解していること

評価C（69～60点）：講義内容を60～69%理解していること

評価F（59点以下）：講義内容の理解が60%に満たないこと

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業は文章を読み、内容を理解することを中心においてすすめる。したがって出席し、教師の話を聞いているだけというものではない。講義時間のほとんどを課題文の読解に費やすことになる。

なお、ここに記載しているのは、あくまで計画である。したがって、本シラバスの記載内容にかかわらず、講義開始後、受講生の理解や興味・関心、教員の興味・関心に応じて、講義内容を大幅に変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。変更がある場合は講義時間中に指示する。掲示等は行わない。

**科目名** 日本語講座(初級) (Japanese Language Beginners Course)

**サブタイトル**

**担当教員** TIJ東京日本語研修所

**■講義目的**

留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員、教師をコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人力育成  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- (1) 日常生活や大生生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。
- (2) 日常生活や大生生活の中で自分が言いたいことを大体伝えることができる。
- (3) 自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

**■授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 その他 (ペアワーク・スピーチ・ドリル)

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

必要に応じて授業後にはレポートを提出すること。

**■評価方法**

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：80%  
 修了スピーチ：20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : (1) 社会生活や大生生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。  
 (2) 社会生活や大生生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことが論理的に発表できる。
- 評価A (89~80点) : (1) 社会生活や大生生活の中で話されている会話がだいたい理解できる。  
 (2) 社会生活や大生生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分の考えたことが分かりやすく発表できる。
- 評価B (79~70点) : (1) 社会生活や大生生活の中で話されている会話が理解できる。  
 (2) 社会生活や大生生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
- 評価C (69~60点) : (1) 社会生活や大生生活の中で話されている平易な会話が理解できる。  
 (2) 社会生活や大生生活の中で、自分が言いたいことを何とか伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことが短く発表できる。
- 評価F (59点以下) : 出席・授業中の活動・期末テストで基準を満たさなかった。

**■履修していることが望ましい科目**

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

**科目名** 日本語講座(中級I)(Japanese Language (Intermediate Course I))**サブタイトル****担当教員** TLJ東京日本語研修所**■講義目的**

留学生在日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するため、及び社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人育成  
地域ビジネス

**■到達目標**

- (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。
- (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。
- (3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
その他(ディベート・スピーチ)

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

必要に応じて授業後にはレポートを提出すること。

**■評価方法**

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：80%  
修了プレゼンテーション：20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことが分かりやすく発表できる。
- 評価A (89~80点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がだいたい理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことがしっかり発表できる。
- 評価B (79~70点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
- 評価C (69~60点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されているやさしい会話が理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを少し伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことが短く発表できる。
- 評価F (59点以下) : 出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

本講座は外国人留學生のための講座です。日本人學生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日合わせて一講座となりますので、両方を履修してください。

**科目名** 日本語講座(中級II)(Japanese Language (Intermediate Course II))**サブタイトル****担当教員** TIJ東京日本語研修所**■講義目的**

留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員・教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成  
地域ビジネス

**■到達目標**

- (1) 日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。
- (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。
- (3) 自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

必要に応じて授業後にはレポートを提出すること。

**■評価方法**

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：80%  
修了プレゼンテーション：20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことが分かりやすく発表できる。
- 評価A (89~80点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がだいたい理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことがしっかり発表できる。
- 評価B (79~70点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
- 評価C (69~60点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されているやさしい会話が理解できる。  
(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを少し伝えることができる。  
(3) 社会の問題について、自分が考えたことが短く発表できる。
- 評価F (59点以下) : 出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

**科目名** 日本語講座(上級) (Japanese Language An Upper Course)**サブタイトル****担当教員** TLJ 東京日本語研修所**■講義目的**

留学生が日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するため、及び、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人育成  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。
- (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。
- (3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
- (4) 調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。

**■授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 その他(ディベート・スピーチ)

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

必要に応じて授業後にはレポートを提出すること。

**■評価方法**

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：80%  
 修了プレゼンテーション：20%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話が問題なく理解できる。  
 (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを的確に伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことが論理的に発表できる。  
 (4) 調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションで披露できる。
- 評価A (89~80点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がほとんど問題なく理解できる。  
 (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをかなりの確に伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことが問題なく発表できる。  
 (4) 調べたこと、研究したことなどを分かりやすくプレゼンテーションできる。
- 評価B (79~70点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。  
 (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。  
 (4) 調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。
- 評価C (69~60点) : (1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がだいたい理解できる。  
 (2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。  
 (3) 社会の問題について、自分が考えたことがなんとか発表できる。  
 (4) 調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。
- 評価F (59点以下) : 出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。日本語講座上級を履修するためには、それ以前に日本語講座中級を履修していることが前提条件となります。

**科目名** 認知心理(Cognitive Psychology)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉**■講義目的**

認知心理学は、人間の心のしくみを学ぶ心理学の一分野である。人間が外部の環境や刺激をどう感じ、どう理解しているのかといったしくみを様々な角度から考察する。講義中に自分自身についても当てはめ、実験演習も行う。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 ビジネスICT

**■到達目標**

この授業で学んだことを日常世界の中においても理解・応用できるか、経済・経営活動においてこの知識を応用・適用できるか。

**■授業形態**

講義  
 グループワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各回に新出した用語についてまとめておく。また、講義内で実施した実験実習等についてもまとめを行うこと。

**■評価方法**

出席を前提とし、期末定期試験（100％）により評価する。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義内容を完全に理解できている  
 評価A（89～80点）：講義内容を理解できている  
 評価B（79～70点）：講義内容をおおよそ理解できている  
 評価C（69～60点）：最低限の理解ができている  
 評価F（59点以下）：講義科目の履修目標に達していない

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義は、幅広い心理学のうちの一分野である。「消費心理」、「社会心理」などの他の心理学の講義も聴講するとよりいっそう理解が深まる。また、「経営と意思決定」の講義にも関連がある。講義途中で心理実験やそのレポート提出を求められることがあるので、毎回の出席は必須である。私話、飲食、授業と関係のないPC操作、携帯電話操作、帽子・サングラス着用等禁止する。なお、本科目は履修制限科目であり履修希望者は初回講義に必ず出席すること。

**科目名** ビジネスコミュニケーションI(Business Communication I)**サブタイトル** 図解表現**担当教員** 久恒 啓一**■講義目的**

どのような経営体にも経営資源がある、それはヒト、モノ、カネ、時間、情報、システム、技術、人脈、ブランド、理念、歴史などである。ビジネスにおいてはこれらの経営資源をコミュニケーション活動によって活性化させ商品やサービスをつくりだし、それを外部に販売する。そして売った商品に対して、CS(顧客満足)活動によって苦情や意見を消費者から受け取り、再び経営資源を活性化させ、商品を改良し、新商品につなげていく。ビジネスとはこういったコミュニケーション活動の一連の流れのことである。

この講義では、上述の観点からビジネスにおけるコミュニケーションと情報に焦点をあて、今までの文章と箇条書きを中心とした情報処理の欠陥を克服するため、図を用いたコミュニケーションの理論と技術を学ぶ。毎回、産業界の現場の最前線のテーマを題材に実習を行い「図解コミュニケーション」という新しい問題解決の武器を身につけてもらう。

**■講義分類**ビジネスマネジメント  
グローバルビジネス**■到達目標**

- ・新聞社説等による個人ワーク、グループでのプレゼンテーションやディスカッションをふまえ、「日本の論点」(文春)の中の一流論者の時事論文をパワーポイントを用いて一枚の図に要約する技術を身につける。又、二枚以上の感想をワードで書く技術を身につける。
- ・自身で作成した図解を用いて大人数を対象に自信を持ってプレゼンテーションができるようになる。

**■授業形態**講義  
グループワーク  
プレゼンテーション**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

目についた新聞・雑誌の記事、他の先生の講義内容を努めて図解する。  
毎回の授業で作った図解をブラッシュアップする。

**■評価方法**

- 1.出席 50点
- 2.提出する図 25点
- 3.毎回の授業に関するレポートの内容 25点

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 全回出席。レポートが特に優れている。  
評価A (89~80点) : ほぼ全回出席。レポートが優れている。  
評価B (79~70点) : 高い出席率。レポートが良い。  
評価C (69~60点) : 高い出席率。レポートの提出あり。  
評価F (59点以下) : 低い出席率。レポート提出なし。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

毎回実習(作図・プレゼン・ディスカッション)を行うことで力をつけていくので、毎回出席することが望ましい。



**科目名** ビジネスコミュニケーションⅡ(Business Communication Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 樋口 裕一**■講義目的**

ビジネスマンとして産業社会で活躍し、問題発見、問題解決に不可欠なコミュニケーション力を養成する。そのために、授業ではアクティブラーニングの方法を用いて、社会人に必要なプレゼン力、文章力、発言力を養成する。

**■講義分類**

顧客理解  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

状況に応じて、社会人に必要な様々な文章を書けるようになる。自分の考えを伝え、相手を説得し、しかもマナーを守って好感を持たれるような文章を書く力を養う。

**■授業形態**

講義  
文章作成  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前もって次の週に学ぶ内容を予告するので、ネットなどでその実例を調べておく。また、復習として、時間内に書いた自分の文章を書きなおす。

**■評価方法**

提出文章（80パーセント）、平常点（20パーセント）  
出席が3分の2に満たないものは不合格にする。授業中に毎回、文章を書いてもらい、その総合点で採点する。なお、書き直して提出した場合、必ず加点する。授業中の発言についても加点する。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：原則として全回出席で、提出した文章が平均してBランクを surpass する者。また、授業中、優れた発言を行った者。  
評価A（89～80点）：出席が12回以上で、提出文章の平均がBに近い者。または、それに匹敵する授業中の発言がある者。  
評価B（79～70点）：出席が10回以上で、提出文章が平均してCランクを surpass する者。および、それに匹敵する発言を授業中に行った者。  
評価C（69～60点）：出席回数が10回以上で、提出文章の平均がDランクを surpass する者。または、それに匹敵する発言を授業中にした者。  
評価F（59点以下）：出席回数が9回以下の者。あるいは、提出文章の平均がDランクに満たず、授業中の発言を十分にしなかった者。なお、提出文章の再提出についても加点したうえでの評価となる。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業中の私語禁止。そのほか、飲食（ただし飲みものの摂取は許す）・ガム・帽子着用・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。文章力だけを身につけても説得できる文章を書くことはできない。発信したい内容を持つことによって表現力も増す。それゆえ、多くの時間を、単に表現法ではなく、思考法、社会的知識を身につけることに費やす。

**科目名** ビジネスコミュニケーション入門I(Introduction to Business Communication I)**サブタイトル** 情報のインプットからアウトプットまで**担当教員** 中澤 弥**■講義目的**

資料の収集・整理、および問題発見からその解決を経てプレゼンテーションするまでの能力を高める。

**■講義分類**

社会人育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

資料の収集を効率よく行える。  
ソフトウェアwordを使って資料をまとめることができる。  
ソフトウェアPowerPointを使って、プレゼンテーションができる。

**■授業形態**

講義  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

テーマが決定してから資料を集めると言うだけではなく、日常的に興味のある情報を貯めておくことが重要である。

**■評価方法**

出席 20%  
授業内課題 60%  
期末課題 20%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 出席12回以上で、課題がたいへん優れている。  
評価A (89~80点) : 出席12回以上で、課題が優れている。  
評価B (79~70点) : 出席10回以上で、課題が目標を充分上回っている。  
評価C (69~60点) : 出席10回以上で、課題が目標に到達している。  
評価F (59点以下) : 出席が9回以下。もしくは提出された課題が目標に到達していない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

**科目名** ビジネス数学基礎 (Practical Mathematics)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉、久保田 貴文、良峯 徳和、日本数学検定協会**■講義目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。この講義は必修科目である。演習の積み重ねを通して技術が身に付く構成になっているので、欠席しないこと。

本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数的・論理的処理力の基礎を完全習得する。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 ビジネスICT

**■到達目標**

経営情報学部で学ぶ上での最低限の数学の能力が身についているか。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

中学・高校数学の最も基礎的な知識を必要とする。各回で完答できなかった問題については時間外に自ら完成させておくこと。

**■評価方法**

成績評価は、80%以上の出席を単位取得の条件とし、その上で試験 (90%)、平常点 (10%) により評価する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 日本数学検定協会ビジネス数学検定LiteIにおいて90点以上およびそれに相当する成績を収めたもの  
 評価A (89~80点) : 日本数学検定協会ビジネス数学検定LiteIにおいて80点以上およびそれに相当する成績を収めたもの  
 評価B (79~70点) : 日本数学検定協会ビジネス数学検定LiteIにおいて70点以上およびそれに相当する成績を収めたもの  
 評価C (69~60点) : 日本数学検定協会ビジネス数学検定LiteIにおいて60点以上およびそれに相当する成績を収めたもの  
 評価F (59点以下) : 上記以外

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

割り当てられたクラスを確認の上、そのクラスで履修すること。  
 学期途中でクラス替えがあるので注意すること。  
 電車の遅延や病欠などの際には、遅延証明書・診断書を提出すること。

**科目名** ビジネス数学I(Business mathematics I)

サブタイトル

担当教員 久保田 貴文

**■講義目的**

ビジネスの現場で使える数学の基礎的な実力、特に、数学で物事を考える力を養います。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養う。また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキル、さらに発表するためのスライド・資料を作成するためのパワーポイントのスキルを養う。データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力をつけ、自ら問題を設定し数的処理により解決できるように学修する。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

中学までの数学（算数）：四則演算、割合の計算など  
特に、ビジネス数学基礎の内容。

**■評価方法**

中間試験50点、レポート50点。  
10回以上出席した者（もしくは欠席回数が5回未満の者）に対して評価を行う。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養われている。  
また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキル、さらに発表するためのスライド・資料を作成するためのパワーポイントのスキルが養われている。  
データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力があり、自ら問題を設定し数的処理により解決できる。
- 評価A (89~80点) : ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養われている。  
また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキル、さらに発表するためのスライド・資料を作成するためのパワーポイントのスキルが養われている。  
データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力があり、設定された問題に対して数的処理により解決できる。
- 評価B (79~70点) : ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養われている。  
また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキル、さらに発表するためのスライド・資料を作成するためのパワーポイントのスキルが養われている。  
データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力があり、設定された問題に対して、何らかのヒントや助けがあれば数的処理により解決できる。
- 評価C (69~60点) : ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養われている。  
また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキル、さらに発表するためのスライド・資料を作成するためのパワーポイントのスキルが養われている。
- 評価F (59点以下) : ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養われていない。  
また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキル、さらに発表するためのスライド・資料を作成するためのパワーポイントのスキルが養われていない。

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス数学基礎

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ビジネス数学Ⅱ(Business mathematics Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 今泉 忠**■講義目的**

経営上では、情報を活用して、未来の状態を予測し、そこで発生する問題を事前に対応できるようにすることは重要である。

本講義では、ビジネス課題の解決のために数学的知識を用いたモデル構築のための基礎としての、数学的な考察およびモデルの構築を目指し、関数の概念とその応用、微分積分の概念と応用について、基礎的な概念についての理解と実際の計算方法についての習得を目指す。

できるだけ、実際の問題解決のための数学と位置づけて講義を行う。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- (1)初等関数について微分積分を理解して行える
- (2)多変数関数の微分を理解して行える
- (3)関数近似について理解して行える

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

微分積分は単に公式に適用するのみでは、経営上活用できない。

数的・論理的処理力の向上のためにも、各講義回において出される課題を毎回次回までの解いて整理しておくことが求められる。

**■評価方法**

通常の課題等による平常点(60%)と学期末の試験結果(40%)により総合評価

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 学習した内容について理解して、実際の問題に適用し、解を求めることができる。  
 評価A (89~80点) : 学習した内容について理解して、解をもとめることができる。  
 評価B (79~70点) : 学習した内容について理解して、少なくとも2つの内容に関する解をもとめることができる。  
 評価C (69~60点) : 学習した内容について理解して、少なくとも1つの内容に関する解をもとめることができる。  
 評価F (59点以下) : 学習した内容について理解が不十分で解を求めることができない。

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス数学基礎

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ビジネス戦略I(Business Strategy I)**サブタイトル** 「徹底したグループワーク」で、超実践的に、ビジネス戦略の基本を身につける**担当教員** 志賀 敏宏**■講義目的**

- ①ビジネス戦略の基本（ひとつひとつの事業の成功のために必要なこと）を学ぶ
- ②事例研究、グループワーク、プレゼンテーションというアクティブラーニング手法を通じて学ぶ
- ③結果として、受講生はビジネスに関する思考力、知識の応用力、プレゼン力を身につける

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

講義目的①～③に関する基本的な力を確実に身につけること。  
特に、皆さんが「グループワーク」での資料作成、プレゼン、質疑応答を通じて、発言する勇氣、自ら論理的に考え、語り、討論する力をつけること。必ず「就活の強力な武器」となります。  
この目標に共感する人が履修登録、受講して下さい。

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向  
PowerpointやWordによる資料作成

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

発表担当（候補）の回にむけて、グループワークでの資料収集と発表資料作成が必要です。  
※受講者全員が、どこかのグループメンバーとなり、二回程度は発表担当（候補）となります。

**■評価方法**

出席35点。グループワークのプレゼンテーション45点。質問・発言など授業中の積極的活動20点。  
期末テスト結果は上記に更に加点します。  
細かい内訳は、授業中に説明します。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：下記の評価方法と配分に従って90点以上  
評価A（89～80点）：下記の評価方法と配分に従って80点以上、89点以下  
評価B（79～70点）：下記の評価方法と配分に従って70点以上、79点以下  
評価C（69～60点）：下記の評価方法と配分に従って60点以上、69点以下  
評価F（59点以下）：下記の評価方法と配分に従って59点以下

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**【重要】**  
グループワークで、自分たちの意見を発表し、他のグループと意見交換しようという意欲のある人が履修登録、受講して下さい。なお、「皆さんが、就活時に成績で不利にならないため」、受講とりやめの場合は、期間中に履修登録を削除して下さい。

**科目名** ビジネス戦略II(Business Strategy II)**サブタイトル** 「徹底したグループワーク」で超実践的にビジネス戦略の「企業の生き残り方」を身につける**担当教員** 志賀 敏宏**■講義目的**

- ①ビジネス戦略の内、企業の生き残り戦略として「多角化・新事業、イノベーション、国際展開」を学ぶ
- ②事例研究、グループワーク、プレゼンテーションというアクティブラーニング手法を通じて学ぶ
- ③結果として、受講生はビジネスに関する思考力、知識の応用力、プレゼン力を身につける

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人育成

**■到達目標**

講義目的①～③に関する基本的な力を確実に身につけること。  
 特に、皆さんが「グループワーク」での資料作成、プレゼン、質疑応答を通じて発言する勇氣、自ら論理的に考え、語り、討論する力をつけること。必ず「就活の強力な武器」となります。  
 この目標に共感する人が履修登録、受講して下さい。

**■授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向  
 PowerPointやWordによる資料作成

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

発表担当（候補）の回に向けて、グループワークでの資料収集と発表資料作成が必要です。  
 ※受講者全員が、どこかのグループメンバーとなり、二回程度は発表担当（候補）となります。

**■評価方法**

出席35点。グループワークのプレゼンテーション45点。質問・発言など授業中の積極的活動20点。  
 期末テスト結果は更に加算します。  
 細かい内訳は、授業中に説明します。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 下記の評価方法と配分に従って90点以上  
 評価A (89～80点) : 下記の評価方法と配分に従って80点以上89点以下  
 評価B (79～70点) : 下記の評価方法と配分に従って70点以上79点以下  
 評価C (69～60点) : 下記の評価方法と配分に従って60点以上69点以下  
 評価F (59点以下) : 下記の評価方法と配分に従って59点以下

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス戦略 I を受講して、その授業の進め方に共感していることが望ましいが、必須ではない。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**【重要】**  
 グループワークで自分たちの意見を発表し、他のグループと意見交換しようという意欲のある人が履修登録、受講して下さい。なお、「皆さんが、『不可の成績記録』により、就活時に不利にならないため」、受講とりやめの場合は、期間中に履修登録を削除して下さい。

**科目名** ビジネスソフトウェア活用 (Business Software)**サブタイトル****担当教員** トランスコスモス**■講義目的**

現代社会においてはビジネス・日常の場を問わず、Excel(表計算ソフトウェア)の利用シーンが増加しており、社会人としていまや必要不可欠な知識・スキルとなりつつある。

本科目では、実務に即したデータを使用し、テキストに沿って操作演習を行いながら、Excel2010の操作スキルを習得する。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

- (1) 企業での業務において、実践的に活用できるExcel2010の操作スキルを身につける
  - (2) MOS (Microsoft Office Specialist) Excel2010スペシャリスト(一般)レベル※に相当するExcel2010の操作スキルを身につける
- ※Excel 2010 スペシャリスト (一般) レベル：数式や基本的な関数の作成、セルの書式設定、グラフ作成など、Excelの基本的な操作を理解している

**■授業形態**

講義  
演習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ・ Microsoft Office2010のインストール及び動作確認
- ・ MOS (Microsoft Office Specialist) Excel2010スペシャリストとはどのような資格なのかの理解

**■評価方法**

評価は、出席率70%以上の者に対し、期末定期試験（100%）により行う  
注）遅刻・早退は欠席扱いとする。電車遅延の際は遅延証明書を提出すること。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 期末定期試験100点満点中90点以上  
 評価A (89~80点) : 期末定期試験100点満点中80点以上90点未満  
 評価B (79~70点) : 期末定期試験100点満点中70点以上80点未満  
 評価C (69~60点) : 期末定期試験100点満点中60点以上70点未満  
 評価F (59点以下) : 期末定期試験100点満点60点未満  
 または出席率70%未満

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

私語、飲食、授業と関係のないPC操作、携帯電話操作、帽子・サングラス着用、その他履修態度としてふさわしくない行為を禁止する。また著しく履修態度の悪い者にはその後の出席ならびに期末試験の受験資格を認めないことがある。



**科目名** ビジネス入門I(Business Principle I)**サブタイトル** 職業観の醸成**担当教員** 小林 英夫**■講義目的**

本講義は、多摩大学経営情報学部におけるキャリア形成科目の一つに位置付けられ、その目的は「職業観の醸成」である。

職業観の醸成され方は多様であり、それは就学期全体を通して、また就業後も継続して形成されていくものである。本講義は、職業観が醸成される過程における主要な要素を、「知識」「能力」「意思=志」の3点からとらえ、これらの要素の基礎を学生諸君に伝えることを目的とする。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成

**■到達目標**

- ・ビジネスとは何かを理解すること
- ・社会人としての基本的なビジネスの知識と能力を、学生生活を通じて身に付けていくための土台を築くこと
- ・自らが持つ職業観を理解し、学生生活での学習の方向性に対する指針を得ること

**■授業形態**

講義  
 双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には、事前学習しておくべき用語やポイントを自分なりに調べその意味を考えてくるとともに、T-NEXTにアップされる授業資料に事前に目を通し、疑問点を明確にしておくこと。

授業後には、授業資料に再度目を通して疑問点が解消されたかを確認し、解消されていない場合は次回の授業までに教員に質問するなどにより解消すること。

**■評価方法**

授業貢献点（59点）、期末試験（41点）  
 毎回の授業においてコメントシートまたはミニレポートの提出を求め、その内容をA（授業を聴き良い気づきがあった）、B（授業を聴いていた）、C（授業を聴いていたとは思わない）の3段階評価し、授業貢献点とする。Aは加点対象（6点）、Bが標準（4点）、Cは減点（-4点）、欠席は0点とする。従って、授業に出席していても、受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大59点とする。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：授業貢献点と期末試験の合計が90点以上  
 授業貢献点は単なる出席点ではなく、授業を聴き、更に自ら考えることができているかを評価する。また、授業を改善していくための建設的提言も授業への貢献として評価する。  
 期末試験では、ビジネスに関する知識、能力の習得度とともに、ビジネス社会で活動していくことに対する意思が築かれつつあるかを評価する。

評価A（89～80点）：授業貢献点と期末試験の合計が80点以上90点未満  
 評価B（79～70点）：授業貢献点と期末試験の合計が70点以上80点未満  
 評価C（69～60点）：授業貢献点と期末試験の合計が60点以上70点未満  
 評価F（59点以下）：授業貢献点と期末試験の合計が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

**科目名** ビジネス入門Ⅱ(Business Principle Ⅱ)**サブタイトル** 会社の利益はどのように計算されるのか？**担当教員** 清松 敏雄**■講義目的**

本講義は、企業の会計の仕組みを初めて学ぶ人を対象に、企業活動の成果としての「儲け（利益）」を計算する「企業会計」の仕組みを学ぶことで、産業社会の実践の場において企業の儲けに結びつく行動を考えられるようになる実践的知識の獲得を目的としている。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

企業活動を描き出す会計情報（特に利益）について、どのように計算されるのか、企業活動と結びつけて理解すること。

**■授業形態**講義  
グループワーク**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業の際に課す課題を提出すること。

**■評価方法**

授業中に提出を求める課題 100%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 企業活動を描き出す会計情報（特に利益）について、どのように計算されるのか、企業活動と結びつけて網羅的に理解できている。

評価A (89～80点) : 企業活動を描き出す会計情報（特に利益）について、どのように計算されるのか、企業活動と結びつけて概ね網羅的に理解できている。

評価B (79～70点) : 企業活動を描き出す会計情報（特に利益）について、どのように計算されるのか、企業活動と結びつけて初歩的な点の半数超を理解できている。

評価C (69～60点) : 企業活動を描き出す会計情報（特に利益）について、どのように計算されるのか、企業活動と結びつけて初歩的な点の半数程度を理解できている。

評価F (59点以下) : 企業活動を描き出す会計情報（特に利益）について、どのように計算されるのか、企業活動と結びつけて初歩的な点の半数程度の理解に至っていない。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**

**科目名** ビジネス法(Business Law)**サブタイトル****担当教員** 櫻井 博子**■講義目的**

産業社会の中心的な担い手である企業が行うビジネスは、一定の法ルールによって規律されている。昨今、企業にはルール（法）に対するコンプライアンス（法令遵守）が強く求められている。将来、社会人となり、企業の一員として仕事に従事する際には、企業もまた法に従って動いている側面があるというビジネス環境を理解している必要がある。

本講義では、まず、ビジネス上の取引のみならず、日常生活においても重要な役割を果たしている、契約に関する規律のあり方を学ぶ。次に、企業を規律する会社法について学ぶ。このように、ビジネスにかかわる法の根幹をなす、民法と会社法を中心に、基本的な法の在り方を学び、法に基づく問題処理能力を涵養する。

また、それぞれの制度の規定された背景や、意義・役割も含めて学ぶことにより、法的なものの考え方（リーガル・マインド）を身に着けることも目的とする。

**■講義分類**

問題解決  
 ビジネス環境理解  
 ビジネスマネジメント  
 社会人育成  
 社会人基礎力

**■到達目標**

ビジネスに関連する主要な法制度の構造と、その前提となっている法の基本概念を理解し、説明できるようになる。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

予習：教科書の該当部分を読む（20分程度）

復習：講義資料・ノートの見直し（15分程度）

**■評価方法**

授業内期末試験（100％）。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義で説明した法の概念、特定の問題状況に適用されるべき制度につき、意義や機能を理解した上で、要件と効果を正確に説明できる。

評価A（89～80点）：講義で説明した法の概念、特定の問題状況に適用される条文とその要件、効果を正確に説明できる。

評価B（79～70点）：講義で説明した法の概念について理解しており、特定の問題状況に適用されるべき法律の条文を挙げるができる。

評価C（69～60点）：講義で説明した法の概念や法律につき、基礎的な知識を理解している。

評価F（59点以下）：講義で説明した法の概念や法律に関する理解が不十分である。

**■履修していることが望ましい科目**

法学

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

履修希望者は、必ず初回の講義に出席すること。

（欠席分の資料は、正当な事由による欠席の場合にのみ、教員が準備します）。

講義に出席する際は、私語を慎み、自分で工夫しながらノートをとること。

**科目名** Practical English Conversation I・II (Practical English Conversation I・II)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取りましょう!**担当教員** 中村 その子**講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

**講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス

**到達目標**

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。  
 特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。  
 単に英語を話せるだけでなく、英語を話すことによって円滑な人間関係が作れるようになること、またそのために必要な言語以外の資質と素養も身に付けるよう心がける。

**授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向  
 発見学習  
 問題解決学習  
 経験・調査学習

学習者の能動的な学習への参加があり、学んだ情報を思い出しやすい、異なる文脈でもその情報を使いこなしやすい授業

**準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

**評価方法**

出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

**評価基準**

評価A+ (90点以上) : 出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%  
 上記の配分で得点を付け、90点以上の場合  
 評価A (89~80点) : 出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%  
 上記の配分で得点を付け、80点から89点の場合  
 評価B (79~70点) : 出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%  
 上記の配分で得点を付け、70点から79点の場合  
 評価C (69~60点) : 出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%  
 上記の配分で得点を付け、60点から69点の場合  
 評価F (59点以下) : 出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%  
 上記の配分で得点を付け、59点以下の場合

**履修していることが望ましい科目**

海外活動英語コミュニケーションと同時に履修することが望ましい。

**卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**留意点**

**科目名** ブランドマネジメント (Brand Management)**サブタイトル****担当教員** 細川 淳**■講義目的**

私たちの身の回りにはなぜブランドがあふれているのか。これは、社会の情報過多とスピード化が激化する現代において、一瞬で多くのメッセージを伝えようという切実な企業や組織のニーズを背景としている。ブランディングの力や戦略を理解する事は、ビジネス創造や顧客理解の学習を促進するだけでなく、学生個々人の中心的価値の理解・設定の一助にもなる。

本講義ではブランドマネジメントの基本概念の習得を目的とする。ブランド戦略の基礎と理論を学び、また多くの最前線事例を見て行く事で、グローバルビジネス、地域ビジネス、志企業の「積み重ね」と「今」を掴み取る。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 グローバルビジネス  
 地域ビジネス  
 社会人力育成

**■到達目標**

- ①ブランド戦略の概念と基本理論を体系的に理解する。
- ②多数の最前線事例の研究を通じて、ビジネス創造、ビジネスマネジメント、顧客理解の習得を促し、学生の着眼点、創造力、問題解決力などの社会人力育成を目指す。

**■授業形態**

講義  
 双方向

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

参考文献、その他のブランドやブランディングに関する書籍、雑誌のうち、学生自身の興味を喚起するものを読み込み、また日常生活で触れるブランドの店舗やURLを観察する事により、各自のブランドへの興味を喚起、ブランドというものについての各自のイメージ、疑問、仮説を整理、考察しておく。

**■評価方法**

期末試験 80%  
 授業参画 20% (コメント・ペーパー (随時実施) の提出、発言、質問、問いかけへの応答、各1回につき5点。)

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : ブランドマネジメントの各概念やキーワードをほぼ完全に理解し、使いこなせる。授業参画回数が多い。授業参画の点数は参画回数1回5点の加点方式。最大20点 (ただし参画の内容、授業態度により、減点もあり得る。)
- 評価A (89~80点) : ブランドマネジメントの各概念やキーワードを充分理解している。授業参画回数が比較的多い。
- 評価B (79~70点) : ブランドマネジメントの各概念やキーワードを平均以上に理解している。授業参画回数がやや多い。
- 評価C (69~60点) : ブランドマネジメントの各概念やキーワードある程度理解しているが欠落している部分も多い。授業参画回数がやや少ない。
- 評価F (59点以下) : ブランドマネジメントの各概念やキーワードの理解度が必要レベルに達していない。授業参画回数が少ないか少ない。

**■履修していることが望ましい科目**

マーケティング関連の授業を履修していることが望ましいが、必須ではない。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 文章伝達入門(Introduction to Communication in Writing)**サブタイトル****担当教員** 中澤 弥、樋口 裕一**■講義目的**

産業社会で活躍し、問題発見、問題解決に不可欠な文章力を養成する。現代の志塾として、将来のビジネスに直結する文章力養成する。授業はアクティブラーニングの方法を用いて双方で進めるので、自分の考えをプレゼンして他者に理解させる力を養うことにもなる。社会や人間に対する関心も高め、社会人基礎力を高め、自らの志を明確にすることにもなる。

**■講義分類**

顧客理解  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

社会についての関心を高め、社会問題について600字から800字程度の論理的な文章を、自在に書ける力を養う。

**■授業形態**

講義  
文章作成  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前もって次の時間に書く問題を示すので、書籍やインターネットサイトで下調べをする。授業後、学習したテクニックを用いて自分の文章を書きなおす。

**■評価方法**

提出文章（80パーセント）、平常点（20パーセント）  
出席が3分の2に満たないものは不合格にする。授業中に合計5～6回、小論文を書いてもらい、1点～5点で採点して返却する。平均2点を超過のものについては原則として合格とみなす。なお、書き直して提出した場合、必ず加点する。授業中の発言についても加点する。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：原則として全回出席で、提出文章の平均がBランクを超過者。また、授業中、優れた発言を行った者。  
評価A（89～80点）：出席が12回以上で、提出文章の平均がBランクに近い者。または、それに匹敵する授業中の発言がある者。  
評価B（79～70点）：出席が10回以上で、提出文章の平均がCランクを超過者。および、それに匹敵する発言を授業中に行った者。  
評価C（69～60点）：出席回数が10回以上で、提出文章の平均がDランクを超過者。または、それに匹敵する発言を授業中にした者。  
評価F（59点以下）：出席回数が9回以下の者。あるいは、提出文章の平均がDランクに満たず、授業中の発言を十分にできなかった者。なお、提出文章の再提出についても加点したうえでの評価となる。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

授業中の私語禁止。そのほか、飲食（ただし飲みものの摂取は許す）・ガム・帽子着用・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。文章力だけを身につけても説得できる文章を書くことはできない。発信したい内容を持つことによって表現力も増す。それゆえ、多くの時間を、単に表現法ではなく、思考法、社会的知識を身につけることに費やす。

**科目名** Basic Office English I・II(Basic Office English I・II)**サブタイトル****担当教員** ガイ ローズ**■講義目的**

The aim of this course is to provide practice for basic office situations as well as develop and practice skills for successful business interactions.

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

- 1 Read and discuss news about current business practices, entrepreneurs and situations
- 2 Learn how to express yourself in English to resolve issues and solve problems
- 3 Learn: Self-Introductions, Introducing others, Talking about companies, Meeting etiquette, At the office situations, Interviews and Socializing.
- 4 Live Conference Calls throughout the semester with foreigners
- 5 Group work and in class presentations.
- 6 Keywords/Things to know: Scheduling: (Ordinal Numbers, Days of the week, Months of the year, Time), Companies (Nationalities, Countries), Introductions ( "I'm..." "I work for..." ) Requests ( "Could I/you.." ) Interruptions ( "Excuse me" , "Pardon me" )

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向  
発見学習  
問題解決学習  
経験・調査学習

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎クラスごとに約2時間ほどの課題が与えられる。(時間は英語のレベルによる。)

**■評価方法**

宿題20%、テスト・クイズ40%、プレゼンテーション40%

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 授業参加、試験とプレゼンテーションの成績、宿題・課題の提出の総合で判断  
Excellent participation, all homework and assignments completed, excellent grades on tests and presentations
- 評価A (89~80点) : 授業参加、試験とプレゼンテーションの成績、宿題・課題の提出の総合で判断  
Above average participation, good grades on tests and presentations, homework and assignments completed
- 評価B (79~70点) : 授業参加、試験とプレゼンテーションの成績、宿題・課題の提出の総合で判断  
Average participation grades on tests/presentations, some homework and assignments completed
- 評価C (69~60点) : 授業参加、試験とプレゼンテーションの成績、宿題・課題の提出の総合で判断  
Below average participation, grades on tests and presentations, little to no homework completed
- 評価F (59点以下) : 授業に全くもしくは、ほぼ参加がない  
試験とプレゼンテーションの成績、宿題・課題の提出の総合で判断ができない場合  
Little to no participation, homework or assignments, failed tests and presentations

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

Class criteria subject to change

**科目名** ベンチャー企業論 (Venture company Theory)**サブタイトル** 企業家精神の習得**担当教員** 小林 英夫**■講義目的**

付加価値や雇用の創出においてベンチャー企業の果たす役割は非常に大きい。また、ベンチャー企業を興し発展させていくことを司る精神-企業家精神-は、創業に携わるかどうかにかかわらず、創造的なビジネス活動を行っていく上で重要なものである。

本講義では、組織のマネジメントとそれを支える行動規範としての企業家精神について包括的に学ぶとともに、現在活躍中の企業家や事業家の生き方を知ることを通じて、ベンチャー企業の経営やベンチャー企業への参画について学び、自らのライフマネジメントについて考える。

**■講義分類**

ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

- ・企業家という存在とは何かを理解することを通して、自らのキャリアデザインを考えられるようになる。
- ・事業立ち上げや発展に必要な知識を習得し、事業創業や急成長時に特有の課題や戦略を理解する。
- ・立志につながるアイデアを発見し、それを具体化させられるようになる。

**■授業形態**

講義  
 双方向  
 クラスディスカッション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業前には、事前学習しておくべき用語やポイントを自分なりに調べその意味を考えてくるとともに、T-NEXTにアップされる授業資料に事前に目を通し、疑問点を明確にしておくこと。

授業後には、授業資料に再度目を通して疑問点が解消されたかを確認し、解消されていない場合は次回の授業までに教員に質問するなどにより解消すること。

**■評価方法**

授業貢献点 (59点)、期末試験 (41点)  
 毎回の授業においてコメントシートまたはミニレポートの提出を求め、その内容をA (授業を聴き良い気づきがあった)、B (授業を聴いていた)、C (授業を聴いていたとは思われない) の3段階評価し、授業貢献点とする。Aは加点対象 (6点)、Bが標準 (4点)、Cは減点 (-4点)、欠席は0点とする。従って、授業に出席していても、受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大59点とする。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が90点以上  
 授業貢献点は単なる出席点ではなく、授業を聴き、更に自ら考えることができているかを評価する。また、授業を改善していくための建設的提言も授業への貢献として評価する。期末試験では、企業家精神に関する知識の習得度とともに、事業構想活動を通じたライフマネジメントのイメージが描けるようになっているかを評価する。

評価A (89~80点) : 授業貢献点と期末試験の合計が80点以上90点未満

評価B (79~70点) : 授業貢献点と期末試験の合計が70点以上80点未満

評価C (69~60点) : 授業貢献点と期末試験の合計が60点以上70点未満

評価F (59点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施する

**■留意点**



**科目名** 法学(憲法) (Jurisprudence (including Constitution Law))**サブタイトル****担当教員** 石岡 克俊**■講義目的**

本講義は、法ないし法的な考え方のエッセンスをできるだけわかりやすく解説していく。近年、法科大学院(ロー・スクール)をはじめとする専門職大学院の設置に世間の耳目が集まり、わが国でも専門家教育のためのカリキュラムが整いつつある。しかし、いうまでもないことだが、法は弁護士など一部専門家のもではなく、われわれ社会を構成する市民一人ひとりのものである。

われわれが、身近なトラブルに見舞われたとき、その解決に法的素養は不可欠である(トラブルの解決を担う公的な機関は、法をよりどころに判断し、その役割を果たしているからである)。また、昨今制度化された裁判員制度は、一定の法的判断を司法が行う場合に、一般市民がその判断に義務として関与する仕組みである。社会を構成するわれわれは、社会の問題を他人事としてではなく、わが事として考え、その判断や決定に参加することが期待されるが、このような公共的性質を有する判断や決定の際にも、法的素養を欠くことはできない(法は社会を成り立たせている基本的なルールであり、偏見や思い込みを伴った判断や決定は他者を説得する力を欠くからである)。

このように、法は自分自身の利益ないし必要と、他者や社会全体の利益・必要とを折り合わせるための拠り所であり、法を学ぶことは、自らの自由を享受しつつ、他者を意識した適切・妥当な判断ないし決定を促すことであり、また、公共的な判断や決定に参画するための作法を身につけることである。

ここに、専門家教育のための法学とは異なる、いわゆる「教養としての法学」の必要性が存在する。本講義では、「教養としての法学」の意義を踏まえ、法律家(法律学者や裁判官、弁護士などの法曹)と呼ばれる人々の基本的な思考や発想を理解することを目的とする。そして、いくつかの具体的な事例を参照しつつ、さまざまな問題に対しどのような考え方や方法で解決を導いているのか(導いてきたのか)見ていくことにしたい。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成

**■到達目標**

法や法律に関する基本的な知識や国や行政の仕組みに関する基本的な知識を身につけ、これらの背後にある基本的な発想ないしは思想を適確に理解すること、その上で、法律家と呼ばれる人々の思考や発想の端緒に気づき、問題解決の作法を身につけることを目的とする。

**■授業形態**

講義

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

事前に配布する講義資料(原則A4サイズ1枚)に目を通しておき、ポイントや疑問点などを確認しておくこと(正味1時間程度)。

**■評価方法**

学期末に行われる試験にて評価を行う(100%)

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 本講義で取り扱われた内容について、ほとんどすべて正確に理解している。  
 評価A (89~80点) : 法律家と呼ばれる人々の思考や発想の端緒への気づき  
 評価B (79~70点) : 法や法律の背後にある基本的な発想ないし思想の理解  
 評価C (69~60点) : 法や法律に関する基礎的な知識等の習得  
 評価F (59点以下) : 本講義で取り扱われた内容について、あまり理解していない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 簿記演習(Bookkeeping Practice)

サブタイトル

担当教員 渡辺 智信

**■講義目的**

われわれ個人が支出を適切に管理するために小遣い帳や家計簿をつけるように、企業がその財産を適切に管理するには簿記（特に複式簿記）による記録が不可欠である。また簿記は、企業が国・地方公共団体に対して行う納税や、株主に対して行う決算報告など、様々な目的に利用されている。本講義は、問題演習を通じて簿記の仕組みに対する理解を深めることを目的としている。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

複式簿記に対する理解を深めるべく、問題演習を行う。最終的には日商簿記検定試験3級程度の問題が解けるようになることを目標とする。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

本講義は『初級簿記』と併せて履修することが想定されている。簿記の内容に関する講義が『初級簿記』で扱われ、そこで学習した内容を問題演習によってブラッシュ・アップするのが本講義である。よって、『初級簿記』の復習が本講義への予習となる。本講義における問題演習で間違えたところ、理解が足りないと思われるところを中心に、1時間程度の復習が必要になるであろう。

**■評価方法**

期末試験80%、出席20%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 日商簿記検定試験3級で出題される程度の会計処理を、十分にマスターしている。  
評価A (89~80点) : 日商簿記検定試験3級で出題される程度の会計処理を、概ね網羅的にマスターしている。  
評価B (79~70点) : 日商簿記検定試験3級で出題される程度の会計処理を、半分超をマスターしている。  
評価C (69~60点) : 日商簿記検定試験3級で出題される程度の会計処理を、半分程度をマスターしている。  
評価F (59点以下) : 日商簿記検定試験3級で出題される程度の会計処理を、わずかしがマスターしていない。

**■履修していることが望ましい科目**

初級簿記

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

1. この科目で単位を取得するためには、講義時間中の演習問題に積極的に取り組み、複式簿記の仕組みを理解していこうとする前向きな姿勢と、自主的な学習が不可欠である。  
2. 『初級簿記』と併せて履修することを想定しているため、当該科目を履修していない場合には、自分でテキストを読むなどして、事前の学習にかなりの時間を必要とすることに留意すること。

**科目名** マーケティング・データ分析I(Marketing Data Analysis I)**サブタイトル** データ分析基礎(記述統計)**担当教員** 酒井 麻衣子**■講義目的**

IT化が進んだ現在、企業活動の現場には多くのデータが溢れている。これからの企業人には、そのデータから価値ある情報を読み取り、活用する能力が必須となる。

本講義では、データの入力・加工方法、集計やグラフ化による基本的なデータの特徴の捉え方、データ間の関連性を統計的に明らかにする方法を学ぶ。同時に、企業で広く導入されている専門的な統計解析ソフトIBM SPSS Statistics (旧 SPSS for Windows) の操作方法を身につける。

企業のマーケティング活動においてはさまざまなデータが取得され、活用されるようになってきている。みずからデータを取り扱い、データに基づいた判断ができるようになることは、企業人として大きな武器となるだろう。

講義とIBM SPSS Statistics による演習を中心に、以下のような内容について学ぶ。演習は可能な限り他の受講者とのディスカッションや共同作業によって行う。

**■講義分類**

顧客理解  
社会人育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

データの入力・加工方法、集計やグラフ化による基本的なデータの特徴の捉え方、データ間の関連性を統計的に明らかにする方法を習得する。同時に、企業で広く導入されている専門的な統計解析ソフトIBM SPSS Statistics (旧 SPSS for Windows) の操作方法を身につける。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

・指定図書『SPSS完全活用法 データの入力と加工(第3版)』および『SPSS完全活用法 データの視覚化とレポートの作成』

(データの入力方法、データの尺度水準、基礎統計量、1変量および2変量の視覚化)

・仮説検定の考え方 (「仮説検定」「母集団と標本」「帰無仮説と対立仮説」「有意水準と有意確率」)

各種検定・分析手法 (「相関係数」「偏相関係数」「カイ2乗検定」「t検定」「分散分析」)

**■評価方法**

出席および課題50%、期末試験50%

注：講義期間中に数回のレポート提出の機会を設ける。レポート内容に関連する講義について一定の出席回数を満たす受講者に限りレポートの提出を認め、採点のうえ返却する。

以下の項目についての到達水準に基づいて評価する。

- ・正しくデータの種類を見極められるか
- ・データの種類に適した要約と視覚化を行い、特徴を把握できるか
- ・仮説検定の考え方を理解し、適切な統計手法を選択し、分析結果を読み取れるか
- ・統計解析ソフトIBM SPSS Statisticsの基本的操作法を身につけているか等

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 顕著にすぐれた水準に達している  
 評価A (89~80点) : 到達すべき水準を十分に超えている  
 評価B (79~70点) : 到達すべき水準に達している  
 評価C (69~60点) : 十分とは言えないが最低限の水準を満たしている  
 評価F (59点以下) : 本講義で到達すべき水準に達していない

**■履修していることが望ましい科目**

- ・「マーケティング・データ分析Ⅱ」を履修する場合は、本講義の単位取得を前提とする。
- ・基本として統計の知識は前提としないが、情報系科目、「データサイエンスⅠ」「リサーチ入門」等で学習した基礎統計量についてあらかじめ復習しておくことを勧める。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

### ■留意点

- ・本講義は統計処理ソフトを用いてデータを分析するという専門性を身に付けるものである。毎回の演習の積み重ねで習得していくので、主体的な受講態度を重視する。関心と意欲をもって取り組める学生を対象とする。
- ・「マーケティングリサーチ」の受講を規模する場合は本講義の事前履修を強く推奨する。
- ・本講義は、社会調査士取得のための認定科目(C分野)に該当する。

**科目名** マーケティング・データ分析II (Marketing Data Analysis II)**サブタイトル** データ分析応用(多変量解析)**担当教員** 酒井 麻衣子**■講義目的**

「多変量解析」というと、何かとても難解なもののように聞こえてしまうかもしれない。しかし、読んで字のごとく「複数の(多)データ(変量)を扱う分析(解析)」であり、扱う変数が多い場合に行うデータ分析と考えればよい。

扱う変数が多くなればなるほど、そこに含まれる関係性を明らかにするには複雑な数学的処理が必要となる。しかし、分析手法の基本的な仕組みを理解し、必ず確認しなくてはならないポイントと、気を付けなければいけないポイントをわかっていれば、正しく分析を行い、結果を解釈することが可能になる。

本講義では、多変量解析の中でも代表的な分析手法に焦点を当て、その理論的基礎を理解するとともに、実際のデータに対して目的に即した分析を実施し、正しくその結果を読み取れるようになることを目的とする。データが溢れる現代において、企業のマーケティング活動においてもさまざまなデータが取得され、活用されるようになっている。膨大なデータの後ろに秘められた関係性を明らかにする多変量解析は、強力な武器となってさまざまな意思決定に役立つことになるだろう。

講義とIBM SPSS Statistics (旧 SPSS for Windows) による演習を中心に、以下のような内容について学ぶ。演習は可能な限り他の受講者とのディスカッションや共同作業によって行う。

**■講義分類**

顧客理解  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

多変量解析の中でも代表的な3つの分析手法(回帰分析・クラスター分析・因子分析)について、その理論的基礎を理解するとともに、実際のデータに対して目的に即した分析を実施し、正しくその結果を読み取れるようになる。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

マーケティング・データ分析Iで学んだ「変数間の関係性の捉え方」および「仮説検定の考え方」を理解していることが前提となるので、しっかり復習した上で講義に臨むこと。また、各講の予習・復習に際しては、講義概要に記した学習ポイントのキーワードを参考にすること。

**■評価方法**

出席および課題50%、期末試験50%

注：講義期間中に数回のレポート提出の機会を設ける。レポート内容に関連する講義について一定の出席回数を満たす受講者に限りレポートの提出を認め、採点のうえ返却する

以下の項目についての到達水準に基づいて評価する。

- ・各分析手法の基本的な仕組みが理解できているか
- ・各分析手法を実施する上での重要ポイントや留意点をしっかり把握しているか
- ・実際のデータに対し分析を正しく実施し、結果をレポートとして適切に表現することができるか 等

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 顕著にすぐれた水準に達している  
 評価A (89~80点) : 到達すべき水準を十分に超えている  
 評価B (79~70点) : 到達すべき水準に達している  
 評価C (69~60点) : 十分とは言えないが最低限の水準を満たしている  
 評価F (59点以下) : 本講義で到達すべき水準に達していない

**■履修していることが望ましい科目**

- ・本講義を履修する場合は、「マーケティング・データ分析I」の単位取得を前提とする。
- ・基本として多変量解析の知識は前提としないが、「データサイエンスII」「データサイエンスIII」「データサイエンスIV」等で学習した手法についてあらかじめ復習しておくことを勧める。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

### ■留意点

- ・本講義は統計処理ソフトを用いてデータを分析するという専門性を身に付けるものである。毎回の演習の積み重ねで習得していくので、主体的な受講態度を重視する。関心と意欲をもって取り組める学生を対象とする。
- ・本講義は、社会調査士取得のための認定科目(E分野)に該当する。

**科目名** マーケティング・リサーチ(Marketing Reserch)**サブタイトル****担当教員** 酒井 麻衣子**■講義目的**

企業のマーケティング活動においては、その目標達成や課題解決のためにさまざまな意思決定が行われる。その際に重要視されるのが、マーケティングリサーチによって得られる客観的なデータである。マーケティングリサーチの体系は非常に広範でその種類も多岐にわたり、また実務の現場で日々進化しているため、すべてを網羅的にマスターすることは難しい。本講義では、マーケティングリサーチの全体像をおおまかに把握するとともに、数あるリサーチ手法の中でももっとも一般的で活用範囲が広い、質問紙による定量調査に焦点を当て、その一連の知識・技術を実践的に習得することを目的とする。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネスICT

**■到達目標**

マーケティングリサーチの役割や種類を理解した上で、マーケティング課題に応じた調査課題の設定ができるようになること。  
さらにその調査課題に対し、特に定量調査において適切な調査票設計ができるようになること。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

関心のある商品やサービスのマーケティング課題に関する二次データ収集、マーケティングリサーチ全般に関する基礎的な知識、定量調査およびデータ分析に関する基礎的な知識

**■評価方法**

出席および授業内外での取り組み（レポート、講義内課題、グループワークへの貢献、成果報告等）50%、期末試験50%

以下の項目についての到達水準に基づいて評価する。

- ・マーケティングリサーチの基本概念を理解していること
- ・定量調査の一連の流れを理解していること
- ・調査課題に応じた適切な調査票設計に必要な知識を習得し、実際に設計できること
- ・調査結果を正しく理解し、解釈できること

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 顕著にすぐれた水準に達している  
評価A (89~80点) : 到達すべき水準を十分に超えている  
評価B (79~70点) : 到達すべき水準に達している  
評価C (69~60点) : 十分とは言えないが最低限の水準を満たしている  
評価F (59点以下) : 本講義で到達すべき水準に達していない

**■履修していることが望ましい科目**

- ・マーケティングリサーチの調査設計においては、調査目的に応じた適切なデータ分析手法の理解が必須となるため、以下の関連授業の事前履修もしくは同時履修を強く推奨する。  
「マーケティング・データ分析Ⅰ」「マーケティング・データ分析Ⅱ」
- ・以下の関連授業についても履修していることが望ましい。  
「リサーチ入門」「データサイエンスⅠ」

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・本講義は単なる座学ではなく演習やグループワークを通して理解の促進を図るため、主体的な受講態度を重視する。関心と意欲をもって取り組める学生を対象とする。
- ・本講義は、社会調査士取得のための認定科目(B分野)に該当する。

**科目名** マーケティング入門(Marketing Principle)**サブタイトル** マーケティングの意味と意義を理解する**担当教員** 村山 貞幸**■講義目的**

マーケティングの仕事を知り、その面白さを知ることで、志の視野を広げる。企業のマーケティングに関する問題解決に必要な基本的な概念を、さまざまな企業の最前線事例を通じて学び、マーケティング思考力、問題解決力を鍛えることで、実践的知識・能力を獲得することを旨とする。講義では、インタラクティブを重視し、ディスカッションやプレゼンテーションを組み込んで学んでいく。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人育成

**■到達目標**

- (1) マーケティングの仕事を知り、将来のキャリアについて考えるベースをつくる。
- (2) マーケティングの基本的な概念を理解する。
- (3) その概念を利用し、マーケティング戦略を立案できるようにする。
- (4) 学習した内容を、将来ビジネスの現場で使いこなし、さまざまな問題解決につながるような実践的知識・能力を獲得する。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回講義の内容を復習し理解した上で講義に参加すること。

**■評価方法**

出席50% パワーポイントで作成するレポート50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : マーケティングの主要概念を完全に理解しており、それを利用して戦略立案ができる。  
評価A (89~80点) : マーケティングの主要概念を8割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。  
評価B (79~70点) : マーケティングの主要概念を7割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。  
評価C (69~60点) : マーケティングの主要概念を6割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。  
評価F (59点以下) : マーケティングの主要概念の理解が6割を下回っている。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

履修人数などにより講義の構成は変わる可能性がある。



**科目名** マーケティングマネジメント論(Marketing Management)**サブタイトル****担当教員** 趙 佑鎮**■講義目的**

マーケティングとは「売れる仕組みづくり」である。そして、マーケティングマネジメント論とは、マーケティングをマネジメントの観点から捉える「システムの」、「全体最適」思考からの論である。そして、問題解決における手段と思考の多くが、マーケティングに通じるものである。この講義では、マーケティングマネジメントを行う人にとって必要な知識、概念、理論、手法、発想、技術、思考などの「基礎」を学ぶことで、その実行と問題解決の手がかりを得ることを目的とする。実際のマーケティングにおける企業を中心とした最前線事例をできるだけとりあげて、現実のマネジメントに適用可能になるよう説明する。担当教員としてメリハリがあり、分かり易い講義を常に心がけたい。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
グローバルビジネス

**■到達目標**

マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得をめざす。中小企業診断士試験レベルの問題解読を目指す。

**■授業形態**

講義  
双方向  
マーケティングの事例を扱ったビデオ・視聴覚教育

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義は教科書に該当する配布資料にそって進むわけだが、配布資料には翌週講義回の内容が常に記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前によく読んでおくこと。

**■評価方法**

- ・期末試験（筆記試験・50%）＋出席（50%）＋授業態度（加算点としての $+\alpha$ ）
- ・詳細はオリエンテーション時に提示

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を高度に理解しており、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得が高度である。中小企業診断士試験を勧めたいレベルの優秀な学生と認められる。

評価A（89～80点）：マーケティング・マネジメント・プロセスの基本をかなり理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得もかなりのレベルである。販売士試験を勧めたいレベルの学生である。

評価B（79～70点）：マーケティング・マネジメント・プロセスの基本をある程度理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得もある程度に達している。

評価C（69～60点）：マーケティング・マネジメント・プロセスの基本や、マーケティングマネジメントを行う際の重要概念を実践の場で活用しようとするための一部知識を有している

評価F（59点以下）：マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解していない結果として不合格

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・授業態度における私語、携帯電話（をいじること）、本授業とは無関係のパソコン使用、途中退室は絶対に不可であり、熾烈に厳しく注意する。これらの注意は学生の社会人としての常識涵養のための不可避なもの（教員個人的には極めて不本意）であるが、このような注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。
- ・講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後、変更する可能性があることを留意されたい。また、外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になることがあり得る。

**科目名** マーケティングモデリング(Marketing Modeling)**サブタイトル** ビジネスにおける意思決定に必要な知識を理解する。**担当教員** 栢原 伸也**■講義目的**

ビジネスを遂行して行く途中には、様々な意思決定の場面がある。この意思決定の合理性や効率性がビジネスの成否を決めることになる。

ビジネスにおける意思決定のスキルを高める事で社会にて活躍する力を磨いてもらおうというのが、講義の目的である。

マーケティングの知識の本質の理解を中心にビジネスモデルについての知見を深めていく。

**■講義分類**

ビジネス創造

グローバルビジネス

**■到達目標**

①ビジネスにおける意思決定とは何かを理解する。

②ビジネスモデルを理解する。

③マーケティングの知識を体得する。

**■授業形態**

講義（解説中心）

双方向

講義の最初には、導入として消費者心理に関する様々な事例の紹介をする。

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義の概要を参照。

**■評価方法**

出席（50％）授業中のテスト第1 4 講（50％）

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：①出席50%(回数を50点満点に換算する)

②授業内テストを50%(50点満点のテスト)

上合計点で評価する。

評価A（89～80点）：①出席50%(回数を50点満点に換算する)

②授業内テストを50%(50点満点のテスト)

上合計点で評価する。

評価B（79～70点）：①出席50%(回数を50点満点に換算する)

②授業内テストを50%(50点満点のテスト)

上合計点で評価する。

評価C（69～60点）：①出席50%(回数を50点満点に換算する)

②授業内テストを50%(50点満点のテスト)

上合計点で評価する。

評価F（59点以下）：①出席50%(回数を50点満点に換算する)

②授業内テストを50%(50点満点のテスト)

上合計点で評価する。

**■履修していることが望ましい科目**

無

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

※シラバスの内容は授業の進行状況によって変更する場合がある。

①第14講の授業中にテストを実施する。内容は授業内容の理解度の確認である。

この回をやむ無く欠席した場合は、レポートの提出によりテストの代替を考えるが、ハードルが高くなるので、テストへの参加をお薦めする。

②出席は重視するが、授業中に他者の勉強に迷惑をかける行為(私語など)がある場合は、出席を取り消す事もある。

**科目名** マクロ経済学(Macroeconomics)**サブタイトル** 初級(入門)篇**担当教員** 椎木 哲太郎**■講義目的**

「(高度)産業社会」のメカニズムを解明するために不可欠なマクロ経済学の原理を学び、「状況認識の学」として実態経済への適用を志向する。そして、マクロ経済の動向が市民生活と深い結びつきを持っていることを理解し、その健全な運営・制御に努める「問題解決の学」としての活用方法を身に付ける。さらに、双方向性を重視した「アクティブ・ラーニング」としての展開を試みる。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

初級レベルのマクロ経済学の理論を学び、企業活動の前提となるマクロ経済、諸変数の意味する所、その動向と因果関係、さらに日々生起するマクロ経済ニュースに関する理解を深め、生活者・市民として望ましいマクロ経済政策を構想・評価することができる。

**■授業形態**

講義  
 双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

シラバスの講義概要・「事前学習ポイント」に従って、必ず教科書の該当部分を読んで理解して講義に臨むこと。そのためには、毎週最低1時間以上は読み込むことが必要となろう。それを怠ると、経済理論の展開を理解することが殆ど困難となるであろう。

**■評価方法**

期末試験【持込不可】の結果(70%)、小テスト・レポート・出席(30%)

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : マクロ経済学の基礎的理解を示す試験の成績、通常の取り組みとともに顕著に優れている  
 評価A (89~80点) : 試験の成績、通常の取り組みとともに優れている  
 評価B (79~70点) : 試験の成績、通常の取り組みともに良い  
 評価C (69~60点) : 試験の成績、通常の取り組みともに普通  
 評価F (59点以下) : 試験の成績、通常の取り組みともに不十分

**■履修していることが望ましい科目**

ミクロ経済学

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

15週の講義でマクロ経済学のエッセンスを理解してもらうためには、ある程度の「詰め込み」もやむを得ないと考えられる。従って、9月の第1回は、ガイダンスを20分程度に抑えていきなり講義を行うので、そのつもりで臨みたい。ノートを毎回持参し、口頭での説明も含め逐一筆記することを要求する。各回の筆記量は、相当な分量となるであろう。欠席者は、他の出席者に講義内容を尋ね、確認する以外にない。

科目の特徴として、一度欠席すると講義についていけなくなる危険性が高い。毎回の講義の理解、自力での復習、積み重ねが不可欠な科目であることを十分心得おかれたい。

第4講目から本格的に教科書を使用する。それまでに、あらゆる手立てを駆使して教科書を入手し、必要箇所を読んでおかなばならない。それ以降、教科書の持参を忘れた者は、直ちに退室して頂く。講義は教科書の該当箇所を読んでいることを前提として行う。当該箇所とは、シラバスの講義概要に記されたページの範囲である。

講義中の私語、着帽、飲食、PC・スマートフォン・音楽イヤホン等の使用は禁止する。板書の撮影は認めない。私語した者には退室を命じる。遅刻及び途中退室は厳禁とする。

講義中に居眠りなど論外である。一度も出席せずして、或は教科書を購入せずして、単位を取得することは不可能であろう。

講義の中で「マクロ経済に関する最新の経済ニュース」を取り上げ、分析して頂くので、新聞やネットで日々チェックしておくことも必要とされる。

**科目名** ▶ ミクロ経済学 (Microeconomics)**サブタイトル** ▶ ミクロ経済学 (Microeconomics)**担当教員** ▶ 下井 直毅**■講義目的**

この講義ではミクロ経済学について学ぶ。ミクロ経済学は、産業社会の中で資源配分がどのように行われているのか、あるいはいないのかといった、メカニズムを明らかにすることを主たる目的としている。限られた生産資源である労働や資本などをいかに効率的に生産にまわすのか(配分するのか)という問題を扱う。また、企業や産業を取り巻く社会問題についても経済学の発想で分析し、問題把握を行う。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
グローバルビジネス  
地域ビジネス

**■到達目標**

できるだけ現実の産業社会における経済現象に関心を持ち、それを分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識の修得をめざす。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教科書の該当する範囲の熟読

**■評価方法**

出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計100%で100点満点。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識をほぼすべて修得できている  
評価A（89～80点）：分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識をかなり修得できている  
評価B（79～70点）：分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識を十分に修得できている  
評価C（69～60点）：分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識をある程度修得できている  
評価F（59点以下）：分析するための枠組みとしての経済学を学ばず、その基本的な知識を修得できていない

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

**科目名** 問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ(Complex Problem Solving Lecture on a special topic I～III)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 金 美徳、金子 邦博、志賀 敏宏**■講義目的**

皆さんは、これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできました。卒業を目の前に、皆さんは、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければなりません。

そこでこの講義では、これまでの学びを振り返り、皆さんが得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていくことを目的としています。

大学での学びは、正解がない問題に、現時点で最も妥当といえる答えを導き出す能力を身につけるものでした。ですから、現時点での正解と思われることを「答え」として覚えても意味はないのです。絶対的な正解が存在しない実社会での問題解決においては、答えと思っていたことが明日には別のよりよい答えに追い越され、間違いになることが日常茶飯事だからです。

この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確かなものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行っていきます。そのなかで、直面する問題から安易に逃げる「人生あきらめ症候群」から脱却して、社会人として当然に要求される「社会人基礎力」を高めていきます。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

**■授業形態**

双方向型の講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間程度的事後学習が必要です。

**■評価方法**

講義への出席（評価割合50%）と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価（評価割合50%）の成績により評価する。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）： 教員の指示に従い、問題解決の実習に真剣に取り組み、革新性を持った確実性のある解決策を提案出来るようになった。  
 評価A（89～80点）： 教員の指示に従い、問題解決の実習に真剣に取り組み、革新性はないものの確実性のある解決策を提案出来るようになった。  
 評価B（79～70点）： 教員の指示に従い、問題解決の実習に真剣に取り組んだが、能力の不足から、とりまとめた解決策の実現可能性に疑問があり、今後も問題解決能力の開発に努力が必要と判断される場合  
 評価C（69～60点）： 教員の指示に従い、問題解決の実習に真剣に取り組んだものの、情報探査能力が不足していることから、とりまとめた解決策が問題の解決に結びつかが不明で、情報探査能力と問題解決能力の開発にさらなる努力が必要と判断される場合  
 評価F（59点以下）： 教員の指示に従い、問題解決の実習に真剣に取り組んだものの、考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できなかった場合。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

(1) この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとめた後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

(2) この講義は、個別指導を中心とする双方向型授業であるので、教員からの指示に従って作業を積み重ねていくことが要求される。そのため、指示した作業を行わない、求めた報告を行わない等の不良行為があった場合には、単位は付与しない。

## 科目名 問題解決学入門I(Introduction to Complex Problem Solving I)

サブタイトル 多摩大学での「学び方」を知る

担当教員 金子 邦博

### ■講義目的

皆さんのこれまでの学生生活を振り返って見て、思い通りにならなくて「困ったこと」に直面したことが数多くあると思います。

限られた資源のなかで生きている私たち人類は、希望することをすべて実現することはできず、必死に努力をして1つでも多く希望を実現すべく生きているのですから、思い通りにならず「困ったこと」に直面するのは当然といえます。

これからの皆さんの人生は、「困ったこと」と真剣に向き合って、それをより希望に近い状態に変えること、すなわち「問題解決する」ことで、自らの希望をかなえて「幸福感」を得てより多き人生を実現していかなければなりません。

しかし、「問題解決する」にはスキルが必要です。スキルなしに、ただ闇雲に頑張っても空回りするだけできなかに前には進むことはできません。大事なのは、目の前の問題の本質を見抜き、それへの対応策を考え、実行する過程で自らのスキルとして身につけることなのです。

大学での学びは、答えが分かっているものを学ぶ高校までの学びとは決定的に異なっています。正解がない問題に、現時点で最も妥当といえる答えを導き出す能力を身につけるのが大学での学びになります。答えを覚えても意味はないのです。絶対的な正解が存在しない実社会での問題解決においては、答えと思っていたことが明日には別のよりよい答えに追い越され、間違いになることが日常茶飯事だからです。

この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを身につけることを目的としている「大学での学び」を始めるにあたって、「問題解決」をするのにはどうしたらいいのかという「問題解決の取り組み方」という最初の問題について、皆さんと一緒に考えていくことを講義の目的としています。

具体的には、多摩大学での勉学、大学生生活全般に関する理解と、「問題解決」のための基本となる問題の解き方への理解を中心に講義をします。

問題解決の取り組み方法を知ること、直面する問題から安易に逃げる「人生あきらめ症候群」から脱却して、社会人として当然に要求される「社会人基礎力」が身についていくのです。

### ■講義分類

社会人力養成

### ■到達目標

全15回の講義にすべて出席をして、下記の項目を修得すること。

- ①「問題解決」のための取り組み方を理解する。
- ②「問題解決能力」を向上するための大学での勉学、大学生生活に必要な支援の受け方を理解する。
- ③「問題解決」を進めるうえで絶対に必要な基本のITスキルを習得する。

### ■授業形態

「講義」が中心となるが、受講者の能動的な学習に多くの時間を割いて、「双方向」で学習を深めていく。

能動的な学習の内容としては、問題点を発見する実践学習、解決策を探索する調査学習、解決策を選択し実践する問題解決学習を中心に展開していく。

### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

この講義の受講にあたっては、前回の学習内容を完全に消化していることを前提に各回の講義を実施しますので、毎回1時間程度の講義内容に関して実習を中心とした復習が必要です。

### ■評価方法

出席50%、課題の提出物の評価50%。

### ■評価基準

評価A+ (90点以上) : 全講義に対する出席数の割合を点数化したもの(1% = 1点)と課された課題を実行して要求した提出物の評価点を平均したものが90点以上、および講義の受講態度が不良でない者。

評価A (89~80点) : 全講義に対する出席数の割合を点数化したもの(1% = 1点)と課された課題を実行して要求した提出物の評価点を平均したものが80点以上、および講義の受講態度が不良でない者。

評価B (79~70点) : 全講義に対する出席数の割合を点数化したもの(1% = 1点)と課された課題を実行して要求した提出物の評価点を平均したものが70点以上、および講義の受講態度が不良でない者。

評価C (69~60点) : 全講義に対する出席数の割合を点数化したもの(1% = 1点)と課された課題を実行して要求した提出物の評価点を平均したものが60点以上、および講義の受講態度が不良でない者。

評価F (59点以下) : 全講義に対する出席数の割合を点数化したもの(1% = 1点)と課された課題を実行して要求した提出物の評価点を平均したものが59点以下の者、または講義に際して、教職員の指示に従わず講義の進行を妨げるなど受講態度が不良だった者。

### ■履修していることが望ましい科目

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- (1) この科目は、2015年度以降の入学者専用科目ですので、2014年以前の入学者は履修することができません。
- (2) 講義に際して教員の指示に従わない等の受講態度に問題があった者（受講態度が不良だった者）に対しては、成績が良好であっても単位は付与しません。
- (3) 理由の如何を問わず、授業開始から5分を経過した以降の教室入室は認めません。交通機関等の遅延を理由として遅刻した場合は、遅延した交通機関が発行した遅延証明書に学籍番号と名前を記入して次回の講義の際に提出すれば、その回の講義の出席点は認定します。なお、出席点は認定しますが、課題については当日しか提出出来ないで出すことはできませんので、その回の課題点は0点になります。また、病気による欠席については通院や入院したことが証明出来る場合（通院時の領収書や診断書の写し）に限り出席点を認定します。通院等せずに自宅療養した場合には、病気の実態が証明出来ませんので公平性の観点から出席の認定はしません。
- (4) トイレや体調不良での途中退回は認めますが周りの受講生に迷惑にならないよう静かに退入室してください。
- (5) 出席点は、学生証のカードリーダーへのタッチと講義終了時の課題の提出により把握します。学生証を忘れてカードリーダーにタッチ出来ない場合は出席点は0.5回分の評価になります。学生証は常時携帯し忘れないようにしてください。

## 科目名

問題解決学入門Ⅱ(Introduction to Complex Problem Solving Ⅱ)

## サブタイトル

## 担当教員

下井 直毅、大森 映子、趙 佑鎮、良峯 徳和、栢原 伸也、石川 晴子、清松 敏雄

## ■講義目的

実学志向の多摩大学経営情報学部では、産業社会の問題解決の最前線に立つ力の育成を重視している。そのためには、各種講義や演習で学ぶ知識を組み合わせ、様々な問題にどう挑み、解決するかを修得する必要がある。この目的から、この科目では毎回異なる教員が様々な分野のテーマを取り上げ、そのテーマに関して「問題はどこにあるか（解くべき問題は何か）」「なぜ問題となっているか」「その問題をどのように解決するか」などを、事例や方法論の立場から解説する。

※7教員がコーディネーターとなり、毎回異なる教員が講義を行うオムニバス形式を採用する。

## ■講義分類

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
グローバルビジネス  
ビジネスICT  
地域ビジネス

## ■到達目標

様々なテーマの問題解決事例を学び、①それぞれのテーマに自分ならばどのようなアプローチをするか。また、②その事例の問題解決に用いられた方法が、自分の興味がある問題にいかに応用出来るかを考えられることを目標とする。

## ■授業形態

講義  
レポート

## ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

オムニバス形式のため、毎回 次の授業の準備項目、復習項目について授業内で知らせる。それに従って、準備を進めること。

## ■評価方法

出席（50%）および毎回講義の最後に提出するレポート（講義レポート）（30%）と期末レポート（20%）による。

## ■評価基準

評価A+（90点以上）：各回、語られるテーマについて、①自分なりのアプローチを明示することができ、その理由も明確に語る事ができる。②その回で示された問題解決事例が、自分の興味ある問題に対して、どこまで応用可能であるかしっかりと示すことができる。

評価A（89～80点）：語られたテーマを正しく理解し、自分の言葉でまとめることができる。レポートが理路整然としている。問題解決の方法を自分の問題にあてはめることができる。

評価B（79～70点）：レポートを自分の言葉でまとめることができる。問題解決について理解している。

評価C（69～60点）：一応の出席と、的外れではないレポートをまとめることができる。自分の興味ある問題を説明することができる。

評価F（59点以下）：到達目標に達していない。

## ■履修していることが望ましい科目

## ■卒業年次生対象再試験の実施

実施する

## ■留意点

「問題解決学総論」の読み替え授業であるため、履修できるかどうか自分で確認すること。各回のテーマやスケジュールについては、第1回目の講義で配布する。



**科目名** 問題解決メソッドI(Problem-solving methods I)**サブタイトル****担当教員** 増田 浩通**■講義目的**

問題解決学メソッドとして、主に経営科学の基本的な考え方を理解することを目的とします。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

この授業では数学とExcelを多く使います。数学的思考を身につけ、Excelの基本が身につくことを到達目標とします。パソコンは毎週持ってきて、Excelが使えるようにしておくこと。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

EXCELの基本的な使い方。

**■評価方法**

授業内でのT-NEXTへの課題 70%、中間課題 15%、期末課題 15%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : T-NEXTに提出された課題と中間課題、期末課題で判定する。

評価A (89~80点) : T-NEXTに提出された課題と中間課題、期末課題で判定する。

評価B (79~70点) : T-NEXTに提出された課題と中間課題、期末課題で判定する。

評価C (69~60点) : T-NEXTに提出された課題と中間課題、期末課題で判定する。

評価F (59点以下) : 課題の未提出など

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** 問題解決メソッドIII(Problem-solving methods III)**サブタイトル****担当教員** 増田 浩通**■講義目的**

コンピュータ、通信技術、通信網の発達とその融合によって、インターネットなどの通信ネットワークが急速に発達してきた。本講義では、情報ネットワークの概念と役割、基礎技術、LAN、インターネットの概要について学び、それらがどのようにインターネット社会における問題解決と結びつくかを学ぶ。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

本講義で説明する情報理論については、ビジネスパスポート等の情報技術者試験の問題を解くことができるレベルに到達することを目標とする。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教科書をよく読んでおくこと。

**■評価方法**

中間レポート50%、期末テスト50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 中間レポートと期末テストで評価する。

評価A (89~80点) : 中間レポートと期末テストで評価する。

評価B (79~70点) : 中間レポートと期末テストで評価する。

評価C (69~60点) : 中間レポートと期末テストで評価する。

評価F (59点以下) : 中間レポートと期末テストで評価する。

中間レポートの提出がないか、または期末テストを受けないと評価はFとする。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ヨーロッパ経済論(European Economic)**サブタイトル****担当教員** 田中 理**■講義目的**

ヨーロッパでは各国・各地域が民族、言語、文化、宗教などの垣根を越え、政治、経済、司法、外交・安全保障など様々な分野で政策の統一や調整を進めている。1950年代に6ヶ国で始まった欧州統合のプロセスは28ヶ国体制に拡大。1999年には域内で単一の通貨を用いるユーロ圏が発足した。急速に統合を進める影で様々な歪みも生じている。ユーロの崩壊や解体の危機が叫ばれた欧州債務危機の最中、ヨーロッパ諸国は統合を次のステージに進めることで危機克服を目指した。だが、長引く景気停滞、失業や貧困の増加から、ヨーロッパ市民の間では現状への不満が高まっている。また、中東や北アフリカ情勢の不安定化を受け、ヨーロッパに多くの難民や移民が押し寄せ、一部の市民の間からは自身の生活が脅かされているとの不満の声が聞かれる。こうした不満の矛先は統合への批判や難民・移民の排斥という形でヨーロッパの各地で噴出している。ヨーロッパは今、統合の求心力を保てるかの岐路に立たされている。本講義では、こうした現在進行形のヨーロッパ情勢と一般的なヨーロッパ経済の教科書に書かれている内容の「橋渡し」を意識し、時事的なトピックを随時取り上げる。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成  
グローバルビジネス

**■到達目標**

ヨーロッパの政治・経済・金融情勢を題材に、国際問題に関する情報収集の力を磨き、それを整理し、分かりやすく伝える能力を身に付けることを目指す。

**■授業形態**

原則として講義。  
但し、履修者の人数次第ではグループワークやプレゼンテーションの機会を設けたい。

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義では最新のヨーロッパ事情について数多く扱うので、普段から新聞やニュース報道などでヨーロッパの経済・政治情勢にアンテナを張り巡らせておく。教科書の内容と現実事象とがどこで結び付いているかを意識して学習する。

**■評価方法**

出席(30%)、中間レポート(30%)、期末レポート(40%)  
履修者が少ない場合にはレポートの代わりにグループワークやプレゼンテーションで代替する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を非常によく理解している。  
評価A (89~80点) : 講義内容をよく理解している。  
評価B (79~70点) : 講義内容を概ね理解している。  
評価C (69~60点) : 講義内容の理解で不十分な点がある。  
評価F (59点以下) : 講義内容を理解していない。

**■履修していることが望ましい科目**

基礎知識を前提としない授業を心掛けるが、経済学や金融論の初歩的な知識(新聞の経済・金融記事が理解できる程度)やヨーロッパを中心とした世界史の知識があることが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・授業では最新のヨーロッパ事情や現地情報などを適宜紹介するが、日頃から新聞、テレビ、インターネットなどでヨーロッパのニュースに触れておくと、授業の理解や関心が深まるのでお勧めしたい。
- ・レポート執筆にあたって、統計データの入手方法や分析・加工方法を知りたい履修者は、別途指導する機会を設けるので、担当教員に相談すること。

**科目名** 余暇マネジメントⅠ・Ⅱ(Management of Leisure Life & Leisure SocietyⅠ・Ⅱ)**サブタイトル****担当教員** 杉田 文章**■講義目的**

- (1) 以下三点について知り、自分なりの知見を有することに資する
  - ① 「余暇」の概念、歴史、現状、意義
  - ② 「余暇市場」の構造、現状、背景
  - ③ 「余暇製品」産業の使命、マーケティング方法の中核
- (2) 「余暇をマネジメントする」概念を理解することによって、問題発見・解決の切り口を与えること。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 グローバルビジネス  
 地域ビジネス

**■到達目標**

本講義における「余暇」「レジャー」の概念と意義について十分理解し、たとえばあるレジャー製品（財もしくはサービス）について、そのマーケティングの在り方について論じることができるようになること。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ① 「余暇」「余暇市場産業」に関する諸情報
- ② 今日の余暇市場動向や観光・レジャー政策の動向に関する情報を、講義内で示される諸資料等より、把握してもらいたい。

**■評価方法**

期末試験6割、講義中のレポート等を含めた受講態度などの参加状況によって4割を評価することとする。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 講義で学んだ諸理論について深く理解していること。  
 社会・歴史的背景と余暇の在り方の関係を深く理解し、今後の余暇産業・余暇政策の在り方についての意見形成がなされていること。
- 評価A (89~80点) : 講義で学んだ諸理論について深く理解していること。
- 評価B (79~70点) : 余暇の概念について理解できていること。  
 余暇（余暇社会）のマネジメントの必要性について論じることができること。
- 評価C (69~60点) : 余暇をめぐる理論、現状について、最低限理解しており、企業活動にかかわった際にこの理解を生かすことができるようになること。
- 評価F (59点以下) : 上記のいずれも達成されていない場合、F評価とする。

**■履修していることが望ましい科目**

特に指定等はないが、近代史や経済、経営の基礎系の科目での学修内容を良く理解した上で受講されることを望んでいます。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

履修制限を行います。選抜方法は別途周知します。

**科目名** ライフ・デザイン(Life Design)**サブタイトル****担当教員** 梅澤 佳子**■講義目的**

生活環境が豊かになり、日本人の平均寿命は80歳を超えるようになりました。高齢化、少子化、人口減少、グローバル化、産業構造の変化、ICTや技術開発の進歩等々により、私たちの生き方（暮らし、仕事、教育、余暇）や社会のあり方をは大きく変わろうとしています。足元の暮らしをしっかりと見つめ、これからの生き方、社会のあり方に、一人ひとりが真剣に向き合い、考え、行動するための基本的な知識を学ぶことを目的としています。

**■講義分類**社会人力育成  
地域ビジネス**■到達目標**

1. 社会的なものの方、考え方を理解すること。
2. 暮らし、地域に興味と関心を向けることができるようになる。
3. 暮らし、地域の課題をみつけ解決のためのデザインを考える習慣がつくこと。
4. 自分自身のライフデザインを考える。

**■授業形態**講義  
グループディスカッション  
グループワーク**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

理解を深めるために、予習・復習は大切です。指定図書を多数紹介しているので、図書館で見ておくこと。後半は、アクティブラーニングを中心に行いますが、フィールドワークが含まれる。

**■評価方法**提出物（30%）、中間テスト（30%）、最終課題（40%）  
絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。**■評価基準**

評価A+（90点以上）：授業内容について十分に理解し、与えられた課題に対して、たいへん優れた提案を行うことができた。  
評価A（89～80点）：授業内容について十分に理解し、与えられた課題に対して、優れた提案を行うことができた。  
評価B（79～70点）：授業内容について理解し、与えられた課題に対して、提案を行うことができた。  
評価C（69～60点）：授業内容について十分に理解できているとは言えない。与えられた課題につもまとめが不十分である。  
評価F（59点以下）：著しく理解が不十分である。

**■履修していることが望ましい科目**

特にありません。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

出席は評価のための前提条件です。

**科目名** ▶ リサーチ入門(Introduction to research)**サブタイトル** ▶ リサーチの意義と楽しさを学ぶ**担当教員** ▶ 村山 貞幸**■講義目的**

ビジネスにおいて、リサーチはさまざまな場面で行われている。その方法も多岐に渡っている。本講義では、リサーチを広くとらえ、講義や実践を通じその意義と概要を理解することを目的とする。  
ビジネスを取り巻く環境は変化し続け、それに伴いリサーチの範囲や方法も変わり続けている。その動向もふまえながら、できるだけ多くの事例や実践を通じて理解を深めたい。  
リサーチを身近なものとして関心を高め、関連講義を積極的に受講する動機づけを行う。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

リサーチの意義を理解する。  
リサーチの概要を理解する。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義だけでなく、リサーチの実践に力を入れるため、時間内では完結しない場合は、講義後にも作業、考察、解釈が継続することになる。  
予習は不要。

**■評価方法**

出席50% ワードなどで作成するレポート50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : リサーチの意義と概要を完全に理解している。  
評価A (89~80点) : リサーチの意義と概要を8割理解している。  
評価B (79~70点) : リサーチの意義と概要を7割理解している。  
評価C (69~60点) : リサーチの意義と概要を6割理解している。  
評価F (59点以下) : リサーチの意義と概要の理解が6割を下回っている。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

入門科目として体系的理解よりも、関心を高めることに注力する。リサーチを広くとらえ、できるだけ多くの体験を通じてリサーチを身近に感じることになることを心掛ける。したがって、内容は難しくないが、「実践」を重視するため講義外の作業が多くなる。  
受講人数により、内容を変える可能性がある。

**科目名** 立志特講Ⅰ～Ⅲ(Aspiration lecture on a special topic I～III)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 金 美德、金子 邦博、志賀 敏宏**■講義目的**

本学では、大学での学びとその延長線上にある実社会での活躍を展望し、自らの可能性と向き合って、「志」を確立し、大人になった将来の自分をどう創り上げていくのかを考えることを目標に教育を行っている。

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見だし、それにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかねばならないのである。

この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめていく。

このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うこと目指していく。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

**■授業形態**

双方向型の講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間程度の事後学習が必要です。

**■評価方法**

完成したロードマップ（評価割合100%）の成績により評価する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成出来た。  
 評価A (89～80点) : 実現に向けて一層の努力は必要だが、成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成出来た。  
 評価B (79～70点) : 現時点での実現可能性には不確実な面が多いが、目標とすべき課題が明確なロードマップができた。  
 評価C (69～60点) : ロードマップが完成し、長期的な目標は明確なものにはなったが、そこに到達するまでの短期的な目標からの発展経路の整理が不十分で、今後、更なる見直しが必要と認められる場合。  
 評価F (59点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成出来なかった場合。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

(1) この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとめた後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

(2) この講義は、個別指導を中心とする双方向型授業であるので、教員からの指示に従って作業を積み重ねていくことが要求される。そのため、指示した作業を行わない、求めた報告を行わない等の不良行為があった場合には、単位は付与しない。

**科目名** 立志論I(Aspiration Theory I)**サブタイトル** 働く意味を考え、志を確立する。**担当教員** 栢原 伸也**■講義目的**

「立志論I～V」の講義は、大学での学びとその延長線上にある実社会での活躍を展望し、自らの可能性と向き合って、「志」を確立し、大人になった将来の自分をどう創り上げていくのかを考えることを目標としている。

この講義では、将来の可能性を考えるきっかけに「出会い」、将来への希望を見出して欲しいと思います。様々な出会いをして「世界観」を広げるとともに、「成長する自分」を創り上げるために、自分の「人格」と向かい合ってください。

立志論Iでは、「働く意味」に出会ってまいります。実際に社会で働いている人たちが、努力している姿の映像を中心に見ていきます。そして、自分自身に「ピンときた」言葉や価値観を蓄積していきましょう。

**■講義分類**

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造、ビジネスマネジメント、社会人力育成

**■到達目標**

講義で学習したことを踏まえて、「働く意味」を理解し、社会人としての将来の活躍をイメージして、これから進むべき道を具体的に設定することを目標とします。

**■授業形態**

講義

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前回の内容について考えた事を、自分の言葉でまとめる。

**■評価方法**

出席50%と期末レポート50%の合計得点で成績をつける。

ただし、講義に際して教員の指示に従わない等の受講態度に問題があった者に対しては、成績が良好であっても単位は付与しない。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 出席と期末レポートの合計が90点以上。  
評価A (89～80点) : 出席と期末レポートの合計得点が80点以上90点未満  
評価B (79～70点) : 出席と期末レポートの合計得点が70点以上80点未満  
評価C (69～60点) : 出席と期末レポートの合計得点が60点以上70点未満  
評価F (59点以下) : 出席とと期末レポートの合計得点が60点未満

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**



**科目名** 立志論Ⅲ(Aspiration Theory Ⅲ)**サブタイトル** 立志起業家論**担当教員** 趙 佑鎮**■講義目的**

規模が小さくても良いサービスと製品を世の中に提供することでイノベーションを起こし、成長速度が早い企業のことをベンチャー企業という。この「ベンチャー」という言葉を最初に日本で広めたのは多摩大学2代目学長である中村秀一郎教授であり、彼はアントレプレナーシップのことを「単なる営利欲ではなく、それを突き抜けた達成動機と人間の気概」としている。要は、ベンチャーの経営者は単なる金儲けだけではなく、アントレプレナーシップを以って社会に貢献し、歴史を前進させる役目があるということを強調しているのである。起業家とベンチャーの経営者は、ほぼ同義語だと理解してよからう。

この「立志論Ⅲ」では将来、ビジネスを起こしたいと考えている学生、大企業や中小企業の中でコーポレート・ベンチャーを手掛けたいと思う学生、金融機関などで支援側に立ちたいと思う学生等がその実践に生かせる手がかりを学ぶことを科目の目的とする。この場合の「手がかり」とは、起業家に必要な最低限の「初歩的知識」すなわち、ビジネス・プラン、戦略、組織、マーケティング等のことであり、さらにはビジネスを立ち上げようという「志」、「やる気、思い」である。本講義においては知識以上に「志」、「やる気、思い」は重要なキーワードである。

この授業では、理論を中心とした部分と共に志・実践に役立つ部分を強化している。趙が講義した内容と対応するかたちで、外部講師として本学に招いたベンチャー業界の実務家（産業社会で活躍し名声を得ている起業家、インキュベーターマネジャー、メンター）は、起業経営の現実と最前線事例のダイナミクスさを学生諸君に感じさせるであろう。

将来何をしたいのか漠然としている学生にとっても実務家の体験談を交えた講義は志・キャリア設計の参考のうえで有意義であると思われる。趙は外部講師の講義にコーディネーターとして毎回参加し、司会、質疑応答の進行をつとめる。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- ・ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識習得
- ・起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを理解する
- ・自分にとって経営(学)を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくり

**■授業形態**

講義  
 双方向  
 ベンチャー企業の事例を扱ったビデオ・視聴覚教育

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義は教科書に該当する配布資料にそって進むわけだが、配布資料には翌週講義回の内容が常に記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前によく読んでくること。

**■評価方法**

- ・定期期末試験（ペーパーテスト40%）＋レポート（3本・30%）＋出席（30%）＋授業態度（加算点としての $\alpha$ ）
- ・期末試験は趙の講義内容、レポート3本は外部講師の内容を中心に行う
- ・レポート3本は、MS Office wordを用いた課題作成提出であり、パワーポイントと表計算ソフトのExcellを用いる工夫も好ましい
- ・詳細はオリエンテーション時に提示

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：・ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識を高度に習得している  
 ・起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを高度に理解している  
 ・自分にとって経営(学)を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくりをレポートのなかで大変良く述べられている

- 評価A (89~80点) : ・ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識をかなり習得している  
・起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングをかなり理解している  
・自分にとって経営(学)を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくりがレポートのなかで良く述べられている
- 評価B (79~70点) : ・ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識の基本を習得している  
・起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングの基本をある程度理解している  
・自分にとって経営(学)を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくりがレポートのなかで一部分述べられている
- 評価C (69~60点) : ・ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識の基本をある程度習得している  
・外部講師講義に対するレポートを提出したことで、自分にとっての志を考えさせるきっかけづくりが一部分述べられている
- 評価F (59点以下) : ベンチャー経営の基本を理解しておらず、レポートも未提出かレポートの要諦を得ていない結果としての不合格

### ■履修していることが望ましい科目

特になし

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

- ・講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後、変更する場合があることを留意されたい。また、外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になることがあり得る。
- ・履修申請者が多すぎる場合、この科目の履修者制限を行うことがありうる。履修者選抜は、第1回目の講義の際に、出席者に対して「この講義の履修動機」を簡単に書かせてこれをもとに評価し選抜する。選抜詳細は第1回目の際に提示する。
- ・授業態度における私語、携帯電話（をいじること）、本授業とは無関係のパソコン使用、途中退室は絶対に不可であり、熾烈に厳しく注意する。これらの注意は学生の社会人としての常識涵養のための不可避なもの（教員個人的には極めて不本意）であるが、このような注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

**科目名** 立志論Ⅳ(Aspiration Theory Ⅳ)**サブタイトル** 立志人物論**担当教員** 久恒 啓一**■講義目的**

ビジネスはコミュニケーション活動によって成り立っており、その活動を担うのは人である。経営資源を束ねる人的資源の重要性はますます高まっている。今後はキャリア形成を含むライフマネジメントの視点から人的資源の活性化を考えながら、組織や経営やビジネスについて考察することが求められる。

この講義においては、近代日本を作った明治期を中心とするわが国の志を実現した偉人の生涯（経営者・政治家・芸術家・作家・ジャーナリスト）の資料やYouTubeの映像を題材に、いくつかの切り口一仰ぎ見る師匠の存在、敵との切磋・友との拓磨、持続する志、怒涛の仕事量、修養・鍛錬・研鑽、飛翔する構想力、日本への回帰一を用いて今日の産業社会で生きるための問題解決の知恵について学び、自らの志とライフマネジメントについて深く考えてもらう。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
グローバルビジネス

**■到達目標**

自身のロールモデルを発見し、最終レポートとしてパワーポイントを用いて「私のロールモデル〇〇〇〇の人生鳥瞰図」を作成し、ワードを用いて「私のロールモデル〇〇〇〇から学んだこと」をレポートできる力を身につける。

**■授業形態**

講義  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

次回に取り上げる予定の偉人について自分なりに調べておくこと。  
毎回の授業で紹介したYouTube映像を視聴。

**■評価方法**

出席 50点  
毎回の提出アンケート 25点  
最終レポート 25点

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 全回出席。レポートが特に優れている。  
評価A (89~80点) : ほぼ全回出席。レポートが優れている。  
評価B (79~70点) : 高い出席率。レポートが良い。  
評価C (69~60点) : 高い出席率。レポートの提出あり。  
評価F (59点以下) : 低い出席率。レポートの提出なし。

**■履修していることが望ましい科目**

立志系科目を履修するのが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

次回に取り上げる予定の偉人について、自分なりに調べておくことを心がけてもらいたい。  
講義に興味を持った人物の自伝や伝記を読んでほしい。

## 科目名 プレゼミ (Pre-seminar)

サブタイトル 「社会人マイナス四年生」のゼミ入門

担当教員 金子 邦博

## ■講義目的

多摩大学では、大学に入学した時点での学生諸君は、「大学一年生」ではなく、「社会人マイナス四年生」である。それは、諸君が4年後に、社会人になることを前提としているからである。したがって、社会から要求されるものを身につけることが、大学4年間の、諸君のミッション（使命）である。

では、「社会から求められるもの」とは何か。

多摩大学は、これを総称して「問題解決力」と定義する。つまり、社会とは「問題」の塊そのものであって、社会で役割を担うこと（つまり就職ということ）は、「問題を解決する」ことだ、と考えている。多摩大学のすべての授業は、諸君の「社会における問題解決力」を伸ばすことのためにある、と言っても過言ではない。

問題解決力養成は、講義だけで達成することはできない。そこで用いられるのが、「ゼミ形式による学び」である。この「ゼミ」という学びのスタイルには、いくつかの核心的な意味が隠されている。

1) 具体的な問題を認識し、問題構造を明確にし、解決方法を模索し、実行する、という実際の問題解決に挑む活動のプロセスによってこそ、有効な学びがある、ということ。

2) 同じ問題に、自分だけではなく複数人間（仲間）で取り組むことによって、問題発見－解決プロセスの糸が、より網の目のように重なることを体験し、互いに知恵を出し合い、協業して問題解決に当たる基本的能力が身に付く、ということ。

3) 解決に役立つ情報は、この世界のいたるところに転がっている。したがって、無数の無駄な情報の中から、必要・有効なものを見つけ出し、とり出し、加工したり組み合わせたりすることによって、新たな知を作り出していくということこそが、諸君が身につけなければならないのだ、ということ。この、「有用な情報」を手に入れるという教科書のない作業こそが、諸君にとって必要である、ということ。

こういった考えから、本学は「ゼミ中心大学」を標榜し、さまざまな取り組みを行っている。したがって、まずは諸君自身がこういった大学の考え方を理解し、取り組んでもらうことが重要である。これは、大きな教室で講義を聴くことによってだけではなく、諸君自身が活発に積極的に、能動的に考え、話し、そして行動する、ということの意味している。先生の言うことをよくきき、ノートをしっかりと、暗記し、答案を書くという営みは、諸君にとって重要ではあるが、十分とは言えない。そのもう一歩先の、「みづから学びをつかみ取る」姿勢こそ、最も大切なものであるということを、われわれはまず伝えたい。

この「プレゼミナールⅠ」は、諸君のこうした今までにあまりなかったであろう「学び」の「学び方を学ぶ」ためである。

この授業で諸君に求められることは、

- 1) 緊張感のある主体的意識、当事者意識を持って参加すること
  - 2) 教員や仲間に対し、可能な限り積極的に「情報発信」をすること
  - 3) 考えることと物事を進めることを、同時にを行うのを厭わないこと
- これらを通じて、
- 4) 経営情報学を学び、問題解決能力を身につける4年間の学びの道筋の全体像を把握すること
- である。

## ■講義分類

社会人力育成

初年次教育

高等学校から大学への円滑な移行を図るため、主として大学新入生を対象に作られた総合教育プログラム

## ■到達目標

- ① 就業意識に基づいた4年間の学修イメージが確立すること。
- ② 学びに対象を主体的に見出せるようになること。
- ③ 学びの成果に対する現実的期待を抱くことができるようになること。

## ■授業形態

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

## ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要があります。復習に際しては、単に学んだことを整理するだけでなく、講義を通じて「気づいたこと」を自分の人生のなかで活かすために、追加で関係する情報の収集を行い、学んだことを将来の自分に結びつけていく作業が必要になります。この講義での学びを活かすためには、復習に概ね2時間程度の取り組みが必要です。

## ■評価方法

- 1) まず、下記の条件を満たすことが、単位取得のために必要である。

- ① すべてに出席することがこの科目単位取得の前提である。  
理由の如何にかかわらず、3分の2以上の出席ができない場合は、単位を取ることはできない。また、定刻に遅れた場合は、欠席となる可能性がある。
  - ② 積極的に参加する受講態度。
  - ③ クラス毎に指定された最終課題の提出。
- 2) そのうえで、上記①②③の総合評価(100点満点で、配分は出席50%、受講態度30%、最終課題20%)によって、成績評価を決定する。

#### ■評価基準

- 評価P(合格) : 総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。  
評価F(不合格) : 総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

#### ■履修していることが望ましい科目

なし

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

#### ■留意点

- 1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席すると単位取得に大きな影響を与えることとなるため、すべての回に必ず出席すること。
- 2) かならず配布されたパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

科目名 ホームゼミ(Seminars)

サブタイトル ホームゼミナールI(Seminars I)

担当教員 飯田 健雄

■講義目的

ビジネス英語表現の向上を実践的に習得する。

■講義分類

仕事状況に応じた英語表現のワークショップ

■到達目標

異文化コミュニケーションの向上

■授業形態

グループディスカッション

■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

配布した資料を事前によく読んでおく

■評価方法

ゼミ出席・課外活動参加 7割：レポート 3割

■評価基準

評価P（合格）：ゼミ出席と積極的なビジネス英語表現の獲得

評価F（不合格）：ゼミにほとんど出席せず、課外活動にも参加しない場合

■履修していることが望ましい科目

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 英語・コミュニケーション・地域活動**担当教員** 石川 晴子**■講義目的**

石川ゼミは、英語、異文化コミュニケーション、地域社会活動をテーマに、自分の個性や持ち味を生かしながら地域社会、国際社会で社会貢献ができる人材を育てることを目標に活動しています。主な活動内容は、地域小学校の放課後子ども教室での英語授業、国際交流イベント、学内スポーツイベントの企画・運営、英語スピーチ、プレゼンテーション、グループディスカッション、輪読、ムービー制作など多岐にわたります。学生はこれらの活動を通して体験的にチームワーク、コミュニケーション力、自主性を磨き、そこで生じる様々な問題の解決に取り組んでいます。また、そこで出会う子どもから社会人まで様々な背景を持つ人々との交流を通して、社会と自らの在り方について学んでいます。

**■講義分類**社会人力育成  
グローバルビジネス**■到達目標**

ゼミで行う学内、学外の様々な活動を通して、社会人に必要なスキルおよびマナーを身に着けます。

**■授業形態**講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

レポートの提出、発表準備、資料の作成、小学校訪問の準備等、その都度指示する。

**■評価方法**

毎回の出席を前提とし、課題への取り組み（100％）で評価します。

**■評価基準**評価P（合格）：課題への取り組みの総合点が60％以上である。  
評価F（不合格）：課題への取り組みの総合点が59％以下である。**■履修していることが望ましい科目**

語学系科目

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 出原 至道**■講義目的**

このゼミナールは、社会に出て通用するシステム構築能力を身につけることを目的とする。ゼミナール開始時のスキルは特に必要としないが、未知の領域に対する旺盛な好奇心、自発的学習能力、平均的な社会性・コミュニケーション能力については既に身につけていることを求める。

2年次では、まず、手法を指定して機能を実現する練習を行い、その後、オリジナルなアイデアを自力で組み上げる段階に進む。その後3年次で、各自が選択した社会的な意義をもつテーマについて、データ解析手法の理論を学んだ上で、プログラミングによって実際にシステムを構築する。次に、このシステムの改良・運用を通して得られる知見について、4年次に各自が論文としてまとめる。

講義時間は週1回であるが、この時間は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすることが求められている。作業はそれ以外の時間に各自行うことになる。

基本的に、研究テーマについては個人の希望する方向性を尊重しつつ、実現可能性・社会的意義などを検討して決定していく。

積極的に外部に成果を応募・発表することを奨励する。目標とする代表的な場として、IVRC（日本）、Laval Virtual（フランス）、SIGGRAPH（アメリカ）、SIGGRAPH ASIA（日中韓など）がある。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

プロジェクトベースでシステム開発能力を持つ社会人として、社会性・人間性を含めて評価される。「大学で何を勉強したか」ではなく「大学で何を生み出したか」を語るができる。単に「コンピュータが使える」だけの人材とはどこが違うか自分で説明できる。共通の目的を持つ他国の学生との交流を通じて、単なる言語や文化的興味にとどまらない、高いレベルの国際意識を身につける。

このうち、ホームゼミ1では、大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。特に、ホームゼミ選抜において研究計画を提出することなくゼミに割り当てられた学生は、ホームゼミ1終了時点で、単位の可否とは別に継続の可否について審査する。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義時間は週1回であるが、この時間は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすることが求められている。作業はそれ以外の時間に各自行うことになる。

**■評価方法**

平常点(60%)・期末レポート(40%)（絶対基準）。

ただし、期末レポートへの取り組みに応じて、期末レポートの評価の一部を平常点によって評価することができる。

**■評価基準**

評価P（合格）：F以外  
 評価F（不合格）：無断欠席。自主的な取り組みが見られない場合。その他信義に反する場合。  
 平常点については、以下の点を中心に評価する。

- ・明確な課題意識を持っているか。
- ・定期的な発表で基礎を固めているか。

期末レポートについては、以下の点を中心に評価する。

- ・明確な課題意識を持っているか。
- ・既存研究の中での位置づけがはっきりしているか。
- ・独創的な視点を持っているか。
- ・課題に対して成果をあげているか。

**■履修していることが望ましい科目**

IT活用法I、IT活用法II



■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars)

サブタイトル ▶ データ分析入門ゼミナール

担当教員 ▶ 今泉 忠

#### ■講義目的

近年、ビジネスにおける問題解決において、データにもとづく解決案提案は必須になってきている。また、当然、コンピュータを利用する場面が多くなってきている。本演習では、これを、「データ(もの)」という観点から見た場合のデータ分析法やモデル構成法について学ぶ。定量的データ処理能力および統計的分析手法を習得することを目標とする。統計的データ解析やデータマイニングや意思決定問題についても学ぶ。最終的には卒論の提出を行う。基礎知識の習得については履修者全員に必須とする。

#### ■講義分類

ビジネスICT

#### ■到達目標

Excel (関数活用まで) が自在に使えることがホームゼミナールの目標である。

卒業時には、以下の手法について理解し、説明でき、利活用できるようになることを目標とする。

- ・ 統計的データ解析
- 主として、多変量解析の分野での手法を学ぶ。回帰分析、主成分分析、判別分析について習得する。
- ・ データマイニング

大量のデータから、ある目的に応じた結果をえることは容易であるが、それを外部からの評価にも耐えられるようにすることは困難である。このような分析手法について実際のデータを用いながら学ぶ。

- ・ 意思決定問題
- ベイズ統計の観点から意思決定の数理的側面について学ぶ。

- ・ データプレゼンテーション

解決案提案のためのプロセスにおいて、グラフ、チャート、センテンスを利活用して提案できるようになる。

#### ■授業形態

演習 (グループ演習)

#### ■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

表計算ソフトを使用するので、Excelのピボット計算を利用できるように、予習復習すること。また統計ソフトRについてインストールし、授業で使用できるようにすること。

#### ■評価方法

出席50%、演習レポート50%

#### ■評価基準

評価P (合格) : 統計的データ分析の基礎を理解して、実際のデータを分析できるかどうか  
 評価F (不合格) : 出席も含めたゼミナール活動への参加が低い場合、出席については全回出席が原則である。

#### ■履修していることが望ましい科目

データサイエンスI

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

#### ■留意点

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 梅澤 佳子**■講義目的**

本ホームゼミナールは、I～VIまでの3年間のゼミナールを通じて、人生80年を豊かに生きるためのライフ・デザインの考え方を身につけ、グローバルな視点と生活者の視点を養います。あわせて問題解決能力を身につけます。

**■講義分類**

社会人力育成  
ビジネス創造  
顧客理解  
地域ビジネス

**■到達目標**

以下の内容を習得することを目標とする。

1. 文章の読解力、理解力、表現力
2. コミュニケーション能力
3. コミュニティデザインの手法
4. ビジネス創造力
5. プロジェクトマネジメントの手法

**■授業形態**

グループワーク  
グループディスカッション  
プレゼンテーション  
問題解決学習  
調査学習  
PBL学習  
双方向学習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

本ゼミは、地域・企業・行政・教育機関と連携して活動を行っている為、ゼミ以外の時間でもプロジェクトチーム毎にミーティング、外部団体との打合せ、そのための事前準備、事前・事後の活動（議事録・報告書の作成等の時間を必要とする。

**■評価方法**

- ・時間割におけるゼミの出席は前提条件です。
- ・学内外におけるゼミ活動への参加 50%
- ・課題提出 50%

**■評価基準**

評価P (合格)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間割上のホームゼミナールに加え、地域連携型P L Bの参加状況。</li> <li>・担当するプロジェクトチームでの活動状況。</li> <li>・課題提出。</li> </ul>
評価F (不合格)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間割上のホームゼミナールに加え、地域連携型P L Bの参加状況が悪い。</li> <li>・担当するプロジェクトチームの一員としての自覚がなく、活動に参加しない。</li> <li>・課題提出がない。</li> </ul>

**■履修していることが望ましい科目**

ライフ・デザイン、余暇マネジメント、事業構想論、問題解決学、地域ビジネス入門

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars)

サブタイトル ▶ 歴史を通して現代社会を見直す

担当教員 ▶ 大森 映子

#### ■講義目的

歴史を学ぶということは、ただ過去の事象を明らかにするだけではなく、現代社会を相対化・客観化してとらえる視点を養うことでもある。一見、全く無縁と思われるような歴史的事象も、考え方によっては現代社会と深く結びついていることが少なくない。ちょっとした関心や興味を出発点として、過去の歴史事象を吟味・分析し、さまざまな可能性を考えながら、理論化を試み、その上で現代社会に潜む課題を発見し、その問題解決の道を探る。

#### ■講義分類

社会人力育成  
社会人基礎力  
地域ビジネス

#### ■到達目標

- (1) 現代社会を考えるにあたって、歴史的分析の重要性を認識する。
- (2) 現代の諸問題を客観的に捉えられる視点を養う。
- (3) ディスカッションの中で、自分の意見をまとめ、全体を統括することができる。
- (4) 自らの課題を進めるにあたって、パソコンを活用できるようにする。
- (5) 最終年次に卒論がまとめられるように、段階的な積み重ねを目指す。

#### ■授業形態

講義  
ゼミ

#### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

予定する内容に従って報告の準備やレポートの提出、グループごとの打ち合わせなど、準備を整えた上でゼミに参加する。また、ゼミ終了後には、毎回、簡単な報告書（参加記録）を作成する。

#### ■評価方法

授業への積極的な参加と姿勢(50%)、レポート(20%)、報告(30%)

#### ■評価基準

評価P（合格）：ゼミに積極的に参加し、報告やレポートなどの課題を果たした。  
評価F（不合格）：報告や発表、グループワークなどで相応の役割をはたしていない。

#### ■履修していることが望ましい科目

グローバルヒストリーⅠ、グローバルヒストリーⅣを履修することが望ましい。

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

#### ■留意点

学生の主体性を重視する。またこの授業を通して「文献」の重要性も学んで欲しい。また見学旅行を予定しているので、これにも積極的な参加を期待する。

なお、出席者の興味・関心などによって、一部内容を変更することがある。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉**■講義目的**

生活する社会の中で、情報を的確に収集・分析することは必要不可欠である。本講義では人間行動の調査の方法の習得・データの収集・分析といった一連の流れを経験し、体得することを目的とする。同時に、人間行動のシミュレーションを各自がプログラムを作成することによって行う。最終的には、心理学、統計学、プログラミングの知識と技法を体得し、人間行動の理解とモデリング全般が行えることを目標とする。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

人間行動全般の理解と、情報の処理方法、および物事の客観的な判断・意思決定ができること。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

心理学・統計学

**■評価方法**

出席点90%、課題10%

**■評価基準**

評価P（合格）：全てのゼミ活動に出席し、全ての課題を提出すること。  
評価F（不合格）：上記以外

**■履修していることが望ましい科目**

情報系科目全般

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

心理学・データ分析関連の話題を題材とし、実験演習を通して人間行動の理解を深める。各学期ごとに大きなテーマを決め、そのテーマに関連する事柄について、グループワークを中心に、実験・調査演習を行う。扱うテーマは心理学関連である。データを収集し、分析を行うことにより、客観的な論理の展開を行う能力を身につける。各学期末にはSRCにて成果を発表する。4年時には一人一テーマの卒業論文を執筆する。講義は各回が連続しており、欠席すると次回講義ではフォローできないため、毎回の出席が必須である。無断欠席は即退ゼミとなる。また、正規の時間外にもゼミの活動を行うので、留意すること。春季休業中・夏季休業中のゼミ合宿は参加必須である。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 地域産業・中小企業研究～地域産業・中小企業を「実学」する～**担当教員** 奥山 雅之**■講義目的**

地域産業、中小企業について研究するゼミナールです。  
 どんな人でも、生活の場である「地域」とは無縁ではられません。奥山ゼミは、そんな「地域」の産業・中小企業の現場を大切にします。

一例として、日の出町に学生が半年通い、地域の方々と一緒に立ち上げた「日の出町産業振興プロジェクト(日の出赤いプロジェクト)」では、地域資源を編集していくことで新しい観光ルートを創出し、学生との化学反応で地域も変わりつつあります。

そのほか、昨年から取組を開始した「小豆島」、地域からオファーがある「島根県松江市」、近場では聖蹟桜ヶ丘の「こどもリビング」、特別プログラムとしての「起業家クラブ」など、ゼミ生が活躍する場は多様です。自分で活躍フィールドを選択し、実学を通じて社会人基礎力と生きた経営学、そして地域経済感覚を身につけてください。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

社会人力育成

地域ビジネス

**■到達目標**

(1) 「発見力」を高めます

皆さんは普段の生活から、何か疑問を感じたことはありませんか。新しいビジネスの種や仕事上の課題を発見することが上手い人の共通点は、「発見力(アンテナ)」が高いということです。何気ない日常生活からも、「ここはちょっとおかしいのではないか」といった「疑問」や、「こうなればいいのに」という「あるべき姿」を発見することができるようにします。

(2) 「創造性」を高めます

なかなか解決できそうにない課題に直面しても、物事を様々な角度から見ていくことで、皆さんの中にある「創造性(クリエイティビティ)」が発揮され、課題解決の糸口がつかめるようにします。

(3) 「チームワーク」を高めます

言うまでもなく、ゼミは教師一人が創るものでなく、学生一人が創るものでもありません。教師と学生がチームとなってつくる上げるものです。ゼミの運営の中で、「チームワーク」を高めていきます。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎週の校内での学習のほか、頻繁に中小企業見学、地域へのフィールドワーク、地域活動の実践を行います。

**■評価方法**

学外活動を含めたゼミ活動への出席(50%)、積極的な発言を含めたゼミ活動への貢献度(50%)

**■評価基準**

評価P(合格) : 学外活動を含めてゼミにしっかりと出席し、ゼミのメンバーとチームで行動することに適性がみられ、「チームワーク」を高める力をつけるとともに、課題の「発見力」およびその課題に対応した解決策を導き出す「創造性(クリエイティビティ)」を獲得できた。

評価F(不合格) : ゼミのメンバーとチームで行動することに適性がみられなかった。または、「課題の「発見力」およびその課題に対応した解決策を導き出す「創造性(クリエイティビティ)」が獲得できなかった。  
 ※ゼミを無断で欠席する、欠席が続くなどの学生は不合格となります。

**■履修していることが望ましい科目**

多摩学I、多摩学II、地域産業論I、地域産業論II

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

■留意点

- ・ホームゼミは教員と学生が力を合わせて運営します。「他人ごと」ではなく、主体性を持ってゼミに参加することを望みます。
- ・ゼミの仲間は「一生モノ」です。仲間を自分の力としてください。自分も仲間の力となってください。
- ・皆さんは「多摩大学地域産業・中小企業研究室」の一員あり、社会人と同等に扱われます。社会人との付き合いも多くなりますので、それなりのマナー、作法を身につけて実践してください。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 企業の成長と衰退**担当教員** 栢原 伸也**■講義目的**

企業の誕生・成長・衰退・消滅。企業にも人間同様、様々な運命をたどる。企業はどのように成長するだろうか？また衰退するのはどのような理由からであろうか？様々な会社や事業の研究やマーケティングの知識を通じて、企業の成長や衰退のポイントを探る。

**■講義分類**

ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
顧客理解

**■到達目標**

企業や事業を多面的に観察するスキルを身につける。

**■授業形態**

講義  
グループワーク  
グループディスカッション  
プレゼンテーション  
フィールドワーク

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

取り上げる企業や事業の調べ学習等

**■評価方法**

出席50%  
ゼミ活動の成果50%

**■評価基準**

評価P（合格）	：マーケティングの基礎知識を身につける。 基礎知識に基づいたフィールドワークが行える。 企業の成長についての戦略が立案できる。
評価F（不合格）	：マーケティングの知識の習得が不十分である。 フィールドワーク等の活動が不十分である。

**■履修していることが望ましい科目**

特に無

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**



**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 「儲ける」ことを科学する会計を学ぶ。**担当教員** 金子 邦博**■講義目的**

本ゼミでは、ビジネスにおける意思決定に際して、会計情報を活用することができる人材の育成を目的に、会計学を中心に「儲ける」というビジネスの基本を如何に実現していくかを学んでいく。

そのため、ゼミでは、将来のビジネスシーンで直面する解決策が明確でない諸課題に対して、会計情報を活用して適切な判断、指示が行えるようになるために必要な、財務会計、管理会計、経営学の基本的な思考方式と、説得的な表現が行える論理力を身につけることを目指して計画的に演習により学習し、産業社会での社会人基礎力を高め、卒業後の就業力を培っていく。

具体的には、2年次には会計学の基礎知識を固めることを目指し、3年次にはそれを発展させて企業や事業手法の現状を分析する学習を行い「いい企業」とはどのような経営を行っている会社なのかを検討し、4年次にはそれまでに身に付けた知識、能力を社会の実践のなかで活かせるようにOUTPUTの能力を高めることを意図して、情報収集能力と自らが収集した情報を利用した問題解決能力の向上を図るためのフィールドワークや論文作成を指導していくことを予定している。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

(ホームゼミⅠ：2年春) 日本商工会議所の簿記検定3級に合格すること。  
(ホームゼミⅡ：2年秋) 株式会社の会計(日商簿記2級程度)を理解すること。  
(ホームゼミⅢ：3年春) 財務会計の分析手法を理解すること。  
(ホームゼミⅣ：3年秋) プレゼンテーション能力の対応能力を高めること。  
(ホームゼミⅤ：4年春) 卒業論文としてまとめる「テーマ」についての理解を深めること。  
(ホームゼミⅥ：4年秋) 卒業論文作成のための考察を通じて問題解決力を高め、論文にまとめることを通じて文章伝達力を高めコミュニケーション能力の向上を図る。

**■授業形態**

双方向  
講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
実習

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要があります。復習に際しては、単に学んだことを整理するだけでなく、講義を通じて「気づいたこと」を自分の人生のなかで活かすために、追加で関係する情報の収集を行い、学んだことを将来の自分に結びつけていく作業が必要になります。この講義での学びを活かすためには、復習に概ね2時間程度の取り組みが必要です。

**■評価方法**

ゼミへの出席状況(50%)を基本に、報告内容や提出されたレポートの内容(50%)を加味して評価を行う。

**■評価基準**

評価P(合格) :ゼミ活動の到達目標に概ね達している。  
評価F(不合格) :ゼミ活動への参加が不十分でゼミ活動の到達目標に達していない。

**■履修していることが望ましい科目**

ゼミの参加に際して、特定の科目の単位取得は条件とはしないが、「ビジネス入門Ⅱ」が履修済みであることが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- (1) 正当な理由なしにゼミ活動を欠席する者には単位を付与しない。
- (2) 本ゼミ参加者は、原則として財務・会計領域の全ての科目を履修すること。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 経営と起業**担当教員** 金 美德**■講義目的**

- ①経営の知識や企業・業界・情勢の情報の収集・分析を通じて、就活力・働く力・起業力を身に付ける。
- ②学生が興味のあるテーマについて調べたり、関心がもてそうなテーマを探し出し、それを自らの専門・得意・強みとする。
- ③プレゼン力、ディスカッション力、コミュニケーション力などのスキルを習得する。
- ④ゼミ合宿、企業訪問、社会人との交流などの学外学習や国内外のフィールドワーク(現地調査)を通じて、多くの社会体験やネットワーク作りを行う。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人育成  
グローバルビジネス  
地域ビジネス  
ビジネスICT

**■到達目標**

- 2年時は、各自テーマについて情報収集力や現地調査力を身に付ける。  
3年時は、各自テーマについて分析力やグループディスカッション力を身に付ける。  
4年時は、各自の専門性・得意・強みについて伝える・表現する・プレゼンする力を身に付ける。

**■授業形態**

プレゼンテーション  
グループディスカッション  
グループワーク  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各自のテーマにしたがって書籍・資料・ニュース・時事情報の収集や現地調査を行う。

**■評価方法**

出席40%、報告30%、ディスカッション30%の割合で評価する。また、学外学習に参加した場合に加点する。

**■評価基準**

評価P(合格) : 出席40%、報告30%、ディスカッション30%、加点(学外学習参加)の合算点が60%以上の場合、合格とする。  
評価F(不合格) : 出席40%、報告30%、ディスカッション30%、加点(学外学習参加)の合算点が59%以下の場合、不合格とする。

**■履修していることが望ましい科目**

経営学やグローバルビジネス系科目を積極的に履修すること。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ▶ ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** ▶ 企業の会計情報の作成と利用**担当教員** ▶ 清松 敏雄**■講義目的**

ホームゼミナールでは、①就職までの間の自己の成長計画、その修正を繰り返し行う習慣付け、②会計情報の作成方法の理解と実践（日商簿記検定の受検）、③会計情報の利用方法の習得、④海外ゼミ合宿などを通じた視野の拡大、の4点を目的としている。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 社会人育成  
 ビジネスマネジメント

**■到達目標**

- ①自己の成長計画、その実践、その修正を繰り返し行う習慣を付けること
- ②会計情報の作成方法を理解し、日商簿記検定などに積極的にチャレンジすること
- ③会計情報の利用方法を習得すること
- ④海外ゼミ合宿などを通じて視野を拡大すること

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業には前回授業時に示した課題をおこなった上で参加すること

**■評価方法**

出席（積極的に議論に参加していること）100%

**■評価基準**

評価P（合格）：到達目標に示した①～④について実践してること  
 評価F（不合格）：授業に参加していない場合及び到達目標に示した①～④を実践していない場合

**■履修していることが望ましい科目**

ビジネス入門Ⅱ

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

科目名 ホームゼミ (Seminars)

サブタイトル

担当教員 久保田 貴文

#### ■講義目的

世の中にある様々な課題をデータやデータ解析の結果を活用することにより、さらに統計的に嗜好することにより解決することを目的とする。

手法としては、以下を想定する。

- ・データの視覚化
- ・空間データと地図との連携による可視化
- ・SBSデータを用いたネットワーク分析
- ・スマホアプリやWebアプリの作成

#### ■講義分類

#### ■到達目標

自らデータ解析を行うことにより、世の中のさまざまな問題について解決を行うことが出来る。さらに、その方法について説明し、データやデータ解析の結果もしくは作成したアプリケーションによってその正当性を説明し説得することが出来る。

#### ■授業形態

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

#### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

毎授業後にはレポートを提出すること。

#### ■評価方法

ゼミ活動により作成した文書もしくはプレゼン資料（100%）。

なお15回の出席（もしくはそれと同等の活動）および次のいずれか1つを必須とする。

- ・統計グラフコンクールに出展
- ・SRCで報告

#### ■評価基準

評価P（合格）：以下の項目について、必要な項目により、問題解決が出来ること。

- ・データを収集するスキル
- ・データを解析するスキル
- ・データ解析の結果を理解し、正しい判断をする能力
- ・データ解析の結果を文書でまとめる能力
- ・データ解析の結果をまとめてプレゼンテーションする能力

評価F（不合格）：以下の項目のいずれについても習得できていなく、データ解析によって問題解決をすることができない、もしくはその可能性を見いだせない。

- ・データを収集するスキル
- ・データを解析するスキル
- ・データ解析の結果を理解し、正しい判断をする能力
- ・データ解析の結果を文書でまとめる能力
- ・データ解析の結果をまとめてプレゼンテーションする能力

#### ■履修していることが望ましい科目

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

#### ■留意点

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 組織マネジメントと企業家精神**担当教員** 小林 英夫**■講義目的**

本ゼミの目的は、ゼミ活動を通じゼミ生のキャリアの礎を築いていくことである。本ゼミは「組織マネジメント」を対象領域とする。その中で、「組織行動」と「企業家精神」の2つの分野を基本の研究対象としているが、人が社会で生きていく限り様々な組織との繋がりは欠かせないものであり、何らかの創造的活動を行っている。従って研究テーマはゼミ生の関心に応じて幅広く設定することを可能とするが、設定したテーマに対しては真剣に取り組むことを要求する。

また、大学時代は人格形成においても人間関係形成においても非常に重要な時期である。ゼミはコミュニティとしての役割を果たすものであり、社会活動を学ぶ場としても位置付けられる。大学生活、ゼミ活動、設定したテーマに対する取り組みを通じて、良き人生を送るための土台を築くことを本ゼミの狙いとする。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT  
 地域ビジネス

**■到達目標**

- ・社会人としての仕事をしていく際に大切な常識と物事に対する真摯な取り組み姿勢を身に付ける。
- ・社会人として、課題を発見し問題解決を行っていくための方法、理論、科学を身に付ける。
- ・キャリア選択の判断基準ともなり、その選択肢を広げることにも役立つ知識を身に付ける。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ゼミに出席するにあたっては、事前にアサインされた課題項目に対して学習するとともに、発表資料を準備してくること。  
 ゼミ後には、発表内容に対する教員および他のゼミ員からのコメントを取りまとめ、次回発表資料の改善に活かすこと。

**■評価方法**

出席(30点)、ゼミ活動への貢献(30点)、ゼミ発表、提出物(40点)

**■評価基準**

評価P(合格) :ゼミへの出席、ゼミ活動への積極的な取り組み姿勢と建設的な意見や質問によるゼミの品質向上への貢献、ゼミにおける発表内容や提出物の質を評価する。  
 下記配点で60点以上を合格とする。

評価F(不合格) :下記配点で60点未満を不合格とする。

**■履修していることが望ましい科目**

ベンチャー企業論、経営組織Ⅰ、経営組織Ⅱ

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

科目名 ホームゼミ (Seminars)

サブタイトル 3DCGゼミ

担当教員 彩藤 ひろみ

#### ■講義目的

3DCGをメインに、マルチメディアのスキルを高め、自己表現の手段として使えるようにする。また、プロジェクトを企画実践することにチャレンジする。個人発表もグループ発表も恐れなく、こなせるようになってもらいたい。キーワードは次のとおり。

問題解決のための科学

ビジネスICT

クリエイティブデザイン

ユーザエクスペリエンス

アプリ開発

IOT (INTERNET OF THINGS)

#### ■講義分類

ビジネスICT

#### ■到達目標

3DCG技術以外の何らかの「スペシャリスト」になること。  
資格試験はいろいろあるので、各自目標をもって精進すること。  
3DCG検定、色彩圏点、マルチメディア検定

#### ■授業形態

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

双方向

#### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

授業前には、Blenderソフトウェアを起動し、使い方に習熟してくること  
授業後は、プロジェクトの完成のために自ら努力すること

#### ■評価方法

出席および取組み態度50%、課題や発表など定められたアウトプット50%程度の割合で、総合的に評価する。  
学期ごとに2回の発表会があり、そこでの作品発表を重視する。

普段からのゼミ参加は必須で、無断欠席は許可しない。

ホームゼミナールVIIについては卒業論文または卒業設計を提出しないものは不可とする。

#### ■評価基準

評価P (合格) : 目標に沿って、よく努力したかどうか

評価F (不合格) : 無断欠席の積み重ね。

目標に到達できない。

#### ■履修していることが望ましい科目

クリエイティブデザイン

#### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

#### ■留意点

・普段から積極的にパソコンに親しみ、表現することが好きな人。使う楽しみを知っている人を求める。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 齋藤 S.裕美**■講義目的**

現代社会において、情報倫理にかかわる問題の解決は急務の課題となっている。企業の保有する様々なコンテンツや顧客データ、営業秘密など重要な情報を保護するために、かつてはウィルス対策や不正アクセス対策などIT部門によって技術的な対策がとられてきた。しかし、近年ではシステム障害や情報漏えいなどが企業活動の継続に大きな妨げとなる事件などが相次ぎ、企業が保有する様々な情報の保護は事業継続管理や内部統制など経営上の課題と捉えられるようになってきたといえる。さらに、情報公開の仕方や不祥事の際のメディア対応などによって企業イメージが大きく左右されることなどもある。

このゼミでは、情報モラルやセキュリティ、メディアについて、知識の修得、問題意識の醸成と問題の発見・分析、問題解決方法の考察を行うことを通じて、各個人の知的な判断に基づいて内的規制・自己統制が行なえるようにすること、すなわち知的論理に基づく判断能力を習得できること、情報社会に必要な倫理的態度とは何かを理解することを目標とする。また、ゼミを進めていく際に用いるグループディスカッションやブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、レポート作成などを通じて、社会に出て必要となる基礎的理論や考える手法、文章力を身につけることも目標のひとつである。

具体的には、1)著作権、2)プライバシー権、3)個人情報保護、4)情報モラル、5)メディアリテラシーなどの範囲を扱う。

また、2月にはゼミ内研究発表会において、2、3年生はグループ研究の成果を、4年生は卒業研究の成果を発表する。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

- ① 情報倫理の分野に関する知識の習得
- ② 情報倫理の分野に関する問題意識の醸成、問題発見・分析、問題解決方法の考察
- ③ グループディスカッション、ディベート、ブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、論理的文章の論述ができる

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
ディベート

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

報告準備、レジュメ作成、発表資料作成等適宜指示する課題について取り組むこと。

**■評価方法**

期末レポート40%、期中のゼミ活動の状況、レポートや課題、発表など60%に出席状況などを加味して総合的に評価する。

**■評価基準**

評価P (合格) : ・演習に積極的に参加し、意欲的に取り組んでいるか  
・課題、レポートの内容および記述方法  
上記評価で評価点60点以上  
評価F (不合格) : 上記評価で評価点60点未満

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ (Seminars)**サブタイトル** ビジネスの最前線で活きるマーケティング・データ分析**担当教員** 酒井 麻衣子**■講義目的**

本ゼミナールは、マーケティング・データ分析（リサーチ、データマイニング、統計、多変量解析）および知的プロフェッショナルスキル（ロジカルシンキング、コミュニケーション、ドキュメンテーション、プレゼンテーション）とマーケティング・データ分析を身に付け、ビジネスの現場でデータに基づいた判断・企画・実践ができる人材を育てることを目的とする。

IT（情報技術）の発展により、大量のデータを蓄積し分析できるようになったため、企業活動の現場には多くのデータが溢れている。これからの企業人には、そのデータから価値ある情報を読み取り、活用する能力が必須となる。

特に企業のマーケティング活動においてはさまざまなデータが取得され、活用されるようになっている。みずから正しくデータを取り扱い、膨大なデータの背後に秘められた関係性を明らかにし、データに基づいた意思決定ができるようになることは、企業人として大きな武器となるだろう。

本ゼミナールにおける3年間で、マーケティングの実践的知識、情報活用力とデータ・ハンドリング能力、および基本的なビジネス・スキルを有した、社会に出て即戦力となる人材を目指してもらいたい。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人育成  
 ビジネスICT

**■到達目標**

<3年間を通じて>

マーケティング・データ分析（リサーチ、データマイニング、統計、多変量解析）および知的プロフェッショナルスキル（ロジカルシンキング、コミュニケーション、ドキュメンテーション、プレゼンテーション）を身に付け、ビジネスの現場でデータに基づいた判断・企画・実践ができる人材を目指す。

<各年次において>

2年次：基礎的なデータ分析を確実に行えるようになる。リサーチの一連の流れを身につける。ビジネスにおけるマーケティング・データ分析の実際について自分なりのイメージをつかめるようになる。

3年次：ビジネスにおけるマーケティング・データ分析の応用について、より具体的な発想をもてるようになる。2年次に習得した基礎知識を背景に、より実践的なリサーチ・データ分析を行えるようになる。

4年次：あらゆる課題・データに対して、ビジネスでの活用を視野に入れた創造的なマーケティング・データ分析を実践できるようになる。また卒業論文の執筆を通じて、一つのテーマを深く考え抜く力、論理的なものごとを文章で表現する力を身につける。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

共同研究プロジェクトや卒業研究での取り組みに随時必要となる情報収集、研究テーマに関連する基礎的知識の修得等

**■評価方法**

出席および取り組み態度50%、課題や発表など定められたアウトプット50%程度の割合で、総合的に評価する。

**■評価基準**

評価P（合格）： ・ゼミ活動に自主的・積極的に参加し、意欲的な態度で臨んでいるか  
 ・各年次に定めた到達目標水準に達しているか  
 ・創意工夫を試み、創造的な発想ができるか  
 ・社会人として必要なマナーなど基本的なビジネス・スキルを身に付けているか など

評価F（不合格）： 上記基準に到達しない場合

**■履修していることが望ましい科目**

以下の科目・講座を必ず受講すること。



- ・「データサイエンスⅠ」「リサーチ入門」「マーケティング・データ分析Ⅰ・Ⅱ」「マーケティング・リサーチ」
- ・すべてのキャリア支援科目・講座
- ・「文章伝達入門」

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** クラウドサービスとデジタルマーケティング**担当教員** 佐藤 洋行**■講義目的**

この先、企業のマーケティング活動で必ず重要なテーマとなってくる「クラウドサービス」と「デジタルマーケティング」。本ゼミでは、これら2つに関する知識と経験を得るべく、座学と実践を行う。グーグル・アマゾン・マイクロソフト、これら3社のクラウドサービスには、名前は違えども同じような機能が揃っているため、まずはそれらの機能を理解するところから始める。その後、実際にECサイトを運営する企業からデータを受託し、クラウド環境で分析を行い、施策を提言する機会をもらう。最終的には、これらの学習を通して、クラウドサービスとデジタルマーケティングに関するレポートをまとめてもらう。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス環境理解  
社会人育成  
グローバルビジネス  
ビジネス ICT

**■到達目標**

2年生： クラウドサービスとデジタルマーケティングについて実践的知識を獲得する  
3年生： クラウドサービスを利用して、データを取扱うことができる  
4年生： 卒業論文をまとめると共に、就職を見据えた企業研究を行う

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

2年生： 課題図書を読み、レポートを作成してもらう  
3年生： クラウドサービスを利用した作業を宿題として課す（週3～4時間）  
4年生： 卒業論文を作成してもらう

**■評価方法**

出席50%、授業内で作成するレポート30%、授業外で課す輪読20%

**■評価基準**

評価P（合格）：クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、自身の考えを加えて人に説明することができる。  
評価F（不合格）：クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、理解できていない

**■履修していることが望ましい科目**

ITマネジメントⅠ、ITマネジメントⅡ

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

必ずPCを持参すること。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 社会経済政策 公共政策**担当教員** 椎木 哲太郎**■講義目的**

社会経済政策、グローバル近現代史の視点から現代の社会・経済を分析し、直面する諸課題の解決に向けての方途を考究する。毎週のゼミでは、経済、産業・企業分析、時事・政治問題を中心として、プレゼンテーションと討論を通じたコミュニケーション能力の向上に主眼を置き、小レポートの添削による文章表現力強化を図る。今年度は、事業構想の研究や地域活性化につながるイベントの企画にも取り組んでみたい。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
社会人力育成  
グローバル

**■到達目標**

ソシオ・エコノミストの眼と、企画・構想力を身に付ける

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向授業  
(必要な場合は学外調査等も)

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

十分な予習・復習を必要とする

**■評価方法**

平常点80%、最終報告20%

**■評価基準**

評価P(合格) : ゼミへの取り組みが優れている、良い  
評価F(不合格) : ゼミへの取り組みが不十分

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 志賀 敏宏**■講義目的**

イノベーションで志を実現し、自分とまわりの人々を幸せにする人間となる。  
そのために、「イノベーション=創新」を良く理解し、実現するための知識、意欲を身につける。  
結果として、自然に就職力、社会人力の高い人材となる。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
社会人力育成  
グローバルビジネス  
地域ビジネス

**■到達目標**

- ①面白いと思えるものを見つける
- ②それについて、知らべ、課題をみつけて、解決のアイデアを出す
- ③調べたこと、アイデアを、「社会人レベル」でプレゼンテーションする

**■授業形態**

講義  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向  
現場見学  
インタビュー

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回の活動記録、次回に向けての「調べもの」、プレゼン資料等の準備

**■評価方法**

出席点50点。日常活動の努力と期末プレゼンへの貢献・成果50点。

**■評価基準**

評価P（合格） : 下記評価方法・配分で60点以上  
評価F（不合格） : 下記評価方法・配分で59点以下

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

意欲、好奇心、行動力を最優先し、その上で工夫を大切にせるゼミです。面白いことのためなら努力を惜しまない人を求めます。そういう人が立派な社会人として羽ばたけるようになることを約束します。

**科目名** ▶▶▶ **ホームゼミ(Seminars)****サブタイトル** ▶▶▶**担当教員** ▶▶▶ 下井 直毅**■講義目的**

この講義では、産業社会における基礎的な政治経済について学ぶ。その際、時事的な経済問題を取りあげ、経済学的に捉えて理解することをめざす。この演習を通じて、経済の表面的な動きに惑わされることなく、変化の本質を見る目が育ち、物事を考える力がついて問題解決ができるようになることをめざす。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
グローバルビジネス  
地域ビジネス  
社会人力育成

**■到達目標**

経済学的なものの考え方の修得をめざす。  
word、excel (マクロ関数を含めて) 等のソフトを活用できるようになることをめざす。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

指定する書籍や論文を事前に読んでおくこと。

**■評価方法**

ゼミナールへの参加 (100%)

**■評価基準**

評価P (合格) :ゼミナールに積極的に参加し、経済学的なものの考え方を修得できている  
評価F (不合格) :ゼミナールへの参加意欲が乏しく、経済学的なものの考え方が修得できていない

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** スポーツやレジャーのマネジメントを通じて、社会に貢献する方法を模索する**担当教員** 杉田 文章**■講義目的**

この演習の目的として、2つのことをかかげたい。第1は、レジャーやスポーツ分野の職業を志望する学生を前提に、これらの分野で提供される製品(財やサービス)のうちの何を大切にするべきか、またそのためには、レジャー産業に関わるためにはどのような能力や知識が必要かについての全体的認識を育ててもらうことである。第2は、レジャー産業分野における経営の一つの社会現象と捉え、経済現象の一つのケーススタディとして、学習していくことである。これらの目的を達成するために、以下のような方法、内容によって演習を行う。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人育成

**■到達目標**

ビジネスに従事する人として社会に対する行為的な態度と理解を持ち、社会に貢献する意欲や能力を持って社会に出ることが、最終的な到達目標である。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

大学在学中を通じて自分のメインテーマとなるものを発見し、課題を構造化し、他者にこれを説明できるようになるために、論理的整理と、これをプレゼンテーションする諸技法について学んでいく必要があることを踏まえて履修してほしい。

**■評価方法**

評価項目①～⑥をすべて満たした場合にPとする。総合評価となる。

**■評価基準**

評価P(合格)	:	以下の条件を満たした場合、P評価とする。
		① ゼミの目的を理解しそれに沿った活動を実践すること
		② ①により、社会人基礎力を持った人材と認められる資質を持つ方向に「成長」していること
		③ 毎回のゼミへの参加
		④ 年2回(9月後半、1月後半または2月前半)の、ゼミ内合同研究発表会での発表
		⑤ SRCへの発表
		⑥ (4年秋学期)卒業論文の執筆、提出、発表
評価F(不合格)	:	上のいずれかの条件を満たさなかったと認められた時、F評価とする

**■履修していることが望ましい科目**

ライフ・デザイン  
 キャリアデザイン入門  
 キャリアデザインI, III, IV

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

ゼミによる学習は、講義よりもより主体的、積極的な取り組みが重要となる。当事者意識を持って、同士となった他のゼミ生と互いに影響を合せて成長するという強い意思を持った(またはそうなりたいたと強く臨んでいる)学生の参加を希望します。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 趙 佑鎮**■講義目的**

中国古典の戦国策に「智者は未明にみる」という言葉がある。知恵(先見力)のある者は、ものごとが形になる前に(まだ芽が出ないとき)、その兆しを察して有効な手を打つという意味である。このことは経営/経営者にとっても大事であり、若き日の孫正義(ソフトバンク会長)等が代表的ケースともいえよう。経営者は、「マーケティング」や「経営戦略」的な発想を土台にして、常に変化している「環境」から、未来にとって意味のあるメッセージを読み取って「実践」していかなければならない。

本演習では「マーケティング」、「経営組織論」、「ベンチャー企業経営」を中心テーマとして「環境と戦略」の具体的なケースを扱いながら企業経営の現実を理解することを目的とする。最前線事例としての具体的なケースをもとにグループディスカッション及び問題解決に関連するプレゼンテーションを通じて、経営における「智者は未明にみる」とは何かを互いに意識できること(学生も教員に気づきを与える)を期待するものである。

本ゼミナールを履修するにあたって、経営基礎、マーケティングマネジメント論、立志論Ⅲ(立志起業家論)、特別講座(リレー講座)の単位取得が好ましい。

**■講義分類**

顧客理解

ビジネス環境理解

ビジネス創造

ビジネスマネジメント

グローバルビジネス

地域ビジネス

**■到達目標**

「環境と経営」の総合的理解

・「マーケティング」・「ベンチャー企業経営」・「経営組織論」の3つのテーマにおける基礎知識の理解

・学生と教員、ゲスト講演者(経営者等)との活発な発言、ディスカッションを通じてのコミュニケーション力の向上

・教養知識と歴史観の涵養

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

双方向授業

その他(マーケティングや経営の事例を扱ったビデオ・視聴覚教育)

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

配布資料またはケーススタディー資料を授業前によく読んでくること。特にケーススタディー資料は、グループワークによる発表があるので、授業前に同じグループの学生がゼミ時間外でミーティングし、協力してプレゼン資料をつくってこよう。

**■評価方法**

出席(60%) + 授業態度(20%) (グループディスカッションとプレゼンテーション) + 小テスト(10%) + レポート(10%)

**■評価基準**

評価P(合格) : ゼミナールの良好な出席とレポート(あるいはプレゼン資料)提出、ディスカッションに活発に参加したことで、「環境と経営」の総合的理解に達し、「マーケティング」・「ベンチャー企業経営」・「経営組織論」の3つのテーマにおける基礎知識の習得、コミュニケーション力の向上が成し遂げられた

評価F(不合格) : 低調な出席率、レポートの未提出、不誠実な受講態度の結果による不合格

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

科目名 ホームゼミ(Seminars)

サブタイトル

担当教員 常見 耕平

■講義目的

自ら学ぶ力を身につける。

■講義分類

ビジネス・マネジメント

■到達目標

自ら学ぶ力を身につける。

■授業形態

演習

■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

日々之学習

■評価方法

課題の挑戦 25%、課題の理解 25%、課題の達成 25%、課題の応用 25%

■評価基準

評価P（合格）：評価方法から合格基準（60点）に到達する場合。

評価F（不合格）：評価方法から合格基準（60点）に到達しない場合

■履修していることが望ましい科目

特にない。

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

特にない。



**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 豊田 裕貴**■講義目的**

豊田ゼミは、マーケティングとマーケティング・リサーチをテーマとする。2から4年次の三年間を通じて、マーケティングセンスの獲得と、リサーチセンスの獲得(視点・仮説・調査・分析・解釈といった調査を用いた論展開が出来るようになる)を目指す。特に3年次には一年間を通じて、「グループでの共通テーマを設定し、各テーマについて必ず調査(質的・量的共に必須)を行った上での研究発表並びにグループとしての報告書の作成」を演習として取り組む。なお、これらの成果については、他者からの評価も重要と考え、インターカレッジによる論文大会への参加を義務づけ、質の高い調査を目指せるようにしている。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人育成

**■到達目標**

マーケティング視点からビジネスを考えられる力の習得を目指し、5年後、10年後に活躍できる基礎を固めることを目標とする。また、学外での論文大会(関東10ゼミマーケティング討論会)への出場や企業からの課題への取り組みなどを通じて、学外での成果の発表とそれに対するフィードバックに向き合うことで、実践力を身につけることを目指す。

**■授業形態**

グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

テーマに対する情報収集・レビューならびに発表準備。

**■評価方法**

試験を行わないため、ゼミへの取り組みのみ(100%)で評価する。

**■評価基準**

評価P(合格) : ・やる気とゼミへの参加姿勢を評価の大前提とする。  
                   : ・面白い発想や独自の視点を高く評価する。  
                   : ・ゼミ外での発表も高く評価する。  
 評価F(不合格) : ・参加状況、取り組みが悪い場合には、Fとする。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ (Seminars)**サブタイトル** メディア研究**担当教員** 中澤 弥**■講義目的**

今日の我々は多様なメディアに囲まれて生きている。本ゼミでは、特にマスメディアについて、その歴史的背景を探り、そのコンテンツ（内容）がどのような影響・効果を受容者に与えるのかを考えていく。マスメディアにおいては、我々は多くの場合受容者であるわけだが、単にコンテンツを消費するだけではなく、発信者（作者）からいかなる媒介（＝これがまさにメディアである）を通して伝えられるのか、まずはそれを意識することが重要である。そしてそれぞれのメディアの特性を知り、その環境に着目することで、メディアを介したコミュニケーションの可能性を探る。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
地域ビジネス

**■到達目標**

メディア研究の基礎をふまえ、対象となるコンテンツについて資料を読み込んだうえで課題を発見し、問題を提起できる。同時に、プレゼンテーションの方法を身に付け、自分の考えを論理的に文章化できる。

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

作品（コンテンツ）の解読。プレゼンテーション資料の作成。レポートの作成。

**■評価方法**

資料調査・フィールドワーク 40％  
期末課題 60％

**■評価基準**

評価P（合格）：資料調査、フィールドワークを適正に行い、課題レポートが十分な内容となっている。  
評価F（不合格）：資料調査やフィールドワークの成果が不十分であり、課題レポートが十分な内容と成っていない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 地域政策・観光まちづくり研究室**担当教員** 中庭 光彦**■講義目的**

本ゼミナールは観光まちづくり・地域ブランディングを中心とした地域政策の分析・企画を専門とするゼミです。人口減少社会で、地域の魅力を生み出す企画方法を身につけるために、基本的な文献を読み、現場を調査し、多くの人にインタビューを行い、討議を通して問題解決の報告書をつくり、提案力を身につけます。

**■講義分類**

地域ビジネス

**■到達目標**

- ① 1年間でインタビュー10件
- ② 1年間で報告書1本(グループで)
- ③ 1年間でプレゼン10回(人・グループで)
- ④ 1年間で読書発表 1冊

**■授業形態**

グループディスカッション  
プレゼンテーション  
輪読

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

前日に配布した資料とノートを理解しておくこと。

**■評価方法**

出席100%

**■評価基準**

評価P(合格) : 到達目標達成に向けて活動している。  
評価F(不合格) : 到達目標達成に向けて活動していない。

**■履修していることが望ましい科目**

地域ビジネスプランニング、地域観光論、地域政策プランニング

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

2年生と3年生が共に活動する。

## 科目名 ホームゼミ(Seminars)

サブタイトル 世の中PRできないものはない!地域企業と連携した 広告・宣伝・PR・情報発信ゼミナール

担当教員 中村 その子

### ■講義目的

中村そのこゼミナールは「世の中PRできないものはない」を合言葉に地域企業・組織と連携しながら、広告・宣伝・組織PR・情報発信・マーケティングコミュニケーションを追求するゼミです。以下を学ぶことがゼミの目的です。

#### <活動内容>

ラジオ番組企画と出演

ラジオコマーシャル研究・制作

映像・静止画コマーシャル研究・制作

ポスター、ビラやポップなどの広告印刷物研究・制作

ネーミングとキャッチコピーの手法を学ぶ

世界、そして地域をPRする=シティブロモーション、地方公共団体や非営利組織、福祉関連団体、ボランティア活動などの広報

マスコットキャラクターやアニメキャラクターによるセールスプロモーション活動 イベント活動と企業PRの関係を探る

上記に関連する懸賞やコンテストへの応募

コミュニティラジオ局やケーブルテレビ局など、広告に関連の深い企業の見学やインターンシップ その他企業や製品、サービスにかんするPR活動全般に目を向ける

自分のアイデアを製品開発に結び付けるための研究とそのPR

#### 活動項目

映像・ラジオCM制作

マスコットキャラクターデザイン、ポスター、看板やロゴ制作

お店の販売促進やキャンペーン提案、広告宣伝制作、

ラジオ番組の出演とプロデュース、

イベント・展示会企画・参加、

キャッチコピーやネーミング研究、など

そのこゼミナールは社会で自分の製品やサービス、アイデアを効果的にPRし社会に感動を与える方法を学ぶゼミです。

同時に、人々の心を動かす説得力のある話し方や問題解決に結びつく考え方も学んでいきます。

中村そのこゼミは「アイデアの電波塔～世の中PRできないものはない!」を合言葉に、

主として地域企業・組織と連携し、映像・ラジオ・文字広告、ポスター・フライヤー・POP制作、ラジオ番組のプロデュース、イベント・展示会企画・参加、広報誌制作、キャッチコピー・ネーミング・ロゴ研究など、自分の製品やサービス、アイデアを効果的に社会にPRし、感動を生み出す方法を学ぶゼミです。同時に、人々の心を動かす説得力のある話し方や問題解決に必要なスキルも学んでいきます。企業や自治体、非営利活動組織などと連携して活動を行うので、自分たちのゼミ活動が教室の中だけで終わることなく、必ず社会で現実のものとなって成果、業績となって目に見える形で残ります。

先生と一緒にゼミ生みんなで協力をするから勉強の不安はないし、友だちの輪が広がって楽しく

社会で適用する人間力を身に付けて行くことができます。やる気があれば誰だってウェルカム!一緒に楽しく活動しましょう。

コマーシャルを見るのではなく、自分で『創って』みたいと思いませんか?

そのこゼミでは、広告宣伝に興味があり、将来そのような関係の仕事をしたいなと思っている学生さんもいます。ゼミでは、広告宣伝について学び、広告宣伝やイベント企画などの仕事に必要な能力、技術、テクニック、ことば力、人間力などを楽しく身に付けていきます。日頃なにげなく見ているコマーシャルの裏側にひそむ数々の『消費者を引きつける裏ワザ』を学び、みんなの話題になるような素敵な広告宣伝をプロデュースできる「魅力あふれる人材」になっていきます。

あなたも将来コマーシャルを作る創造力あふれる人になってみたいと思いませんか?

必ずしも広告会社に就職する必要はありません。将来どんな仕事をするにしても、自分の会社や製品、社会的な活動を「PRする」力を身に付けることはとても大切なことです。どんな分野でも魅力あふれるPRができる人材になりましょう!

ラジオCM、ラジオ番組の制作、さらに声優さんや出演もやってみたいと思いませんか。上手にやる必要はまったくありません。トライして自分のスキルを少しでもアップしようという気持ちがあればまったく大丈夫。先生、ゼミの先輩、コラボしている社会人の方が積極的にサポートします。

そのこゼミでは、メディア関連企業を目指す人、また出演することを目指す人も、そのために必要なスキルを学ぶことができますが、「芸能人」になるためのゼミではありません。ラジオ活動を通して、人々の心を動かす説得力のある話し方や、社会でのいろいろな困った問題を解決するのに必要な社会人としての力=就職するための

力も身に付けて行きます。

また、ゼミでは、大学の外の会社、ボランティア団体、市役所などと連携して活動を行うので、自分たちのゼミ活動が教室の中だけで終わることなく、必ず社会で現実のもの、あなたの成果となって目に見える形で残ります。学生のうちから、ちょっと社会人っぽい=現役のビジネスマンがやっていることと同じ活動ができて、将来への準備がどんどんできてしまいます。

そんなこと自分にはできるかしら?と思う方もいるかもしれませんが。でも心配することはありません!先生と一緒に先輩ゼミ生、同期ゼミ生みんなで協力するから勉強の不安はないし、友だちの輪が広がって、楽しく社会で通用する人間力を身に付けて行くことができます。

そのこゼミナールで。。。社会に影響を与えることば力の世界を探検し、辞書に残るネーミング 歴史に残るキャッチコピー 記憶に残るコマーシャルメッセージ を創造してみませんか。中村そのこゼミナールは、「世の中PRできないものはない」をテーマに、コマーシャル作り、キャッチコピー作成、ネーミングテクニックなど、社会で自分の製品やアイデアを広告、PRする方法を学ぶゼミです。同時に、人々の心を動かす説得力のある話し方や問題解決に結びつく考え方も学んで行きます。将来、広告製作やPR活動に関係した分野で志を実現する力を付けることももちろんですが、どんな分野で仕事、社会活動をする場合でも、自分のアイデア、製品のPR、会社業務、活動のPR、など、説得力のあるメッセージを、社会に向けて力強く発信する(訴える)必要があります。このゼミでは(中心は広告になりますが)社会に向けて情報を発信していく「発信力」をどんな分野でも発揮できるような力を付けることをゴールとしています。グループワーク・グループディスカッション・プレゼンテーションなどの活動を重視し、産業界の最前線事例や問題解決シミュレーションなども積極的に取り入れられます。

### ■講義分類

ビジネス創造  
顧客理解  
地域ビジネス  
社会人力育成

### ■到達目標

講義目的に書かれている項目において、関連する社会の現場で、自分の志を実現すべく、革新的で創造的な役割を果たして仕事をしていくことができるようになること。

### ■授業形態

ゼミナール形式の少人数クラス  
グループワーク  
グループディスカッション  
プレゼンテーション  
双方向  
発見学習  
問題解決学習  
経験・調査学習  
外部での社会的活動  
自分のアイデアや研究成果を積極的に外部に発信していくことを主眼とする

学習者の能動的な学習への参加があり、学んだ情報を思い出しやすい、異なる文脈でもその情報を使いこなしやすい授業

### ■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

毎週教員から告知される学習テーマについて基礎的な知識を探索しておくこと、また授業後は授業内容に関して自分の意見や提案、アイデアなどをまとめておくこと(プレゼンテーションできるようにしておくこと)

### ■評価方法

ゼミは毎回出席することがあたりまえである  
テストや授業内課題20パーセント  
ゼミの教室内外での活動の成果60パーセント  
レポート提出20パーセント

### ■評価基準

評価P(合格) : 上記活動項目について、十分な社会的な貢献ができる形で、教員が、そして関係した外部組織の方々が認めるような成果を生み出すことができたかどうかを評価し、それに合格した場合Pとなる。  
評価F(不合格) : 上記活動項目について、十分な社会的な貢献ができる形で、教員が、そして関係した外部組織の方々が認めるような成果を生み出すことができなかったかどうかを評価し、そのような成果が出せなかった場合、またはゼミナール活動に積極的に参加しなかった場合はFとなる。

### ■履修していることが望ましい科目

マーケティング関連科目

事業構想論

海外活動英語コミュニケーション

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 情報技術による価値の創造**担当教員** 中村 有一**■講義目的**

情報系のゼミで、主に、コンピュータ、ネットワーク、情報社会、数理モデルなどの分野で研究を進めている。内容的には理科系・工学系であるが、それほど前提となる知識は必要としない。情報系の分野において各自テーマを決め、研究を通して実際の知識を身に付けることを目的とする。また最終的には卒業論文または卒業製作の形に成果をまとめる。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

自分で研究テーマを決め、研究していく能力を身につける。プログラミングや電子工作などにより、自分のアイデアを実現していくこと。成果を論文や研究発表の形で表現する能力を習得する。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各自研究を進め、レポート・卒業論文などを書く。

**■評価方法**

出席点・平常点70%、レポート・発表30%

**■評価基準**

評価P（合格）：研究発表を行い、レポート・卒業論文を提出すること

評価F（不合格）：研究発表を行わない場合、レポート・卒業論文などを提出しない場合

**■履修していることが望ましい科目**

情報系科目を履修していること、あるいはゼミと並行して履修することが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

やる気をもって積極的に参加することが重要である。自分でテーマを探し、自分で研究を進めていくという自己解決能力を養うことが目標である。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)

**サブタイトル** 中国・大中華圏で活躍できる人財を目指そう

**担当教員** バートル

**■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。

本ゼミでは、世界経済のけん引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、中国を含めた大中華圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎的な知識の習得と産業社会が求める問題発見・解決能力に優れ、かつ高度なコミュニケーション能力を備えた「グローバル人材の育成」を念頭に置いた各種調査活動に基づいたプレゼンテーションおよびディスカッションを積極的に行う。具体的には以下三つの目的意識を持って各種ゼミ活動を実施する。

1. 企業が求める「グローバル人材」の育成である。  
近年、日本とアジア・太平洋地域の経済関係の緊密化に伴い、日本企業は「アジア重視」に舵を切り始め、人事戦略の面では「グローバル人材」の育成に注力している。こうした日本企業（外資系企業も含む）の動向を踏まえ、学生諸君の就職活動や大学院への進学の一助となることを念頭に置きながら企業が求めるグローバル人材（主体性、外国語によるコミュニケーション能力、協調性、異文化に対する興味・関心・適応力、多角的・複眼的な手法でグローバルな問題に取り組む能力、規制概念にとらわれず、チャレンジ精神を持つなど）の育成を最大の目的とする。
2. 中国を中心とした大中華圏への理解を深めることである。  
中国を中心とした大中華圏（香港・台湾・シンガポールを含む）の経済、政治、外交関係に関するテーマを取り上げ、全員参加型の議論を重ね、中国及び大中華圏のビジネスに関わる基本的な知識やノウハウを身につけることである。
3. 日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案のほか、日中両国と日本と大中華圏の政府・民間の協力の可能性について考えることである。

本ゼミの運営方法としては、「学生による文献調査+レポート作成+ゼミ報告+ディスカッション」の形式を採用する。具体的には、ゼミ生が日本を始め、中国・大中華圏に関する時事問題からトピックスを選んだうえ、関連文献やデータの収集、調査を行うと共に、レポートを作成し、プレゼンテーションを行う。それに基づいて、ゼミ生全員で議論し、問題の所在と問題解決のための方法論を検討する。

また、アジア主要国地域の政治経済概況に関する情報やデータの収集と定期的な更新作業を行い、報告する。更には、学外学習の一環として、フィールドワーク調査・人的ネットワーク形成の観点から各種セミナーへの参加、留学生や企業関係者との交流活動も行うほか、海外視察（海外の大学や企業、工場など）にも積極的に参加することを求める。  
なお、ゼミの運営方法に関しては、学生の意見やアイデアを積極的に取り入れて実行する。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
グローバルビジネス  
ビジネスICT  
地域ビジネス

**■到達目標**

- ①2年次は、「Asian Weekly News（毎週・全員）」や「アジア政治経済概況（4半期・通年ベース）、全員」の作成と発信・報告を行い、日本を含めた中国・大中華圏・アジア地域に関する知見を深める。  
2年次後半には、各自の研究テーマを設定し、関連文献や情報の収集、調査を行い、SRCで報告する。
- ②3年次は、「Asian Weekly News」（毎週・全員）に加え、自分自身が関心を持つ特定の業界や産業、企業などに関するテーマを設定し、関連文献や情報の収集、実地調査（インターンシップなど）を行い、その結果をゼミないしSRCで報告する。また、就活を視野にSPI対策などを始めとする進路指導も行う。
- ③4年次は、「Asian Weekly News」（毎週・全員）に加え、就活を視野に入れたSPI対策、面接試験対策等を行うほか、卒業論文（就職希望先に関連する業界・産業・企業の調査を中心、PPT可）を作成し、4年次後半の卒業発表会としてゼミないしSRCで報告する。
- ④定期的に学年とゼミの垣根を越えた合同ゼミないし合同発表会を実施する。



**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

日頃から時事問題を始め、自分自身が関心をもつ特定の分野や業界ないし産業および企業に関する情報を常に収集、分析、調査する習慣をつけ、その過程の中で、自分自身や社会にとって将来役立つであろう問題の発見・解決力・コミュニケーション能力を身につける努力を惜しまない。

**■評価方法**

評価は、出席（45%）、報告・ディスカッション（25%）、学年毎のレポート（30%）により行う。

**■評価基準**

評価P（合格）：絶対評価  
出席（45%）と報告・ディスカッション（25%）およびレポート（30%）の総合点が60点以上の場合合格。  
レポートは、2年次は「Asian Weekly News」とアジア政治経済概況、SRCなど、3年次は「Asian Weekly News」とアジア政治経済概況に加え、特定の分野に関する研究報告（含むSRC）、4年次は「Asian Weekly News」に加え、卒業発表（含むSRC）。  
卒業発表は、日本企業の中国やアジア戦略をテーマに設定し、作成することが望ましい。なお、レポートは、独自の視点や問題意識を持ち、問題解決へ向けての積極的な取り組み姿勢を重視する。

評価F（不合格）：出席（45%）、報告・ディスカッション（25%）、レポート（30%）の総合点が59点以下は不合格。

**■履修していることが望ましい科目**

「特別講座」「中国経済論」「アジア経済論」などグローバル系の科目。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ①ゼミのルール（出欠管理・課題提出期限など）を厳格に順守すること。
- ②ゼミ内での報告等はペーパーレスで行うため、FacebookとLineの登録は必須。

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** 組織マネジメント、組織心理学**担当教員** 浜田 正幸**■講義目的**

産業社会で活躍する社会人を育成する。

**■講義分類**ビジネスマネジメント  
社会人力育成**■到達目標**

卒業時には、「社会人3年目」を目標とする。

**■授業形態**グループワーク  
グループディスカッション  
プレゼンテーション  
実務の遂行**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**毎回課題が出され、次回までに完遂しなければならない。  
QCD はMUSTである。**■評価方法**

出席（授業、イベント）、課題のQCD を100%として評価する。

**■評価基準**評価P（合格）：授業全出席MUST  
浜田ゼミ公式イベントに全出席  
課題のQCD を満たしている  
評価F（不合格）：上記要件を満たしていない場合**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ▶▶▶ **ホームゼミ(Seminars)****サブタイトル** ▶▶▶**担当教員** ▶▶▶ 樋口 裕一**■講義目的**

クラシック音楽や古典芸能を多摩地区のひとびと、とりわけ若者に広めるための活動を行う。ゼミ生が、一流演奏家に出演交渉をし、会場を探し、プログラム、ポスター作りなどをして、ゼミ生主催の本格的コンサート、寄席などを開く。このような活動によって、産業社会で活躍し、問題発見、解決に不可欠な企画力、行動力を養成する。また、就職のために必要なコミュニケーション力も養う。

**■講義分類**

社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

一つのグループで、クラシック音楽コンサート企画し、出演者・会場などとの交渉、当日のコンサートの運営など、すべてを行えるようにする。

**■授業形態**

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

クラシック音楽にふだんからなじむ

**■評価方法****■評価基準**

評価P（合格） : 10回以上出席し、コンサートについての打ち合わせやコンサートの運営に積極的にかかわる。  
評価F（不合格） : 欠席が6回を超し、コンサートについての打ち合わせや運営にかかわらない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ (Seminars)**サブタイトル** 図解ゼミ**担当教員** 久恒 啓一**■講義目的**

行政、ビジネス、教育などあらゆる分野でのコミュニケーションの手段は、文章と箇条書きが中心である。文章最大の特徴はごまかしができることである。また箇条書きはそれぞれの項目の大小、重なり、関係を示すことができない。関係を意識する図解コミュニケーション力を鍛えるもっとも大きなメリットは、「考える力」を身につけることができる点である。ゼミ生は実戦経験を重ね、卒業までに考えるための強力な武器となる「図解思考」を自分のものにすることができる。

問題解決の武器としての「図解思考」を身につけ、産業社会を形成する企業・地域・行政などの最前線の問題解決プロジェクトに挑戦する中で産業社会の問題解決の最前線に立つ人材を育てる志を持った実学ゼミとする方針である。

◎プロジェクトのテーマ

- ・東京ヴェルディ応援プロジェクト
- ・スポーツごみ拾いプロジェクト
- ・多摩の手土産プロジェクト

**■講義分類**

ビジネスマネジメント

**■到達目標**

問題解決の武器としての「図解思考」と「図解の技術」を身につける。  
パワーポイントを用いて図を描く能力を身につける。

**■授業形態**グループワーク  
プレゼンテーション**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ・新聞、雑誌の記事、他の先生の講義内容を図解する。
- ・毎回のゼミで作った図解をブラッシュアップする。

**■評価方法**

1. 出席 90点
2. ゼミの成果への貢献 10点

**■評価基準**

評価P（合格）：図解思考の視点を身につけた。出席率と貢献度が高い。  
評価F（不合格）：図解思考の視点への理解が不足している。出席率と貢献度が低い。

**■履修していることが望ましい科目**

「問題解決学」分野の科目を多数履修することが望ましい。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**参考URL  
<http://www.hisatune.net/>

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル****担当教員** 増田 浩通**■講義目的**

経営情報の基礎となる書籍を輪講し、その内容を人前でわかりやすく伝えるためのプレゼンテーションの仕方を学ぶ。またMOS試験やITパスポート試験を受け、合格できるよう基礎的な勉強をゼミ全体で行う。またプログラミングの基礎を学ぶ。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

プレゼンテーション：人前で、自分が調べたことをパワーポイントを用いて発表できるようにする。  
MOS試験やITパスポート試験を受験する。またプログラミングの基礎を理解し、フローチャートを書けるようになる。

**■授業形態**

ゼミ形式

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ワード、エクセル、パワーポイントを使うので、このゼミで基本的な使い方をマスターすること。  
あわせて、MOS試験やITパスポート試験の勉強を参考書を使いながら行う。

**■評価方法**

- ・出席：50%
- ・発表：25%
- ・課題：25%

**■評価基準**

- 評価P（合格）：  
・規定回数以上の出席をすること。  
・指定されたところの発表をパワーポイントで行うこと。  
・出された課題を期日までに提出すること。
- 評価F（不合格）：  
・規定回数以上の出席をしない場合。  
・指定されたところの発表を行わない場合。  
・出された課題を期日までに提出しない場合。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの事業開発**担当教員** 松本 祐一**■講義目的**

将来、創業・起業したい、お店をやりたい、地域や社会の問題を解決するビジネスをやりたい、NPOの事業をやりたい、企業で商品開発や新規事業開発に携わりたいという学生を対象に、事業開発に関する理論と方法を学ばるとともに、実際に様々なプロジェクトを企画運営しながら事業開発力を養う。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
ビジネスICT  
地域ビジネス

**■到達目標**

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ビジネスプランのケース分析や自身のビジネスプラン作成

**■評価方法**

出席 40%  
課題等のアウトプットの質 30%  
授業中やプロジェクト中の姿勢 30%

**■評価基準**

評価P（合格） : 8割以上の出席。  
企画立案などを自分なりの視点で行える。  
グループワーク、フィールドワークに自主的・積極的に貢献した。  
仲間と一緒に協力してプロジェクトを運営できた。

評価F（不合格） : 上記を達成できていない場合

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ▶ ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** ▶ イベントの企画運営を通じてプロフェッショナル・スキルと社会性を学ぶ。**担当教員** ▶ 村山 貞幸**■講義目的**

プロフェッショナル・ビジネスパーソンに必要な社会性とスキルを獲得することで、ビジネスの高度な問題解決を行う能力を養う。それは、就職力向上にもつながり、厳しい就職活動に打ち勝つ能力を獲得することになる。本ゼミでは、プロフェッショナル ビジネスパーソンを、「社会性を重視し、組織目標を圧倒的に優れた能力により達成する人」とする。そのために必要な能力は、以下と考える。

- 社会性
- 行動力
- 創造力
- 人脈構築力
- コミュニケーション力
- 論理的思考力

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成

**■到達目標**

- (1) 社会性を高いレベルで獲得する。
- (2) プロフェッショナル・スキルを高いレベルで獲得する。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ゼミで学習した内容を完全に理解するまで復習する。（30時間程度）

**■評価方法**

出席50%、クラス貢献度50%

**■評価基準**

評価P（合格）：出席9割以上。  
 社会性レベルと社会人基礎力が成長した。  
 評価F（不合格）：出席が9割未満。  
 社会性レベルと社会人基礎力が成長していない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** ホームゼミ(Seminars)**サブタイトル** エンターテインメントを脳科学する**担当教員** 良峯 徳和**■講義目的**

現代社会の日常生活から、ビジネス、エンターテインメントの世界を変える可能性のある「ニューロ・イノベーション（情報科学技術の潮流がついに人間の「脳」に到達）」をさまざまな実例や実験を通して体感する。

自分の脳の状態を知ること、生き方やビジネスの方法、コミュニケーションの方法などが、どのように変わる可能性があるかについて、実践的に学ぶ。

例えば、以下のような心に関わるさまざまな謎に対し、脳という視点から探求、考察する。

「怖い」と感じるジェットコースターやお化け屋敷に夢中になるのはなぜか？

「悲しい」物語や映画を読んだり、鑑賞したくなるのはなぜか？

好きな音楽に夢中になったり、感動したりするのはなぜか？

何かに夢中になったり、感動しているときの脳はどんな状態にあるのか？

感動して涙を流したり、楽しく笑うことがストレス解消になるのはなぜか？

心の働きと脳の働きの関係はどうなっているか？

BMI(Brain Machine Interface)を体験して、その実用化の可能性を実験を通して探求する：

BMIとは、利用者の脳信号を読み取り・脳への刺激によって脳（思考）と機械のダイレクトな情報伝達を仲介するプログラムと機器の総称である。従来の手などを使った物理的操作でなく、脳の状態を直接コンピュータに読み取らせて、さまざまな機械のコントロールを行わせることが可能となる。こうした新しい技術は、義手や車椅子など介護・福祉分野での応用、医療分野での応用、新しい玩具開発やゲーム機のコントロールなど、エンターテインメント分野での応用が研究開発されている。本ホームゼミでは、実験器具を使ってBMIを実際に体験しながら、実用化の可能性を考察、探求する。

**■講義分類**

ビジネスICT

ビジネス創造

ビジネス環境理解

社会人育成

**■到達目標**

- ①脳に関する基本的な知識の習得（脳の構造、機能、脳の研究方法、脳計測機器（PET・MRI・NIRD・EGGなど）の種類と特徴）
- ②脳に関する最新研究の調査（さまざまな研究機関や企業で行われている脳研究の事例調査）
- ③脳研究に基づくさまざまな分野での応用技術開発の現状調査
- ④脳波計や皮膚電位計、心拍計などを使い、脳と心の状態を実験・計測する手順・方法論を習得。
- ⑤実験計画策定→実験実施→実験結果の集計→考察→発表という一連の科学的研究方法の習得。
- ⑥グループワークでの協調性、積極的な発言力、実行力を身につける。
- ⑦効果的なプレゼンテーション資料を制作する力をつける。

**■授業形態**

グループワーク

プレゼンテーション

双方向

グループディスカッション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

基本的な知識習得については各自が担当個所をプレゼンテーションすることで進めていくので、担当者は責任をもって事前準備を行う。実験においては、事前準備がきわめて重要である。メンバーは分担して、実験に必要な試料や実験計画の立案、実験装置の準備などを行う。

**■評価方法**

出席および課題や役割分担への取り組み態度60%、最終レポート40%

**■評価基準**

評価P（合格）：ゼミ活動に自主的、積極的に参加し、意欲的な態度で臨んでいる。創意工夫を試み、創造的な発想を行う。各自担当のプレゼンテーションや課題、実験準備、役割をきちんとこなしている。

評価F（不合格）：上記基準を満たしていない場合。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**



**科目名** インターゼミ (Inter Seminars)**サブタイトル** 寺島学長ゼミ (社会工学研究会)**担当教員** 寺島 実郎、久恒 啓一、金 美徳、中庭 光彦、バートル、奥山 雅之、久保田 貴文、中澤 弥**■講義目的**

現代社会の抱える課題について、学部・大学院・学年・社会人などをまたいで塾形式で切磋琢磨しながら、多様な要素や手法を組み合わせた柔軟な発想で、体系的・総合的な答を志向する総合設計力を身に付ける。

学生自身による問題発掘・発見から仮説の提示、そして多様な要素の組み合わせによる問題解決へ至るプロセスの中で、寺島学長以下、学内の教員や社会で活躍する学外の専門家による付加価値を高め、創造的問題解決策を志向する。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス  
 ビジネスICT  
 地域ビジネス

**■到達目標**

①選択したテーマについて、文献調査・フィールドワーク・考察・執筆を行い、1年後に論文を完成させる。②産業界の持つ課題を発見し、解決へのアプローチを目指す論文内容へと指導する。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

- ①各テーマに従って文献一覧を作成する。
- ②フィールドワークをアレンジする。(調査場所の設定、相手先への連絡、日程調整、学芸員やガイドなどの手配)
- ③年間スケジュールを作成する。(文献調査、フィールドワーク、調査分担、論文作成分担)

**■評価方法**

出席(25%)、グループワーク貢献度(25%)、中間および最終発表(50%)の割合で評価する。

- ①出席率を重視する。
- ②問題意識の尖鋭化、テーマ設定、文献調査、フィールドワークなどグループワークへの貢献度。
- ③1年間にかけて共同で論文を完成させること。

**■評価基準**

評価P (合格) : 出席(25%)、グループワーク貢献度(25%)、中間および最終発表(50%)の合算点が、60%以上であること。  
 評価F (不合格) : 出席(25%)、グループワーク貢献度(25%)、中間および最終発表(50%)の合算点が、59%以下の場合とは不合格とする。

**■履修していることが望ましい科目**

グローバルビジネス系、地域ビジネス系、ビジネスICT系のすべての科目に関連する。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ①毎回出席すること。欠席時は、必ず連絡すること。
- ②夏季合宿に参加すること。
- ③寺島学長の講演会やセミナーなどに積極的に参加すること。

**科目名** プロジェクトゼミ (Project Seminars)**サブタイトル** 環境問題とビジネス創造 ～環境問題を考えて、ビジネスコンテストによう！～**担当教員** 荒木 恵理子**■講義目的**

未来に生きることにもたちへ豊かな自然と安心して生活ができる地球環境を残すための「環境問題」をテーマとして、様々な分野の企業やNPOの環境活動を学習し、人々にどんな環境活動や教育・ビジネスを行えば意識変化及び行動変容をもたらすことができるかを検討し実施することで、社会課題解決基礎力をつける。

**■講義分類**

環境  
課題解決  
ビジネス創造  
社会人力育成

**■到達目標**

- ・ 環境問題を切り口に、世の中について知る。
- ・ 各分野の企業やNPOの環境活動を学習し環境ビジネスのアイディア及び事業案を創出のための既存の環境活動・環境ビジネスについて分析を行い、秋講座（大学生向けビジコンへの参加体験）への準備とする。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

調査・検討などの事前準備（ゼミで発表のため）

**■評価方法**

講義への参加度50%、提出物の内容評価やプレゼン50%

**■評価基準**

評価P（合格）：講義への参加度50%、提出物の内容評価やプレゼン50%  
評価F（不合格）：講義への参加度50%、提出物の内容評価やプレゼン50%

**■履修していることが望ましい科目**

マーケティング、アカウンティングに関連する科目

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・ 春学期、秋学期と通期で受けることを推奨。
- ・ PC持参（ただし、講義以外での目的での使用はしないこと、講義以外での使用の場合には評価対象外となる）。
- ・ 積極的に考え議論し、問題意識をもってリサーチし、その中からビジネスについて積極的に学ぶ姿勢、ビジネス創出への意欲をもって取り組める学生を対象とする。

**科目名** プロジェクトゼミ(Project Seminars)**サブタイトル** メディア実践論 ～メディアをつくる・大学発情報発信をめざして～**担当教員** 木村 知義**■講義目的**

&lt;春学期&gt;

軸足は地域・多摩に、目は世界に、トキメキのメディア実践論へ！

メディアの世界にいま「新しいうねり」が起きている。

ICT(情報通信技術)のめざましい発展によって、これまでは情報の「受け手」としてしか存在しえなかった我々の誰もが情報発信の主体、「送り手」になれる時代がやってきている。

とりわけ、フェイスブックやツイッターといったソーシャルメディアがめざましい広がりをみせて、日常的な情報発信ツールとなっている。さらに、「オルタナティブ・メディア」あるいは「コミュニティ・メディア」といわれる、市民によるメディア発信も、世界各地で活発におこなわれている。また、従来の「受け手」(視聴者)が自ら番組を企画・制作して放送に参画する「パブリック・アクセス」といわれる試みもはじまっている。

しかし、それだけに、何を、どう伝えるのかが深く問われる時代だというべきである。

こうした時代認識と問題意識に立って、プロジェクトゼミ「メディア実践論」では、社会や地域を見つめ、自らテーマを発見し、企画、取材、編集といった、メディアにかかわる全プロセスを体験することで、課題発見能力、企画力、取材力、そして問題解決能力にいたる総合的な力の獲得をめざす。

これらの取り組み、学びによって、なによりも実社会で通用する実践的知識と能力の獲得、錬磨をめざす。同時に、メディアリテラシーとコミュニケーション能力を鍛え、社会と人間へのまなざし、もの見方、考え方を深め、現代社会で生きていくために不可欠な人間力の陶冶をめざす。さらに多様な発想にもとづくメディア実践を通して、現代社会におけるメディアの使命と責任、ビジネスICTの現状と可能性についても学ぶ。

&lt;秋学期&gt;

春学期のプロジェクト活動を引き続き発展させる。

活動の柱を確認しておく、

1. 映像および音声番組の企画、制作
2. 多摩地域の「コミュニティ・メディア」に関する調査・研究とプランニング  
\*具体的には「多摩コミュニティFM放送局」の復活、再興に向けたプランニング
3. 多摩大学「学生ジャーナル」の取材、編集への参画  
\*取材と記事の執筆、写真も含めた紙面制作の3つである。

企画のジャンルは大きく分けて

1. 発見!多摩
2. 大学を記録する
3. 見つめて、青春  
そして、制作メディアの選択肢は、
1. ビデオ番組
2. デジタルカメラを活用したスライドショー構成番組
3. 音声番組
4. 活字、ペーパーメディアにおける写真と記事  
となっている。

「メディア実践論」に取り組む際の、現在のメディア状況についての認識と問題意識について整理すれば、下のとおりである。

急速な進化、広がりをみせるSNSや投稿動画サイト「YouTube」など、これまで閉ざされがちだったメディアの世界にいま「新しい風」が起きている。つまり、ICT(情報通信技術)のめざましい発展によって、これまでは情報の「受け手」としてしか存在し得なかったわれわれの誰もが情報発信の主体、「送り手」になれる時代がやってきた。また「オルタナティブ・メディア」といわれる市民によるメディア発信も、世界各地で活発におこなわれるようになってきた。

しかし、それだけに、何を、どう伝えるのかが深く問われてくる。

プロジェクトゼミ「メディアを創る－メディア実践論」では、社会や地域を見つめ、自らテーマを発見し、企画、取材、編集といった、メディアにかかわる全プロセスを体験することで、課題発見能力、企画力、取材力、そして問題解決能力にいたる総合的な力の獲得をめざしている。

こうした実践的知識と能力の錬磨を通じて、メディアリテラシーとコミュニケーション能力を育み、社会と人間へのまなざし、もの見方、考え方を鍛え、社会で生きていくために不可欠な人間力の陶冶をめざす。さらに多様な発想にもとづくメディア実践を通して現代社会におけるメディアの責任と使命、ビジネスICTの現状と可能性についても学ぶ。これらを総合して、社会で実際に役立つ人材の育成と、大学からの多摩の地域社会への貢献をめざす。

以上の立脚点に立って秋学期は、春学期から重ねてきたプロジェクト活動の一層の深化と充実、当初の目標の達成をめざす。

また、秋学期から参加する諸君に向けては、映像コンテンツの企画制作の初歩から段階を踏んで体得していく実践的な学びの場としていく。

### ■講義分類

社会人力育成  
ビジネスマネジメント  
ビジネスICT  
ビジネス創造

### ■到達目標

1. 広く社会に目を向けて、テーマを見つけ、企画を立て、取材できる。
2. インタビューやレポートなど、聴く力を鍛えるとともに自らのことばで語り、伝えることができる。
3. 映像や音声によるドキュメンタリーなど、コンテンツ制作にかかわる過程を体験することで、メディア制作についての知識と実際的な技法、方法を活用して、社会に向けて情報発信できる。
4. 多摩大学「学生ジャーナル」の取材、編集に参画して、大学発の情報発信を担う。
5. 多摩地域をベースにしたゼミ活動などと連携し、地域社会に根ざすコミュニティメディアの創造および大学発の情報発信にむけての活動を担う。
6. これらの取り組みによって、豊かな表現力を獲得し、問題発見能力、企画力、さらには交渉力をはじめとするマネジメント能力、問題解決能力を鍛え、実社会で活用できる。

### ■授業形態

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

教室で学んだ知識、制作技法にもとづいて、学外での取材やロケに取り組むので自主的かつ能動的な学習が不可欠である。また編集作業なども自主的に取り組む必要があり、教室での学習より事前、事後を含めた自主的な学習の比重が高い。さらに、指定する放送番組などを視聴して企画や編集、制作技法を吸収したり、配布資料や指定図書を読み込んで、企画・制作にかかわる具体事例についても学んだりする必要もある。全体として教室外での自主的、能動的な学習と作業が不可欠かつ重要になる。

### ■評価方法

数値上の評価配分の基本は、日常のゼミ活動への出席40% 自主的な取材・制作活動30%、制作成果の評価30%とする。

### ■評価基準

- 評価P（合格）：真摯に各回の教室に出席し、積極的に意見発表、議論に臨むとともに、自分の企画を完成させ、目標を達成する。  
注：日常のゼミへの参加の姿勢をはじめ番組制作プロセス、プロジェクト活動での努力に主眼をおいて評価する。そのうえで、作り上げた作品のレベル、発想の豊かさ、企画力、実行力などを総合的に判断して評価。結果としての番組の出来具合、プロジェクトの目標実現力も大事だが、なによりも真摯に努力する姿勢や積極性を重視する。
- 評価F（不合格）：三分の一（5回）以上欠席し、かつ企画を完成できなかった場合は不合格とする。  
欠席が三分の一をこえていて、企画を完成させた場合は、各人の事情を聴取し、日ごろのゼミに臨む姿勢などを勘案して慎重に判断する。不合格とせざるを得ない場合は事前に本人と話し合い、納得性の上に判定する。

### ■履修していることが望ましい科目

社会と人間に関心を持つ力を育み、人に寄り添う温かい人間性と深い問題意識を育てることにつながる、すべての科目と真摯に向き合って学ぶことが、このゼミでの活動に生きてくると確信する。

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

自ら調べ、考え、企画を立てて議論し、取材に歩き、編集に取り組むなど、相当ハードなワークになるが、自発性にもとづく創造的な「学びの場」をめざす。  
どんなことでも挑戦してみようという、チャレンジ精神に富む学生諸君の参加を呼びかけたい。  
同時に、将来、進路としてメディアでの仕事を志す学生はもちろん、それ以外の学生にとっても重要な、ものの見方や考え方、社会性などを実戦的に鍛え、総合的なコミュニケーション能力の鍛錬をめざしていることをふまえ、多様な問題意識をもった学生の参画を期待する。  
なお、15回という限られたカリキュラム設定の中で目標を達成する必要があるため、病気、就活などやむを得ない場合を除いて、全授業に出席することが不可欠。

**科目名** ▶ プロジェクトゼミ (Project Seminars)

**サブタイトル** ▶ 事業構想入門講座 (Zero to One)

**担当教員** ▶ 見山 謙一郎

**■講義目的**

先が見えない今の時代は、学生諸君にとっては厳しい時代と感じるかも知れない。しかしながら、違った視点で捉えてみると、こんな時代だからこそ、柔軟な発想を生かしたビジネスプランを構想し、それを実現するチャンスでもある。本ゼミナールは、ビジネスプランの作成と、ビジネスプランコンテスト (ビジコン) の優勝を目指し、グローバルとローカル双方の視点から、事業構想力と経営戦略、マーケティングなどを体系的に学ぶ、実践型のゼミナールである。

春学期は、経営学基礎講座から事業構想入門講座 (初級編、中級編) までを行なう。具体的には、グループワーク、グループディスカッションにより、学生の関心の高い身近な事例から経営学の基礎を学んでもらい、徐々に「自分ごとに置き換えて考える力」を身につけてもらう。その後、ビジネスアイデアの構想からビジネスプラン作成へとステップアップしてもらうことを目指す。

また、今期は企業訪問や市場調査など、学外での活動についても積極的に導入する予定である。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成  
 グローバルビジネス

**■到達目標**

- (1) 世界、アジア、及び日本の現状と課題を理解すること
- (2) 現代社会の様々な課題を自分ごとに置き換え理解するとともに、経営学の基礎知識を体系的に習得すること。
- (3) グループワークを通じて、多面的且つ柔軟な思考と事業構想力を身につけ、ビジネスプランコンテストで優勝を目指すこと。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 双方向

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

毎回、ゼミで出された「課題」に対し、必ず次回までに自分なりの意見にまとめ、発表が出来るようにしておくこと。

**■評価方法**

出席状況 (50%)、講義内での発言や貢献度 (30%)、最終プレゼンテーション (20%) にて評価を行う。  
 (単位取得には2/3以上の出席が必要となる。)

**■評価基準**

評価P (合格) : 60点以上  
 (単位取得には2/3以上の出席が必要となる)  
 評価F (不合格) : 59点以下

**■履修していることが望ましい科目**

必ず、秋学期に開講される事業構想入門講座(2)を履修すること。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

必ず、春学期秋学期通年で履修すること。  
 また、ゼミ時間外や、夏休み期間中にグループワークが発生することも予め留意のこと。  
 尚、応募予定のビジネスプランコンテストは、以下の通り (追加の可能性もある)  
 ①UVGP (University Venture Grand Prix)  
 ②40億人のためのビジネスアイデアコンテスト

## 科目名 ▶▶▶ プロジェクトゼミ (Project Seminars)

サブタイトル ▶▶▶ 「シェアリング」ビジネスの現場を見て自分で考える ～就職活動で役立つ自己プレゼン術を養う～

担当教員 ▶▶▶ 伊藤 暢人

### ■講義目的

いま、米シリコンバレーをはじめ、世界で注目を集めているのは「シェアリング」型のビジネスモデルである。自分で養わず、余っているものや使っていないものを「シェア」というモデルは、従来の事業構造とは大きく異なる。このモデルを活用して急成長するベンチャー企業も登場し、また大企業でも従来のモデルとは別にシェアリングに乗り出す会社が出ている。

実際に社会はどのように動いているのかを知り、新しいモデルやサービスを考えることは、卒業後の進路を考える上でも重要である。また、企業の側でも大学生の新鮮な考え方に触れたいというニーズを持っている。

そこで、実際の企業の事業活動について、フィールドワーク的に調査し、企業や社会が抱えている課題について自分たちの解決策を見出し提案していかうというのがこの講義の狙いである。企業や社会が置かれた状況を冷静に理解し、自分たちの手でフレッシュなアイデアを磨き上げていってもらいたい。

調査能力、プレゼンテーション能力、チームワークなど企業活動に必要な要素を実践的に学んでいく。こうした能力を養い、就職活動において個人面接やグループ面接で、論理的に自分の考えをまとめ、説得力をもって発言できる力を備えてほしい。

講義の具体的な内容としては、このところ話題のシェアリングサービスを展開する2社を訪問し、それぞれのビジネスモデルを理解。その改善策や、新たなシェアリングのサービスなどを考える。対象企業の1社はベンチャー型の「軒先（予定）」。軒先などの小さな空いているスペースを、利用したい人に仲介して貸し出すサービスを展開している。もう1社は「クロスカンパニー（予定）」。ファッションブランドのアース ミュージック&エコロジーなどを展開する。2015年にカジュアル服のシェアサービスを開始した。実際に拠点を訪問して、自らの目で両社のビジネスについて考え、よりよいモデルやサービスを考え、発表する（企業や講義の順番は先方の都合により変更になることもある）。

### ■講義分類

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人育成  
ビジネスICT  
地域ビジネス

### ■到達目標

グループをつくり、グループごとに社会や企業の課題を見つけ、それを改善する方法を提案する。自分たちで課題を発見し、解決策を考え、自分たちの言葉でプレゼンテーションする手順を学んでほしい。

### ■授業形態

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向

### ■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容

「シェアリング」サービスというものについて、インターネットや書物などを通じて一般的な知識を習得してほしい。

### ■評価方法

評価は講義中のプレゼンテーション（3回分を予定）の内容（70%）、出席(30%)により行う。

### ■評価基準

評価P（合格）：講義中のプレゼンテーションは次の4点を中心に評価する。  
 (1)対象の企業や社会が抱える課題の状況・課題を十分に理解しているか。  
 (2)その課題に対する独創的な解決策を用意できているか。  
 (3)分かりやすく制限時間内にプレゼンテーションできているか。  
 (4)チームワークがとれているか。

評価F（不合格）：自分たちの視点により意義あるプレゼンテーションができなかった場合

### ■履修していることが望ましい科目

特になし

■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

■留意点

学期中2回程度、企業訪問を予定している。この講義は、2コマ分の時間を要する見込み。また、それとは別に1回は店舗を対象としたフィールド調査を大学の近郊で実施する。対象企業が変更になることや、企業の訪問日程やテーマによりスケジュールが変更になることがある。

**科目名** プロジェクトゼミ (Project Seminars)**サブタイトル** アプリの開発～Webを活用して**担当教員** 梶原 裕**■講義目的**

昨今開発されている、インターネットを介したアプリ開発においては、様々なツールやインターネット上で提供されているサービスのAPIを用いて構築が行われている。  
このプロジェクトゼミでは、開発の現場で使われているツールや技法を学び、実践として、それらを用いてPCやスマートフォンから利用するWebアプリ開発を行う。  
また構築を通じて、Webアプリケーションの仕組みを理解し、Webアプリケーション活用・開発のスキル習得を目標とする。

**■講義分類**

ビジネスICT

**■到達目標**

- (1)DBを活用したWebアプリケーションの仕組みを理解する。
- (2)Java・Spring Frameworkを学習し、利用する。
- (3)JavaScript(AngularJS)を学習し、利用する。
- (4)レスポンシブデザインを学習し、利用する。
- (5)WebAPIを活用し、利用する。
- (6)Webデータベースシステムを設計し、開発する。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
PCを使用した実習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

ツールの使い方等においては、授業の復習を推奨

**■評価方法**

課題提出(50%)、システム開発(30%)、平常点(20%)

**■評価基準**

評価P (合格) : 授業内容を理解し、課題提出を行った。  
評価F (不合格) : 課題提出を行わなかった

**■履修していることが望ましい科目**

Webサービス開発・Webプログラミングを履修、もしくはそれらと同程度の知識を学習していることを前提とする。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

PC持参必須。  
この授業では実際に開発の現場で用いているツールや技法を用いるが、それらの習熟の時間は授業内では設けることはできないため、講義時間外に自ら理解を深める努力が求められる。  
受講者数や受講者の技術レベルにより、Webを活用するアプリ開発という範囲内で難易度および題材が変わる可能性がある。



**科目名** ▶ プロジェクトゼミ (Project Seminars)**サブタイトル** ▶ 地域の歴史と偉人から学ぶ問題解決のための理論**担当教員** ▶ 河合 敦**■講義目的**

史跡・遺物・史資料を用いて偉人や地域の歴史を学習することによって、志を養うとともに、問題解決の方法や実践的知識を獲得する。

**■講義分類**

顧客理解  
 社会人力育成  
 地域ビジネス

**■到達目標**

本講義で学習した偉人の生涯や地域の歴史的事象を、現代社会や自身の問題に置き換えてとらえ、教訓や問題解決のための実践的理論として役立てることができる。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 プレゼンテーション

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

地域の史跡散策、博物館等での見学・学習等、校外学習を2回予定しているので、事前に行き先についての下調べ等を行う。また、事後にその成果について発表をおこない、小レポートを提出する。後半に各自プレゼンテーションを実施してもらうので、そのための準備学習が必要である。

**■評価方法**

出席点15%、小レポート(2回分)50%、プレゼンテーション35%

**■評価基準**

評価P (合格) : 上記の活動項目について、偉人の生涯や地域の歴史的事象を、現代社会や自身の問題に置き換えてとらえ、教訓や問題解決のための実践的理論として役立てることができたかどうかを教員が評価し、それに合格した場合Pとなる  
 評価F (不合格) : 上記の活動項目について、偉人の生涯や地域の歴史的事象を、現代社会や自身の問題に置き換えてとらえ、教訓や問題解決のための実践的理論として役立てることができたかどうかを教員が評価し、成果が出せなかった場合、またはゼミナール活動に積極的に参加しなかった場合はFとなる。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

博物館への校外学習を予定している。8月の集中講義の3日目を予定。  
 博物館までの交通費と博物館の拝観料は自弁となる。

**科目名** プロジェクトゼミ (Project Seminars)**サブタイトル** 考える力の有無が分野を問わず諸君の人生の価値を決する。 ～グローバルビジネスパーソンと一緒に鍛える“考力塾”～**担当教員** 富田 直美**■講義目的**

混沌とした時代、未来、そこで力強く歩むあなたに最も必要な力、それが“考える力” = “考力”だ。今までの世の中、特に日本では、先達の成功方法を記憶し、その通りに実行できる者が勝利者だった。しかし、そんな人生をCopy & Paste (コピペ) しても現在そして、将来の成功はありえない。朗報なのはそんな記憶力での勝者である、日本の一流大学に入学を許可された、君達の人生でのライバル達は、この事実に残り気づいていない。 ⇒ BIG CHANCE  
しかもその大切な“考力”をしっかりと身に着ける塾も大学も見当たらない。

それを行えるのが富田ゼミ。 たった15回の授業で、あなたの鍛えられていない“考力”は著しく向上する。今がその時！

9社のグローバルICT企業のトップマネージメントとコンサル企業を通じて多くの大人を知っているが、彼らも又、人生における“成功”について真面目に、そして真剣に考えている人は極めて少ない。何故ならば考える事なしに生きてこられたという今までがあるからだ。

そこで、まずは、人生の成功のみならず、幸せな人生を日々歩んで行く為に絶対に必要な“考える力” = “考力”を15回の授業の中で、鍛練し、身に着けて行く事がこのプロジェクトゼミの主目的である。コピペや記憶力中心の生き方から、自らの考えに基づく生き方をできる一人前の“独立し、自由な大人”への“考力塾”である。

**■講義分類**

社会人力育成  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
グローバルビジネス  
ビジネスICT

**■到達目標**

人生で成功する為の自分自身のライフスタンダード (自己人生規範) の必要性を知り、実際の世の中へ出てから遭遇するであろう諸課題をポジティブ & 創造的に “考える力” の基礎を習得する、その為に、

- (1) 自身の内面を探查する。特に自分の存在意義をポジティブな観点で発見する。
- (2) 優れたリーダーになる為の資質と要件を探索し、それらを得て育む具体的な方法を世界レベルでの成功哲学者から学び、自身の具体的な実現プランを考え構築を試みる。
- (3) リーダーになる為の自分力、創造的思考力、説得力を具体的に学び、人生を通じて育むヒントを得る。

**■授業形態**

富田よりの課題提起  
Q&A  
ディスカッション  
ディベート

**■準備学習 (予習・復習等) に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

初講の前に、富田の経歴等をWikiPediaにて確認し、一人につき一問の質問を用意しておくこと。  
本ゼミを選択した理由を説明できるようにしておくこと。

**■評価方法**

講義への出席50%、授業内での応答20%、講義への参加の姿勢30%

**■評価基準**

評価P (合格) : 絶対評価  
A+: 91%以上、A: 75~90%、B: 50~74%、C: 40~49%、F: 40%未満  
評価F (不合格) : 2/3 以下の出席でFの評価の場合 ただし、特別な事情があり出席が不可の場合は、事前に富田の許可をもらった場合は、出席とみなす。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

講義への参加のレベルを以下に分類する。

- Level 1: Just Sitting (そこに居るだけ)
- Level 2: Participate (消極的参加)
- Level 3: Involve (積極的参加)
- Level 4: Engage (主体的参加)

自分自身の“考える力”を身につけるのがこのプロジェクトの目的であるから、当然Level 3 以上の参加姿勢を期待する。また“考力”は筋トレの筋力アップと同様に、考力アップは日頃使っていない頭脳を鍛えるので、通常の授業より“疲れる”可能性がある。その覚悟が大切。疲れない筋トレで筋肉がつくことはないのと同じ。すべて人生をHappyに生きるために必要な頭脳の筋トレだからである。考力アップを保障する為である。

**科目名** プロジェクトゼミ (Project Seminars)**サブタイトル** 知的プロフェッショナル入門 ～アクティブ・ラーニングで質問力を鍛える～**担当教員** 中野 未知子**■講義目的**

チームメンバーとともに課題を解決していくための質問力を鍛えること。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

課題の芯を捉えるためにはどのような質問を投げかければよいのかということと、本質的な課題解決のための策をチームで立案していく対話の進め方を体験的に学んだという実感を得る。

**■授業形態**

グループディスカッション  
双方向

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

講義前：

授業中に毎回ディスカッションを行うので、持ち回りでディスカッション・テーマを考えてくる。ディスカッション・テーマは他のゼミ活動等で個々が感じている問題意識から生ずるものが望ましい。

講義後：

毎回リフレクションペーパーを提出する。

**■評価方法**

ゼミ活動（学内外活動両方）への出席状況30%、ゼミ参加への積極性30%、事前事後学習の遂行状況30%、ゼミ中の発表の品質10%の4点で評価する。

**■評価基準**

評価P（合格）：評価Fの状況でなければPとする。

評価F（不合格）：一定数の欠席・遅刻を越えた場合、事前事後学習及び、授業参加、特にディスカッションへの参加姿勢に積極性が感じられない場合。

**■履修していることが望ましい科目**

初回授業時に説明する。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本ゼミは学習効果を高める観点から、1回（90分）単位でなく隔週の連続授業を行う。また指定の授業日程とは別に1、2日程度の学外活動日が発生する。日程は初回授業で説明するので、講師の指示をよく確認して受講すること。

**科目名** ▶ プロジェクトゼミ(Project Seminars)**サブタイトル** ▶ スポーツを通してデータ分析を学ぶ**担当教員** ▶ 森本 美行**■講義目的**

今やビッグデータやデータサイエンスという言葉は目新しいものではありません。ビジネスを行う際の顧客理解、課題発見、問題解決を考えるために必要な情報であり考え方としてしっかり根付き始めました。しかしそれらを実践的知識として獲得するというハードルは決して低いものではありません。実際に起きた現象の原因を探るために仮説を立て、データを収集し、分析を行い検証し問題解決に役立てるといって一連のプロセスをスポーツという身近なコンテンツを活用して学び、実践的知識を獲得することを本講義の目的としています。

**■講義分類**

ビジネスマネジメント  
 ビジネスICT  
 課題発見  
 ビジネス環境理解  
 顧客理解  
 ビジネス創造

**■到達目標**

(1) サッカー、フットサル、野球、バレーボール、バスケットボール等の協議における実際の試合から、勝ち負け、得失点、ゲームの進め方(優勢、劣勢)を決める要因はどのようなことが考えられるか、データを活用して説得力のある分析を行う。  
 (2) スポーツの試合で起きている様々なアクションを映像、ネット等から取得し、それを元に仮説を立て、質の高い分析を元に検証を行い原因の探求及び問題解決のための考え方を習得する。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

話題になっているスポーツ、自分が興味を持っているスポーツの中継もしくは観戦を行うこと。また、それらのスポーツ終了後に、メディアを通して意識的により多くの記事、公式記録等のスタッツに触れること。

**■評価方法**

出席回数(60%)  
 プレゼンテーション(30%)  
 授業への貢献(10%)

**■評価基準**

評価P(合格) : 講義15回中10回以上出席、授業中の貢献、グループプレゼンテーション  
 評価F(不合格) : プレゼンテーションへの不参加。欠席6回以上。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** インターンシップI・II(Internship I・II)**サブタイトル** 「就業体験」を重ねて、社会人になる準備をする。**担当教員** 浜田 正幸**■講義目的**

実際に社会で働く会社の人たちとの職業体験を通じて、「働く」ということを理解する。  
アルバイトとは全く異なる、「会社で働く」ということを体験する。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

- ① 社会人としての基本的な行動ができるようになる（マナー、報連相）
- ② 朝から夜まで、一つの仕事に集中して取り組むことができ、毎日それが続けられる
- ③ 社会人として認められる、最低限の仕事のレベルに到達する

**■授業形態**

その他（インターン先の会社において、与えられた課題の遂行）

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

春学期（5月 or 6月）に実施されるインターンシップ説明会に出席しなければならない。  
夏休み中にインターンシップ先に行き、全日程の課題を遂行しなければならない。  
秋学期（9月）に実施されるインターンシップ報告会に出席しなければならない。

**■評価方法**

インターンシップ講座・発表会への出席50%、実習50%

**■評価基準**

評価N（認定）：キャリア支援講座、インターンシップ報告会など、すべての説明会や講座に出席していること。  
インターンシップに無遅刻無欠席であること。  
インターンシップ先の評価を重視する。

評価F（認定せず）：要件を満たしていない場合。

**■履修していることが望ましい科目**

インターンシップIとインターンシップIIは同じ内容（2回までインターンシップ体験ができる）

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

**科目名** AP数学(Advanced Practical Mathematics)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉**■講義目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをすればよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数的・論理的処理力の基礎を完全習得する。

**■講義分類**

ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
ビジネスICT

**■到達目標**

経営情報学部で学ぶ上での必要な数学の十分な能力が身についているか。

**■授業形態**

講義  
演習

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業内に示される課題について、授業内で完答できなかったものについて完成させておくこと。

**■評価方法**

出席点50%、期末試験50%

**■評価基準**

評価N（認定）：1年次ビジネス数学検定受講者のうち、中間テスト時点で合格し、かつ期末試験で合格した者のみ単位認定される。  
評価F（認定せず）：1年次ビジネス数学検定受講者の中間テスト時点で合格した場合でも、期末試験で合格しなかった場合には本講義の単位は認定されない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

履修は許可制となる。

**科目名** キャリア・デザインII(Career Design II)**サブタイトル** 就職筆記試験対策を中心とした能力開発**担当教員** 中村 有一**■講義目的**

これは、直接的には企業による新入社員選考の際の筆記試験を確実にパスするための能力開発を行うが、決して言語、非言語のリメディアルエデュケーションではなく、より前向きに、産業社会で有用な人材となるために必要なスキルを磨くことを目的としている。これまで学んできたことを再チェックし、課題を見つけた場合しっかりと対応した上でまずは就職活動に立ち向かい、さらには、職業の最前線の現場で活躍できるようになれることが大切である。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成

**■到達目標**

学生がより望ましい就業観を持ち、また就職就業に必要な十分な知識とスキルを身に着けることが、本講座の目標である。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション  
 (主に講義が中心となる)

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

予習・復習の繰り返し極めて重要であり、特に講師の指示に従った目標設定に応じた繰り返しの復習を推奨したい。

**■評価方法**

少なくとも11回の参加を必要とする。これをクリアした場合、単位を認定する。ただし、受講態度に問題があるとみなされた場合、出席と認められないことがある。

**■評価基準**

評価N（認定）：所定の回数の出席と、受講態度によって単位を認定する。  
 評価F（認定せず）：出席回数が不足しているとみなされた場合と、出席していても受講態度がよくないと見られた場合は、単位を認定しないことがある。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

特になし



**科目名** キャリア・デザインIII(Career Design III)**サブタイトル** 就職活動を学ぶ。**担当教員** 梅澤 佳子**■講義目的**

本学の理念の一つは、「すべての道はキャリアに通ず」である。就職し、就業し、職業を通して成長し、職業を通じて社会の問題解決に貢献する人材を育成する事であり、就職活動は、その中核にある。多摩大学の教育をこの理念に近づけるために本講義を設置する。すなわち、就職、就業に向けて

- ① 自己を知る
- ② 産業社会を知る
- ③ 企業を知る
- ④ 何をすべきかを知り、実践する

ことがよりよく実践されるために必要な講義を行う。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成

**■到達目標**

学生がより望ましい就業観を持ち、また就職就業に必要十分な知識とスキルを身に着けることが、本講座の目標である。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

履歴書等に取れんされていくべき「自己理解」「開発が必要なスキルへの認識」を育成するための予習、復習を必要とする。

**■評価方法**

出席8割、受講の姿勢評価2割、とする。それぞれの具体的基準等については、講義内で指示する。

**■評価基準**

評価N（認定）：① 15回の講義への出席が、単位を認定するための基礎要件となる。  
 ② ①に加えて、講義の目的を良く理解し、当事者意識を持って積極的に関与し、特にグループワークではリーダーシップを発揮することが求められる。

評価F（認定せず）：上の条件を満たさなかったとみなした場合は、F評価とする。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

積極的な関わりと、何事にも挑戦する当事者としての態度が求められる。  
 授業全体のマイナスになると担当者が判断する場合には、他の学生の利益を確保するために、退出を命じることもあるので、くれぐれも留意されたい。

**科目名** キャリア・デザインⅣ(Career Design Ⅳ)**サブタイトル** 就職活動を学ぶ**担当教員** 村山 貞幸**■講義目的**

本学の理念の一つは、「すべての道はキャリアに通ず」である。就職し、就業し、職業を通して成長し、職業を通じて社会の問題解決に貢献する人材を育成する事であり、就職活動は、その中核にある。多摩大学の教育をこの理念に近づけるために本講義を設置する。すなわち、就職、就業に向けて

- ① 自己を知る
- ② 産業社会を知る
- ③ 企業を知る
- ④ 何をすべきかを知り、実践する

ことがよりよく実践されるために必要な講義を行う。

**■講義分類**

ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 社会人力育成

**■到達目標**

学生がより望ましい就業観を持ち、また就職就業に必要十分な知識とスキルを身に着けることが、本講座の目標である。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

履歴書等に収れんされていくべき「自己理解」「開発が必要なスキルへの認識」や、企業や産業に対する認識や見方を育成するための予習、復習を必要とする。

**■評価方法**

出席8割、受講の姿勢評価2割、とする。それぞれの具体的な基準等については、講義内で指示する。

**■評価基準**

評価N（認定）：① 15回の所定の講座に出席することにより単位を認定する。（詳しくは、秋学期第1講の中で伝える）  
 ② ①に加えて、講義の目的を良く理解し、当事者意識を持って積極的に関与し、特にグループワークではリーダーシップを発揮することが求められる。  
 評価F（認定せず）：上の条件を満たさなかったとみなした場合は、F評価とする。

**■履修していることが望ましい科目**

特になし。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

積極的な関わりと、何事にも挑戦する当事者としての態度が求められる。  
 授業全体のマイナスになると担当者が判断する場合には、他の学生の利益を確保するために、退出を命じることもあるので、くれぐれも留意されたい。

**科目名** アクティブ・ラーニング実践 (Active Learning Practice)**サブタイトル****担当教員** 金子 邦博**■講義目的**

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化は、少子高齢化による社会活力の低下、厳しさを増す経済環境、日本型雇用環境の変容、人間関係の希薄化、格差の再生産・固定化、豊かさの変容など我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。今、企業も含めた社会全体がこのような社会経済の構造的な変化に直面し、科学技術から経営、社会システムに至るまでパラダイム（認識や考え方の枠組み）の転換を模索しなければならない厳しい環境におかれている。

このような中で、企業や地域社会が今求めているのは、生涯学び習慣や主体的に考える力を持ち、予測困難な時代の中で、どんな状況にも自ら対応できる人材である。

予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験でははぐくむことはできない。教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生自らが主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献出来る社会人基礎力を備えた人材に成長するためには、課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）が必要である。

アクティブ・ラーニングの実施方法には、双方の講義、演習、実験、実習や実技等の授業のほか、インターシッピングやサービス・ラーニングといった学外や課外での体験活動などの事前準備・実践・事後展開を通じた主体的な学びなどが考えられる。これまで、実学の多摩大学を標榜し、ゼミ中心の教育を展開して、前段の講義の中でのアクティブ・ラーニングに関しては、積極的にカリキュラムのなかに取り入れてきた。大学教育の「質的転換」が問われる今、より実践的で実社会が求める人材育成には、学生の主体性を基礎に、社会人基礎力の向上に資する学外や課外での学修活動をカリキュラムとして取り入れて、

「どんな状況にも自ら対応できる人材」を育てていかなければならない。

このアクティブ・ラーニング実践は、上記の趣旨で、教員が用意する学外や課外での体験活動などの事前準備・実践・事後展開を通じた主体的な学びのプログラムに参加し、単位取得に必要な時間の学修をし、社会人基礎力の向上があったと担当教員が認めたときに単位を付与する講義である。

**■講義分類**

社会人力養成

**■到達目標**

学外や課外での体験活動などを目的とする主体的な学びのプログラムに参加して、下記の取り組みを行って、社会人基礎力の着実な向上を図る。

- ① 主体的に「事前準備」に取り組み。
- ② 「実践」の場面においては、主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献するように努力する。
- ③ 主体的な活動の中で得られたものを「事後展開」のなかで、自らの志の実現のためにどう活かしていくのかを整理する。

**■授業形態**

受講者が主体的に行う学外や課外での体験活動などの課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）により行う。

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

この講義は、受講者の能動的な学修が基本となる。準備時間、実践、事後展開が一体となるため、準備学修に必要な時間ということで特定することは難しいが、高い学習効果を得るためには総学修時間の2割から3割ほど時間を準備に割く必要がある。

**■評価方法**

「アクティブ・ラーニング実践報告書」等に基づき能動的学修の達成時間で評価する。

**■評価基準**

評価N（認定）： アクティブ・ラーニング実践の「計画書」と「報告書」を提出し、「報告書」に基づき、プログラムの趣旨を理解して必要な準備活動を行い、実践活動を必要な時間実施し、活動結果をとりまとめて事後展開までを完結し、プログラムに沿った45時間以上の学修時間を達成したと認められた場合。

評価F（認定せず）： プログラムに参加したものアクティブ・ラーニング実践の「計画書」若しくは「報告書」を提出しなかった者、および「報告書」は提出したものの45時間以上の学修時間を達成したとは認められない場合。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

(1) この科目は、アクティブ・ラーニング実践のプログラムとして指定されたプログラムに参加して、必要な学修時間を達成した場合に単位が認定される科目になります。プログラムに参加しても、必要な学修時間を達成できなかったとは認められない場合、教員が要求した活動の「計画書」「報告書」を提出しない場合には単位認定されません。

(2) 単位認定までの道筋は、プログラム毎に異なります。プログラムの説明会に参加してどのような活動を行うのか、学修時間はどれほどの程度になるのか、活動に要する負担は時間的な面、金銭的な面でどれほどになるのかを確認してプログラムへの参加を決めてください。課外や学外でのプログラム参加に伴う費用は大学から補助が出る場合を除き、受講者の負担となります。

**科目名** ▶▶ **スタディーアブロード(Study Abroad)****サブタイトル** ▶▶ **志を持って海外で活動する学生のための単位認定****担当教員** ▶▶ **中村 その子****■講義目的**

原則として、大学が認定した海外活動に参加した学生が、留学先で取得した単位を多摩大学の正規の単位として読み替えるための科目である。ただし大学が認定した海外での活動で顕著な成果をあげた学生に授与される場合もある。いずれの場合も担当教員との事前面談、審査と学習、事後学習、審査、成果報告が必須である。事前面談、審査、学習、事後学習、審査、報告、については学期開始後にT-NEXTなどを通して学生に周知される予定である。

また、原則として海外活動、地域関連活動に関連して大学で実施される諸プログラムに参加して教員の認定を受けた学生の単位認定にも用いられる場合がある。

**■講義分類**

グローバルビジネス  
語学・コミュニケーション

**■到達目標**

- (1) 自分たちの意見、考え方、アイデアをしっかりとした形で伝え、提案できる = 発信
- (2) 相手からの発信を正確に理解し、状況に応じた的確な処理が行える = 受信
- (3) 自分が必要な情報(WEB/論文をはじめとする資料や文献など)を検索し、内容を読み取って利用できる = 情報理解
- (4) 社会の課題をビジネスの現場で解決していく力の一つとして英語でのコミュニケーション能力を身につける
- (5) グローバリズムに対する正しい知識と、地球人として自分の志を実現するための社会における人間力を留学を通して身につける。

**■授業形態**

海外留学  
海外研修  
インターンシップ  
海外・日本国内での社会的活動  
学外活動

グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション  
双方向  
発見学習  
問題解決学習  
経験・調査学習

学習者の能動的な学習への参加があり、学んだ情報を思い出しやすい、異なる文脈でもその情報を使いこなしやすい授業

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

海外・国内での単位認定を伴う社会的活動のための事前事後審査シートの記入、担当教員との複数回の面接、担当教員が必要と判断する研修見学への参加、活動報告プレゼンテーション大会への参加、必要に応じて多摩大学ホームページ(海外NOWなど)への投稿。参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料の提出。

**■評価方法**

出席(活動実績) 70%、活動前後のレポート 30%

**■評価基準**

- 評価N(認定) : 原則として、留学先、インターンシップ先、研修、活動先の組織の成績認定に準じる。  
または該当する留学、インターンシップ、国内外での社会的活動を責任と熱意を持って行い、十分な成果を出したかどうかで単位を認定する。
- 評価F(認定せず) : 原則として、留学先、インターンシップ先、研修、活動先の組織の成績認定に準じる。  
または該当する留学、インターンシップ、国内外での社会的活動を責任と熱意を持って行わず、十分な成果を出さなかった場合、参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料の提出などを怠った場合。

**■履修していることが望ましい科目**

English Expression  
Basic Office English  
Practical English Conversation

TOEIC

海外活動英語コミュニケーション

### ■卒業年次生対象再試験の実施

実施しない

### ■留意点

海外・国内での単位認定を伴う社会的活動のための事前事後審査シートの記入、担当教員との複数回の面接、担当教員が必要と判断する研修見学への参加、活動報告プレゼンテーション大会への参加、必要に応じて多摩大学ホームページ（海外NOWなど）への投稿。

参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料の提出。

**科目名** 教育課程総論(Curriculum)**サブタイトル** 教育課程改革の動向を把握し、情報科の単元指導計画を作成する**担当教員** 杉森 知也**■講義目的**

1. 現在の日本の教育課程について、学力観の変遷や「学力低下」問題などを通して全体像を把握するとともに、問題点もあわせて析出する。
2. 学習指導要領と教科書をみながら、単元の指導計画を作成するためのグループ・個人ワークをおこない、さまざまなアイデアを活かしてよりよい授業プランを創造する。

**■講義分類**

社会人育成

**■到達目標**

1. 教育課程(カリキュラム)の意義と、その編成方法を理解できる。
2. 現代の日本の教育課程改革の動向とその課題について歴史的・国際的に理解し、その改善のために個々の授業でどのように対応できるのかについて、自己の教育観を説明できる。
3. グループ・個人ワークを通じて、さまざまなアイデアを活かした魅力的な授業プラン(単元指導計画)を創造することができる。

**■授業形態**

基本的には、事前学習の成果をもとに講義、全体討議をおこなう。  
また、本講の最後に情報科の1単元分の授業プランをグループで検討してプレゼンテーションをおこなう。これについては、各講で少しずつ時間を割き、グループでの調べ学習や個人作業結果の共有等をおこなう。

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

事前・事後学習で課された作業をおこない、レポート(またはメモ)として人数分印刷して授業に持参する。また、グループで協力する作業については、個人に割り当てられた担当をしっかりとおこない、またグループでの作業の進捗状況等をメンバーで共有したり催促したりするなどして、全員で協力していくことも求める。

**■評価方法**

各講で割り当てられている事前・事後学習のレポート30%、最終プレゼンテーションまでの個人作業の進捗状況と計画性、グループへの貢献度40%、最終プレゼンテーションの内容と質疑への対応30%を総合的に評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している  
 評価A (89~80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している  
 評価B (79~70点) : 講義に参加しているが、積極的な参加姿勢が十分ではない  
 評価C (69~60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い  
 評価F (59点以下) : 欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する

**■履修していることが望ましい科目**

該当学年までに履修すべき教職課程の授業すべて

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・この授業は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することを望む。
- ・講義の部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、そのためにも事前学習が必須であることを自覚してほしい。
- ・最新の教育情報を、新聞等で常にチェックしておくこと。
- ・最終プレゼンテーションを実施するまでに、グループで十分に協力しあってワークを進める必要がある。各個人が担当する作業をおこなうのはもちろん、互いに進捗状況等を報告しあったり遅れているメンバーに作業の催促をおこなったりして、脱落者なくプレゼンテーションがおこなえるよう配慮すること。
- ・履修人数等の状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。

**科目名** 教育史(Education History)**サブタイトル****担当教員** 齋藤 S.裕美**■講義目的**

本講義は、諸外国と日本の教育の歴史的展開と代表的な思想家の教育思想や教育実践についての基礎的な知識を習得し、理解を深めることを目的とする。この講義を通じて、歴史を全体的にどう見るかという根本的なものの見方を考え、歴史的事象と教育の間に関連を見出すことによって、教職を目指す者が身に付けなければならない必須の教養を深める。  
教育史上に重要な役割を果たした人物を中心に、その背景となっている歴史の流れをたどり、教育の本質について考察を進める。

**■講義分類****■到達目標**

諸外国および日本の教育史を時系列的にたどり、教職に就く者として求められる教育の歴史について、基本的な知識の習得をめざす。具体的には、①諸外国の教育史および代表的な思想家の教育思想や教育実践についての知識の習得、②日本の教育史、とりわけ近代以降の公教育制度の整備の歴史についての知識の習得、③教育観や子ども観の変遷についての知識の習得の3点をめざす。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講で取り扱う時代について、世界史の教科書等で時代背景を確認しておくこと。

**■評価方法**

レポート70%、発表30%

レポート等は次の3点を中心に評価する。

- (1)ヨーロッパ諸国の歴史と教育との関連について理解しているか。
- (2)日本の歴史と教育との関連について理解しているか。
- (3)様々な教育思想家の思想や教育実践の内容を理解しているか。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分理解し、評価方法に示した3つの観点について、その内容を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。

評価A (89~80点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した3つの観点について、その内容を個別に、自分の考察を含めて説明できる。

評価B (79~70点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した3つの観点について、いずれか2つ以上の内容を説明できる。

評価C (69~60点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した3つの観点について、いずれか1つ以上の内容を説明できる。

評価F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・講義は毎回出席し、積極的な態度が望まれる（原則として、欠席・遅刻はしないこと）。
- ・教員としての資質を啓発するために、資料を収集・整理して発表する機会を設ける。



**科目名** 教育実習(Practice Teaching)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉**■講義目的**

本講義は、教育実習の前後に行う指導である。事前に、教育実習の意義、実習上の留意事項、授業の見方、授業の実施方法、実習校とのかわり方などについて講義するとともに、模擬実習を組み込んで2週間～3週間の教育実習の指導・助言を図る。

実習後には、実習体験の整理の方法などについてふれる。その際に、教育実習が単に教える技術を学ぶ場だけではなく、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験の機会であったことを思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。

**■講義分類**

顧客理解  
 ビジネス環境理解  
 ビジネス創造  
 ビジネスマネジメント  
 社会人力育成  
 ビジネスICT

**■到達目標**

教職に就く者として求められる教育実習について、講義技法と教育者としての態度を身に付け、基本的な知識の修得をめざす。

**■授業形態**

講義  
 グループディスカッション  
 グループワーク  
 プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

教職科目・教科科目のすべてを履修し、完璧な理解をしておくこと。

**■評価方法**

全講義・全実習・全提出物を完了すること。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を完全に理解できている  
 評価A (89～80点) : 実習に行く準備・実習後のまとめがきちんとできている  
 評価B (79～70点) : 講義内容が理解できている  
 評価C (69～60点) : 最低限の理解ができている  
 評価F (59点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

**■履修していることが望ましい科目**

3年次までの教職科目を単位履修していないと、本講義を受講することはできない。

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

教育実習は、高等学校では2週間～3週間の期間で行われる。その前後に1単位分の事前および事後指導をすることが教員免許法で定められている。その中身は特に定められていないが、はじめて実習校で生徒の前に立って授業をする以上、少しでも円滑に進められるように準備をしておくことが必要になる。また、高等学校の教育活動の全体を知り、経験を通じて学ぶことも教育実習の重要な目的とされており、そのための基礎的な知識を与えることも大切なことである。

教育実習の講義では、こういった目的を果たすために教育実習前(事前)の指導に必要な準備をする。また、教育実習後(事後)に、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験の機会であったことを思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。

本講義は集中授業であるため、実施日については別途連絡する。

**科目名** 教育心理学 (Educational Psychology)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉**■講義目的**

教育心理学とは、人間の「教える」「学ぶ」という営為について、心理学の観点から科学的に理解・考察する学問である。この学問の目的は、心理学の研究から得られた知見や技術を教育活動の場に応用することによって、教育という活動を社会において効率的・効果的に行えるようにすることである。

**■講義分類**

顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成

**■到達目標**

教育・発達について、心理学的な観点から科学的に理解し、一般社会における学校教育・社会教育においても本講義で学んだ知見を応用できるようにすることを目標とする。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各回に新出した用語についてまとめておくこと。また、授業内課題について十分な考察ができなかった個所については授業後にまとめておくこと。

**■評価方法**

出席50%、課題+テスト50%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 全ての講義に出席し、講義内容を十分理解しているか。  
評価A (89~80点) : 2/3以上の出席をし、講義内容を十分理解しているか。  
評価B (79~70点) : 2/3以上の出席をし、講義内容を理解しているか。  
評価C (69~60点) : 本講義における最低限の理解をしているか。  
評価F (59点以下) : 上記を満たさない場合

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。講義中の飲食、携帯電話操作、帽子・サングラスの着用等は厳禁である。

**科目名** 教育制度論(Educational System)**サブタイトル** 教育の法と制度について、比較教育・教育社会学的な視点でとらえる**担当教員** 杉森 知也**■講義目的**

1. 教育をとりまく社会・行政の制度改革の動向を含めて考察する。
2. 現在の日本の教育制度・行政等について、歴史的視点と国際比較の視点の両面から読み解く。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

現在の日本の教育行政・制度設計および政策の動向について、客観的に評価することができる。  
 ※取得可能な資格: 高等学校情報科教諭免許

**■授業形態**

講義のあと、講義と事前学習で調べてきたことを踏まえて、随時、意見交換・グループディスカッションをおこなう。

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

指定教科書の該当箇所を事前に必ず読み、不明な用語についてはインターネット、図書館の教育学辞典等で調べてくること。  
 また、授業で扱う内容に関する質問を一つ以上持ち寄って授業に参加すること。

**■評価方法**

最終テスト50%、事前学習の取り組みと授業に積極的に取り組む姿勢50%を総合的に評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している  
 評価A (89~80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している  
 評価B (79~70点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない  
 評価C (69~60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い  
 評価F (59点以下) : 欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する

**■履修していることが望ましい科目**

特になし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・この授業は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することを望む。
- ・講義の部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、そのためにも事前学習が必須であることを自覚してほしい。
- ・最新の教育情報を、新聞等で常にチェックをしておくこと。
- ・状況によって、講義内容や扱う回の入替えをおこなう場合がある。

**科目名** 教育相談(Educational Counseling)**サブタイトル****担当教員** 大森 拓哉**■講義目的**

本講義は、教育場面において相談を受ける立場となった時のその方法や技術・知識の習得と、理論的学問的な背景、実践場面での応用などについて学ぶ。実際にカウンセラーとなって業務を行うには数多くの経験と豊富な知識が必要であり、本講義だけでそれを満たすことは不可能であるが、相談を受ける立場の者として最低限必要な素養を身につけることを目的とする。教育場面とは、学校教育のみならず、社会人教育、人材教育などの場面も想定し、実社会で必要な、意味のある知識を習得する。

**■講義分類**

志  
キャリア  
産業社会  
サービス  
最前線事例  
課題発見  
問題解決  
実践的知識獲得  
問題解決のための理論  
問題解決のための科学  
問題解決のための方法  
顧客理解  
ビジネス環境理解  
ビジネス創造  
ビジネスマネジメント  
社会人力育成  
社会人基礎力

**■到達目標**

教育相談の理論と実践について、適切に理解し、実際の場面でも適応できるかどうか。

**■授業形態**

講義  
グループディスカッション  
グループワーク  
プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各回に新出した用語についてはまとめておくこと。また、実習等行った課題については、自分自身の振り返りとともにまとめておくこと。

**■評価方法**

出席点60%、期末テスト40%

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容を完全に理解できている  
評価A (89~80点) : 講義内容を理解できている  
評価B (79~70点) : 講義内容をおおよそ理解できている  
評価C (69~60点) : 最低限の理解ができている  
評価F (59点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。

**科目名** 教育方法(Teaching Method)**サブタイトル** 教育方法(Teaching Method)**担当教員** 峯岸 久枝**■講義目的**

学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲が重視され、学校教育においてはこれらを調和的に育むことが必要であるとされている。

本講義では、学校教育の要ともいえる「授業」について、その歴史の変遷から授業実践の方法まで多岐にわたりに学ぶ。授業が成り立つ条件、授業の構成要素（学習目標・学習内容・指導/学習方法・指導組織/形態・学習環境・ICTの活用・学習評価等）の基礎理論を学び、さらに、具体的な学習指導案の書き方や教材・教具の開発の方法を「教員として授業をすることを想定」して授業を組み立て、その工夫の方法や改善のあり方について理解・検討する。これにより、授業づくりと授業実践力を身につける。

**■講義分類**

社会人育成

**■到達目標**

- 1.教育方法の基本的な概念がわかる。
- 2.教育方法の変遷（西洋・日本）や現代的課題がわかる。
- 3.指導内容・教材・教具等の関係について説明でき、教材を開発し活用した授業を設計できる。
- 4.教材研究の意義と機能を説明し、具体的な教材開発・教材研究ができる。
- 5.教育評価の機能と授業評価の種類や方法を実践的に説明できる。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講とも、テキストの該当部分を事前の読んでおくこと。また、配布された資料をよく読み、教師の立場に立つて考える姿勢を常に持つこと。授業内で課された課題（教材・教具作成、評価規準・基準作成）は、期限内に完成するよう計画的に取り組むこと。

**■評価方法**

- ・平常点（授業参加態度・出席状況）50%、レポート50%とする。
- ・出席状況については、教職を志す者に向けた講義であるため、正当な理由がない場合の遅刻・欠席は認められない。なお、欠席時数が授業時数の3分の1を超えた場合は、その時点で単位の取得が難しくなる。
- ・レポートは授業内のミニレポート（授業内課題）および中間レポート、最終レポートを総合的に評価する。レポートの評価規準については、課題を提示する際に説明する。

**■評価基準**

評価A+（90点以上）：講義に積極的かつ意欲的に参加し、講義内容について十分理解しており、その内容について自分の考察を深め、的確に説明できる。また、発展的な学習に意欲的で、自ら学ぼうとする姿勢が見られる。

評価A（89～80点）：講義に参加し、講義内容について理解しており、その内容について自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明することができる。

評価B（79～70点）：講義に参加し、講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。

評価C（69～60点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い。

評価F（59点以下）：欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生を対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・この講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。
- ・教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。
- ・状況によって、講義内容や扱う回の入替えなどが生じることもある。

**科目名** 教職概論 2015年度入学生以前用(Teaching Profession)**サブタイトル** 自らの教職観を構築する**担当教員** 杉森 知也**■講義目的**

教職の意義を国内外の動向を含めて広く理解し、将来、教職に就くための基礎的資質を養う。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

1. 教員の養成・採用・研修を、「教師の成長」という観点から把握し、教職の意義、教師の仕事、教職の専門性などについて総合的に説明できる。
  2. 近年の教員養成政策の動向を確認しながら、新たな教師像を模索する方向性について、世界的な流れを含めて説明できる。
  3. 上記1～2を踏まえ、自己の教職観を構築し、説明できる。
- ※取得可能な資格: 高等学校情報科教諭免許

**■授業形態**

講義形式(グループディスカッションとプレゼンテーションを含む)を中心とし、コメントシートや小レポートの提出を適宜、課す。  
また、最後に、A4用紙5枚以上のレポートの提出を義務づける。

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業でのディスカッションを円滑に進めかつ高度なものにするために、授業前に指定教科書の該当箇所と参考書、インターネット等でその内容を調べて、自分なりの解釈をしておくこと。

**■評価方法**

最終レポート50点、コメントシート・小レポート20点、授業の参加姿勢30点の総合評価とする。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している。  
 評価A (89～80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している。  
 評価B (79～70点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない。  
 評価C (69～60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い。  
 評価F (59点以下) : 欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する。

**■履修していることが望ましい科目**

該当学年に履修すべき教職科目すべて

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・本講義は、受講生の主体的な働きかけによって進められるので、ここに記載した事前・事後学習以外にも自主的に理解を深めて授業に参加することが望ましい。また、毎回、授業についての質問をもって参加すること。教員による講義はできる限り少なくし、学生による討議や質問への回答に時間を割けるようにしたい。活発な授業が展開できるかどうかは、参加学生の事前学習にかかっている。
- ・教員への聞き取りと、それに基づく調査レポート(最終レポート)の作成に関する質問は、第14講以外でも、適宜、受け付ける。なお、このレポートについては、提出の遅滞および授業時に伝える必要事項を満たしていないレポートは採点しないので十分、注意してほしい。
- ・状況によっては、講義の内容や扱う回の入れ替え等をおこなうことがある。

**科目名** 教職概論 2016年度入学生用(Teaching Profession)**サブタイトル** 自らの教職観を構築する**担当教員** 杉森 知也**■講義目的**

教職の意義を国内外の動向を含めて広く理解し、将来、教職に就くための基礎的資質を養う。

**■講義分類**

社会人育成

**■到達目標**

- 1.教員の養成・採用・研修を、「教師の成長」という観点から把握し、教職の意義、教師の仕事、教職の専門性などについて総合的に説明できる。
  - 2.近年の教員養成政策の動向を確認しながら、新たな教師像を模索する方向性について、世界的な流れを含めて説明できる。
  - 3.上記1～2を踏まえ、自己の教職観を構築し、説明できる。
- ※取得可能な資格: 高等学校情報科教諭免許

**■授業形態**

講義形式(グループディスカッションとプレゼンテーションを含む)を中心とし、コメントシートや小レポートの提出を適宜、課す。  
また、最後に、A4用紙5枚以上のレポートの提出を義務づける。

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

授業でのディスカッションを円滑に進めかつ高度なものにするために、授業前に指定教科書の該当箇所と参考書、インターネット等でその内容を調べて、自分なりの解釈をしておくこと。

**■評価方法**

最終レポート50点、コメントシート・小レポート20点、授業の参加姿勢30点の総合評価とする。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している。  
 評価A (89～80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している。  
 評価B (79～70点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない。  
 評価C (69～60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い。  
 評価F (59点以下) : 欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・本講義は、受講生の主体的な働きかけによって進められるので、ここに記載した事前・事後学習以外にも自主的に理解を深めて授業に参加することが望ましい。また、毎回、授業についての質問をもって参加すること。教員による講義はできる限り少なくし、学生による討議や質問への回答に時間を割けるようにしたい。活発な授業が展開できるかどうかは、参加学生の事前学習にかかっている。
- ・教員への聞き取りと、それに基づく調査レポート(最終レポート)の作成に関する質問は、第14講以外でも、適宜、受け付ける。なお、このレポートについては、提出の遅滞および授業時に伝える必要事項を満たしていないレポートは採点しないので十分、注意してほしい。
- ・状況によっては、講義の内容や扱う回の入れ替え等をおこなうことがある。

**科目名** 教職実践演習**サブタイトル** 学生生活と教育実習を振り返り、自己の教職観を再確認する**担当教員** 杉森 知也**■講義目的**

学生生活(特に、教職に関すること)と教育実習の体験を丹念に省察し、その過程で自己の強み・弱みを自覚する。また、この振り返りを通して、自己の教職観を見直し、修正する。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

1. 学生時代の振り返りを通して、今後の自己成長に必要なことを見出す。
  2. 個人ワークやグループディスカッションを通して、教育実習等の経験の振り返りをおこない、それぞれの経験を共有化する。
  3. これらの活動を通して、自己の教職観を再確認・修正する。
- ※取得可能な資格:高等学校情報科教諭免許

**■授業形態**

振り返りの個人ワークをもとに、グループディスカッションとプレゼンテーションをおこなう。

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

1. 大学生活(特に、教職課程に関すること)で得られたことを、教職履修カルテ等をもとに整理すること。
2. 教育実習の記録を、できる限り詳細にとっておくこと。

**■評価方法**

授業時の積極的な姿勢(特に、ワークやディスカッション)50%、事前学習で課した内容についての提出物の完成度50%で総合的に評価する。

**■評価基準**

- 評価A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
- 評価A (89~80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
- 評価B (79~70点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
- 評価C (69~60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
- 評価F (59点以下) : 欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する

**■履修していることが望ましい科目**

本講以外の教職課程の授業すべて

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・必ず事前学習をおこない、必要な資料を作成・持参して授業の臨むこと。これができていなければ、授業に出席していても参加していることにはならない。
- ・この授業でさまざまな資料を駆使して振り返る作業をおこなうことを想定して、実習中に出来事を記載したメモなどを紛失しないようデータの保持につとめること。
- ・履修人数等によって、シラバスの内容を変更することもある。その場合は、事前に変更点を指示する。



**科目名** 情報科教育法Ⅰ・Ⅱ(Teaching Method on Information Education I・II)**サブタイトル****担当教員** 齋藤 S.裕美**■講義目的**

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身に付けることを目的とする。情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。

本講義では、新学習指導要領(平成25年度入学生から学年進行で実施)の改訂ポイントや主な改善事項について触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。

なお、15週を通じての講義概要は以下の通りである。

- ・講義と研究授業の形式による模擬授業(教壇実習)を行う。
- ・高等学校(情報科)の教員として、基本的な理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な資質や指導力の習得を図る。
- ・『高等学校学習指導要領解説 情報編』(文部科学省編 開隆堂出版)を中心に、指導用図書(高等学校で使用する教科書)や参考資料を配布して講義を進める。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

教職に就く者として求められる教科教育(情報)について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。

- ・情報教育の沿革と現状、在り方について説明できる。
- ・共通教科「情報」(各学科に共通する教科「情報」と専門教科「情報」(主として専門学科において開設される教科「情報」)の基本的な理念について説明できる。
- ・共通教科「情報」と専門教科「情報」の目標、内容、構成を理解する。
- ・指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる。
- ・他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを相互に指摘できる。
- ・指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫できる。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

プレゼンテーション

**■準備学習(予習・復習等)に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。

**■評価方法**

期末試験30%、提出物30%、発表(模擬授業)40%

なお、期末試験、提出物、発表(模擬授業)については次の4点を中心に評価する。

- (1)教職および情報にかかわる専門用語を正確に理解しているか。
- (2)学習指導要領および講義内容をよく理解して学習指導案を作成できるか。
- (3)十分な教材研究に基づいて、正確・簡潔な表現で、よく整理された授業の構成になっているか。
- (4)学習指導案(導入⇒展開⇒まとめ)の指導プロセスと模擬授業が整合しているか。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分理解し、評価方法に示した(1)の観点について、その内容を自分の考察を含めて的確に説明できる。かつ(2)から(4)の全てを満たす授業の設計ができる。

評価A (89~80点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した(1)の観点について、その内容を自分の考察を含めて説明できる。かつ(2)から(4)のいずれか2つ以上を満たす授業の設計ができる。

評価B (79~70点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した(1)の観点について、その内容を説明できる。かつ(2)から(4)のいずれか1つ以上を満たす授業の設計ができる。

評価C (69~60点) : 講義内容について理解し、評価方法に示した(1)の観点について、その内容を十分ではないが説明できる。かつ50分間の授業の設計ができる。

評価F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。または50分間の授業の設計ができない。

**■履修していることが望ましい科目****■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

### ■留意点

- ・高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配布する。
- ・講義には毎回出席し、意欲的な受講態度や丁寧な教案・資料作りが求められる。
- ・各自で学習指導案・単元指導案および参考資料(手許資料)を作成して、他の実習予定者にも配布する。
- ・研究課題ごとに、複数回の教材研究と模擬授業の機会を課する。
- ・教職に就く者として教科教育について強い「意志」が求められ、基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。
- ・教員としての資質を啓発するために、指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。

**科目名** 生徒指導(Student Direction)**サブタイトル** 生徒指導(Student Direction)**担当教員** 峯岸 久枝**■講義目的**

学校教育において学習指導と並んで重要な意義を持つ生徒指導は、教育相談、進路指導・キャリア教育への対応など多岐にわたり、意義と役割について学習することが必要である。また、生徒指導に関わる様々な局面において、具体的な事例や指導例をもとに教師が求められる役割は何かについて当事者意識で考え、議論して理解を深める。

**■講義分類**

社会人育成

**■到達目標**

- 1.生徒指導の意義と役割について、基本的な概念を理解し、説明できる。
- 2.生徒指導や教育相談、進路指導等の活動について、教師の果たすべき役割を理解し、指導の在り方について考え、説明できる。
- 3.生徒指導の方法と実際について理解を深め、自分が教師の立場に立ったら、どのように生徒に接するかを具体的に考え、説明できる。
- 4.生徒指導の実際の場面を観察／視聴し、学校現場での指導方法について意見や改善点を述べるができる。
- 5.「チーム学校」の意義とその組織作りについて理解し、組織の一員としてどのように行動するか、当事者意識で考えることができる。

**■授業形態**

講義

グループディスカッション

グループワーク

プレゼンテーション

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

各講とも、テキストの該当部分を事前の読んでおくこと。また、配布された資料をよく読み、教師の立場に立って考える姿勢を常に持つこと。授業内で課された課題は、期限内に完成するよう計画的に取り組むこと。

**■評価方法**

- ・平常点（授業参加態度・模擬授業・出席状況）60%、レポート40%とする。
- ・出席状況については、教職を志す者に向けた講義であるため、正当な理由がない場合の遅刻・欠席は認められない。なお、欠席時数が授業時数の3分の1を超えた場合は、その時点で単位の取得が難しくなる。
- ・レポートは授業内のミニレポート（授業内課題）および中間レポート、最終レポートを総合的に評価する。レポートの評価規準については、課題を提示する際に説明する。

**■評価基準**

- 評価A+（90点以上）：講義に積極的かつ意欲的に参加し、講義内容について十分理解しており、その内容について自分の考察を深く、的確に説明できる。また、発展的な学習に意欲的で、自ら学ぼうとする姿勢が見られる。
- 評価A（89～80点）：講義に参加し、講義内容について理解しており、その内容について自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明することができる。
- 評価B（79～70点）：講義に参加し、講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
- 評価C（69～60点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い。
- 評価F（59点以下）：欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する。

**■履修していることが望ましい科目**

なし

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・この講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。
- ・教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。
- ・状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

**科目名** 特別活動(Extracurricular activity)**サブタイトル** 学校・学級づくりと人格形成と教師の指導性**担当教員** 杉森 知也**■講義目的**

学習指導要領の中の位置づけや目標を理解し、学生それぞれの被教育経験を事例的に検討しながら、特別活動の指導的力を育成する。

**■講義分類**

社会人力育成

**■到達目標**

特別活動が学習指導要領においてどのように位置づけられているか、その目標はいかに設定されているかを理解した上で、特別活動を実施するための指導的力の基礎が形成される。

※取得可能な資格: 高等学校情報科教諭免許

**■授業形態**

プレゼンテーションと全体討議を中心に進め、適宜、解説等を加える。

**■準備学習（予習・復習等）に必要な時間またはそれに準ずる程度の具体的な学習内容**

事前学習として、指定教科書の該当部分を必ず読み、またその部分について自己の被教育経験をもとに具体的にどのような活動や指導がおこなわれていたかについてレポートを作成して授業に持参する。

**■評価方法**

授業内テスト30点、授業の取り組みの姿勢70点(授業での積極的な姿勢30点、事前学習のレポート40点)を総合的に評価する。

**■評価基準**

評価A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価A (89~80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価B (79~70点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない

評価C (69~60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価F (59点以下) : 欠席が多い、講義内容がほとんど理解できていない、他者と協力することができていないなど、いずれか一つ以上に該当する

**■履修していることが望ましい科目**

当該学年までに履修することになっている教職課程の科目すべて

**■卒業年次生対象再試験の実施**

実施しない

**■留意点**

- ・この授業は、受講生の主体的な動きかけを進めていくので、自主的・積極的に発言することを望む。
- ・講義の部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、そのためにも事前学習が必須であることを自覚してほしい。事前学習のうち、「具体的な場面を考えてくる」ものについては、すべてA4×1枚いっばいの分量を記述し、毎回、授業に持参して授業の最後に提出すること。
- ・最新の教育情報を、新聞等で常にチェックをしておくこと。
- ・状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。